

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅴ

## 大 角 地 遺 跡

2 0 0 6

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅴ

お がく ち  
大 角 地 遺 跡

2 0 0 6

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市を経て大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成17年度に実施した大角地遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代前期に、蛇紋岩製の磨製石斧や滑石製の装身具が盛んに製作されていたことが明らかになりました。しかしながら、それらは未完成品ばかりで、完成品はほとんど遺跡に残されていませんでした。大量に製作された完成品は、交易品として他地域に持ち出されたものとみられ、縄文時代における石器の流通を研究する上で貴重な資料になるものと考えられます。

今回の調査結果が、糸魚川地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成18年12月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字田海字田海に所在する大角地遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は、県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物及び調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「05 オガクチ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 6 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 7 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に [ ] で示し、巻末に一括して掲載した。
- 8 作成した図版のうち、既成の地図図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 9 調査成果の一部は、現地説明会（平成17年11月5日実施）、広報誌『埋文にいがた』第54号で公開しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 出土石器の石質同定を、糸魚川市フォッサマグナミュージアムに委託した。分析走査型電子顕微鏡での半定量分析の結果を第V章と遺物観察表に掲載した。なお、火山灰分析を株式会社古環境研究所に委託して実施したが、火山灰が検出されなかったため報告書への掲載は割愛した。
- 11 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社セビアスに委託した。
- 12 遺物集合写真（図版26・27と図版48の一部）は、小川忠博氏に撮影いただいた。
- 13 木製品の樹種同定は、三ツ井朋子（埋文事業団班長）が行った。
- 14 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団班長）、杉田和宏（同主任調査員）、近藤慎子（同文化財調査員）、相羽重徳（株式会社古田組調査員）、松永篤知（同調査員）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第II章、第III章3ABC：近藤・加藤 第III章3F、第IV章3：杉田・加藤

第IV章1、第V章4A・C：相羽 第V章3A・3B砥石・石皿・磨石類・石錘、第VI章1：松永

その他：加藤

- 15 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。

（敬称略 五十音順）

石川日出志 扇山和博 大竹憲昭 岡村道雄 小川忠博 長田友也 小野 健 織笠明子  
金山哲哉 狩野 睦 川崎 保 木島 勉 木下哲夫 小池義人 小島幸雄 小嶋芳孝  
小林達雄 佐藤雅一 清水宣義 竹之内耕 田中耕作 谷 和隆 谷藤保彦 土田孝雄  
寺村光晴 戸田哲也 永澤博之 西田昌弘 橋本澄夫 布尾和史 藤田富士夫 細野高伯  
本田秀生 前山精明 増子正三 三浦知徳 宮島 宏 安中玲美 山岸洋一 山本正敏  
石川県埋蔵文化財センター 糸魚川市教育委員会 上市町教育委員会 電気化学工業株式会社  
富山県埋蔵文化財センター

# 目 次

## 第I章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業の経過	2
A 確認調査	2
(1) 調査の体制	2
(2) 調査の結果と取扱い	3
B 本発掘調査	3
(1) 調査・整理の体制	3
(2) 調査・整理の経過	5
C 工事立会	5
(1) 調査の体制	5
(2) 調査の経過	5

## 第II章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	6
A 姫川とフォッサマグナ	6
B 交易ルート・塩の道	7
C 大角地遺跡周辺の地形	7
2 歴史的環境	7
3 大角地遺跡をめぐる研究史	11

## 第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定	13
2 基本層序	13
3 調査の概要	14
A 1区	14
B 2区	15
C 3区	15
D 4区	16
E 5区	16
F 6区	17
G 7・8区	17

## 第IV章 遺 構

1 4区	18
A 縄文時代の遺構	18
(1) 竪穴住居	18
(2) 土 坑	19
B 古墳時代以降の遺構	19
(1) 竪穴住居	19
(2) 掘立柱建物	20
(3) 溝	20
(4) そ の 他	20

2	5区	21
	A 縄文時代の遺構	21
	(1) 調査の過程	21
	(2) 土層の堆積と遺物の出土状況	21
	(3) 遺構の形状と性格	22
	B 古代の遺構	23
3	6区	23
	A 縄文時代の遺構	23
	B 古代の遺構	24
4	工事立会範囲	24
	(1) 竪穴住居	24
	(2) 土 坑	24
	(3) 溝	25
	(4) ピ ッ ト	25

## 第V章 遺 物

1	旧石器時代の遺物	26
	A 出土状況	26
	B 形態的特徴	26
	C 編年の位置付けと本資料の意義	27
2	縄文時代草創期の遺物	27
3	縄文時代早期・前期の遺物	27
	A 土 器	27
	(1) 縄文土器の分類	27
	(2) 2・3区出土の縄文土器	29
	(3) 4区出土の縄文土器	29
	(4) 5区出土の縄文土器	30
	(5) 6区出土の縄文土器	31
	B 石 器	32
	(1) 概 要	32
	(2) 資料提示の方法	32
	(3) 石器石材名の同定	33
	(4) 各 説	36
	C 石 製 品	49
	(1) 概 要	49
	(2) 記述の方法	50
	(3) 各 説	50
	D 原 石 等	55
4	古墳時代以降の遺物	56
	A 土 器	56
	(1) 古墳時代	56
	(2) 平安時代	57
	(3) 室町時代	58
	B 古墳時代の玉作関連資料	59
	C 石製品・鍛冶関係遺物・金属製品	61
	D 木 製 品	61

## 第VI章 ま と め

1	大角地遺跡出土の縄文土器について	62
2	蛇紋岩製磨製石斧の大量生産	65
	A 大量生産の背景	65
	B 製作過程の復元	65
	C 製作に関連する工具	66

3 滑石製装身具の製作	68
A 石製装身具の素材「滑石」	68
(1) 滑石利用の背景	68
(2) 「石灰岩説」の問題	69
B 滑石製装身具の形態構成	69
C 珧状耳飾の製作過程	70
4 縄文時代前期前葉における大角地遺跡の性格	72
《要 約》	73
《引用文献》	74
《観 察 表》	78

## 挿 図 目 次

第 1 図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第 13 図 磨製石斧製作関連資料の長さ	41
第 2 図 確認調査トレンチ位置と本調査対象範囲	4	第 14 図 磨製石斧製作関連資料の厚さと重さ	41
第 3 図 大角地遺跡周辺における旧地形の起伏	4	第 15 図 石皿の長幅分布図	45
第 4 図 基本層序	4	第 16 図 磨石類の長幅分布図	46
第 5 図 調査・整理の経過	5	第 17 図 石錘の長幅分布図	47
第 6 図 ヒスイの原産地と縄文時代の遺跡分布	6	第 18 図 石製品の計測位置	49
第 7 図 大角地遺跡と周辺の遺跡	8	第 19 図 珧状耳飾の外径と内径	51
第 8 図 昭和 54 (1979) 年報告書に掲載された 縄文時代前期の「飾玉」	11	第 20 図 大角地遺跡における縄文土器の変遷	63
第 9 図 大角地遺跡の調査履歴と主要遺構の分布	12	第 21 図 大角地遺跡における蛇紋岩製磨製石斧の製作 過程	67
第 10 図 石質分析の結果 (1)	34	第 22 図 北陸地方における早期末葉～前期前葉の石製 装身具の形態構成	71
第 11 図 石質分析の結果 (2)	35		
第 12 図 石質分析の結果 (3)	36		

## 表 目 次

第 1 表 石器組成と石材組成	32	第 8 表 磨石類の厚さ分布表	46
第 2 表 不定形石器分類表	38	第 9 表 北陸地方における縄文早期末葉～前期前葉の 主な石錘出土遺跡	47
第 3 表 不定形石器の分類別構成	39	第 10 表 石錘の分類別石材組成表	48
第 4 表 石皿の重量分布表	44	第 11 表 石錘の重量分布表	48
第 5 表 石皿の厚さ分布表	44	第 12 表 石錘の厚さ分布表	48
第 6 表 磨石類の分類別石材組成表	46		
第 7 表 磨石類の重量分布表	46		

## 図 版 目 次

[図面図版]	図版 6 遺構個別図 (3) 5 区
図版 1 遺構全体図	図版 7 遺構個別図 (4) 6 区
図版 2 遺構個別図 (1) 2 区・3 区	図版 8 遺構個別図 (4) 6 区・遺構個別図 (5) 工事 立会、旧石器時代の遺物、縄文時代の遺物 (1)
図版 3 遺構個別図 (2) 4 区	図版 9 縄文時代の遺物 (2)
図版 4 遺構個別図 (2) 4 区	図版 10 縄文時代の遺物 (3)
図版 5 遺構個別図 (2) 4 区、遺構個別図 (3) 5 区	

- 図版 11 縄文時代の遺物 (4)
- 図版 12 縄文時代の遺物 (5)
- 図版 13 縄文時代の遺物 (6)
- 図版 14 縄文時代の遺物 (7)
- 図版 15 縄文時代の遺物 (8)
- 図版 16 縄文時代の遺物 (9)
- 図版 17 縄文時代の遺物 (10)
- 図版 18 縄文時代の遺物 (11)
- 図版 19 縄文時代の遺物 (12)
- 図版 20 縄文時代の遺物 (13)
- 図版 21 縄文時代の遺物 (14)
- 図版 22 縄文時代の遺物 (15)、古墳時代の遺物 (1)
- 図版 23 古墳時代の遺物 (2)、平安時代の遺物 (1)
- 図版 24 平安時代の遺物 (2)、室町時代の遺物
- [写真図版]**
- 図版 25 遺跡近景
- 図版 26 縄文時代前期前葉のヒスイ製敲石と滑石製装身具
- 図版 27 縄文時代早期末葉～前期前葉の滑石製装身具と石鏃
- 図版 28 SI14 完掘・遺物出土状況
- 図版 29 遺跡近景、4・5・6区完掘、4・5区遺物出土状況、5区セクション
- 図版 30 1区 調査前近景・完掘・基本層序、2区完掘・遺構検出状況・セクション
- 図版 31 3区 完掘・基本層序・4・5・6区完掘
- 図版 32 4区 遺構完掘 (1)・セクション (1)・遺物出土状況 (1)
- 図版 33 4区 セクション (2)・遺構完掘 (2)
- 図版 34 4区 セクション (3)・遺構完掘 (3)
- 図版 35 4区 セクション (4)・遺物出土状況 (2)
- 図版 36 5区 調査前近景・基本層序・遺構検出状況・遺物出土状況 (1)
- 図版 37 5区 遺物出土状況 (2)・焼土検出状況・セクション (1)
- 図版 38 5区 セクション (2)・遺物出土状況 (3)、6区 近景・セクション・遺構検出状況・遺物出土状況 (1)・完掘
- 図版 39 6区 遺物出土状況 (2)、7区 セクション、付帯工事立会、作業風景
- 図版 40 旧石器時代の遺物、縄文時代の遺物 (1)
- 図版 41 縄文時代の遺物 (2)
- 図版 42 縄文時代の遺物 (3)
- 図版 43 縄文時代の遺物 (4)
- 図版 44 縄文時代の遺物 (5)
- 図版 45 縄文時代の遺物 (6)
- 図版 46 縄文時代の遺物 (7)
- 図版 47 縄文時代の遺物 (8)、古墳時代の遺物、平安時代の遺物 (1)
- 図版 48 縄文時代の遺物 (9)、平安時代の遺物 (2)、室町時代の遺物



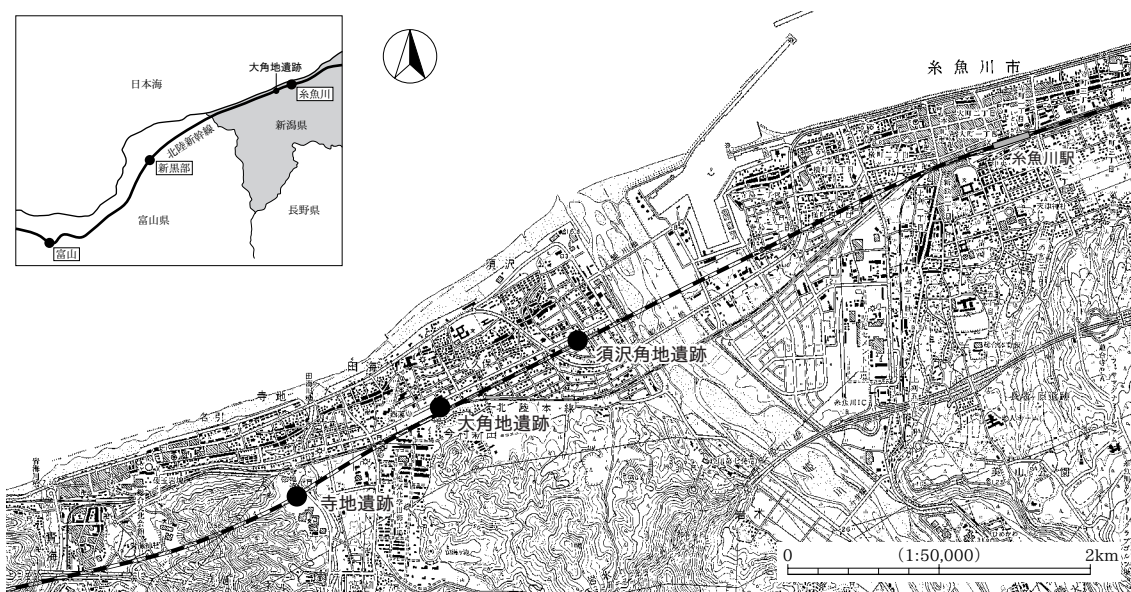
# 第 I 章 序 説

## 1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京・高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎・長野間は、平成9年10月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線鉄道規格路線としての工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越～糸魚川間及び新黒部～富山間の新規着工及び糸魚川～新黒部間のフル規格化が決定した。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成13年5月、鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年10月に分布調査を実施した。分布調査によって、施工予定範囲が周知の大角地遺跡にかかることから、確認調査実施の必要性が報告された。平成16年5月には、新幹線建設の付帯工事（ガス管理設）に先立つ確認調査が実施された。その結果、遺跡の存在が確認されたが、遺物の出土数が少なく、掘削幅が80cm程度と狭小なことから7月に工事立会の措置がとられることとなった。平成16年11月、平成17年5月には、本工事範囲の確認調査が行われた。新幹線橋脚建設予定地内に調査坑を設定し遺構・遺物の有無を確認したところ、16年度の調査では古墳時代の土師器・須恵器・木製品が出土し、17年度の試掘確認調査では竪穴住居等の遺



第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

## 2 調査と整理作業の経過

構や縄文土器・石器等が出土したことから、工事で掘削される橋脚部分について本発掘調査が必要であると報告された。

この結果を受けて、鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で取扱い協議を行った。当初、橋脚4基分（第2図5～8区）の調査を予定していたが、このうちJR北陸本線と近接する2基分（第2図7・8区）については調査に必要な土留め工を県教委で施工することは困難で非効率と判断された。そこで、この2基分については本工事時に調査することで合意した。その後、改めて調査実施範囲について協議し、6地点726m<sup>2</sup>（第2図1～6区）を調査することとなった。鉄道・運輸機構から依頼を受け、県教委は埋文事業団に本発掘調査を委託し、平成17年9月8日に調査に着手し、11月21日に調査を終了した。また、本調査の進展に伴い、今年度の調査範囲から除外した在来線と最も近接する2地点側に向かって地形が大きく落ち込むことが確認された。この所見を踏まえて、この2地点について部分的な調査を実施することとした。その結果、遺物が低地の二次堆積物に含まれることが確かめられたことから、この調査をもって本発掘調査にかえることとした。この2地点を含め、平成17年度の本発掘調査対象面積は最終的に8地点1152m<sup>2</sup>となった。

## 2 調査と整理作業の経過

### A 確認調査

#### (1) 調査の体制

平成16年度（付帯工事部分）

調査期間	平成16年5月20日～5月21日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井 幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	長谷川二三夫（同 総務課長）
庶務	高野 正司（同 班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査担当	滝沢 規朗（同 班長）
調査職員	片岡 千恵（同 嘱託員）

平成16年度（本工事部分）

調査期間	平成16年11月24日～11月25日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井 幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	長谷川二三夫（同 総務課長）
庶務	高野 正司（同 班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査担当	山本 肇（同 担当課長代理）
調査職員	田中 一穂（同 嘱託員）

## 平成17年度（本工事部分）

調査期間	平成17年5月12日～5月19日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川二三夫（	同	総務課長）
庶務	長谷川 靖（	同	班長）
調査総括	藤巻 正信（	同	調査課長）
調査担当	寺崎 裕助（	同	担当課長代理）
調査職員	田中 一穂（	同	嘱託員）

## (2) 調査の結果と取扱い

大角地遺跡の確認調査は、本工事部分と付帯工事部分を対象に実施された。対象地に調査坑（トレンチ）を任意に設定し、重機および人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

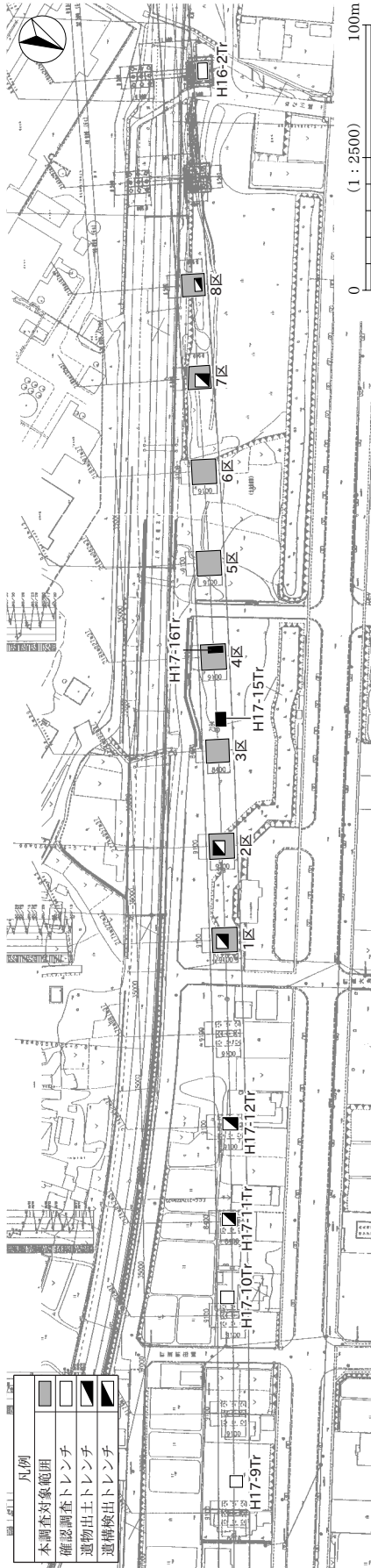
付帯工事部分については、ピットが検出されたが遺物は土師器片3点と少なく、施工による掘削幅が80cmほどと狭小なことから、工事立会の措置をとることとなった。

本工事部分については、周知の大角地遺跡前後のトレンチから縄文時代～中世の遺構・遺物が検出され、第2図に示す橋脚8地点について本発掘調査が必要と判断された。特に台地上のトレンチ（H17-15Tr・H17-16Tr）からは、縄文時代の竪穴住居等の遺構が検出され、多数の遺物が出土した。また、地表面から遺物が採集された5・6区については、1970・73年に実施された調査成果を踏まえて本発掘調査の対象とすることとした。なお、糸魚川方には更に遺跡が延伸する可能性が想定されたが、用地買収の都合で調査を実施することができなかった。

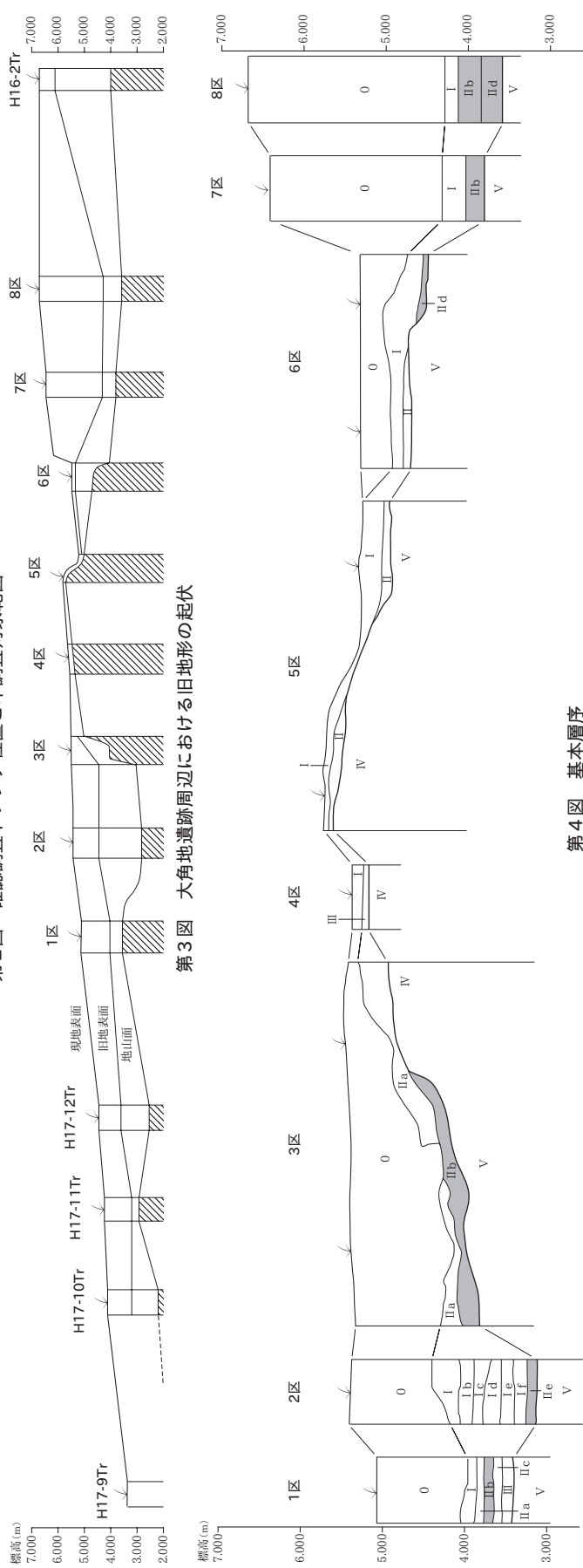
## B 本発掘調査

## (1) 調査・整理の体制

調査期間	平成17年9月8日～平成17年11月21日	整理期間	平成18年1月4日～平成18年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川二三夫（	同	総務課長）
庶務	長谷川 靖（	同	主任）
調査総括	藤巻 正信（	同	調査課長）
指導	田海 義正（	同	担当課長代理）
調査担当	加藤 学（	同	班長）
職員	杉田 和宏（	同	主任調査員）
	近藤 慎子（	同	文化財調査員）
	和泉 裕子（	同	嘱託員）
	小山たか子（	同	嘱託員）
支援	株式会社 古田組 現場代理人 竹内 一喜 調査員 相羽 重徳		



第2図 確認調査トレンチ位置と本調査対象範囲



第3図 大角地遺跡周辺における旧地形の起伏

第4図 基本層序

(2) 調査・整理の経過

平成17年9月から本発掘調査に着手するため、8月下旬から事務所設置等の諸準備にとりかかった。9月初旬には準備が整い、9月8日から重機による表土掘削を開始した。重機による表土掘削と併行して、9月12日から

		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本発掘調査	準備工		■						
	調査		■	■	■	■	■	■	■
	現場撤収					■			
整理作業	図面整理			■	■	■	■	■	
	遺物水洗・注記		■	■	■	■	■	■	
	土壌水洗・選別			■	■	■	■	■	
	遺物実測					■	■	■	
	遺物トレース							■	■
	原稿執筆 編集・校正							■	■

第5図 調査・整理の経過

は作業員を本格的に投入した。地表面から地山までの深度が浅い調査区については、人力で表土・包含層掘削を行った。また、調査の進展に伴い、旧地形が起伏に富み（第3・4図）、遺跡の中心部が台地上に存在することが明らかとなってきたため、台地上の調査に重点を置くこととなった。特に、遺構には玉類等の微細遺物が多数含まれていたため、覆土の全量を水洗選別した。低地部分については、盛土が厚く堆積していたため地山の検出面が地表下2～3mと深く、重機を併用しながら作業を進めた。掘削深度が大きくなったため勾配を確保しながら作業を進めたものの、湧水や雨水により一部が崩落する状況にあり、安全を確保しながら作業を進めた。11月2日に現地の報道公開、11月5日に現地説明会を行い、参加者は335名を数えた。その後、11月17日に航空写真を撮影し、同月21日に作業終了、22日に撤収した。

整理作業は、現地調査と併行して開始した。連日、遺物が多数出土したため、水洗を併行して行い、乾燥・選別後に注記を進めた。遺構の記録類についても現地で基礎整理を進めたが、多数出土した遺物の整理を優先せざるを得なかった。調査終了後、大角地遺跡に先行して調査した上越市用言寺遺跡の整理作業を優先させたため作業を一時中断し、1月から作業を本格的に再開した。2月までに遺構図面の整理、遺物実測図のトレースを完了させ、3月中旬までにすべての原稿を入稿した。その後、編集・校正を行い、平成18年度に印刷、刊行した（第5図）。

C 工事立会

(1) 調査の体制

立会期間	平成16年7月26日～7月28日
調査	新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）
調査総括	北村 亮（新潟県教育庁文化行政課 埋蔵文化財係長）
職員	高橋 一 功（同 主任調査員）
	加藤 学（同 文化財調査員）

(2) 調査の経過

確認調査によって立会調査が必要とされた幅0.8m、総延長95mを対象として施工に立ち会った。重機で慎重に掘削したところ、遺物包含層が部分的にしか残存していないことが明らかになった。また、地山であるローム層上面まで重機で掘削したところ、遺構が良好な状態で残存していた。そこで、人力で遺構精査・覆土掘削を行い、図面・写真等の記録を残した。特に、本発掘調査対象範囲の4区・5区付近からは縄文時代前期の竪穴住居や土坑等の遺構が検出されたため、作業員を投入して掘削を進めた。なお、東西方向の掘削範囲においては、隣接する排水路の掘削時にすでに破壊されていることが確認された。

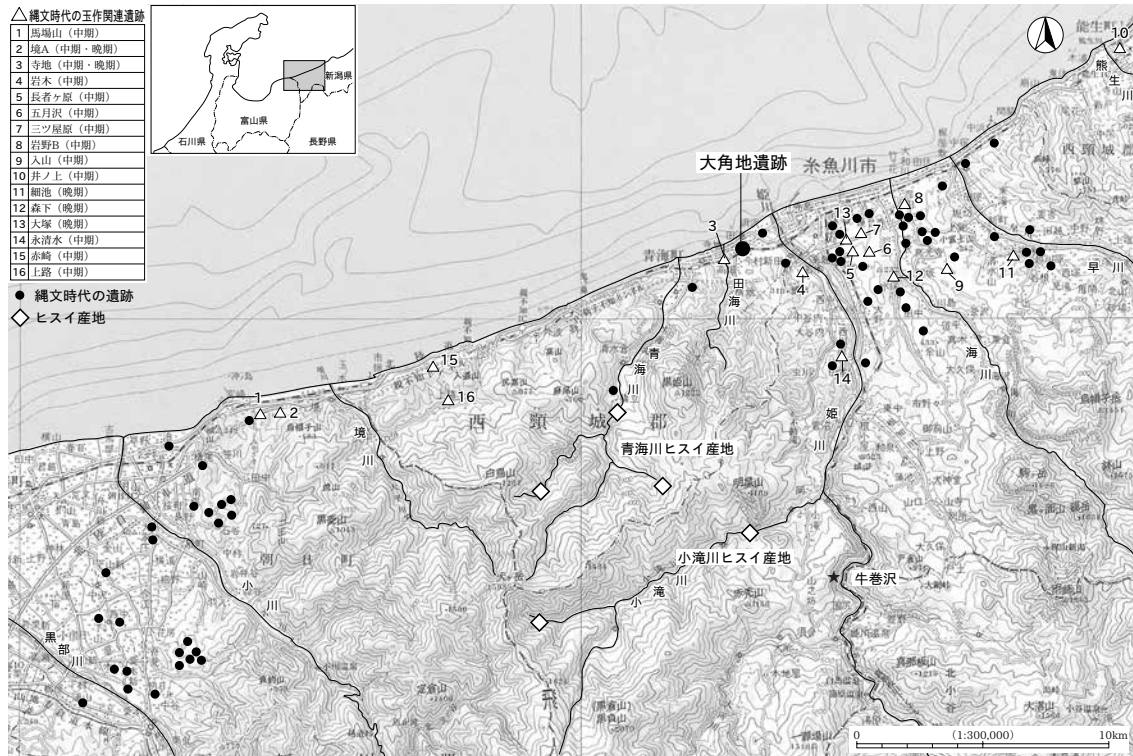
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

#### A 姫川とフォッサマグナ

大角地遺跡の東方約1.6kmには一級河川姫川が流れる。長野県北安曇郡白馬村神城の湿原地帯に源を発し、ヒスイ産地の小滝川などの支流を集め、約60kmを日本海に向かって北流する（第6図）。右岸河口部には数段の河岸段丘が発達し、糸魚川地区の遺跡の多くはこれら段丘上に立地する。全国有数の急勾配河川であることでも著名であり、集中豪雨によって氾濫を繰り返し、多くの土砂災害を引き起こしている。

姫川沿いには「糸魚川－静岡構造線」がほぼ南北方向に分布する。当地域は、フォッサマグナの西縁にあたる糸魚川－静岡構造線を境界にして、地質学的に東北日本と西南日本とに二分される。東北日本にあたる東側のフォッサマグナ地域は、主に新生代第三紀～第四紀にかけて堆積した砂岩・泥岩・火山岩の新しい地層からなる。一方、西南日本にあたる西側は、中・古生代の石灰岩や頁岩・砂岩及び変成岩の古い地層からなる。このことが、姫川の左岸と右岸での地質や地形・動植物の分布に相違を生んだ。さらに、言語・風俗文化にも影響を与え、異なった様相をみせている。このため当地域は、東北日本と西南日本の接点としても注目される。



第6図 ヒスイの原産地と縄文時代の遺跡分布

## B 交易ルート・塩の道

姫川沿いには、糸魚川周辺の塩や海産物を信州へ運んだ「塩の道」が通る。松本街道と呼ばれるこの古道は、平成15(2003)年に大字大野と山口の約4.6kmが国史跡に指定された。糸魚川市から姫川渓谷を南下して長野県松本市に至る、延長約120kmの峻険な山越えの道であり、深い谷をさけるように姫川の右岸と左岸にそれぞれ1本ずつ通り、右岸側は「東回り」、左岸側は「西回り」といわれている。街道は、長野県北安曇郡小谷村大網までの間で確認されている〔佐藤・田海ほか1992〕。

塩の道は、戦国時代に川中島の合戦時に上杉謙信が甲斐の武田信玄に塩を送ったという「義塩」の逸話でも有名である。近世になると、海側からは塩や魚介類、山側からは麻・たばこ・生薬・大豆などの生活必需品の流通路として使われた。これが「塩の道」とよばれる所以である。このように、塩の道は江戸時代には越後と信州を結ぶ重要な交易ルートであったほか、長野の善光寺への参詣の人が往来した。参勤交代の列が往来した五街道のような特別な存在ではなく、庶民の道であったといえる。しかし、明治2(1869)年に口留番所と信州問屋制度が廃止され、明治25(1892)年には新道が開通したため、松本街道・塩の道の役割は終わった。

## C 大角地遺跡周辺の地形

大角地遺跡が所在する糸魚川市青海地区は、新潟県の最西端に位置し、市振地区で富山県と県境を接する。東・西・南の三方を山に囲まれ、地区の90%以上を山岳地帯が占める。富山県境では、日本アルプスの北端が日本海に落ち込んでおり、高さ約80mの切り立った断崖が形成されている。この断崖絶壁「おやしらず・こしらず」は、人々の交流を妨げ、東西文化の交流において障壁のひとつとなった。

遺跡からは、西に黒姫山(標高1,221m)、東に雨飾山(標高1,963m)、県内最高峰の小蓮華山(標高2,768m)、北アルプス唯一の活火山である焼山(標高2,400m)を望むことができる。黒姫山一帯は、全国可採鉱物量10%を占める良質な石灰岩の産出地として知られており、山中には溶食地形が発達し、マイコミ平には十数か所の鍾乳洞が存在する。青海地区には、これら石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成され、石灰窒素等の化学肥料、セメント、塩化ビニール等の化学工業製品が製造されている。

青海地区の平坦地は青海川・田海川・姫川の流域と海沿いに細長く続いているにすぎない。したがって、市街地は姫川河口左岸から海岸線に沿うように広がる砂丘上、河川に沿った狭長な低地帯(姫川低地)、山塊の縁に広がるわずかな平坦面に集中するのみで、遺跡の分布と重複する。

なお、大角地遺跡は、黒姫山地から広がる舌状台地の先端部、海岸から500mほど内陸に立地する。この舌状台地から沖積低地に向かい急激に落ち込んでおり、1~1.4mの高低差が形成されている。海岸砂丘との間に広がるこの低地は、田海川や姫川の氾濫原となったものとみられる。大角地遺跡の立地は、水害を回避する立地環境にあったとみられる。

## 2 歴史的環境

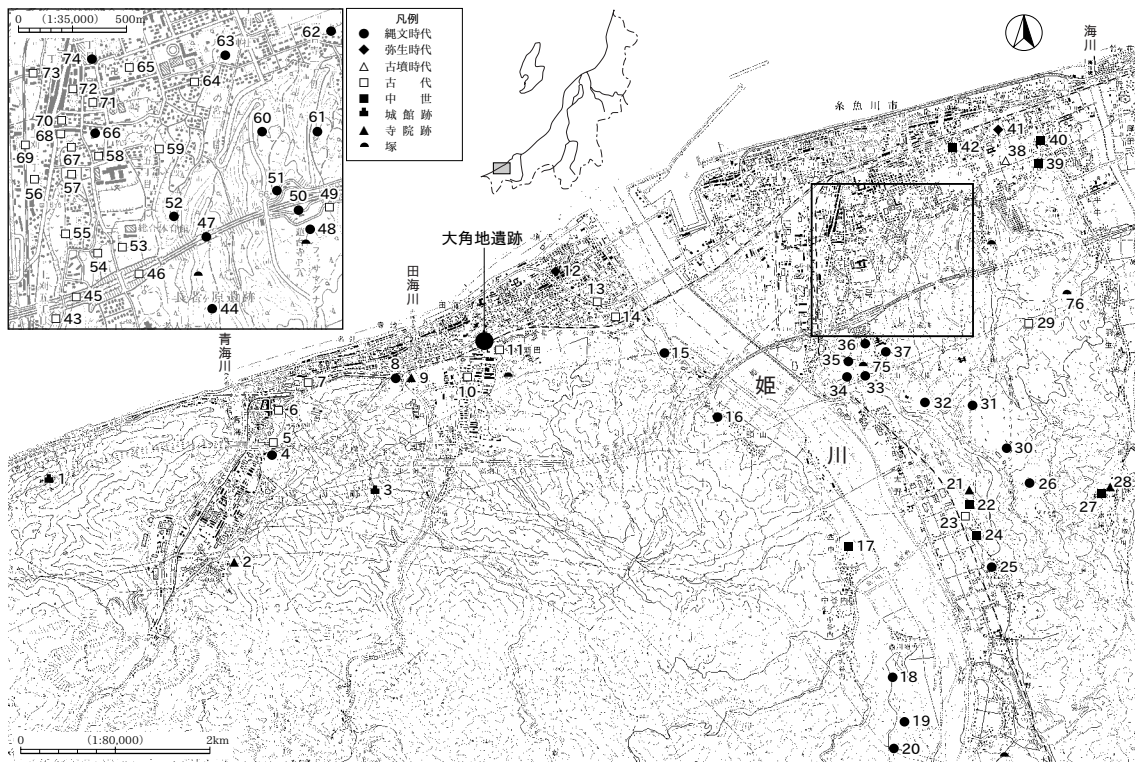
大角地遺跡周辺における、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺跡分布は、第7図のとおりである。各時代をとおして、姫川を境に右岸の糸魚川地区と左岸の青海地区とで特徴が異なるが、地形の相違によるところが大きい。姫川右岸から海川に至る糸魚川地区では、標高100m以下の緩傾斜の丘陵

## 2 歴史的環境

が発達し、特に標高50m前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。姫川左岸の青海地区では、沖積低地の微高地や山塊の縁に広がる低位丘陵に、多くの遺跡が立地する。ここでは、主に青海川～海川の範囲の遺跡について紹介する。

**縄文時代** 青海地区における縄文時代の遺跡は、山塊から広がる丘陵上に立地する。寺地遺跡(8)は、中期から晩期にかけての集落跡であり、姫川・青海川上流の硬玉産地を背景に成立した玉作遺跡とされている。遺跡の発見は古く、1937年の『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯』に記載される[齋藤1937]。その後、1967年から1973年にかけて青海町教育委員会(当時)による発掘調査が行われ、晩期の配石遺構や中期の硬玉工房跡等が検出されている[寺村ほか1987]。この調査成果を受けて、昭和55(1980)年には縄文時代の精神生活や硬玉製品等の加工技術を知る上で貴重な遺跡として一部が国史跡に指定された。また、平成13(2001)年には北陸新幹線建設に伴い、遺跡の縁辺部が発掘調査された。大角地遺跡は、寺地遺跡と田海川を挟んだ東方900mに位置する。昭和45・48(1970・73)年に実施された発掘調査では、縄文時代前期の滑石製装身具(珧状耳飾等)が多数出土しており、縄文時代の玉作研究において注目されている。

糸魚川地区における縄文時代の遺跡は、主に姫川右岸の河岸段丘上に多く立地している。中でも、国史



【国土地理院発行「糸魚川」「小滝」1：50,000原図】

1 勝山城跡	11 西角地古窯跡	21 下諏訪社跡	31 三ツ又中峯	41 姫御前	51 三ツ屋原	61 茶煙	71 東角地
2 大沢	12 本田浜	22 中平	32 苦竹原D	42 竹花	52 火葬場裏	62 館野	72 下畑
3 松山城跡	13 須沢角地	23 榎田	33 苦竹原C	43 美山	53 新割	63 一の宮	73 種場
4 桜ヶ丘	14 後久	24 古川	34 苦竹原E	44 長者ヶ原	54 道者ハバ窯跡	64 城畑	74 鉄砲町
5 天神山経塚	15 須沢水神	25 古川B	35 苦竹原B	45 鱧口下	55 道者ハバ	65 清崎城跡	75 原山十三塚
6 上野	16 岩木	26 蓮台寺	36 原山	46 大塚	56 苗代坪	66 茶畑	76 山崎三十三塚
7 諏訪前	17 御山	27 水保観音堂境内	37 苦竹原A	47 四割・杉沢	57 神角地	67 宮屋敷	
8 寺地	18 下平	28 水穂寺跡	38 笛吹田	48 大原	58 三本松	68 久保角地	
9 金剛院跡	19 永清水	29 堂屋敷	39 北平	49 塚の腰	59 菊畑	69 幅上	
10 奴奈川	20 上平	30 三ツ又	40 クワノ町	50 三ツ屋原B	60 後生山	70 張出	

第7図 大角地遺跡と周辺の遺跡



跡の長者ヶ原遺跡(44)は、縄文時代中期におけるヒスイ製玉類・蛇紋岩製磨製石斧が大量生産された大規模な集落跡として知られる〔藤田・清水<sup>ほか</sup>1964、青木1976、糸魚川市史編さん委員会1986等〕。上越市郷津から富山県朝日町宮崎にかけての海岸部は、蛇紋岩製磨製石斧とヒスイ製玉類の生産地として知られ、特に姫川下流域は、それらの生産拠点とみられる遺跡が多く認められ、長者ヶ原遺跡はその拠点的な遺跡であったとみられる。なお、長者ヶ原遺跡周辺の河岸段丘上には、いくつかの縄文時代の遺跡の分布が知られるが、いずれも小規模な集落とみられている。

姫川下流左岸の今井地区の河岸段丘には、前期から中期にかけての集落が分布する。『西頸城郡誌』〔西頸城郡教育会1930〕では、下平遺跡(18)・永清水遺跡(19)・上平遺跡(20)に関わる「長者ヶ原」伝説が掲載されており、矢の根石(石鎌)が出土するとされている。また、河口付近の低位段丘には、中期中葉～後期の岩木遺跡(16)が分布する。糸魚川地区の縄文時代の遺跡としては、最も低い立地である。このほか、海川右岸地域においては、岩野E遺跡の早期末葉～前期後葉の良好な土器群〔高橋・小池<sup>ほか</sup>1986〕や、細池遺跡の晩期前葉～中葉の硬玉生産関連資料〔寺村<sup>ほか</sup>1974〕などが注目される。

**弥生時代** 当地域で発見されている弥生時代の遺跡は数少ないが、糸魚川地区の河岸段丘上に分布する。後生山遺跡(60)は、上位段丘である長者ヶ原面の北端に位置する。東西には深い沢が刻まれ、北側に広がる沖積地との比高は約30mを測ることから高地性集落と考えられている。昭和60(1985)年の調査では、竪穴住居が検出され玉作関連遺物が出土している〔木島1986〕。大塚遺跡(46)では、前期の水神平式系・浮線文系・亀ヶ岡式系土器とともに遠賀川式系土器が出土している〔寺崎<sup>ほか</sup>1988〕。特に、遠賀川式系土器は、県内でも数少ない事例として注目されている。

**古墳時代** 古墳等の墳墓は発見されておらず、玉作に関連する遺跡が多く発見されている。大角地遺跡では、昭和45・48(1970・73)年に実施された発掘調査(第8回)で、工作用特殊ピットをもつ玉作工房跡が検出された〔寺村・安藤<sup>ほか</sup>1979〕。笛吹田遺跡(38)は、古墳時代前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ピットや方形周溝墓とみられる遺構が検出されている〔寺村<sup>ほか</sup>1978〕。また、近年、都市計画道路建設に伴う発掘調査が断続的に行われ、竪穴住居や、杵や木製釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱形石製品の出土などで注目されている。一の宮遺跡(63)は、大正8(1919)年に高橋健自氏によって天津神社境内の一部が発掘調査されており、古墳時代後期の土器とともに有孔円版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土している〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。祭祀遺跡とみられる一の宮遺跡〔梶山1972〕から出土した玉類は、大角地遺跡・笛吹田遺跡・田伏遺跡など、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている〔関1972〕。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に掲載される「奴奈川神社」に比定されるものと考えられており、奴奈川姫が祀られている。

**古代** 古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。『日本書紀』持統6(692)年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたとみられている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝2(702)年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されている。この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられている。さらに和銅元(708)年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5(712)年に出羽国として分立された。これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の最南西端に位置し、天平勝宝4(752)年10月造東大寺司牒(正倉院文書)に頸城郡の郡名がはじめて見えるが、『和名抄』(東急本)には「久比支」の訓を付している。頸城郡の郷は10郷が記されており、大角地遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。天平勝宝年中(749~756)の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。『和名抄』では高山寺本とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』(1907年)では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えられている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶉石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とあり、他駅が5疋に対して越中国佐味駅と並んで8疋と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推定される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が検出されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡(13)は、昭和62(1987)年に発掘調査が実施され、7世紀末~9世紀前半の集落跡であることが明らかにされている[土田ほか1988]。また、北陸新幹線建設工事に伴い平成17(2005)年には県教委による発掘調査が行われ、8世紀末葉の竪穴住居等が検出されている[辻2006]。大角地遺跡の南方200mには西角地古窯跡が所在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており[寺村・安藤ほか1979]、8世紀末~9世紀初頭前後の窯跡と考えられている[春日1998b]。

糸魚川地区の道者ハバ遺跡(55)では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土しており、当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている。このほか、海川右岸には8世紀末~9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡[鈴木ほか1988]や多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡[高橋1988]などの調査事例がある。

中世 青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。青海に所在する勝山城跡(1)は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間(1573~1582)頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている[平野・渡辺1968]。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡(3)は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯郭・裾郭で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚(5)は、1919(大正8)年に調査され、仁安2(1167)年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている[金子1975]。

糸魚川地区における中世遺跡は、御山遺跡(17)・中平遺跡(22)・古川遺跡(24)・水保観音堂境内(27)・北平遺跡(39)・クワノ町遺跡(40)・竹花遺跡(42)等が知られており、観音菩薩立像(重要文化財)を安置する水保観音堂境内からは中世陶磁器類を出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている[山岸・田村2004]。また、段丘~丘陵上には、中世後期~近世初期の原山十三塚(75)[木島1989]や山崎三十三塚(76)[木島1989]が分布する。しかし、調査事例が少なくその実態は必ずしも明らかでない。

### 3 大角地遺跡をめぐる研究史

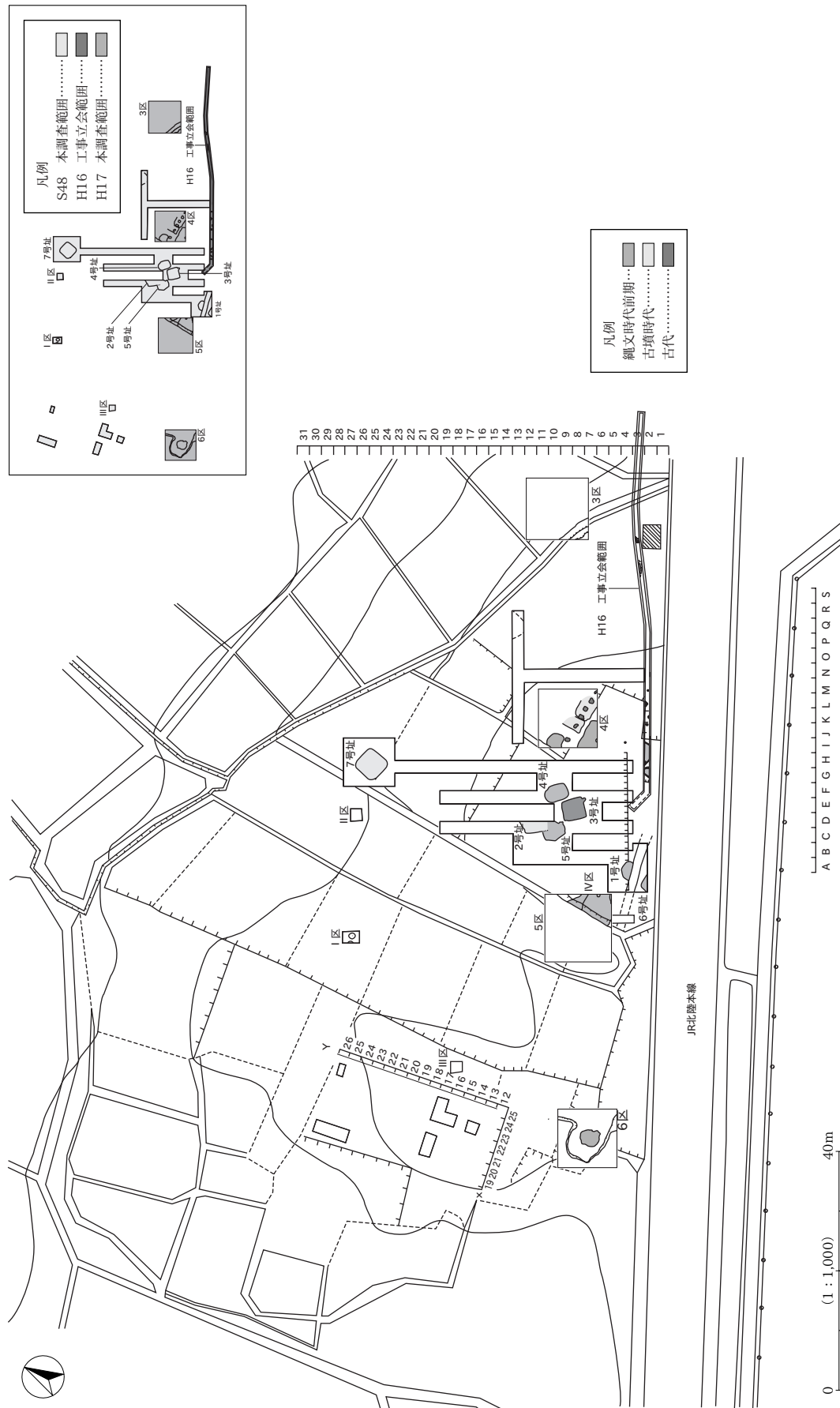
大角地遺跡をめぐる研究史については、寺村光晴氏により詳細に記載されている〔寺村・安藤ほか1979〕。ここでは、この記載をもとに概要をとりまとめることとする。

大角地遺跡の存在は戦前から知られており、昭和10（1935）年の朝日新聞において「石器時代の玉造りの遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と報じられている。これが大角地遺跡に関する最初の記載とみられる。しかし、その2年後に刊行された『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』においては、大角地遺跡の記載はみられない。その後、大角地遺跡の名が再び登場するのは昭和23（1948）年である。樋口清之氏がヒスイ製造遺跡のひとつとして「青海町大ヶ口遺跡」を取り上げており、ここではじめて大角地遺跡が学会に紹介された。その後、藤田亮策氏によりヒスイを出土する遺跡として「大ヶ口遺跡」〔藤田1957〕、「大角地遺跡」〔藤田1960〕が取り上げられている。昭和41（1966）年には青木重孝氏の『青海—その生活と発展』が刊行され、大字名をとって「田海遺跡」として紹介された〔青木1966〕が、後に小字名をとって「大角地遺跡」と名称が変更され〔青木1973〕、現在に至っている。

昭和45・48（1970・73）年には、都市計画道路建設、土地区画整理事業に伴う発掘調査が青海町教育委員会（当時、調査担当者：寺村光晴氏）によって実施された（第9図）。その結果、縄文時代前期の滑石製装身具（第8図）や、古墳時代の玉類の製作遺跡であることが明らかにされ〔寺村・安藤ほか1979〕、現在の玉作研究においても北陸地方を代表する遺跡として取り上げられている〔関・藤田2004〕。



第8図 昭和54（1979）年報告書に掲載された縄文時代前期の「飾玉」



第9図 大角地遺跡の調査履歴と主要遺構の分布

# 第Ⅲ章 調査の概要

## 1 グリッドと調査区の設定

本発掘調査対象範囲は、北陸新幹線法線の橋脚部分8基分となる。約11m四方のトレンチのような調査範囲が35m間隔で存在するため、便宜上、糸魚川方から富山方へ1区～8区と設定した(図版1)。

グリッドの設定は、法線が細長く調査範囲が狭いため、地形や方位にあわせると調査時にグリッドを誤認する恐れがあった。そこで、細長い法線と平行するように設定することで、作業の効率化を図ることとした(図版1)。グリッドの主軸は、1区橋脚基礎の中心点(図版1のA点、世界測地系 $X=113,928.044$ 、 $Y=-60,209.830$ )と6区橋脚基礎の中心点(図版1のB点、世界測地系 $X=113,839.669$ 、 $Y=-60,360.870$ )を結んだラインを主軸とし、6区の橋脚基礎の中心点を基点とした。主軸は真北から $30^{\circ} 19' 57''$ 東偏している。なお、調査範囲内における主なセンター杭の座標は、2区20A5の北東隅の杭で $X=113910.652$ 、 $Y=-60240.202$ 、4区27A5の北東隅の杭で $X=113875.416$ 、 $Y=-60300.686$ である。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をA・Bとし、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドの番号は、1～25の算用数字で表し、北隅を1、東隅を5、西隅を21、南隅を25となるように付した。これらを組み合わせて「30B1」などと表した。また、遺構内の遺物の取り上げにおいては、小グリッドをさらに4分割し、アルファベットの小文字で表記した。なお、糸魚川方に遺跡が延伸する可能性が想定されたため、この点を考慮してグリッド番号を設定した。

## 2 基本層序 (第4図)

各調査区の間におよそ24mの未調査範囲があるため、基本層序の対応関係は必ずしも明らかでないところがある。しかし、各調査区をとおしておおむね「0層：盛土、I層：表土、II層：遺物包含層、III層：漸移層、IV層およびV層：地山」と区分できた。ただし、遺物が多数出土したII層を遺物包含層としたものの近世陶磁器等が混在する。基本的には、このような区分にしたがって層名を付すこととしたが、台地部分と低地部分とで大きく状況が異なるため、別個に記載することとする。

【台地部分】3区の一部および4・5区

I層：耕作土。

II層：暗褐色土層。遺物包含層に相当する。遺物を多数含むものの攪乱が著しく、混在のない状態ではほとんど残存していない。

III層：黄褐色土層。4区の東隅に部分的に残存する。漸移層に相当するが、後世の削平により大半が失われている。

IV層：橙色ローム層。残存状況が良好な4区においても、後世の削平によって上部の漸移層～ソフトロームは失われており、表土下に硬化したハードロームが露出する状況にある。

### 3 調査の概要

V層：灰白色シルト層。ローム層下に平坦に堆積しており、硬化が著しくシルト岩に近い状態にある。

【低地部分】1～3・6～8区

低地部分は、遺構が構築されるより高く平坦な6区と、川底などに相当する1区・2区・3区の低地部分・7区・8区とで様子が異なる。

I層：耕作土。

II層：褐灰色土層。遺物を多く包含する土層であるが、しばしば近世までの遺物が含まれる。調査区間で状況が異なり、II a・II b・II c・II d・II e層に細分することができる。

II a層は、1区・3区で確認された。炭化物を含むが、下位のII b層からは近世の遺物が出土しており、近世以降の堆積層と考えられる。

II b層は、1区・3区・7区・8区で確認された。礫を多く含むことを特徴とし、やや黒味が強い色調である。特に3区では多くの遺物が出土している。

II c層は、1区で確認された。II b層とIII層の中間的な土質を呈し、遺物を少量含む。

II d層は、6区・8区で確認された。暗灰黄色の粘質シルトで、6区では縄文時代・古墳時代の遺物を多く含む。しかし、渡来銭も出土していることから中世以降の堆積層と考えられる。なお、II d層においては、近世以降の遺物は認められない。

II e層は、2区のみで確認された。礫・炭化物を多く含みII b層とよく似る土層といえるが、隣接する1・3区のように遺物は含まない。平安時代に埋積したとみられる川跡に切られていることから、II b層とは区別して考える。

III層：暗灰色シルト層～暗灰色細砂層。漸移層に相当し、遺物は含まない。

V層：灰白色シルト層～細砂層。台地上のV層と共通する色調であるが、硬化していない。遺物や炭化物を含んでおらず、水成堆積層と考えられる。

## 3 調査の概要

調査区周辺における現在の地形はほぼ平坦であるが、かつては起伏に富んだ地形であったことが明らかになった。旧地形は、台地と低地に区分でき、遺構は台地上から検出された。遺物は、台地上およびその周辺の低地から多数出土したが、低地部分から出土した遺物は二次堆積物に含まれるものとみられる。ここでは各調査区における調査成果の概要を報告する。

### A 1区

現地表下1.5mの標高約3.5mで地山と判断されるV層（灰白色細砂）が確認されたが、遺構は検出されなかった。旧表土からII層にかけては、植物遺体や地山ブロック粒子が多くみられた。II b層からは縄文時代・古代・中世の遺物が出土したが、3区に検出された台地の縁から90mほど離れていることもありその量は少ない。II b層・II c層が遺物包含層である可能性が考えられたが、17～19世紀の肥前系陶磁器・越中瀬戸焼が混在しており、それが近世以降の堆積土、あるいは攪乱を受けた土層であると考えられた。

II b層・II c層の下位には、やや暗みを帯びた細砂層III層が堆積しており、これが地山であるIV層中にわずかに落ち込んでいた。しかし、III層そのものに遺物は含まれておらず、検出された落ち込みはIV層の

細砂が水流によって浸蝕した結果とみられる。V層は灰白色のきめの細かい細砂を主体とする部分が多いが、粗砂を主体とする部分もある。総じて粗砂は下位にあるが、細砂と逆転している部分もある。このような調査結果、試掘確認調査の結果、旧地形の観察から、糸魚川方への遺跡は延伸しないものと判断された。

## B 2区

2区の地山面の検出は、調査範囲においては最も深く、地表下2.5mの標高約3mに確認された。旧地形の起伏の観察から、川底や沼地などの低地部分であったものと考えられる。遺構は検出されなかったが、川跡とみられるSX101・SX102が蛇行するように検出された。両者は途切れていたため別個に取り扱ったが、分布・形態の連続性から本来的には一連の落ち込みと判断される。SX101・SX102の覆土は、大小の木片や粗砂、直径5～10mmほどの礫を多量に含むことが特徴的である。特に覆土下半には砂礫層が厚く堆積しており、洪水によって短期間のうちに埋積したものと判断した。

SX101・SX102からは、縄文時代と平安時代の遺物が出土した。一方、周辺の調査区で認められた中世・近世の遺物が認められず、平安時代に洪水に見舞われた可能性が高い。また、川底に堆積した洪水堆積物(砂礫層)からは、平安時代(9世紀)の須恵器が出土した(398～402・407～411)。この須恵器には、焼成時に複数個体が溶着したもの(401・411)や焼き歪んだもの(400)が含まれる。「製品」となり得ない須恵器は、通常、消費地に流通しないことから、2区の南側200mに位置する西角地古窯跡周辺の灰原から流出したものと考えられる。ただし、周知の西角地古窯跡から出土した須恵器とは年代観や胎土が異なり、未知の窯跡が周辺に埋没しているものとみられる。西角地古窯跡では、未知の窯体とあわせて窯跡群を形成した可能性を指摘できる。また、洪水堆積物中には荷札状木簡(455)や緑釉陶器の優品(412)も含まれており、近隣に官衙など有力な遺跡が存在した可能性を指摘できる。なお、厚く堆積したI層中から打ち込まれた杭が多数検出されたが、検出層位と出土遺物の年代から近世以降の所産と判断した。

## C 3区

3区からは、舌状台地の北縁が検出された。この縁は、昭和45・48(1970・73)年調査時の地形測量図にみられる土地区画線と一致する(第8図)ことから、盛土以前から存在した台地縁と判断される。この縁と沿うように土留めとみられる杭列が検出されたが、旧表土層を切るように布掘りした上で打設されていた。すなわち、杭列が現代の所産であることが明らかである。この杭列の低地側には、浅い溝SD51が検出された。これは台地縁に沿うように流れる自然流路とみられる。SD51は杭列と平行するように分布するが、杭列がI層を切るように構築されているのに対し、SD51はII b層の下位から検出されている。すなわち、見かけ上、並列する両者を、並存するものとは判断できない。出土遺物の下限は18～19世紀の肥前系陶磁器であり、SD51は近世後期以降の溝と判断される。また、覆土からは、縄文時代の礫石器、古代の須恵器、中世の珠洲焼、近世の陶磁器などが混在して多数出土した。これらはほとんど磨耗しておらず、供給源が近隣であったことを示唆している。3区と4区の間を設定された確認調査トレンチ(第2図H17-15Tr)からは遺物が多数出土しており、供給源が直近の台地上にあった可能性が高い。

東角には、調査区外へ向かう急激な落ち込みSX52(斜面に杭を打った上段に横木を据えられた土留め)が検出された。SD51と同様、近世の遺物を含むII b層の下位から検出されており、近世以降に位置付けら

### 3 調査の概要

れる。なお、SD51とSX52の間には平坦面の広がり確認されたが、遺構は検出されなかった。

#### D 4区

4区は、舌状台地上の平坦面にあたり、相対的に調査区の南東側（線路側）がより高く、北西側（海側）が低い。調査対象範囲において最も標高の高い地点であり、縄文時代前期・古墳時代・古代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・ピットが検出された。昭和45・48（1970・73）年調査時に遺構が多数検出されたトレンチは4区の周辺にあたることから、過去の調査成果と整合する。

縄文時代前期の遺構として注目されるのは竪穴住居である。4棟検出されたものの、うち3棟は方形プランが検出されたのみで明瞭な柱穴は検出されなかった。最も良好な状態で検出された竪穴住居SI14は、直径2.5mの円形プランで、壁柱穴がめぐるものである。諸磯a式土器が出土したことから、他の縄文前期の遺構より新しく位置付けることができる。また、竪穴住居内からは磨製石斧の原石・製作過程の資料が多数出土している。しかも、それは極めて大型で、他のそれとは明瞭に区別できる。

古墳時代の遺構として注目されるのは溝SD1である。調査区の隅に一部が検出されたのみであるが、覆土中からは古墳時代後期の土器と白玉および製作関連資料がまとまって出土している。昭和45・48（1970・73）年調査時には、周囲から古墳時代の白玉工房が検出されていることから、それに関連する資料とみられる。

古代の遺構は、掘立柱建物が検出された。方形の大型ピットから構成されており、その断面・底面には、柱痕が認められることから建物であったことは確実とみられる。主軸が、ほぼ東西南北方向を示しており、整然と配置される様子が理解される。遺構の年代を決定するための十分な遺物はないが、ピット・建物の形態的特徴、切り合い関係の把握において後出的な位置付けにあることから、古代の遺構と判断した。

このように多数検出された遺構ではあるが、後世の削平が著しく残存状況は良好でない。検出された遺構の深さは浅く、上半を失っているものと判断される。また、調査区北東側の一部を除けば、混在のない遺物包含層はもとより、漸移層・ソフトローム層までが失われていることが明らかであった。

なお、表土下20cmに遺構確認面が存在した。このような状況から、表土の掘削に重機を用いず、人力で掘削することとした。また、過去の調査で、微細な玉類が多数出土していることから、遺構覆土全量を水洗して選別することとした。その結果として、多くの微細資料が採取されている。

#### E 5区

5区からは、舌状台地の西縁が検出された。しかし、この縁は昭和45・48（1970・73）年調査時の地形測量図にみられる土地区画線と一致する（第8図）。この土地区画線は直線であり、区画整理において造成された斜面の可能性が高い。この斜面を境に上段と下段と呼ぶこととする。

上段ではローム層が地山となり、竪穴住居と土坑が重複した遺構が検出された。この遺構覆土からは、多数の磨製石斧製作関連資料や石製装身具が出土している。特に、覆土上半から多数の遺物が出土しているが、古墳時代の遺物がわずかに混入する。地山を基調とする覆土が最上層を覆っており、半埋没状態であった遺構が古墳時代に埋め戻された可能性がある。すなわち、上部から多数出土した遺物は、二次堆積土中に含まれるものと判断される。一方、覆土下半からの出土遺物は上半と比べて多くないが、出土土器は縄文時代早期末葉～前期前葉に限定され、遺構の年代観を示すものと考えられる。この土器に伴い、ヒスイ製敲石や磨製石斧製作関連資料、滑石製装身具が出土している。中でもヒスイ製敲石はヒスイ利用の



初例とみられ注目される。なお、検出された遺構は、斜面に切られている。このためか下段の表土からは多数の遺物が出土する状況にあった。

下段にはローム層（Ⅳ層）が認められず、表土の直下に本来であればローム層の下位に存在する灰白色シルト（Ⅴ層）が露出する状況にあった。すなわち、区画整理時に上部に存在したであろう土層が失われた可能性が高い。したがって、上段と下段の境界となる1mほどの段差は本来的には存在せず、上段部分から6区に向かって緩やかな斜面地が広がっていたものと考えられる。

## F 6区

6区は、標高5.6m前後の湿地帯であったことから低地部分に相当するものと考えたが、厚さ50cmほどの表土を除去すると灰白色シルト層（Ⅴ層）が検出された。しまりの良好な地盤であり、5区のローム層下に確認されたⅤ層と対応する。Ⅴ層を検出すると、舌状に広がる平坦面が検出され、その周囲が急激に落ち込む地形となることが明らかとなった。

平坦面では、Ⅴ層の直上から近世後期（19世紀）の肥前系磁器が出土しており、混在のない遺物包含層が存在しないことが確認された。攪乱も著しく、平坦面上に検出された縄文時代早期末葉～前期初頭の竪穴住居の北東側半分は失われていた。なお、竪穴住居は攪乱の影響もあり、立ち上がり・プランを明瞭に把握することができなかったが、焼土や貼り床が認められ柱穴が認められる。また、住居内の土坑（SK169）からは大型の砥石や石製品が多数出土している。

斜面においては、Ⅴ層とⅠ層の間に炭化物を多量に含む暗灰黄色粘質シルトⅡd層が厚く堆積していた。半埋没の状態で盛土されていることから、斜面が現代まで残されていたことがわかる。この斜面から7区・8区に向かい、急激に落ち込んでいるものと判断された。

## G 7・8区

本発掘調査の進展に伴い、遺跡周辺の旧地形が起伏に富むこと、遺構・遺物の分布に濃淡があることが明らかになった。7区・8区は、隣接する6区の状況から低地部分にあたり遺構・遺物の密度が薄いことが想定された。この所見を踏まえ、本発掘調査の対象である7区・8区に改めて部分的な調査を実施した。

調査の結果、地山面が6区から1m以上低い深さから検出され、それが砂礫層であることが確認された。遺構は検出されず、遺物は7区から3点、8区から8点が出土した。7区の遺物は、すべて旧表土からの出土であり原位置を保っていない。8区の遺物は、Ⅱb層から6点出土している。Ⅱb層は低地に相当する1区・3区に特徴的に確認された土層であり、縄文時代から近世までの遺物が混在することが確認されている。したがって、Ⅱb層から出土した遺物は、二次的な堆積物に含まれるものと考えられる。また、確認調査において古墳時代の土師器が出土したⅡd層からは、土師器1片が出土したが磨耗が著しい。

これらの状況から、7区・8区は低地に相当し、生活の痕跡を積極的に認めることができない。したがって、7区・8区の調査については、全面掘削を行わないこととした。

# 第Ⅳ章 遺 構

## 1 4区

4区は、調査区内のうち最も標高の高い地点にあたり、舌状台地上の平坦面に位置する。4区からは、縄文時代前期および古墳時代～古代の遺構が検出された。これらは、切り合い関係や出土遺物の年代観を把握する過程から、年代ごとに覆土の特徴が異なることが明らかとなった。覆土は色調・混入物・しまりなどの観察から4分類することができる。

A類：にぶい黄褐色土～褐色土でしまりが強い。混ざりがほとんどなく、単一的な層を形成する。縄文時代早期末葉から前期後葉の遺物を包含するが、前期前葉の遺物が中心である。また、前期でも前葉の遺物を含む遺構と、後葉の遺物を含む遺構が存在するが、覆土から2時期に細分することはできなかった。SI2、SI14、SK17、SK22、SK23、SK150が該当する。

B類：にぶい褐色土～黒褐色土・暗灰黄色土で地山ブロック粒子をわずかに含む。覆土から出土した遺物の年代から、古墳時代から平安時代の遺構と考えられる。ただし、古墳時代の遺物のみを含む遺構も存在することから、B類を古墳時代と平安時代の2時期に細分できるものと考えられるが、覆土の分類からそのことを把握することはできなかった。SD1、SI16、SI18、SB1が該当する。

C類：暗褐色土で地山ブロックを多く含む。平安時代から近世の遺物を包含することから、近世以降の遺構と考えられる。調査区南東で平行して検出された溝群SD5・6・8・10が該当する。

D類：暗灰黄色で混入物が多いシルト。近現代の遺物を包含することから、攪乱と判断した。

各覆土の分類間の主な新旧関係として、①SI2 (A類) → SK27 (= SB1) (B類)、②SK40 (= SB1) (B類) → SD8 (C類) を挙げることができる。覆土から出土した遺物の年代観を考慮すれば、「A類(縄文前期) → B類(古墳～平安時代) → C類(近世) → D類(現代)」という変遷をたどることができる。以下、A・B・C類に該当する遺構について報告する。

このような分類に基づき、竪穴住居2棟・土坑4基を縄文時代前期、竪穴住居2棟・掘立柱建物1棟・平行する溝等を古墳時代以降の遺構と判断した。なお、地山と酷似する覆土の遺構が存在したため、掘り残しの遺構がないかを確認することを目的として、調査区全面を対象にローム層をおよそ5cm掘り下げている。

### A 縄文時代の遺構

#### (1) 竪穴住居

覆土の分類から、SI14とSI2を縄文時代の竪穴住居と分類した。平面形は、SI14が円形、SI2が隅丸長方形である。ただし、SI2の半分は調査区外にあるため、明確にプランを把握できていないわけではない。

SI14 円形に近いプランを呈する。西端は調査区外に延びる。南北幅は3mほど、確認面から床面までの深さは約30cmを測る。覆土は5層からなり、1～4層はほぼ水平に堆積する。2・3層からは蛇紋岩製磨製石斧の製作関連資料(160～168)が多く出土する。本遺構の中央と壁付近にピットが認められる。後者は、大きさにまとまりがややないものの、直径40cm程度の穴がほぼ等間隔に巡り、本遺構の上部

構造を支える柱穴である可能性が高い。ただし、P141は直径60cm程度と規模の大きな穴で、特大品の磨製石斧未製品2点(166・167)が出土しており、ここに諸磯a式土器の大破片(14)が伴う。この出土状況の一括性は高いものとみられる。SI14から出土した磨製石斧の未製品は、他の調査区から出土した資料と比べて著しく大きく、様相を異にする。また、住居の形態においても他とは異質である。伴出土器の年代観の相違を考慮すれば、前期後葉に下る遺構と判断される。前期後葉の遺構は、本遺跡においては他に発見されておらず、その位置付けについては必ずしも明らかでない。しかし、竪穴住居の規模が比較的小さいこと、磨製石斧の製作に関連する資料が集中的に出土していることから、特定の作業実施に特化した性格を有する可能性がある。なお、本遺構の覆土上半は、近現代陶磁器を含む攪乱に切られている。

SI2 西端と南端は調査区外に延びる。遺構の中央部の大半を近現代に攪乱されている。辛うじて遺存している覆土も上半が削平されており、状態は良くない。覆土は1層からなり基本層序Ⅱ層に近似する。検出された壁面周辺に無数の小穴が認められた。これらが壁柱穴となる可能性があるが、配置、深度、形状ともに不規則であった。また、検出された床面の大部分に著しい攪乱が及んでいるため、原位置を保った状態で出土した遺物はなかった。しかし、掘立柱建物を構成するSK27に切られることから、古墳時代以前の遺構であることは確実である。

## (2) 土 坑

SK17・SK22・SK23・SK150は、覆土の特徴から縄文時代の土坑と判断される。ともに細片ではあるが、胎土に繊維を含む縄文土器が出土している。また、SK23からは滑石製の管玉(347)が出土している。

## B 古墳時代以降の遺構

### (1) 竪穴住居

遺構覆土の分類からSI16とSI18を古墳時代以降の竪穴住居と分類した。しかし、攪乱が著しいため、明確にプランを把握できていないわけではない。また、竪穴の規模と形態から竪穴住居の可能性を考えたものの、明瞭な柱穴は検出されていない。柱穴の確認については、地山と酷似する覆土の遺構が存在することから、慎重を期して確認面の掘り下げなどの措置を講じている。したがって、分類上の問題もあろうが、掘り込みが浅く広いこと、切り合い関係から古代以前に位置付けられる遺構であることから、該期で想定される分類としては竪穴住居に最も共通する。

SI16 東端と北端の立ち上がりを把握できなかったため規模は明らかでないが、検出範囲における長軸は6.4mを測る。深さは最大で25cmほどであるが、3層からなる覆土のうち1層は攪乱層である。わずかに本来の覆土が残されていたものの、東端と北端の立ち上がりは明瞭でなかった。本遺構はSI18を切るように構築される(図版4、断面図15)。また、古代の遺構とみられる掘立柱建物SB1(SK29・34・40)および近世の遺構(SD8・10)に切られることから、古代以前の遺構であることは確実である。床面は比較的平坦であるが、柱穴は認められず、竪穴住居と判断する十分な根拠に欠ける。SI16からは、胎土中に繊維を含む縄文時代前期前半の土器片(2層)が認められるものの、細片が多く年代を特定できる資料に乏しいが、白玉の未製品(383)が出土しており、古墳時代の遺構である可能性が最も高い。

SI18 北端の立ち上がりを把握できなかったため規模は明らかでないが、東西幅は2.4mほどを測る。深さは最大で15cmほどと浅い。覆土は2層からなるが、うち1層は攪乱層である。本遺構は、古代の遺

構とみられる掘立柱建物SB1（SK21）およびSI16に切られることから、古代以前の遺構であることは確実である。床面は比較的平坦であるが、柱穴は認められず、竪穴住居と判断する十分な根拠に欠ける。遺構内からは土器片が数点出土しているものの細片であるため年代を特定しがたいが、SI16と隣接することから、これに近接する時期の遺構の可能性が高い。

## （2）掘立柱建物

掘立柱建物SB1が検出された。SK20・21・29・40・34が直線上に分布し、この主軸は東西軸から3°南偏する。それぞれの掘方プランは比較的規模の大きな隅丸長方形であるが、柱痕が確認されることから柱穴と判断される。各柱穴の長軸は必ずしも同じ方向は向いていないものの、一辺が70～80cmほどの長さにとまるなどおおよそ同様の規模である。柱間はSK20－21が3.0m、SK21－29が2.2m、SK29－40－34が1.8mと一定しない。また、SK27とSK21を結んだ軸とSK20－34軸は直交しており、SK27も本掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。なお、SK27とSK21の柱間は5.0mとより広い。検出された2列の柱穴列が直交関係にあることから掘立柱建物と判断されるものの、柱穴の大半は調査区外に存在する。したがって、全容を把握することはできないが、柱穴の規模・形状から比較的規模の大きな建物とみられる。

遺構の年代を決定するための十分な遺物はないが、切り合い関係の把握において後出的な位置付けにある。また、SK20から古墳時代の器台と考えられる土師器片（416）が出土しており、古墳時代以降の遺構であることは確実である。柱穴・建物の形態的特徴、9世紀前半に位置付けられる第3号住居址（昭和45・48年調査）と隣接すること、周辺の遺物包含層や表土中から9世紀代の遺物が比較的まとまって出土していることから、古代の遺構と判断することが適当と考えられる。なお、掘立柱建物を構成するSK20・SK40からはヒスイの剥片が、あわせて4点（SK20：3点、SK40：1点）出土した（299）。他の遺構にはみられない高率で出土しており、偶発的な混入と拙速的に判断することはできないかもしれない。

## （3）溝

SD1は、調査区西隅に検出された溝で幅約1m、深さは約0.3mを測る。両端は調査区外に延び、南端は縄文時代前期後葉の竪穴住居であるSI14を切るように構築されている。覆土中からは古墳時代の甕口縁部（415）のほか、白玉およびその未製品（376～380）が出土している。白玉製作関連資料が11点と比較的まとまって出土しており、その製作に関連する遺構の可能性もある。細片のため詳細は不明であるが、内面にハケメを有する土師器片などが出土しており、古墳時代の遺構とみられる。

SD5・6・8・10は平行する溝で耕作に伴う畝である可能性が高い。すべて、幅0.6m、深さ0.1mほどと近似値を示し、覆土も類似する。古代以降の掘立柱建物を構成するSK40をSD8が、SK34をSD10が切る。また、この溝群が埋没した後にI層（近現代）が堆積していることから、古代以降、近現代以前の遺構と考えられる。わずかに出土した遺物の年代から、近世まで下る遺構である可能性がある。

## （4）その他

26A・27Aグリッドにピット群が認められた。それらの配置や規模、深度、覆土のパターンなどは不規則であり、相互の関係や性格を見出すことはできなかった。ピット内からは、古墳時代もしくは古代の土師器片が出土しており、古墳時代以降に形成された遺構と考えられる。ただし、P25の覆土上層は炭

化物層で、確認面の直上に直径10～20cm程の焼礫の集石が検出されており、他と異質である。出土遺物はみられず年代は明らかでないが、礫を多数出土する点においては縄文時代の遺構と共通する。

## 2 5区

5区は、舌状台地上に相当するが、区画整理で大部分が削平されている。遺構確認面が残存しているのは、調査区南東隅の13%ほどに過ぎず、検出された遺構の全貌は明らかでない。

### A 縄文時代の遺構

#### (1) 調査の過程

5区からは、SK61・SK62・SK67が検出された。これらは、別個の遺構として調査を進めたものの、調査の過程から一連の遺構と判断された。図面・写真・遺物注記は、すべて別個の遺構として記録したため、報告においてもそれぞれの名称を使用することとする。別個の名称を使用することにより、遺構内の概ねの位置関係を把握できる。

この遺構を検出した時点では、溝状の遺構SK61とSK62が並列するように観察されたため、別個に掘削を進めた。しかし、掘削を進めるにしたがい、SK61はSK62に向かい、SK62はSK61に向かいオーバーハングする状況となった。さらに底面付近において、にぶい黄褐色土(4層)が壁面に潜り込むことが明らかとなった。そこで、SK61とSK62の関係を探るためにサブトレンチを設定した。その結果、SK61とSK62を区分した「地山」が二次堆積土であることが明らかとなり、2a層・2b層と呼称した。そして、2a層・2b層の下位には4層が薄く面的に広がっていることが明らかとなった。これによりSK61とSK62は一連の遺構であることが確認されることとなった。そして、SK61とSK62の間をSK67と呼称することとした。

また、SK61は、上段と下段に分かれる。上段には焼土があり、これが下段に向かって落ち込んでいることから一連の遺構と判断して調査を進めた。しかし、下段に向かって落ち込むとみられた焼土(5層)は、調査の過程で崩落して二次的に堆積した土層(①層)であることが明らかとなり、上段の遺構が下段の遺構に切られていることが明らかとなった。そこで、上段の遺構をSK61a、下段の遺構をSK61bとして記載する。

#### (2) 土層の堆積と遺物の出土状況

土層は、大きく4層に大別することができる。1層は、黒褐色土でSK61・SK62の最上層を構成する。縄文時代前期前葉の土器・磨製石斧製作関連資料・滑石製装身具類を極めて多く含むが、古墳時代後期の土師器・白玉をわずかに含む。しまりが弱く二次堆積土と考えられる。しかし、古代以降の遺物は認められず、また1層を切るように古代のピット(P64)が掘削されている。このことから、1層が古墳時代以降、平安時代(9世紀)以前に堆積した土層と考えられる。

2層は、にぶい赤褐色でローム質の2a層とにぶい褐色でシルト質の2b層に細分することができる。これらは地山と酷似する土層であるが、ブロック状であるためしまりがやや弱く、炭化物粒子や遺物をごくわずかに含む。ロームを基調とする土層であり、他の遺構の掘削土に由来するとみられる。2層からは古墳時代後期の白玉が出土しており、半埋没状態であった遺構が古墳時代に埋められた可能性を指摘できる。

3層は、暗褐色～黒褐色の土層であり、比較的厚く堆積している。斜面付近や遺構の底部付近に認められることから、自然堆積の土層とみられる。1層と似た土質であるが、遺物の出土は比較的少なく、縄文時代早期末葉～前期前葉の遺物に限られる。

4層は、最下層のにぶい黄褐色土である。縄文時代早期末葉～前期前葉に遺物の年代が限られる。2a層・2b層の下位に薄く堆積しており、遺物はごくわずかであったが楔形石器(143)、磨製石斧未製品(186)、珓状耳飾(329)が出土した。このことから、本来的には本遺構に多数の遺物が伴わない可能性がある。

また、SK61aの覆土は4層に似るが、より地山に近く硬くしまった土質であったため4b層と呼称し区別した。遺物の数は少ないが、他の覆土にみられた磨製石斧や装身具の未製品はほとんど認められず、製品や縄文土器の大破片が特徴的に含まれていた。

### (3) 遺構の形状と性格

SK61a 遺構の大半がSK61bおよび区画整理によって切られているため実態は明らかでない。しかし、直線的なプランが検出されていることから方形基調の大規模な遺構とみられる。遺構の上半を削平で失っていることもあり深さは5cmほどと浅いが、底面が平坦であること、地床炉とみられる焼土が検出されていることを考慮して、竪穴住居の一部と考えたい。しかし、検出範囲がごく一部であるため、上屋を支持するとみられる明らかな柱穴は検出されなかった。

本遺構から出土した遺物は、明らかな覆土である4b層から出土したことを根拠に判断した。4b層の上位の「1層」からも遺物が出土したが、SK61bまで連続して分布することから基本的には本遺構に伴わないものと判断した。ただし、出土状況の確認から床面のごく近くからまとまりをもって出土した一部の資料(31・32・36)については、本遺構に伴うものと積極的に評価することとした。なお、遺物の分布は、特に焼土周辺に集中した。

縄文土器(31・32・36・42)は早期末葉～前期初頭に位置付けられ、SK61bから出土した土器(前期前葉)より古く位置付けられる。また、珓状耳飾(312)、管玉(345)、珓状耳飾の素材とみられる円盤状の石製品(340)、完形の磨製石斧(149)、石皿(222)が近接する位置から出土している。滑石製装身具はほとんど破損しておらず、また研磨が仕上げ段階にまで達しているものである。破損品や粗磨きの段階で留まっている資料が大半を占める本遺跡においては稀有な存在といえる。磨製石斧についても、未製品や破損品でない「製品」が出土している。このように、他の遺構から出土した遺物との間に著しい相違が認められ、石器・石製品の生産痕跡を認めることができない。このほか大形の砥石(212・214)や近似した大きさ・形状の蛇紋岩原石2点(172・173)も出土しているが、磨製石斧の未製品はほとんど出土していない。

SK61b・SK62・SK67 調査区内で検出された範囲が遺構全体の一部である上に、後世に大幅に削られており、全体像を把握することは極めて困難な状況にある。そのような限られた条件にあるが、最大幅が5mほどの楕円形を呈する。しかし、上端ラインには凹凸が認められ、特にSK67の北端には地山が舌状に張り出しており、不整形と表現すべきかもしれない。

また、底面～斜面部分にも凹凸が認められる。あるいは複数の遺構が重なり合って形成された遺構の可能性も考えられる。しかし、縦横に設定したセクション面の土層観察からそのことを裏付けることはできなかった。また、上述のとおり遺構覆土上半の堆積時期は、古墳時代後期以降である可能性が高いことも

あり判断は難しい。

この遺構の性格については、全体像が明らかでなく言及することは難しいが、平面形態や規模は竪穴住居と近似する。しかし、竪穴住居と考えるには深く、柱穴が検出されていないことから、拙速的に判断することはできない。したがって、土坑と表現しておきたい。

また、珧状耳飾・玉類などの滑石製装身具類の41%がこの土坑から集中的に出土していることは特筆される。また、蛇紋岩製磨製石斧の未製品やその工具(砥石・敲石)が多数出土しており、4層からはヒスイ製敲石(207、図版26・29)と磨製石斧の未製品が出土している。一方、磨石類(44点)や石錘(26点)など、それらの製作に直接的に関連しない可能性の高い遺物も多数出土している。一括して投棄されたかのような状況にもみえるが、出土遺物の構成は他の遺構と比べ明らかに異質であり、装身具や磨製石斧の製作に関連する遺構である可能性を指摘しておきたい。

## B 古代の遺構

古代の遺構は、P64が検出されたのみである。SK62の埋没後に掘削された直径30cm、深さ19cmほどのピットで、覆土中からは土師器小甕の大破片(413)が出土した。遺構の切り合い関係と出土遺物の年代から、平安時代(9世紀)の遺構とみられる。

## 3 6区

### A 縄文時代の遺構

舌状に広がる平坦面は、表土の堆積が薄く、攪乱も著しかった。表土・攪乱層を除去して精査したところ、平坦面の中央に焼土が検出された。このことにより竪穴住居SI166の存在が想定されたためプランの検出に努めたが、北西側半分と竪穴の上半が攪乱や削平で失われていた。このような状況でありプランの把握が困難であったため、サブトレンチを設定しながら調査を進めた。その結果、炭化物を多量に含む褐灰色シルトを主体とした円形または方形のプランが検出された。規模は、長径3.75m、短径2.9mほどを測り、深さは10cmほどと浅かった。残存状況が良好でなかったことがわかる。

焼土は、このプランのほぼ中央に位置した。焼土の広がりには長軸55cm、短軸50cmほどで、不整形を呈する。厚さは5~7cmで暗赤褐色シルトを主体とし、まばらに炭化物を含みしまりが極めて強い。この焼土は、地床炉と考えられる。また、東南側には床面積のおよそ1/3にわたり、明黄褐色粘質シルトを基調とした硬化した土層が観察された。ほぼ水平に厚さ5cmほどで床直上に堆積しており、貼り床とみられる。住居内からは、ピット12基、土坑1基が検出された。ピットは、主柱穴4本の正方形もしくは5本の五角形から構成されるとみられる。ただし、ピットの規模は30~50cmほどと大きくない。

遺物は、住居内の2か所から集中的に出土した。南隅のSK169およびその周辺からは、砥石と滑石製装身具がまとまって出土した。覆土上位には、40cmほどの砂岩製砥石(213・216)が出土し、その下位から25cm大の礫が折り重なるように出土した。また、これと隣接して30cm大の礫、縄文土器(99・100)、石錘が出土している。特筆すべきは、この砥石の下位から、滑石製の珧状耳飾5点(318~321・324)、管玉(354)、垂玉?(366)、勾玉未製品?(344)が集中して出土していることである。このうち、319・320・321・344・354は、他の調査区からは出土していない黄土色の特徴的な滑石を素材としており、同一母岩から製作された可能性がある。さらに、これと同質の滑石の破片も出土してい

る。製作時の残滓が共伴すること、未製品や製作途中の破損品のみが出土することから、SK169は装身具製作に関連する遺構である可能性が考えられる。ただし、その位置関係から柱穴の一部とも考えられ、竪穴住居が機能した時点の遺物でない可能性もある。

東南端からは縄文土器1個体(98)が、つぶれたような状態で検出された。貼り床の直上から検出されたものであり、竪穴住居に伴う遺物と考えられる。この土器の年代から、本遺構の年代を早期末葉～前期初頭に位置付けられる可能性が高い。該期における竪穴住居の類例は少なく、貴重な検出事例といえる。

## B 古代の遺構

8世紀末頃の長胴甕もしくは小甕が出土しているP163を古代の遺構と判断した。6区において唯一、古代と判断した遺構である。長径44cm、短径38cm、深さ17cmを測る。覆土は炭化物を多く含む黒褐色シルトであり、縄文時代の遺構とは異なる。6区においては、同様の覆土からなる遺構は他に存在しない。

## 4 工事立会範囲

幅0.8m、総延長95mという限られた範囲の調査であったが、竪穴住居1基、土坑3基、溝2条、ピット3基が検出された。いずれも地山に近い、あるいは地山ブロックを基調としており、量に多寡はあるものの炭化物を含む。炭化物を多く含む遺構・層位から、遺物がより多く出土する傾向にあった。出土遺物から、いずれも縄文時代早期末葉～前期中葉の遺構と考えられる。

### (1) 竪穴住居

SI1 プランの一部しか検出できなかったものの、その形状は直線的であり、方形プランであることが推測された。また、方形プランの西隅にあたる部分からピット1基が検出された。すなわち、方形プランの四隅にピットが配される構造と考えられる。立ち上がりは急斜度をなし、床面はほぼ水平である。検出状況は良好で、残存部分の深さは0.5～0.7mを測る。このようなあり方は、1973年調査時における縄文時代前期の5号住居と共通する。

遺物は、2層から大半が出土しており、土器や蛇紋岩製の石器等が含まれる。土器は、前期中葉のもの(57)が認められ、前期中葉の遺構と判断される。また、蛇紋岩製の石器に、磨製石斧の未製品が多数含まれることが特徴的である。しかし、その工具(敲石・砥石)や製作過程に産出される剥片・碎片等の出土も少なかった。また、東端壁面付近の床直上から蛇紋岩製の磨製石斧未製品2点・大形の調整剥片1点がまとめて出土しており注目される。

### (2) 土 坑

SK1 直径0.63m、深さ0.12mほどの規模を測る。周辺にテラスが作出され、中央部が深く凹む。SD2(幅0.3m、深さ0.05m)を切るように検出されているが、双方から遺物の出土は見られなかった。

SK2 直径3.3m、深さ0.4mを測り、竪穴住居の一部である可能性も考えられる。西側にテラス状の平坦面(緩斜面)が作出される一方、東側が一段低く作出されている。遺物の多くは、より暗い色調を呈する上位の1～3層から出土している。



SK3 直径0.84m、深さ0.28mを測る。中央部が一段低く掘り込まれており、底面の凹凸が顕著であった。他の遺構と同様に、土器片や蛇紋岩製の剥片が出土したほか、石錘等も認められた。土器は、早期末葉～前期初頭のもの(55)が出土した。

### (3) 溝

SD1は、幅0.6m、深さ0.05m程度であり、一部は攪乱と重複するように検出されている。攪乱である可能性も考えられたが、他の遺構と共通する覆土が混在しないように検出された部分を遺構と認識した。覆土からは、滑石製の瑛状耳飾(323)が出土している。

### (4) ピ ッ ト

ピット3基が検出されたが、調査範囲が狭小なため、それらに有意な配置は認められなかった。中でもP3からは、蛇紋岩製の剥片・碎片27点がまとめて出土しており特徴的である。

# 第V章 遺 物

## 1 旧石器時代の遺物 (図版8-1~2)

### A 出土状況

旧石器時代のナイフ形石器と思われる石器が、3区と5区からそれぞれ1点出土した。1は、3区の台地の低地から近世陶磁器等とともに出土したものであり二次堆積中の所産である。2は、5区から縄文時代の遺物とともに取り上げられたものであり、器表面にロームがわずかに付着している。両者とも顕著な磨耗は認められず、本来的な包含地点から大きく移動したものとみられない。すなわち、調査範囲周辺に旧石器時代の遺跡が存在するものと考えられる。

今回の調査範囲においては、3区・4区・5区においてローム層が認められた。3区には、台地縁のごく一部が残存し、ローム層を掘削したが遺物は検出されていない。4区は、後世に削平されているため漸移層やソフトローム層は残存しておらず、表土の直下にハードローム層が露出する状況にあった。排水溝や遺構調査のためのトレンチから遺物は出土しておらず、遺構の壁面等から遺物や炭化物が検出される状況もない。また、遺構の掘り残しを確認するために、ほぼ全面にわたってローム層を5cm以上掘り下げているが同様の状況にある。5区は、台地の縁が検出されたが、遺構や後世の削平で掘削されているためローム層はほとんど残存しない。また、遺構や調査区の壁面に遺物や炭化物は認められなかった。なお、玉の製作遺跡であるため、遺構が集中する4区・5区については表土から人力で掘削して出土した石をすべて水洗し、かつ遺構覆土を全量水洗しているが、この中から旧石器時代の遺物は見出されていない。

当地域においては、土層の堆積状況が薄いため、旧石器時代の遺物集中範囲が存在する場合、このような調査過程において遺物が検出される。しかし、台地上からは1点のみの出土であり、まとまって遺物が出土することはなかった。したがって、調査範囲内に遺物集中範囲は存在しないものと判断された。しかし、調査範囲の隣接地に旧石器時代の遺跡が存在するものとみられる。

### B 形態的特徴

1・2は、ナイフ形石器である。1は、鱗状の寸詰まりな剥片を素材とする。左右両側縁を折断し、左側縁の折断面下半～下面左下にかけて微細な二次加工が施されている。佐藤宏之氏の台形様石器I-a-1類 [佐藤1988]、野尻湖遺跡群の報告書における貝殻状刃器 [大竹2000、谷2000等] に近い形態といえる。2は、長幅比が1:1に近い剥片の打面付近と末端部を折断して素材としている。幅広な先端には、素材の形状を大幅に修正しない程度の折断面が観察される。素材剥片の縁辺が、そのまま残置されているわけでないため、厳密に言えばナイフ形石器の定義にそぐわない。折断面上には対向調整が認められる。佐藤氏の台形様石器I-b-2類 [佐藤1988]、野尻湖遺跡群の報告書における台形石器 [大竹2000、谷2000等] に近い形態といえる。しかし、この2点の素材剥片の剥離にあたっては90度の打面転位が行われており、佐藤氏が指摘する剥片剥離過程の特徴とは異なる。

石材はいずれも玉髄で、やや紫色を帯びる青灰色の特徴的なものがある。糸魚川地域においては、ほとんど利用を認めることのできない石材である。一方、下越地方の旧石器時代遺跡において特徴的に使用され

ているものと共通する。同質の石材が利用されていることは注目されよう。なお、2点の石器の出土位置は80m以上離れているが、特徴的な節理面の状況から同一母岩から得られたとみられる。このことは、母岩の少なさを反映している。

### C 編年的位置付けと本資料の意義

2点の石器は、ローム層中から原位置を保って出土したわけではなく、形態的特徴から旧石器時代の石器と判断したものである。したがって、縄文時代の石器である可能性を完全に否定することはできない。しかし、形態的特徴のほか、2にローム層が付着していること、本遺跡において縄文時代の石器には使用されない特徴的な玉髓が用いられていることから積極的に評価することとした。

本遺跡の資料は断片的ながら、長野県・野尻湖遺跡群第Ⅰ期・第Ⅱ期、富山県・立野ヶ原遺跡群〔橋本ほか1974〕、阿賀野市・上野林J遺跡〔藤田・渡辺ほか2004〕と類似する資料として位置付けることができよう。関東地方におけるⅨ層段階に比定できるものとみられている〔鈴木1999〕が、その細分編年との対応関係には言及することは難しいところもある〔藤田・渡辺ほか2004〕。したがって、より幅をもたせて理解することとしたいが、局部磨製石斧が出現する後期旧石器時代の初頭段階に位置付けられる可能性が高い。なお、野尻湖遺跡群において多数出土している局部磨製石斧の石材は、糸魚川周辺産の蛇紋岩とみられている。糸魚川地域において、これらと同様の年代に位置付けられる資料はこれまでに確認されておらず、2点とわずかな資料ではあるが存在そのものが重要な問題提起となろう。

## 2 縄文時代草創期の遺物 (図版8-3)

縄文時代草創期の石斧1点(3)が出土した。3区の台地下の低地から近世陶磁器等とともに出土したものであり、二次堆積中の所産である。横断面形が三角形をなす形態的特徴から、局部磨製石斧の基部と判断した。石材は硬砂岩であり、縄文時代前期とは異なる石材選択である。調査範囲内に遺物の集中範囲は存在しないが、隣接地に縄文時代草創期の遺跡が存在する可能性を指摘できる。

## 3 縄文時代早期・前期の遺物 (図版9-4～図版22-372)

### A 土器 (図版9-4～図版10-124)

#### (1) 縄文土器の分類

今回調査で出土した縄文土器は、縄文時代早期中葉から前期後葉の範囲に及ぶ。中でも前期前半期の繊維土器がその大半を占め、遺構内から出土した土器も該期のものが多い。ただし、ほとんどが縄文のみの破片資料であり、加えて層位的な区別も困難な出土状況であった。厳密な土器型式まで特定できるものは、ごくわずかである。したがって、縄文土器の整理・分類にあたっては、胎土中の植物繊維の有無で資料をA・B類に二分し、それと同時に有文土器(Ⅰ群)と非有文土器(Ⅱ群)に大別し、さらに文様等による細別をおこなった。文様分類は、有文土器とそれ以外に大別した後、それぞれを別個に細分することにした。以下に、分類の詳細を示す。なお文様分類については、学史的な背景も踏まえ、1979年報文中の安藤文一氏の土器分類〔寺村・安藤ほか1979〕との対応関係も併せて示すこととする。

### 胎土分類

A類 胎土中に植物繊維を含むもの。縄文時代早期後半から前期前半に属すると思われる。

B類 胎土中に植物繊維を含まないもの。縄文時代前期後半に属すると思われる。

### 文様分類

I群 縄文・条痕文以外の文様を持つ有文土器を一括する。数量的に多くはないが、本遺跡の時期を決定する上で重要な資料である。文様の種類によって、以下の1～14類に細分できる。

1類 沈線文が施されるもの。さらに沈線の種類によって、a：単沈線、b：平行沈線、c：押し引き状沈線、の3種に細分できる。

2類 沈線文と刺突文の組み合わせにより文様が描出されるもの。

3類 貝殻腹縁文が施されるもの。

4類 絡条体圧痕文が施されるもの。なお、絡条体圧痕文は、縄文の一種であるが、それが組み合わさって有文土器の文様を構成する場合がしばしばある。本遺跡の絡条体圧痕文資料については小破片のみのため詳細不明であるが、文様構成の一部であった可能性も考慮して、今回は便宜的に有文土器の中に含めた。

5類 撚糸側面圧痕文が施されるもの。なお、撚糸側面圧痕文も縄文の一種であるが、I群4類と同様の理由により今回は便宜的に有文土器の中に含めた。

6類 棒状工具によって矢羽根状文（綾杉文）が施されるもの。

7類 爪形刺突文が施されるもの。さらに爪形の種類によって、a：細いC字形爪形文、b：太いC字形爪形文、c：D字形爪形文、の3種に細分できる。

8類 棒状ないし櫛歯状工具によって点状の刺突文が連続的に施されるもの。前報告〔寺村・安藤ほか1979〕第2群第8類・第11類・第12類に相当する。さらに刺突の間隔によって、a：刺突の間隔が広いもの、b：刺突の間隔が狭いもの、の2種に細分できる。

9類 櫛歯状工具によって若干押し引き気味の連続刺突文が施されるもの。

10類 筥状工具によって直線状の刺突文が施されるもの。

11類 半截竹管によってコンパス文が施されるもの。

12類 円形竹管文が施されるもの。

13類 円形竹管文と沈線・弧線の組み合わせにより文様が描出されるもの。

14類 隆帯を有するもの。

II群 縄文・条痕文のみの土器と、無文土器を一括する。器形・胎土・文様・有文土器との共伴関係などから判断して、いずれも縄文時代早期から前期の範囲内におさまり、その前後の時期のものは、有文土器を鑑みて含んでいないと考えられる。文様の種類や施文される面（外面・内面）の違いなどから、以下の1～11類に細分できる。

1類 内外面ともに条痕文を施すもの。前報告〔寺村・安藤ほか1979〕第1群第1類に相当する。

2類 外面のみに条痕文を施すもの。前報告第1群第2類に相当する。

3類 外面に縄文、内面に条痕文を施すもの。前報告第1群第4類に相当する。

4類 内外面ともに縄文を施すもの。前報告第1群第5類に相当する。

5類 外面に斜縄文が施されるもの。前報告第1群第6類の一部と同第2群第3類・第5類を包括する。当然のことながら、破片資料については羽状縄文の一部である可能性を含む。

- 6類 外面に非結束羽状縄文が施されるもの。前報告第1群第6類の一部と同第2群第4類・第6類の一部を包括する。
- 7類 外面に結束羽状縄文が施されるもの。前報告第1群第6類の一部と同第2群第4類・第6類の一部を包括する。
- 8類 ループ文が施されるもの。前報告第2群第2類に相当する。
- 9類 組紐文が施されるもの。前報告第2群第1類に相当する。
- 10類 結節縄文が施されるもの。
- 11類 無文のもの。

### (2) 2・3区出土の縄文土器 (図版9-4・5)

低地部分に相当する2・3区においては、二次堆積中から縄文土器が出土した。2区SX101から5が、3区からは4が出土している。両者とも、胎土中に繊維を含むA類である。4は底部片で、II群11類。尖底中央に直径約9mmの孔があげられており、早期末葉～前期初頭の極楽寺式の特徴を示す。5は深鉢口縁部でII群5類、端部が先細りになる。外面には原体LRの斜縄文が施される。

### (3) 4区出土の縄文土器 (図版9-6～25)

竪穴住居SI14からは、6～18の土器が出土している。6～8・10・11・16・18がII群5類、9・13がII群7類、12・17がII群8類、14がI群13類、15がII群1類である。胎土は、14が唯一繊維を含まないB類で、残りは全てA類である。

6は、深鉢上半部。遺存状態が悪く文様がほとんど確認できないが、わずかながら原体Lの縄文らしき痕跡が見られる。9は、羽状縄文が施される深鉢で、残存部下端に結束部が確認できる。11は、外面に原体LRの斜縄文を施し、さらに口唇部にも縄文が施されるもので、早期末葉～前期初頭の位置付けが考えられる。12は、原体Rのループ文らしきものが認められる胴部片。前期前葉の関山式併行期に位置付けられようか。15は、内外面に斜位の条痕文が施されるもの。早期末葉～前期初頭のものである。17は、原体LRのループ文が施され、前期前葉に位置付けられる。14は、円形竹管文と沈線・弧線により肋骨文が描出された諸磯a式である。全体的に器壁が薄く、その胴部下半にはRL縄文が施される。本遺跡で確実に前期後葉といえる資料は、この1点のみである。

SK34からは、21が出土している。遺存状態が悪いが、A類の胎土にしろうじて組紐文が確認でき、前期前葉のII群9類であることが分かる。

4区遺構外では、19・20・22～25が出土している。いずれも胎土はA類である。19はII群8類で原体RLのループ文が施される。20はI群7a類で、緻密なC字形爪形刺突文が5段以上連続的に施される。両者は胎土に繊維を少量含み、前期前葉に位置付けられる。22・23・25がII群5類、24がI群1a類である。22は、外面に原体LRの斜縄文を施し、さらに口唇部にも縄文が施されるもので、早期末葉～前期初頭に位置付けられる。23は、撚り戻しと思われる斜縄文が施される口縁部片。時期は、前期前葉に位置付けられようか。24は、原体LR多条の斜縄文と横位の沈線が施されるもの。25は、わずかに上げ底状を呈する底部片。原体LRの回転縄文が、側面のみならず底部外面にも施される。形態や文様から判断して、早期末葉～前期初頭のものであろう。

なお、4区と隣接する工事立会SI1・SK3からは、55～57が出土した。3点とも胎土はA類で、若干

量の繊維を含んでいる。55は外面に条痕文が施されるⅡ群2類。早期末葉～前期初頭にかけてのものであろう。56はⅠ群1b類。体部外面に複数の平行沈線が施文される。57は遺存状態がきわめて悪いが、点状の連続刺突文がかすかに確認でき、Ⅰ群8a類である。時期は前期中葉に位置付けられよう。

(4) 5区出土の縄文土器 (図版9-26~46、図版10-47~54・58~97)

SK61からは、26~54の土器が出土している。このうちSK61aから出土したのは31・32・36・42であり、これ以外はSK61bからの出土である。26・28~30・34・37・38・42・50がⅡ群5類、27・32・36・40がⅡ群7類、31・48・52・53がⅠ群7c類、33・35・39がⅡ群6類、41・46がⅡ群3類、43がⅡ群4類、44・51がⅠ群1c類、45がⅠ群4類、47がⅠ群8a類、49がⅠ群7b類、54がⅡ群11類である。

28は、原体LR多条の斜縄文が施される波状口縁部片。口唇部が平坦に仕上げられている。29は、緩やかな小波状を呈する口縁部片。原体LRの斜縄文が施される。31は、体部に非結束羽状縄文を施し、口縁部付近にD字形爪形刺突文が連続施文される深鉢。口縁部文様帯が狭く、胎土・調整法などから見ても早期末葉～前期初頭の極楽寺式のものであろう。33は、非結束羽状縄文が菱形状になるもので、早期末葉～前期初頭の塚田式などと共通の特徴を示す。41は、外面に非結束羽状縄文、内面に条痕文が施される体部片で、早期末葉～前期初頭のものである。43は、外面に非結束羽状縄文が施され、内面に原体LRの斜縄文が施されるもの。時期は早期末葉～前期初頭である。44は、注口部と思われる破片資料。外面は、曲線状の沈線で文様を描出している。この沈線は、比較的幅が広く押し引き状沈線に近いので、ここではⅠ群1c類に含めた。注口だとすると前期前葉の関山式併行期に位置付けられようか。45は、自縄自巻の絡条体が押圧施文されており、早期末葉に属する資料である。

47は、棒状工具によって連続刺突文が施された突起状の波状口縁部片である。残存部下半には、非結束羽状縄文が確認できる。早期末葉～前期初頭のものであろうか。48・52・53は、D字形の爪形刺突文が複数段連続施文されるもの。この3点は、文様のみならず胎土等もきわめてよく似ており、同一個体の可能性が高い。49は、角張った爪形刺突文が連続的に施文されるもの。この刺突文は、底部外面にまで及び、同心円状に連続施文される。土器底部に刺突をおこなうのは、前期前葉の特徴である。51は、押し引き状の沈線文が施され、さらにその下に原体LRの縄文が施されるもの。54は、無文の尖底部片である。早期末葉～前期初頭のものであろう。

SK62からは、58~84・86~89が出土している。量の違いこそあれ、いずれも胎土中に植物繊維が含まれており、A類に分類できる。58・59・84・88がⅠ群1b類、60・69・71・72がⅡ群5類、61~64・67・68がⅠ群8b類、65・86がⅠ群10類、66がⅠ群8a類、70がⅡ群6類、73・74がⅠ群7a類、75がⅠ群12類、76がⅠ群11類、77・83・89がⅡ群9類、78がⅡ群11類、79~82がⅡ群8類、87がⅡ群10類である。

61は、櫛歯状工具による点状刺突文が平行施文され、さらにそれが組み合わせられて文様を描くもの。62は、沈線の上に点状刺突文が施される波状口縁。63は、平行沈線と点状刺突文が組み合わせられる体部片。64は、櫛歯状工具による点状刺突文が2段施文されるもの。以上61~64は、その施文法から見て、前期中葉の有尾式系統のものであろう。65は、側面に篋状の刺突が連続施文され、さらに口唇部に縄文ないし刺突文らしきものが施される。66は、平坦な口唇部の側面に刺突文が施されるもの。残存部下半には原体RLの縄文らしきものが認められる。67は、櫛歯状工具による点状刺突文とD字形爪形文が組

み合わされるもので、前期中葉に位置付けられる。73・74は、細いC字形爪形文が複数段連続施文され、前期前葉のものである。76は、半截竹管によるコンパス文と点状刺突文が組み合わされるもので、前期前葉に位置付けられる。86は、口唇部に篋状刺突を施し刻目状にするもので、破片最下端にわずかながらループ文らしきものが確認できる。87は、縄を結んで回転施文した結節縄文の一種。時期は、前期前葉のものと思われる。

SK67からは、85が出土している。櫛歯状工具で若干押し引き気味に縦位の刺突が施されており、I群9類に分類できる。前期前葉の神ノ木式に類するものと思われる。

5区遺構外からは、90～97が出土している。いずれも胎土はA類である。90がII群4類、91がII群6類、92・96がII群5類、93がII群9類、94がI群7b類、95がI群8b類、97がII群8類である。90は、内外面に原体RLの斜縄文が施されるもの。早期末葉～前期初頭に位置付けられる。93は、前期前葉の組紐文で、胎土中の繊維があまり多くない。94は、側面に半截竹管によるC字形爪形刺突文が施される。底部外面が強く磨かれており、光沢があるのが特徴的である。前期前葉に位置付けられる。95は、平行沈線が5条横走し、うち2条の上に櫛状工具による点状刺突文が施される。前期中葉の有尾式系統のものであろう。96は、口唇部に縄文が施される口縁部片で、早期末葉～前期初頭に位置付けられる。97は前期前葉のループ文で、繊維が比較的少ない。

#### (5) 6区出土の縄文土器 (図版10-98～124)

SI166からは、98～100が出土している。このうち99・100は住居内の土坑SK169からの出土である。いずれも胎土分類A類、文様分類II群6類である。中でも98は口縁が緩やかな波状を呈し、口辺部が無文になる点の特徴的である。3点とも、胎土中に繊維を多く含むことや、施文法・調整法などから見て、早期末葉～前期初頭のものであろう。

6区遺構外からは、101～124が出土している。胎土は全てA類である。ただし、繊維の含み方にはかなりの個体差があり、早期中葉から前期中葉までの様々な資料が混在している。101がI群6類、102・114がII群6類、103・123がI群14類、104がI群2類、105がI群3類、106がI群5類、107・111がII群2類、108～110がII群1類、112・113・116～119がII群5類、115・120～122がII群7類、124がI群8a類である。

101は、横位の矢羽根状文が複数段施文された口縁部片。早期末葉～前期初頭のものである。103は、小さな隆帯を持つ波状口縁部片。隆帯には刻目が施される。また残存部下半には、非結束羽状縄文が認められる。これも、早期末葉～前期初頭に位置付けられる資料である。104は、外面を沈線で三角形に区画した後、その間に刺突文が充填される深鉢上半部。区画文より下は、平行沈線と波状沈線が施される。また口唇部の内外にも、連続的に刺突文が施される。大角地遺跡出土土器の中ではこれが最も古く、早期中葉の田戸上層式併行期に位置付けられる。105は、貝殻腹縁文が横位に施文されるもので、同じく早期中葉に位置付けられる。107～111は全て早期末葉～前期初頭にかけての条痕文土器である。123は、刻目状の隆帯部片。124は、点状の刺突文が連続施文され、何らかの文様を描いていたものと思われる。時期は、前期中葉のものであろうか。

## B 石 器 (図版 11 - 125 ~ 図版 19 - 296)

### (1) 概 要

2,794点出土した石器・石製品の内訳は第1表のとおりである。ここには碎片や明らかに古墳時代以降に位置付けられる石製品は除外しており、基本的には縄文時代の石器類と考えられる。伴出土器には早期末葉～前期初頭、前期前葉、前期中葉、前期後葉のものが認められるが、4区のSI14から出土したものを除けば早期末葉～前期前葉のものである。石器類の多くも、早期末葉～前期前葉に位置付けられるものと考えられる。

石器組成は、石鏃・石錐・石匙・楔形石器・打製石斧・不定形石器・磨製石斧および未製品・敲石・砥石・磨石類・石皿・石錘・石製品から構成される。調査区ごとに組成の差が若干あるものの、相対的に蛇紋岩製磨製石斧の未製品が多いことがわかる。磨製石斧は、未製品が多い反面、製品が極端に少ない。また、敲石や砥石といった工具も認められる。これらの状況から、蛇紋岩帯を背景に磨製石斧が大量生産されたことを窺うことができる。石錘も極めて多いが、このことは該期の石器組成の特徴といえる。また、石鏃・石匙は精緻な加工が施された薄手のものであり、早期末葉～前期前葉の特徴的な形態といえる。これらの石器組成は、早期末葉～前期前葉に特徴的な状況をよく反映するものと考えられる。

形態と使用石材には密接な関係を読み取ることができる。石鏃には珪質頁岩、不定形石器には頁岩、磨製石斧には蛇紋岩、砥石には砂岩、磨石類には安山岩・砂岩、石皿には安山岩、石錘には安山岩・砂岩、石製品には滑石が特徴的に充てられていることがわかる。特定の形態に特定の石材が選択されている様子を理解することができる。また、珪質頁岩・黒曜石以外は、糸魚川地域で採取可能な石材であり、豊かな石材環境のもと石器製作が行われたものと考えられる。

なお、敲石 207 の素材はヒスイである (図版 26)。前期前葉の土坑 SK62 の最下層から出土しており、国内で最も古いヒスイ製品と位置付けられる。硬く重い特徴から磨製石斧製作の工具としてヒスイが選択されたものと考えられる。これは、ヒスイ利用の初源を考える上で重要な資料といえる。

器種	蛇紋岩		ヒスイ		滑石		砂岩		硬砂岩		頁岩		珪質頁岩		チャート		玉髓		黒曜石		ガラス質岩		安山岩		安山岩		流紋岩		輝緑岩		凝灰岩		石英		鉄石英		閃緑岩		計					
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量						
石 鏃														9	10	1	1	1	1	1	1	1	1															15	16					
石 錐																																								2	4			
石 匙																																								3	364			
楔形石器																																								4	90			
打製石斧																																								1	169			
不定形石器								13	2596																															78	12632			
磨製石斧	9	534																																						10	798			
磨製石斧未製品	127	28864						1	25	1	541																													133	31683			
敲 石	4	1760	2	525																																				6	2285			
砥 石																																								67	68149			
磨石類	1	445																																						177	63147			
石 皿																																									40	54066		
石 錘	10	1959						29	6238																																123	27755		
夔状耳飾																																										45	322	
玉 類	2	1																																							59	419		
石 棒																																										2	507	
原 石	37	19395	15	2050	9	1149																																			2	9		
剥 片	841	14268	22	515	48	674	265	19218																																		2	937	
石 核																																											9	108
計	1031	67226	39	3090	157	2481	400	95101	1	541	590	26664	16	133	16	269	20	169	7	9	9	117	353	142256	21	528	1	322	83	14399	37	1425	9	108	1	207	2793	355046						

第1表 石器組成と石材組成

(重量の単位はg)

### (2) 資料提示の方法

資料の提示にあたっては、実測図・写真・観察表・記載を基本とし、器種ごとに表示することとした。遺構における遺物の出土状況は第IV章に記載したが、出土位置を実測図・観察表に明示した。



掲載遺物は、「①石器の素材がどのようなものであり、どのように用いられているのか。②その素材に対してどのような加工がどのように施されているのか。③その素材に対する加工によってどのような形態の石器として仕上げられているのか。」[織笠 1984] という観点から、資料群の特徴を表現するものを選択して図化・記載した。図化の対象外となった資料については、表やグラフを用いて全体的な傾向を表現することに努めた。

実測図の図化にあたっては、展開面数を器種ごとである程度統一することで、等質的な遺物の観察結果を示した。ただし、必要の都度、面を加えたり省いたりした。また、珧状耳飾の破片など、全体像を表現することが形態を理解するために必要な場合は、想定延長線を図化することに努めた。なお、想定延長線の表現にあたっては、古期欠損部は実線、新規欠損部は破線で示した [織笠 1992]。

### (3) 石器石材名の同定

#### 岩石名・鉱物名の同定

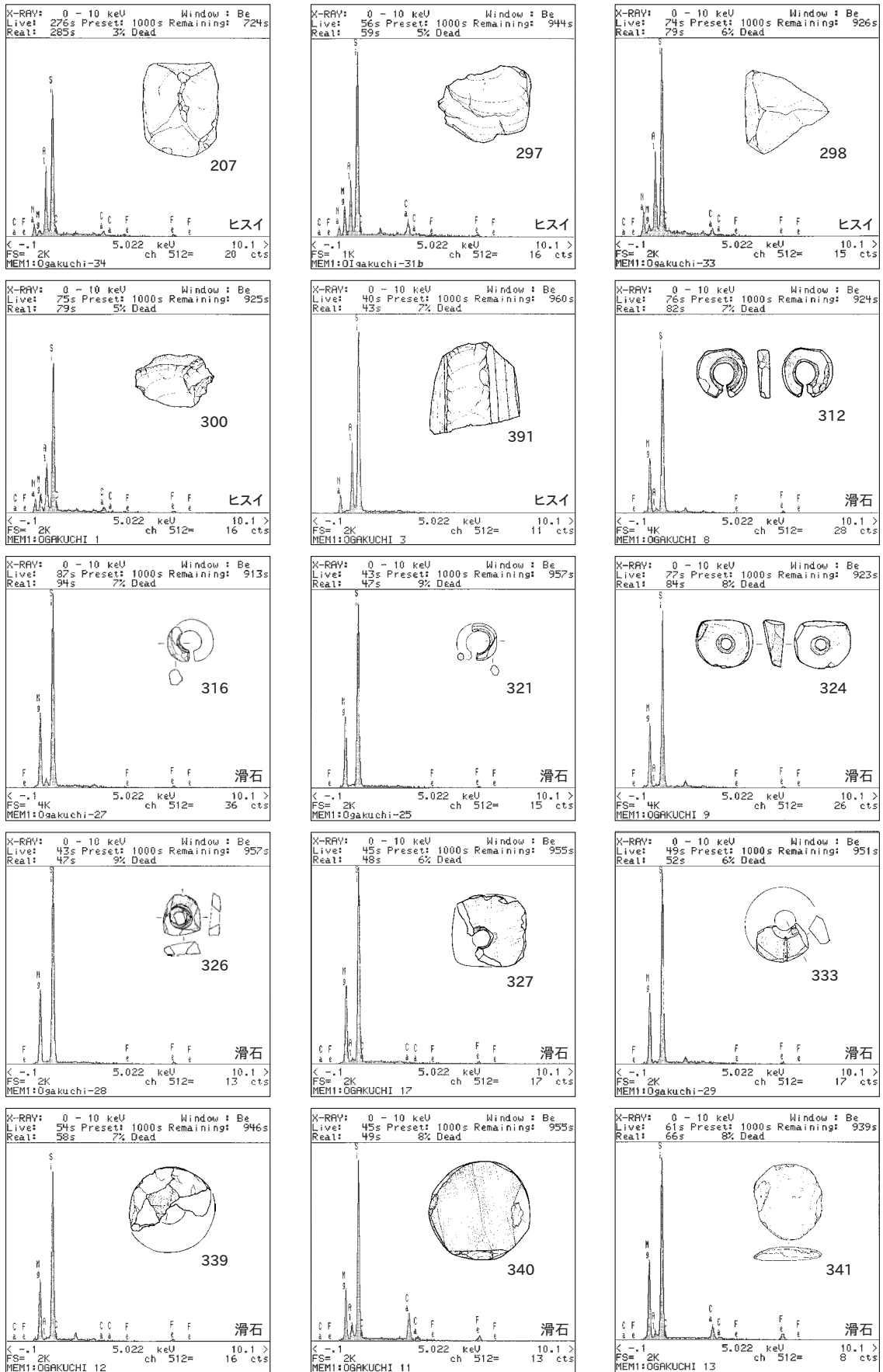
石器・石製品のうち 35 点の石質鑑定を、糸魚川市フォッサマグナミュージアム（分析者：同館館長補佐宮島宏氏）に委託した。分析方法は次のとおりである。

まず、資料を肉眼およびルーペや双眼実態顕微鏡で観察し、肉眼的な特徴を把握した。このときに注目した特徴は、色調、透明度、結晶粒の有無と形、劈開の有無、共生鉱物種の有無とその種類、およびその比重、脈状鉱物の有無などである。さらに分析走査型電子顕微鏡を用いて半定量分析をおこなった。資料の表面に汗、土壌などが付着していると、それらも検出されるので、あらかじめ表面にある汚れを、蒸留水を含ませた脱脂綿で数回拭いて除去し十分に乾燥させた。そして、フォッサマグナミュージアムに設置されている日本電子製走査型電子顕微鏡 JSM - 6300 にオックスフォード社製エネルギー分散型 X 線スペクトロメーター QX2000 を取り付けた分析走査型電子顕微鏡を用いて資料の半定量分析をおこなった。分析にあたっては、前もって清澄にした資料を φ 100mm の試料載台に分析用カーボンテープを用いて軽く固定した。分析走査型電子顕微鏡での半定量分析は、資料に炭素蒸着をするのが普通であるが、考古学的な資料に炭素蒸着をすると資料表面を汚してしまうので、今回は無蒸着の状態で行うこととした。分析条件は加速電圧 15kV、ワーキングディスタンス 39mm から 48mm、分析範囲 0.5mm × 0.4mm、分析時間 30 ~ 120 秒である。必要に応じて複数箇所を分析し、大きな相違がないことを確認した。肉眼鑑定の結果と検出された元素の種類とそれぞれのピークの高さから資料の石質を判断した。その結果は、第 10 ~ 12 図と観察表のとおりである。グラフにおいてピークを示す主要元素名を示し、その構成から判定された岩石名・鉱物名を記載することとした。

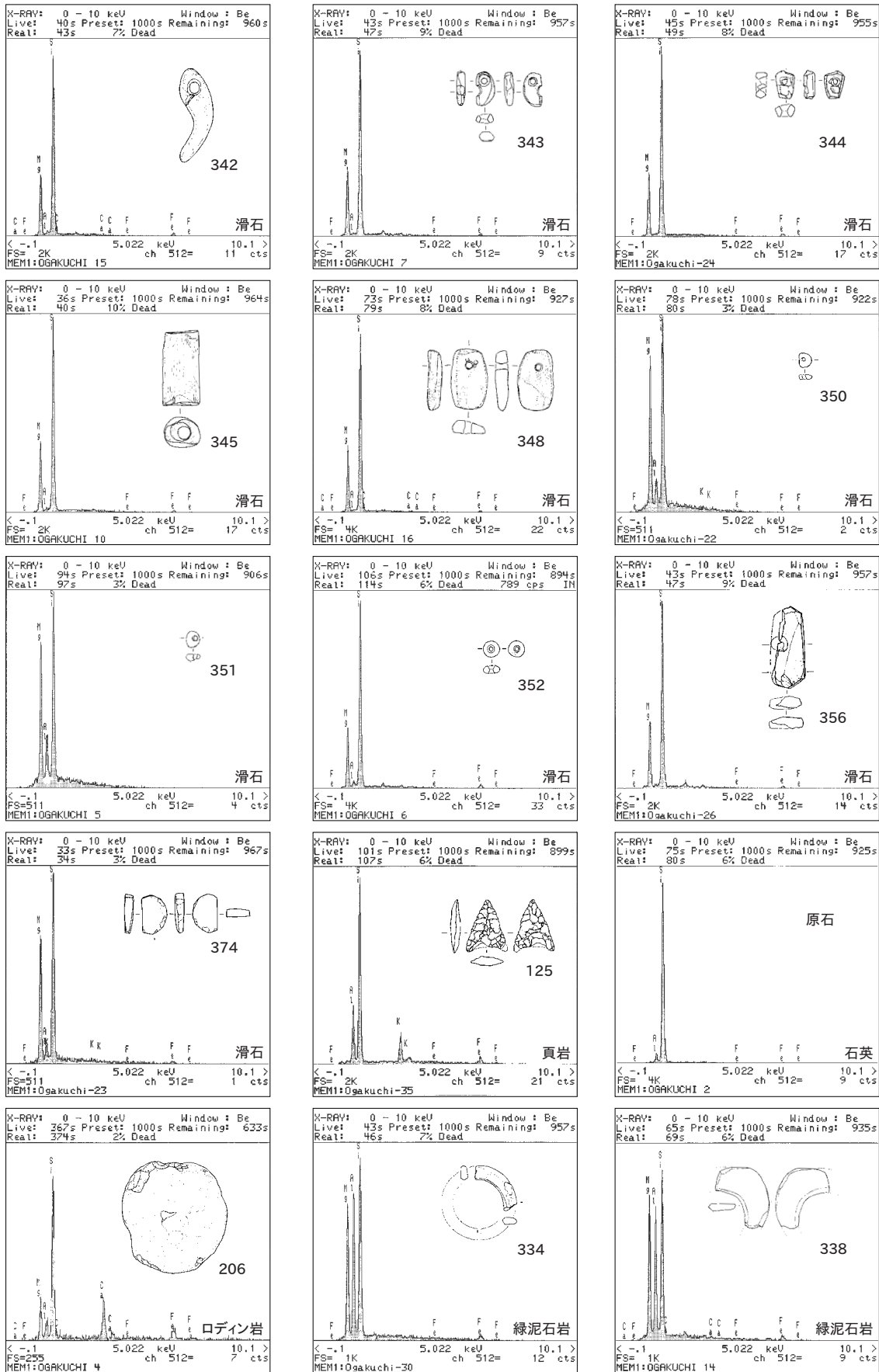
なお、一部の資料については、肉眼観察による岩石名の同定をフォッサマグナミュージアムの宮島宏氏・竹之内耕氏にお願いした。この結果については、観察表の「岩石名」の欄に記載することとした。

#### 石器石材名の同定

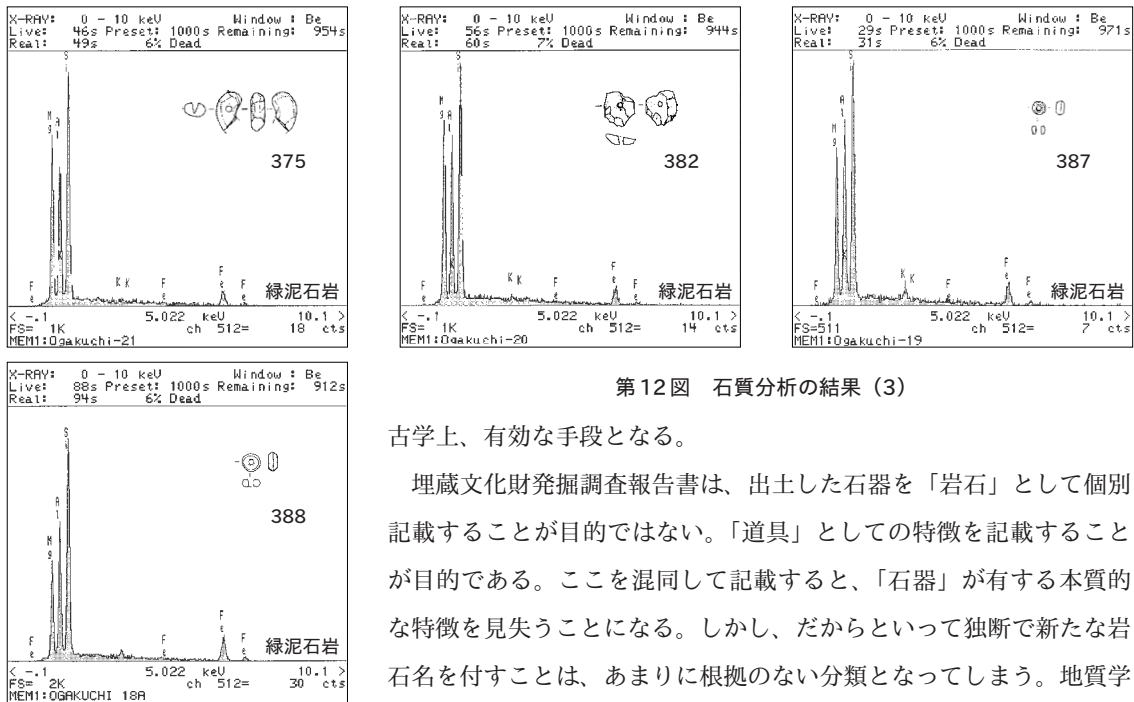
地質学に基づいた厳密な分類による岩石名・鉱物名を記載することは重要である。しかし、岩石名・鉱物名を細分するあまり、縄文人が「石器」として必要とした属性を理解しにくい状況を演出してしまう場合がある。つまり、縄文人は、「○△岩」だから石器石材として選択したのではない。鋭く割れる石であるから刃物に、表面が粗い石であるから磨石や石皿に選択したのである。その結果として、特定の石器形態に特定の石材が選択されたのである。したがって、物性による区分に基づいた岩石名を付すことが、考



第10図 石質分析の結果 (1)



第11図 石質分析の結果 (2)



第12図 石質分析の結果(3)

古学上、有効な手段となる。

埋蔵文化財発掘調査報告書は、出土した石器を「岩石」として個別記載することが目的ではない。「道具」としての特徴を記載することが目的である。ここを混同して記載すると、「石器」が有する本質的な特徴を見失うことになる。しかし、だからといって独断で新たな岩石名を付すことは、あまりに根拠のない分類となってしまう。地質学的な分類を尊重しつつ、「遺物」として有する本質的な特徴を記載する方法を選択する必要がある。そこで、本報告においては岩石名・鉱物名の大分類を表記する方法を採用することとし、地質学上の岩石名・鉱物名を併記することとしたい。考古学的な所見を得るための大分類を、「石器石材」と呼称して記載することとしたい。

例えば、デイサイトなど火山岩系の粗い岩石は安山岩、蛇紋岩やロディン岩など蛇紋岩帯に含まれる変成岩を蛇紋岩としてひと括りすることとした。一方、安山岩においては剥片石器の素材に適したガラス質のものが存在する。これについては、磨石類に多用される表面が粗い「安山岩」とは区別して「ガラス質安山岩」とした。このような石器石材の分類に基づいて出土した全資料を分類し、石器形態と石材の関係や全体的な傾向を把握することに努めた。

#### (4) 各 説

##### 石 鏃 (図版11-125~135)

石鏃は、15点出土した。調査区ごとにみると、3区から1点、4区から3点、5区から9点、6区から2点が出土した。いずれも薄手で精緻な両面加工が施された凹基無茎鏃〔鈴木1974〕である。基部の挟入が深い特徴は、当地域の前期の資料に特徴的に存在する形態〔鈴木1983〕といえる。また、細長い剥離痕が連続的に施される点(125・128・129・130・131)は、縄文草創期や早期の石器と共通する。技術的特徴からも、縄文時代のより古い段階の様相を示すものと考えられる。また、130の側縁には、わずかな張り出しが認められ、先端部がすぼまる特徴的な形態を呈する。いわゆる「五角形鏃」に似た側縁形態といえる。以上のような石鏃の形態構成は、極楽寺遺跡出土資料〔小島1965〕と酷似し、縄文時代早期末葉～前期前葉に特徴的な形態的・技術的特徴を反映している可能性が高い。

石材は、珪質頁岩9点、流紋岩2点、チャート1点、玉髓1点、黒曜石1点、ガラス質安山岩1点で、珪質頁岩が多用されていることがわかる。この珪質頁岩は、糸魚川周辺に分布する第三紀層に含まれるそれとは異なり珪化が進んでおり(図版27)、中越～下越地方に分布する七谷層のものにより近い(竹之内耕

氏のご教示による。)。同質の石材の剥片等は認められないことから、これらが製品として単独で搬入された可能性が高い。チャートについては、近隣の海岸・河川で容易に採取できるものの、同質の石材の剥片や碎片は認められず、遺跡内で製作された可能性は低い。これもまた単独で搬入された可能性が考えられる。黒曜石は、明らかな搬入石材である。いずれも透明感のある黒曜石であり、肉眼観察に過ぎないが信州産によく似る。黒曜石製の石器は、剥片・碎片を含めても7点しか出土しておらず、製品として搬入された可能性が高い。

#### 石 錐 (図版11-136・137)

石錐は、2点出土した。136は、珪質頁岩製であり、石鏃に特徴的に用いられた石材に共通する。棒状を呈し、全面に二次加工が及んでいる。棒状をなすものの、より平坦に仕上げられた一端は、基部になるものと考えられる。その他端は、横断面が略正方形に仕上げられており、稜線上に摩滅が観察される。これは使用痕とみられ、摩滅面の分布から対象物が比較的硬質なものであったことがわかる。機能部の直径は3mmほどであり、玉類の孔径に近い値を示している。滑石製装身具が多数出土したSK62(5区)からの出土であり、その製作時の工具であった可能性がある。

137は、SK61b(5区)からの出土である。赤紫色のチャート製であり、基部側が幅広かつ平坦に仕上げられている。136のような使用痕は認められないが、機能部と考えられる端部からは基軸に沿う衝撃剥離痕が認められる。石鏃未製品の可能性もあろうが、より厚手に作出されている。

#### 石 匙 (図版11-138~140)

石匙と分類した石器は3点である。

138は、SK62(5区)からの出土である。近隣で採取可能な頁岩製の大型剥片を素材とし、両面加工による抉入部が相対する位置に作出されている。ここ以外は、剥片の鋭い縁辺が残置されているが、明瞭な刃こぼれ等、使用に関わる痕跡は認められなかった。縄文中期に信州や関東で特徴的に存在する大型粗製石匙〔藤森1963、五味1983〕との形態上の共通性を認める。しかし、大型粗製石匙には粗い石材が用いられているのに対し、138は緻密な頁岩が用いられている。また、本遺跡から出土している不定形石器との関連も指摘できる。用いられる頁岩が同質であること、大きさが共通すること、不定形石器に形成されるノッチ状や両面調整の刃部が138における抉入部分の作出と技術上・形態上類似することにおいて共通性を見出すことができる。大型粗製石匙と対比するには時期差があり、不定形石器との関係の中で捉えるべき形態であるかもしれない。

139は、3区の二次堆積中からの出土である。石鏃に多用されているものと共通する珪質頁岩が用いられている。石鏃未製品の可能性もあるが、有茎鏃が伴う時期の資料は出土していない。また、茎部と先端部を結んだ軸によって線対称形をなさないことから、その可能性はより低いものと判断し石匙と考えた。

140は、2区の川跡SX101からの出土である。良質なチャートが用いられた横型石匙〔中谷1925〕である。石鏃と同様、端正な二次加工により、薄く精緻に仕上げられている。直線的で鋭利な刃部が形成されており、製作技術は本遺跡の石鏃と共通する。三角形で先端が切られたように直線的なものが北陸地方の前期に特徴的に伴うといわれている〔鈴木1981〕が、本資料はその特徴をよく表している。二次堆積中からの出土ではあるが、石器の技術的特徴から縄文時代早期末葉～前期前葉の遺物に伴う可能性が高い。

#### 楔形石器 (図版11-143)

楔形石器は、4点出土した。頁岩製の1点を除けば茶褐色の玉髓を素材としており、単独個体で搬入されたものとみられる。表裏面には2極からの加撃により剥離された剥離面が認められ、その打点付近には

切り合い関係が不明瞭な剥離面や潰れが認められること [岡村 1976・1979] を判断基準に楔形石器と認定した。楔形石器は、石鏃の製作過程との関連性において注目される形態である [田中 1979] が、本遺跡の資料においても緻密な玉髓が用いられており、その可能性を指摘できる。しかし、楔形石器に用いられた玉髓は、石鏃などの小形剥片石器には用いられておらず、また製作に関連する碎片などもほとんど認められないことから、その性格については明らかでない。143 は、SK67 の床面から出土した資料である。断面が紡錘形をなすまで両極剥離は進行していないが、両端部からの剥離面が観察され、双方の切り合い関係が不明瞭である。また、裏面は自然の凹凸が著しい。このことが理由となり、両極剥離が進展しないうちに放棄された可能性がある。

不定形石器 (図版 11-141・142・144)

不定形石器は、78 点出土した。

剥片・石核等を除いた狭義の石器における比率は 11% に過ぎず、縄文時代の一般的な遺跡と比べると少ない。しかも、その半数は川跡など、低地における二次堆積中からの出土である。すなわち、遺構が検出された遺跡の中心部である台地上における比率の小ささが特筆される。磨製石斧や石製装身具の製作関連資料が多いことを勘案すれば、特定の作業に特化した遺跡の性格を反映するものと考えられる。

不定形石器の石材は、頁岩が 66.7%、砂岩が 16.7%、凝灰岩が 9% を占める。いずれの石材も、近隣の海岸等で容易に採取できる石材である。特に頁岩製が多く比率を占めることが特筆される。この頁岩は、第三紀層に含まれるものとみられ、風化面は灰白色、新鮮な割れ口は黒色を呈する。同種の石材による大形の貝殻状剥片が多数出土しており、この石材が特徴的に使用されたことを窺い知ることができる。

不定形石器の分類は、高橋保雄氏・鈴木俊成氏による分類案 [高橋・鈴木 1990] (第 2 表) にしたがった。分類別にみると、いずれの調

分類	刃部形状	刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類	
A 類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	—	縦長	側縁と端部	A1 類	
			横長	片側縁と底縁	A2 類	
B 類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	外彎状	縦長	片側縁と端部	B1 類	
			横長	底縁	B2 類	
C 類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離	直線状	縦長・厚手	片側縁	C1 類	
			横長・厚手	底縁		
		内彎状	縦長・厚手	片側縁	C2 類	
			横長・厚手	底縁		
		外彎状	縦長・厚手	片側縁	C3 類	
			横長・厚手	底縁		
スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形		—	厚手	—	C4 類	
D 類	鋭利な尖端部をもつ石器 大型・急角度剥離	直線状	厚手	片側縁 (一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する)	D1 類	
		内彎状	厚手			
		大型・浅角度剥離	直線状	厚手	片側縁 (D1 類と同じ) 両側縁	D2 類
			内彎状	厚手	片側縁 (D1 類と同じ) 両側縁	
	小型剥離	直線状	厚手	片側縁 (D1 類と同じ) 両側縁	D3 類	
		内彎状	厚手	両側縁		
		直線状	薄手	両側縁	石錐	
		内彎状	薄手	両側縁		
E 類	大ノツチ 大型・中型・急角度剥離	内彎状	横長・厚手	側縁	E1 類	
			横長・厚手	底縁		
			縦長	側縁		
			横長	底縁		
	小ノツチ 中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側縁	E2 類	
			横長	側縁・底縁		
			縦長	側縁		
			横長	側縁・底縁		
F 類	中型・小型・急角度・不連続剥離	—	縦長	側縁	F1 類	
		端部に丸味	縦長	側縁と端部	F2 類	
		—	横長	底縁	F3 類	
				側縁		
				底縁と側縁		
		G 類	大型・中型・浅角度剥離	直線状	縦長	側縁
横長	底縁					
外彎状	縦長			側縁		
	横長			底縁		
H 類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕) 小型・浅角度剥離	外彎状	背面は自然面 横長	底縁	H 類	
I 類	端部に小型・連続剥離	端部に丸味	縦長・薄手 横長・薄手	端部	I 類	
J 類	無加工 (使用痕の微細剥離・使用痕)	—	縦長 横長	側縁 側縁・底縁	J 類	
K 類	両面加工 (調整) 石器 (刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状)	外彎状	薄手		K 類	

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多く

第 2 表 不定形石器分類表

査区においても鋸歯縁状の刃部を有するC1・C3類と、両面調整の刃部を有するK類が特徴的に認められる(第3表)。C1・C3類が32.1%、K類が42.3%を占め、全体の74.4%をこの2種類の刃部が大多数を占めることがわかる。この傾向が、時期的な特徴であるのか、地域的な特徴である

	1区	2区	3区	4区		5区		6区		合計 (点)	比率 (%)
				SI14		SK61	SK62	SI166			
A1類			3			1	1		1	6	7.7
C1類			4						2	7	9.0
C3類			8	1		2	3	1	3	18	23.1
E1類			1					1		3	3.8
G類			5				1		1	8	10.2
H類							1			1	1.3
I類			2							2	2.6
K類	1	2	12		1	6	5		6	33	42.3
合計(点)	1	2	35	1	1	9	12	2	13	78	
区合計(点)	1	2	35	2		23		15		78	
比率(%)	1.3	2.6	44.9	2.6		29.4		19.2			100.0

第3表 不定形石器の分類別構成

のか、あるいは遺跡の性格を反映するものか、限られた調査範囲においては明らかにすることができなかった。ただし、鋸歯縁状の刃部を有する石器が縄文時代前期に多い傾向にあり、時期的な特徴とみることができる可能性がより高い。

#### 打製石斧(図版11-145)

打製石斧は、調査区の北東端1区から1点のみ出土した。頁岩製の横長剥片を素材として、両面に二次加工が施される。その結果、刃部側がやや幅広い短冊形もしくは撥形に仕上げられている。また、刃部には顕著な使用痕(摩滅痕・線状痕)が認められる。遺物が多数出土した台地周辺の調査区からは出土しておらず、縄文時代中期以降に多く出現する形態であることを勘案すれば、前期の石器でない可能性がある。

#### 磨製石斧(図版11-146~図版12-154)

磨製石斧は、研磨が全面に及び、刃部が形成されるものを製品と判断した。基部のみの残存であっても、研磨が全面に及んでいるものについても、同様に取扱うこととした。その結果、磨製石斧(製品)と判断した資料は10点に留まった。この出土点数は、133点出土した未製品と比べると著しく少ないといえる。大量生産された磨製石斧(製品)は、すでに遺跡外に搬出された可能性を指摘できよう。調査区ごとの出土点数をみると、3区で2点、4区で2点、5区で6点であり、5区から集中的に出土している様子が理解される。特に、5区のSK61a周辺からは3点がまとまっている。同遺構からは、滑石製装身具の製品もまとまって出土しており、製品が集中する状況が理解される。

また、破損がみられない資料となると4点に留まる。破損した資料については、製品のうちに考えたものの、あるいは研磨段階で破損した可能性もある。破損資料が多いため、全体像を把握することは難しいが、大きさにより概ね小形・中形・大形の3種類に分類することができる。

小形は、150・151が相当する。いずれも蛇紋岩製で、最大幅2cm以下、長さ4cm以下ほどの大きさである。いずれも中形・大形の磨製石斧製作時に生じる調整剥片が用いられたものと考えられ、薄く扁平な形態である。剥離面が残される比較的粗いつくりであるが、刃部を片刃・円刃に丹念に仕上げている。未製品においても、同じ大きさの資料が存在することから、目的物として製作されたと考えられる。大きさ・刃部の形態から、鑿のような機能を果たした磨製石斧と考えられる。

中形は、146~149が相当する。いずれも蛇紋岩製で、最大幅3~4cm前後、長さ7~9cm前後の大きさである。いずれも薄く扁平な形態であり、側面に明瞭な平坦面は形成されない。剥片や薄い扁平礫を素材とした結果と考えられる。147・148・149は、刃部を片刃・直刃基調の円刃に仕上げている。これらは、刃部の形態・幅がよく似ている。基部を欠損している147・148は、149のような靴篋に近い形状をなしていた可能性がある。146は、丹念な研磨により円刃に仕上げられている。残存部の実測図

は両刃にもみえるが、欠損している基部側の表裏面の境界は片側に偏っており、片刃であったものと考えられる。

大形は、152～154が相当する。152・153が蛇紋岩製、154が安山岩製で、最大幅5cm前後、長さ10cm超の大きさである。このうち154は完形品であるものの、蛇紋岩製でないこと、基部幅と刃部幅が近い値を示すこと、断面形が丸みを帯びることにおいて他の2点と異なる。3区の二次堆積物中からの出土であり、大きさの上では同じ大形に分類されるものの、同列に扱うことができない。152や153は、側縁にわずかな平坦面が作出され、基部が細く尖る形態である。平面形態は、後期・晩期に特徴的に認められる形態とも共通するが、側面の平坦面作出が顕著でない。未製品が最も多い5区からの出土であり、法量的にも未製品との対応関係が認められる。後期・晩期の資料は認められず、他の磨製石斧製作関連資料とともに前期前葉に位置付けられるものと考えられる。なお、昭和45・48（1970・73）年調査においても、同様の形態の磨製石斧が出土している。

富山県内における縄文時代早期前葉～前期前葉の磨製石斧の形態的特徴について山本正敏氏は、「①断面形が丸みを帯びたり、カマボコ型を呈したりする。②側面の平面形が緩やかな曲線を描くものが多い。③刃部が片刃になるものが多い。④体部が多面体状に研磨される。⑤表面の風化の度合いが中期以降のものと同様で進んでいる。⑥扁平な自然礫の片端に研磨を加えて刃部としたものがある。」と記載している〔山本2005〕。これらと本遺跡の資料を比較すると、①～④の特徴はほぼ一致するといつてよい。⑤については、十分な比較を行えていないため言及を避けたい。⑥については、本遺跡においてそのものは認められない。山本氏が、この特徴を見出す素材とした極楽寺遺跡〔小島1965〕・南太閤山遺跡〔岸本・山本1986〕の資料と本遺跡の資料を比較検討したが、指摘のとおり共通性を見出すことができた。特に、極楽寺遺跡出土資料については、他時期の資料の混在があまり認められず、山本氏の指摘を明解に理解することができる。本遺跡の資料は、極楽寺遺跡の資料と酷似しており、早期前葉～前期初頭の形態的特徴をよく反映している資料と評価できる。

#### 磨製石斧未製品（図版12－155～図版15－204）

蛇紋岩は磨製石斧に特徴的に用いられる石材である。一方、蛇紋岩はそれ以外の石器には、ほとんど用いられない状況がある。特定の形態に、特定の石材が用いられる傾向が極めて強い石器といえる。このような状況を勘案して、両面調整を意識した調整剥離がなされている蛇紋岩製石器を、積極的に磨製石斧の素材と理解した。その結果、磨製石斧の未製品と判断した石器は133点となる。未製品の出土点数を調査区ごとにみると、2区1点、3区24点、4区30点、5区52点、6区25点、7区1点であり、特に5区に集中する。中でもSI14（4区）とSK61b・62（5区）に製作関連資料が集中する。

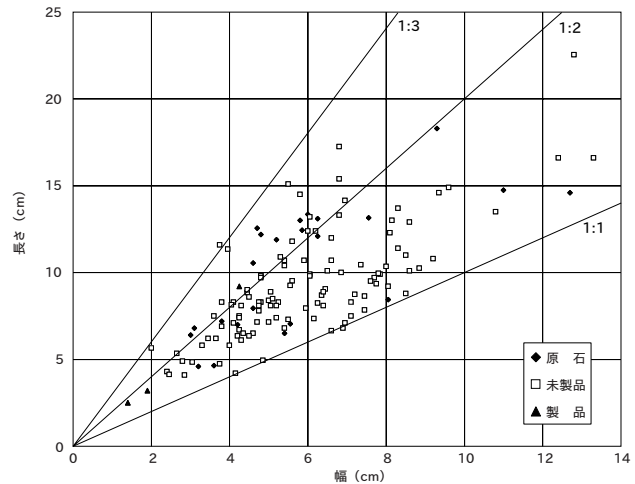
石材は、127点（95.5%）が蛇紋岩であり、特定の石材に特化した製作であったことがわかる。素材となる蛇紋岩は、遺跡周辺で容易に採取できる石材である。原石および未製品に残された原石面の観察からは、遺跡の北方500mに広がる海岸で採取されるものに近似しており、豊かな石材環境のもとで大量生産されたものと考えられる。しかし、製品の出土点数は、未製品と比べると著しく少なく、すでに遺跡外に搬出された可能性が高い。生産数は自家消費的な範囲を超えており、遺跡外への搬出を前提とした大量生産であったものと考えられよう。

さて、先述のとおり磨製石斧（製品）は大きさによって3種類に分類することができる。この相違は、素材の形態差に起因するところが大きい。すなわち、大形は厚手、中・小形は薄手の素材が用いられた可能性が高い。したがって、まずは素材の状態ごとに分類することが重要となる。素材の状態を把握できる



資料は66点あり、そのうち礫素材が43点(65%)、剥片素材が23点(35%)であった。礫素材が圧倒的に多いものの、剥片素材が安定的に加わることが理解される。それらの大きさを示した第13・14図からは、製品の大きさと対応関係から4グループに分類することができる。

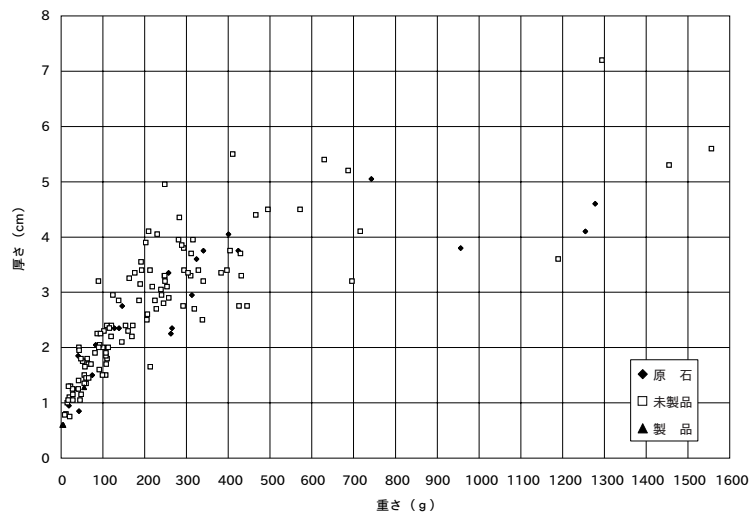
**特大品** (160・164・166~168) 長さが15cm、幅が10cmを超えるような極めて大形の資料(164・166~168)は、製品における大形品とは異質であり、特大品と分類したい。礫素材(164・168)と剥片素材(166・167)とがあるが、大きさの割りに薄く扁平であり、草鞋のような形態をなす。これは、すべて諸磯a式期のSI14からの一括出土したものであり、ここにはこれらに対応する大きさの原石(160)も伴う。特大品に対応する製品が認められないことから、石斧の未製品という判断そのものにも疑問もあるが、研磨段階まで達している資料(166~168)も含まれており、磨



第13図 磨製石斧製作関連資料の長さ と 幅

製石斧の未製品と判断した。いずれの資料とも、刃部が片刃気味に作出される点においては、前期の磨製石斧と共通する。しかし、該期の類例は、管見の限り確認されない。あまりに大きく、一般的に使用される石斧とは区別して理解するべきかもしれない。

**大形品** (156・158・162・163・165・175・179・181~184・186・193~200) 長さ10~15cm、幅5~10cmほどの大きさのものである。比較的厚みのある原石(172~174)が、大形品の素材となるとみられる。これは、製品の大型品と対応するサイズとみられるが、より厚手であることが特徴的である。厚手であることは、礫素材が多い傾向と一致し、その後の工程(剥離・研磨)によって厚さを減じたものと考えられる。あるいは、厚さを減じることができなかつたため、作業が放棄され、未製品の状態で遺跡に残された可能性もある。大形品は、他の大きさと同様、剥離によって成形・整形されているが、これに加えて敲打による整形が認められるものがある。ただし、明らかな敲打整形の認められる唯一の資料194は、工事立会SI1からの出土であり、前期中葉段階の資料と考えられる。前期前葉以前の資料においては、敲打整形を積極的には認められないかもしれない。製品の側面にみられる、より広い平坦面は敲打整形によって作出された可能性も考えられるが、そのことを積極的に裏付ける資料はない。未製品や整形過程の状況からは、いわゆる「定角式」のような平坦な側面とは区別して考えることができる。なお、敲



第14図 磨製石斧製作関連資料の厚さ と 重さ

製石斧の未製品と判断した。いずれの資料とも、刃部が片刃気味に作出される点においては、前期の磨製石斧と共通する。しかし、該期の類例は、管見の限り確認されない。あまりに大きく、一般的に使用される石斧とは区別して理解するべきかもしれない。

**大形品** (156・158・162・163・165・175・179・181~184・186・193~200) 長さ10~15cm、幅5~10cmほどの大きさのものである。比較的厚みのある原石(172~174)が、大形品の素材となるとみられる。これは、製品の大型品と対応するサイズとみられるが、より厚手であることが特徴的である。厚手であることは、礫素材が多い傾向と一致し、その後の工程(剥離・研磨)によって厚さを減じたものと考えられる。あるいは、厚さを減じることができなかつたため、作業が放棄され、未製品の状態で遺跡に残された可能性もある。大形品は、他の大きさと同様、剥離によって成形・整形されているが、これに加えて敲打による整形が認められるものがある。ただし、明らかな敲打整形の認められる唯一の資料194は、工事立会SI1からの出土であり、前期中葉段階の資料と考えられる。前期前葉以前の資料においては、敲打整形を積極的には認められないかもしれない。製品の側面にみられる、より広い平坦面は敲打整形によって作出された可能性も考えられるが、そのことを積極的に裏付ける資料はない。未製品や整形過程の状況からは、いわゆる「定角式」のような平坦な側面とは区別して考えることができる。なお、敲

打痕は、中形品にも認められるものの、剥離を行おうと加撃を繰り返した結果、形成されたものとみられ、性格を異にするものと評価すべきであろう。

**中形品** (155・157・159・161・176～178・180・188～192・201・204) 長さ5～12cm、幅4～7cmほどの大きさのものである。製品の中形品と対応するサイズとみられる。大形品と長さ・幅においては近い値を示すが、より薄手であることが特徴的である。これは、剥片や薄く扁平な礫を素材とした結果と考えられる。剥片を素材とするもの(190・191・201)は、少ないものの安定的に認められる。また、分類上、183・193は、大形と分類したが、剥片を素材とした薄手の未製品であり、中形品との共通性を窺える。礫を素材するもの(155・157・176・177・180・192等)は、扁平で法量的に製品に近い素材が用いられる。調整剥離による成形・整形による、素材の形状修整が比較的小さかったことが窺える。すなわち、素材となる礫を選択する段階で、すでに製品の形状を意図していたと考えられる。

**小形品** (169～171・185・187・202・203) 長さ4～5cm、幅2.5～4cmほどの大きさのものである。製品の小形品と対応するサイズとみられる。小形の剥片が素材とされているが、基本的には横長剥片が用いられている。横長剥片の大きさは、成形時に生じる調整剥片と近く、大形品・中形品の製作時に生じる副産物が素材となった可能性が高い。また、磨製石斧の半数以上が礫素材であることと関係して、背面には礫面が認められる(170・171・202・203)。結果として断面凸形をなすことから、片刃の刃部を作出するのに適した形態であったものと考えられる。礫素材のものは2点のみ(169・185)であるが、いずれも薄く扁平な礫を素材としている。中形品と同様、素材となる礫を選択する段階で、すでに製品の形状を意図していたと考えられる。

作業の進捗について

大きさによる分類とともに、作業の進捗という観点から傾向を把握するため、次の4類に分類した。

**A類** 外周の1～3割程度しか調整剥離が進行しておらず、礫面や素材剥片の剥離面が5割以上残る。成形段階。

**B類** おおむね外周の5割以上に粗い調整剥離が施される。成形段階。

**C類** 成形段階の粗い剥離面の上に、細かい剥離面が著しく重複する。整形段階。

**D類** 研磨開始後の段階。研磨はごく一部にしか及んでいないが、面が形成される。

検討対象にできた資料は113点で、A類が42点(37%)、B類が31点(27%)、C類が30点(27%)、D類が10点(9%)であった。各段階の資料とも、満遍なく存在することが理解できるが、調整剥離が進行していないA類が比較的多いことがわかる。同じく成形段階に位置付けられるB類もあわせれば、64%に達する。遺跡に残された資料が製作途中で放棄されたものであるならば、この事象は製作過程の比較的早い段階で放棄されたことを意味する。すなわち、成形作業を開始したものの、素材の形状が適していないため途中で作業を放棄した可能性がある。上述のとおり、素材の形状が磨製石斧の製作において重要な意味を有しており、そのことを裏付ける状況といえるかもしれない。また、A類には長軸の一端から成形を開始しているもの(162・163・165・175・186)が多いことも特徴的である。これらは、幅のより広い側に、片面に偏る状態で調整剥離が施されている。おそらくは機能部にあたる刃部を先行して形成して、形態の概略を決定したのであろう。一方、研磨段階に達したD類は少ない。この段階まで達した資料は、その後の製作途中の破損するリスクは低い。製品の大半が遺跡外に搬出された可能性が高いことを勘案すれば、研磨段階に達した資料の多くは製品となったものと理解されよう。

以上のように、本遺跡から多数出土した蛇紋岩製磨製石斧の製作に関連する資料には、原石～完成品に

至る一連の過程が認められ、ここに工具である敲石・砥石が伴う。これらを一体的に捉え、より具体性をもった製作過程を復元できる点において、本遺跡の重要性を指摘できる。また、伴出土器の年代から、磨製石斧の大量生産が少なくとも前期前葉にまで遡ることが明らかであり、一部は早期末葉～前期初頭にまで遡る可能性もある。本遺跡は、磨製石斧の大量生産・流通の起源に関わる遺跡と考えられ、今後の研究において重要な情報となるものと期待される。

#### 敲石 (図版15-205～209)

敲石は、6点出土した。多数の磨製石斧未製品とともに出土していることから、その製作時に使用された工具と考えられる。全体像がわかる資料は、すべて拳大の礫を素材としており、稜線上を中心に敲打痕が観察される。特に、表裏面の境界となる稜線に沿うように顕著に確認され、敲打の進行によって面が形成されている。また、表裏面の比較的平坦な範囲にも部分的な敲打痕が確認される。敲打痕の分布範囲の相違から、2種類の握り方・敲き方の存在を想定することができる。

敲石には、蛇紋岩・ヒスイの礫が用いられており、海岸や姫川・田海川の川原で採取されたものと考えられる。ただし、丸みを帯び、表面は光沢を帯びるほど滑らかな産状は、より海岸の礫に近い。距離的にもより近く、海岸で調達された可能性がより高いと考えられる。

ヒスイ製の敲石207の表面は黄白色に風化している。しかし、強い光線を照射すると、かつては透明感の強い緑色を呈していたことがわかる(図版26)。極めて良質なヒスイであるが、これが敲石として使用されたことは敲打痕の存在から明らかである。敲打痕の分布が他の敲石と同様の状況にあることから、ヒスイ製であることが特別な意味を有したとは考えられない。すなわち、重く硬い性質であるため、敲石として利用された可能性がより高いと考えられる。なお、このヒスイ製敲石は、SK62の最下層から出土しており、共伴遺物から前期前葉に位置付けられる。発掘調査で出土した最も古いヒスイ製品は、柏崎市大宮遺跡における前期後葉の加工品であった[平吹2004]ため、現段階において敲石207はヒスイ利用の初源を示す資料といえる。

蛇紋岩製の敲石(205・206・208・209)は、より比重が重く硬いロディン岩などが用いられる傾向にある。ヒスイ製敲石と同様に目的物である磨製石斧の素材より、重量感があり割れにくい素材が選択されたものと考えられる。なお、208の表裏面には研磨面が確認される。これは、磨製石斧の製作途中の破損品が転用された可能性が高い。

#### 砥石 (図版16-210～221)

本遺跡から出土した砥石類は、平坦な砥面を持つ大形砥石(210～216)、扁平な形状の薄形砥石(218～221)、溝状の痕跡が残る筋砥石(217)の3種に大別できる。いずれも研磨具であることに違いはないが、それぞれ研磨する対象や目的に合わせて使い分けがなされていたものと思われる。砥石類は、3～6区の各区から出土しているが、ほとんどが砂岩製の破片資料であり、形態・種類が分かるものはすべて図化した。

210～216の大形砥石は、それぞれ5区SK61a(212・214)、6区SII66-SK169(213・216)、3区(211)、5区(210)、6区(215)から出土したものである。粗い剥離が各所に認められ、原石をある程度の形に整形した上で使用していたものと思われる。特に砥面は、調整剥離を加えながら、随時形成・更新をしていたようである。全体形の大きさや砥面の広さ、使用痕跡などから見て、石斧類を研磨するための置き砥石であろう。石材は、210と211が凝灰岩、212～216が砂岩である。凝灰岩も砂岩も、遺跡付近の海岸などで容易に入手できる石材であることから、身近な適材を使用していたことが窺える。ま

た、石材は、粒子の極めて粗いもの（213・216）と比較的細かいもの（210～212・214・215）に二分することができ、それぞれ荒砥・仕上げ砥として使い分けられていたことが推測される。ただし、後者の場合であっても、滑石製装身具の仕上げ砥としては適さない。

218～221の薄形砥石は、それぞれ3区（219・221）、4区（220）、5区（218）から出土している。石材は、全て細粒の砂岩製である。形態的には「石鋸」や古墳時代の「浜山型内磨砥石」[寺村1966]に近いが、砥面が表面から側縁、裏面へと連続的に分布し、広範囲に同方向の擦痕が認められるなど、これらとは異なった使用痕跡を示している。あるいは縄文時代晩期前葉～中葉の「細池型砥石」[寺村ほか1974]との共通性を指摘できるかもしれない。類例の少ない現状において、本報告においては暫定的に「薄形砥石」の名称を用いることにしたい。

この遺物について注目すべきことは、本遺跡における大形砥石の調整剥片と形状が酷似しているという点である。これを積極的に評価すれば、大形砥石を使用する際に生じた調整剥片を、薄形砥石として再利用するという、一連の過程を復元できる。具体的な使用法については、形態・大きさ・使用痕跡などから判断して、手持ち砥石としての使用が考えられよう。縄文時代の磨製石斧と伴していることを考慮すれば、これも石斧類の研磨具とするのが妥当であろう。ただし、内磨砥石との形態的共通性も見出され、いずれも遺構外からの出土であることを勘案すれば、古墳時代に下る可能性も否定できない。

217の筋砥石は、3区遺構外からの出土品で、玉類の研磨に使用されていたものと思われる。溝だけでなく平坦部にも研磨の痕跡が認められ、ほぼ全ての面が使用されたようである。石材は、細粒の砂岩である。この遺物については、古墳時代に属する可能性が高い。

石 皿（図版16－222～226）

出土した石皿は、他種の石器に比べて数量的に少ない。形態的なバラエティーにも乏しく、本報告では使用痕跡の種類によって、「A類：磨痕が認められるもの、B類：磨痕と敲打痕が認められるもの」の2種に分類した。分類および計測の対象としたのは、ほぼ全体形の分かる石皿12点である。調査区ごとに点数をみていくと、2区がA類1点、3区がA類1点・B類1点、5区がA類4点、6区がA類5点である。総数が少ないため数点の差にしかならないが、5区・6区のものの方が比較的多い。また、3区出土のB類1点（224）以外はいずれもA類であり、この種の石皿が本遺跡の基本であったことが窺われる。

法量については、長さ86～264mm、幅78～234mm、厚さ26～83mm、重さ295～5500gの範囲に広く分布し（第4・5表）、特に目立ったまとまりは認められないが、長幅比1.5：1前後に集中する傾向

にある（第15図）。なお石材は、全て粗粒の安山岩であり、遺跡周辺で入手できる適当な大きさ・形状の礫を使用していたようである。これらの石皿のうち、222～226の5点を実測対象とした。以下に、その詳細を述べる。

重量 (g)	A類	B類
0～400	3	
401～800		
801～1200		
1201～1600	2	1
1601～2000		
2001～2400	1	
2401～2800		
2801～3200	1	
3201～3600	2	
3601～4000	1	
4001～4400		
4401～4800		
4801～5200		
5201～5600	1	
計	11	1

第4表 石皿の重量分布表

厚さ (mm)	A類	B類
0～10		
11～20		
21～30	3	
31～40	1	1
41～50	3	
51～60	2	
61～70	1	
71～80		
81～90	1	
計	11	1

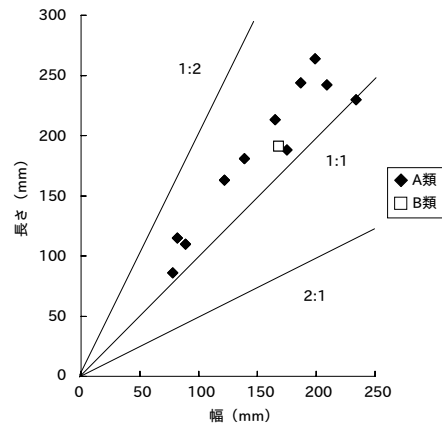
第5表 石皿の厚さ分布表

222・223・225・226は、A類。222・223・225は、大形の扁平礫を使用したもので、平坦な両面に磨痕が認められる。特に、222は5区SK61a、223は5区SK61b、225は5区SK62に伴い、縄文時代前期前半期の遺物であることが土器との伴関係から確認できる。226は、小形の石皿。大きさはどちらかと言えば磨石に近いが、使用痕跡から見ると石皿の類に分類される。片面のみに磨痕が残され、その部分が若干くぼんでいる。

224は、3区遺構外から出土したB類。大形扁平礫の両面に磨痕が残され、さらに片面の中央に敲打痕が認められる。一見すると大形扁平礫を用いたA類と大差なく、使用法は基本的に変わらないものと思われる。中央の敲打の存在は、磨石類の凹石との形態的・機能的連続性を示唆するものである。

#### 磨石類 (図版16-227～図版17-243)

出土した磨石類は、いわゆる「特殊磨石」を除けば、いずれも自然の円礫または扁平礫を用いており、形態分類が困難である。したがって本報告では、石皿同様、使用痕跡を中心に分類をおこなった。なお、石皿・磨石については、基本的に平坦面の使用痕跡が共通しており、セットでの使用が推測される。



第15図 石皿の長幅分布図

**A類** 円礫ないし扁平礫に磨痕のみが認められるもの。使用痕跡が残される面の違いから、1：礫の正面・裏面に磨痕が残されるもの、2：礫の側面に磨痕が残されるもの、3：礫の正面・裏面・側面に磨痕が残されるもの、の3種に細分できる。

**B類** 円礫ないし扁平礫に磨痕と凹痕が認められるもの。

**C類** 円礫ないし扁平礫に磨痕と敲打痕が認められるもの。

**D類** 扁平礫に磨痕・凹痕・敲打痕が認められるもの。

**E類** 柱状礫の稜の部分に細長い磨痕が認められるもの。いわゆる特殊磨石。

上記の分類に基づき、完形ないし完形に近いもの(全体像を把握できる資料)80点を分類および計測の対象とした。調査区ごとの点数で言えば、1区がC類1点、2区がE類1点、3区がA1類15点・A3類5点・B類1点・E類4点、4区がA1類1点・C類1点、5区がA1類17点・A2類1点・A3類8点・B類2点、6区がA1類14点・A3類6点・D類1点・E類1点、8区がA1類1点である。全体として3・5・6区のものが多く、特にA1類が目立つ。以下、分類別に法量・石材の傾向を見ることにする(第6～8表・第16図)。

A1類は、長さ52～160mm、幅46～122mm、厚さ20～68mm、重さ69～1535gの範囲に分布する。数量的に最も多く、様々なサイズのものが認められる。石材は、安山岩が45点、砂岩が3点で、遺跡付近で入手できる安山岩製のものが圧倒的に多い。

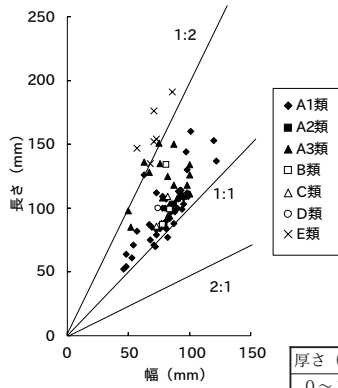
A2類は、1点のみ確認でき、長さ103mm、幅87mm、厚さ45mm、重さ445gである。石材は、蛇紋岩を使用している。

A3類は、長さ85～151mm、幅50～100mm、厚さ33～74mm、重さ217～1263gの範囲に分布する。石材は、安山岩が18点、砂岩が1点である。A1類同様、安山岩を主体とする。

B類は、長さ87～134mm、幅78～84mm、厚さ33～46mm、重さ300～692gの範囲に分布する。石材は、3点全て安山岩製である。

C類は、長さ86～109mm、幅73～82mm、厚さ41～43mm、重さ318～455gの範囲に分布する。石材は、2点ともに安山岩製である。

D類は、1点のみの出土である。長さ100mm、幅74mm、厚さ35mm、重さ370gで、石材は安山岩を使用している。



第16図 磨石類の長幅分布図

	安山岩	砂岩	蛇紋岩	計
A1類	45	3		48
A2類			1	1
A3類	18	1		19
B類	3			3
C類	2			2
D類	1			1
E類	5	1		6
計	74	5	1	80

第6表 磨石類の分類別石材組成表

長さ (mm)	A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類	E類
0～10							
11～20	1						
21～30	9						
31～40	19		6	2		1	1
41～50	13	1	5	1	2		4
51～60	4		5				1
61～70	2		2				
71～80			1				
計	48	1	19	3	2	1	6

第8表 磨石類の長さ分布表

重量 (g)	A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類	E類
0～50							
51～100	2						
101～150	1						
151～200	3						
201～250	3		1				
251～300	6		1	1			
301～350	6		1		1		
351～400	3			1		1	
401～450	5	1					1
451～500	3		1		1		
501～550			1				
551～600	3		3				1
601～650	4		2				2
651～700	2		1	1			1
701～750							
751～800	1		3				
801～850							
851～900	1		1				
901～950	2		1				
951～1000	1		2				
1001～	2		1				1
計	48	1	19	3	2	1	6

第7表 磨石類の重量分布表

E類は、長さ135～191mm、幅57～86mm、厚さ39～60mm、重さ436～1261gの範囲に分布する。長幅比が、A～D類と異なる分布を示すことが最大の特徴である。ただし石材は、安山岩が5点、砂岩が1点で、他の磨石と変わらないものを使用している。

磨石の各種傾向は以上のとおりであるが、実測対象とした17点について、それぞれ詳細を述べておく。

228～232・241はA1類。本遺跡で最も基本的な磨石である。石材はいずれも安山岩。中でも228と231は、5区SK61b内から出土しており、この種の遺物が縄文時代前期前葉に属するものであることが確認できる。

239は、5区SK62から出土したA2類である。本遺跡唯一の蛇紋岩製磨石で、側面のみを使用する点も特殊である。この特殊な石材と使用法には、何らかの相関関係があるのかもしれない。

236・238・240は、A3類である。236は5区SK61bから出土したもので、長楕円形を呈する。238は6区遺構外からの出土で、若干角張った形状をしている。正面・裏面に加え、両側面に磨痕が認められる。240は5区SK62から出土したもので、側面の磨痕が一端のみに認められる。いずれも、石材は安山岩である。

227・235は、B類である。227は、4区SI14内のピットP149から出土したもので、約半分が欠損している。この遺物については、上述した分類・計測対象には含めていない。片面に磨痕が、さらにその中心に凹痕があったと思われる。大形で石皿のようにも見えるが、使用痕跡や形状から判断して磨石の類に含めた。石材は、安山岩である。235は、正面・裏面に磨痕が認められ、さらに両面の中央に凹痕が認められる。3区遺構外から出土しており、石材は安山岩である。

233・237はC類。233は4区SI16から出土したもので、正面・裏面に磨痕、頂部に敲打痕が認められる。237は1区遺構外からの出土で、正面・裏面・側面に磨痕が、下端部に敲打痕が認められる。両者とも石材は、安山岩である。

234は6区遺構外から出土したD類。正面のみに磨痕、正面・裏面中央に凹痕、側面2箇所敲打痕が認められる。石材は、安山岩である。

242・243はE類(特殊磨石)である。両者とも、細長い礫の稜とその付近に広く細長い磨痕が認められ、外見的にA～D類の磨石とは一線を画す。2点とも3区遺構外からの出土で、石材は安山岩である。

石 錘 (図版17-244～図版19-296)

石錘は、170点出土しており、本遺跡における石器組成の中でも主要な石器のひとつである。トウールの24%を占めており、本遺跡の性格を特徴づける遺物として注目される。石錘は、北陸地方における該期の遺跡からも多数出土しており、地域的・時期的な特徴といえよう(第9表)。多数出土した石錘は、扁平礫に剥離によって糸掛けを作出する礫石錘が大半を占めており、ここでは糸掛けの位置・作出法を中心に分類をおこなった。

**A類** 扁平礫の一方の軸に剥離によって糸掛けを作出するもの。糸掛けが作出される軸の長短により、1:長軸に糸掛けを作出するもの、2:短軸に糸掛けを作出するもの、3:長幅比が同じで長軸・短軸の区別ができないもの、の3種に細分できる。

	遺跡名	主体となる時期	点数	文献
新潟	二軒茶屋	前期前葉	350点以上	水澤2003
	新谷	前期前葉	404点	前山1994
	大角地	早期末葉～前期前葉	314点	寺村・安藤ほか1979+今回調査分
富山	極楽寺	早期末葉～前期初頭	2点	小島1965
	南太閤山I	早期末葉～前期前葉	52点	岸本ほか1986
石川	甲・小寺	早期末葉～前期初頭	700点以上	四柳1972
	通ジノハナ	前期前葉	88点	安他1997
	三引	早期末葉～前期初頭	57点	小島ほか2005

第9表 北陸地方における縄文早期末葉～前期前葉の主な石錘出土遺跡

**B類** 扁平礫の二方の軸に剥離によって糸掛けを作出するもの。

**C類** 扁平礫の一方の軸に剥離によって糸掛けを作出し、もう一方に敲打によって糸掛けを作出するもの。

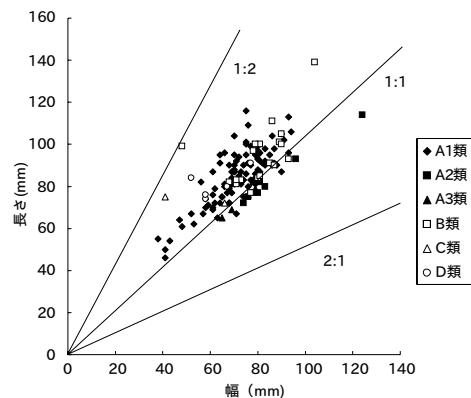
**D類** 剥片を素材とし、剥離によって糸掛けを作出するもの。

上記の分類に基づき、完形ないし完形に近いもの137点を分類および計測の対象とした。調査区ごとの点数で言えば、1区がA2類1点・C類1点、2区がA1類2点、3区がA1類37点・A2類4点・A3類1点・B類8点・D類2点、4区がA1類5点・A2類1点・B類1点・D類1点、5区がA1類31点・A2類2点・A3類1点・B類5点、6区がA1類23点・A2類1点・A3類2点・B類5点・C類1点、D類2点である。磨石などと同様、資料は3・5・6区に集中して見られる。石錘の種類では、長軸に剥離をおこなうA1類が圧倒的に多い。以下、分類別に法量・石材の傾向をみていく(第10～12表・第17図)。

A1類は、長さ46～116mm、幅38～93mm、厚さ13～40mm、重さ39～495gの範囲に分布する。本遺跡において石錘の主体をなすのがこの類であり、大小様々なものが含まれている。石材は、安山岩が79点、砂岩が13点、蛇紋岩が5点、凝灰岩が1点である。ごくわずかに蛇紋岩や凝灰岩が含まれているが、安山岩製のものが主体となることは、石皿や磨石と同様の傾向にある。いずれも、遺跡周辺で入手可能な石材である。

A2類は、長さ72～114mm、幅74～124mm、厚さ21～46mm、重さ146～680gに分布する。石材は、安山岩が5点、砂岩が2点、蛇紋岩が1点、頁岩が1点である。

A3類は、長さ65～79mm、幅65～79mm、厚さ20～30mm、重さ125～212gの範囲に分布する。石材は、4点全て安山岩である。このA3類については、今回とりあえず一つの類として独立させたが、製作時に特別な意図が



第17図 石錘の長幅分布図

3 縄文時代早期・前期の遺物

	安山岩	砂岩	蛇紋岩	凝灰岩	頁岩	計
A1類	79	13	5	1		98
A2類	5	2	1		1	9
A3類	4					4
B類	12	3	3		1	19
C類	1	1				2
D類	1	1			3	5
計	102	20	9	1	5	137

第10表 石錘の分類別石材組成表

重量 (g)	A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類
0~20						
21~40	1					
41~60	4					
61~80	1					
81~100	4				1	3
101~120	5					
121~140	7		2			1
141~160	7	1				
161~180	7	1		2		
181~200	6	1		2	1	
201~220	8		2	1		
221~240	5	2		2		1
241~260	10			3		
261~280	11	2		2		
281~300	6					
301~320	1			3		
321~340	5			1		
341~360	1					
361~380	5					
381~400	1					
401~420	2					
421~440						
441~460				2		
461~480						
481~500	1					
501~520						
521~540						
541~560		1				
561~580						
581~600						
601~620						
621~640				1		
641~660						
661~680		1				
計	98	9	4	19	2	5

第11表 石錘の重量分布表

厚さ (mm)	A1類	A2類	A3類	B類	C類	D類
0~10						
11~15	1					2
16~20	15		1	2	1	1
21~25	37	3	2	6		1
26~30	25	2	1	5	1	1
31~35	17	2		4		
36~40	3	1		1		
41~45						
46~50		1		1		
計	98	9	4	19	2	5

第12表 石錘の厚さ分布表

247 (3区SD51)、274 (5区SK61b)、286 (6区SI166-SK169) がある。

273・286は、A3類である。273が5区SK61b、286が6区SI166-SK169から出土している。石材は、いずれも安山岩である。

あった可能性は低く、実質的にはA1類ないしA2類のいずれかに含めてもよいものと思われる。

B類は、長さ77~139mm、幅48~104mm、厚さ18~50mm、重さ161~626gの範囲に分布する。石材は安山岩が12点、砂岩が3点、蛇紋岩が3点、頁岩が1点である。

C類は、長さ72~75mm、幅41~66mm、厚さ19~30mm、重さ88~188gの範囲に分布する。石材は、安山岩が1点、砂岩が1点である。本遺跡では、この種の石錘が最も数が少ない。

D類は、長さ74~91mm、幅52~77mm、厚さ15~27mm、重さ86~233gの範囲に分布する。石材は安山岩が1点、砂岩が1点、頁岩が3点である。C類に次ぐ少数派であり、石錘として特殊な例である。

これらの石錘については、重量よりも、大きさにまとまりがあるような印象を受ける(第11表・第17図)。本遺跡における石錘の素材選択にあたっては、手頃なサイズ(掌大)であることを重視していた可能性を指摘できる。

石錘類の各種傾向は、上述した通りである。以下では、実測対象とした53点について、それぞれ詳細を述べることにする。

246・249~255・258~261・263~272・275~280・282・284・285・288~291・294~296はA1類である(258は約3分の1が欠損しているが、A1類である可能性が高い。もちろんこの遺物については、上述した分類・計測の対象からは除外している)。繰り返し述べるが、本遺跡ではこの種の石錘が最も多い。同じA類でも、短軸よりも長軸を剥離するものの方がはるかに多く、当時石錘の糸掛けを作出する際には、長軸を加工するのが一般的であったようである。石材は、246・249~254・258~261・265~268・271・272・276~280・282・285・288・290・291・294・296が安山岩、255・263・264・284・289・295が砂岩、269・270・275が蛇紋岩である。また、これらのうち遺構に伴うものとしては、246(2区SX102)、258(4区SI14)、259(4区SI16)、263~272・275~278(5区SK61b)、279・280(5区SK62)がある。

245・247・256・274・281は、A2類。一方の軸を剥離するA類としては少数派である。石材は、245・256が安山岩、247・281が砂岩、274が頁岩である。遺構に伴うものは、



248・262・283・287・292は、B類。248は、3区遺構外から出土したもので、石材は砂岩である。方形に近い形状で、長軸の両端を大きく剥離し、さらに側部にも剥離を加えている。262は、4区遺構外から出土したもので、蛇紋岩製である。バナナ形に近い形状で、他の石錘に比べてきわめて異質な存在である。283・287・292は、いずれも安山岩製。これら3点については、側部の剥離が小さく糸掛けではない可能性もあり、A類に分類すべきものなのかも知れない。

244・293は、C類。244は、1区から出土したもので、安山岩製である。形状はA1類に近似しており、おそらく用途もほとんど変わらないものと思われる。293は、6区遺構外から出土したもので、石材は砂岩を使用している。長軸に剥離による糸掛けが、短軸に敲打による糸掛けが作出される。これについては、他種の石錘に比べ小形のうえ、形態も明らかに異なり、用途の違いがあった可能性も考えられる。

257は、3区遺構外から出土したD類である。頁岩の剥片を素材とし、縁辺にさらに細かい剥離を加えて糸掛けを作出している。いわば「剥片石錘」であるが、石錘の製作法としては珍しく注目される。一定の形態が備えられていれば、礫であっても剥片であっても、石錘の素材となりえたことを示唆している。

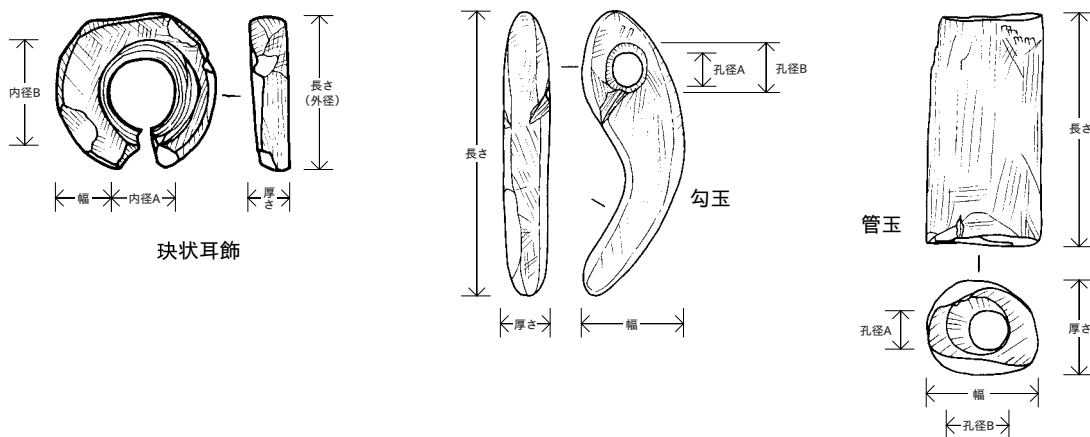
## C 石製品 (図版20-312～図版22-372)

### (1) 概要

石製品は108点(素材とみられる断片も含む)出土した。その大半106点は装身具類で、2点が蛇紋岩製、1点が凝灰岩製、1点が石英製であるほかは、すべて滑石製である。滑石製装身具は、玦状耳飾と玉類に大別できる。

玦状耳飾は、1点(312)を除き、すべて破片の状態出土した。破片資料をもとに、径を復元すると大きさから大形・中形・小形の3種に分類することができる。このうち小形のものが最も多く、半数以上を占めている。二次堆積中から出土した大形品の一部(337)を除けば、大半の資料が円環状をなしており、縄文早期末葉～前期前葉の形態的特徴をよく反映している。これとともに、その製作に関連する資料も出土している。

玉類は、勾玉・管玉・垂玉・丸玉・礫玉およびこれらの未製品が含まれている。この形態構成は、富山県極楽寺遺跡出土資料[小島1965]の在り方と共通しており、縄文時代早期末葉～前期初頭の特徴といえる可能性がある。特に、勾玉は最も古い段階に位置付けられる資料のひとつとみられ注目される。勾玉



第18図 石製品の計測位置

には、牙玉との形態的連続性が認められるもの(342)、玉・珓状耳飾の破損品を転用したもの(343)があり、その系譜を考える上で重要な資料といえる。

なお、多数出土した滑石製装身具の製作関連資料の多くは、未製品や破損品であり、仕上げ砥がなされた完形の製品はほとんど認められなかった。このことから、本遺跡から多数出土した滑石製装身具は、他地域に搬出することを目的に製作された可能性を指摘できる。

## (2) 記述の方法

基本的には、石器と同様の方法で記述することとする。石材名を付する考え方についても同様である。ただし、珓状耳飾など、残存部分から全体像を復元しないと、形態的評価を行えない資料が多い。そこで、復元した大きさを記載するため、必要に応じて観察表に石器とは別個の項目を設けることとした。なお、石製品の計測部位は第18図のとおりである。

## (3) 各 説

### 珓 状 耳 飾 (図版20-312~図版21-341)

滑石製の珓状耳飾は、45点出土した。5・6区の遺構内からの出土が多い。4区SI14から5点(317・322)、5区SK61aから1点(312)、5区SK61bから6点(313・328)、5区SK62から8点(314~316・325・331)、5区SK67から1点(329)、6区SI166内-SK169から8点(318~321・324・335)が出土した。また、スリット形成以前の未製品は5区SK61a(340)、5区SK61b(326・333)・SK62(325)と6区(327・339・341)から出土した。

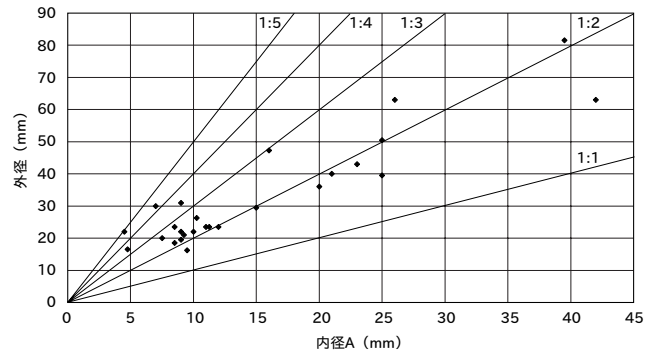
本遺跡の珓状耳飾において特徴的なことは、仕上げ砥までなされた資料は5点(312・314・316・318・334)に限られ、また、破損のみられない資料が1点(312)に限られる点である。すなわち、遺跡に残された珓状耳飾の多くは、製作途中で破損したものとみられ、本遺跡をその製作遺跡と位置付けることができる。本遺跡の珓状耳飾は、大きさによって3種類に分類することができる(第18図)。

小形品は、外径2cm~3cmほどのものである(312~323)。比較的扁平なものが主体をなすが、細くリング状をなすもの(320・321)、厚みがあるもの(323)などバラエティーに富む。残存部分が小さく、全体像が明らかでないところがあるが、外径を正円に近付けようとしているものが多い。一方、314・318は、やや横長の楕円形をなしている。早期末葉~前期前葉に位置づけられる「極楽寺・大角地タイプ」においては、原石の長軸方向を上・下とする傾向にあるといわれており[藤田2004]、これと異なる状況が認められる。

312・314・316・318は、丸みを帯びた滑らかな形態をなしており、仕上げ砥がなされたものと考えられる。特に312は、孔壁の回転痕が、回転方向と直交する擦痕によって磨き消されている。このような擦痕は、明らかに仕上げ砥がなされた製品に、しばしば認められる特徴的なものであり、孔修正[藤田1983]と位置付けることができよう。しかし、このような仕上げの段階にまで至った資料はほとんどない。出土資料の多くに認められる擦痕は粗く、研磨面間の稜線が明瞭に残されている。仕上げの前段階で破損した資料の多さを特筆することができる。また、317には穿孔途中の回転痕が認められる。破損後に勾玉などの玉に転用しようとしたものと考えられる。

なお、324~327・333は、扁平素材の中央に穿孔されており、珓状耳飾の素材とみられる。法量か

らみて、小形品の未製品とみられる。中央部の穿孔は、324・327が正円に近いが、325・326は楕円形である。楕円形の穿孔は、複数の穴を穿ち、それを連結させた結果とみることができる。これらの穿孔は、回転というよりは鋭利な剥片などによって削りつつかのようにあり、「反復様削除痕」〔藤田1983〕または「反復回転抉り穿孔」〔藤田1998〕と呼ばれている技術



第19図 玦状耳飾の外径と内径

によって穿孔されたものとみられる。333も、小形品の未製品とみられる。これは、スリットを刻む際の資料とみられる。

中形品は、外径4cm～5cmほどのものである(328～332)。比較的厚みがあり断面の幅と厚さが近似値を示すものが主体となる(329～332)が、薄手で扁平なもの(328)もある。このうち329・330は、ほぼ正円に仕上げられており、製品により近い段階を示している可能性がある。一方、332は擦痕が粗く形状は歪であり、整形段階にまで達していない可能性がある。破損面に認められる研磨痕は、製作途中で破損したパーツを再利用しようと試みた痕跡と考えられる。なお、328のスリット部分の擦痕は、弧状をなしている。「糸切り技法」〔小嶋2005〕との関連が想定される資料といえる。しかし、一見、弧状に見える314の擦痕は「ハ」の字をなしており、また、スリット形成段階の資料とみられる333の擦痕は直線的で、鋭い刃物が複数回にわたって接触した痕跡を認めることができる。本遺跡においては、ごく少数の資料をもって「技法」を普遍化させることは難しく、「糸切り技法」との関連については、慎重に評価することとしたい。

なお、339・340は中形品の未製品と考えられる。円盤状の340は、穿孔前の素材とみられるが、精巧に整形されている。裏面がより平坦に、表面がややふくらみをもつように仕上げられている。緑色を帯びた透明感のある滑石を素材としており、他の装身具に使用される滑石と比べるとやや異質といえる。このような状況も踏まえれば、玦状耳飾の未製品とは別に「円盤状石製品」と理解する必要もあろうか。ただし、大形品の未製品341と比べると表裏の面構成が共通し、玦状耳飾の製作遺跡である富山県極楽寺遺跡〔小島1965〕・石川県三引遺跡〔小嶋・金山ほか2004〕においても同様の形態が認められる。このような断面形態は、前期後葉の「有明山社型玦状耳飾」〔藤田1971〕とも共通する。外径は、玦状耳飾の中形品と共通しており、総合的に判断すれば玦状耳飾の素材と判断するのが適当であろう。339は、略円盤状に整えられた後、穿孔途中で破損した資料である。「反復回転抉り穿孔」の粗い擦痕が明瞭に残っている。また、穿孔位置は円盤の中心からややずれている。複数の穴を穿ち、それを連結させた結果と考えることができよう。

大形品は、おおむね外径6cm以上のものである(334～338)。334は円環状をなし、早期末葉～前期初頭にみられる典型例といえる。335・336は、早期末葉～前期初頭の土器が多く出土している6区からの出土である。やや歪な形態であるが、三角形基調に仕上げられる点において共通性が見出される。仕上げ段階に到達した資料ではない可能性が高いものの、極楽寺遺跡に類例が見出され(第22図)、早期末葉～前期初頭に特徴的に存在する形態であるかもしれない。なお、いずれも製作途中で破損しているが、破損面に二次加工が認められ、再利用の意図が窺える。338は、流路跡とみられる2区からの出土であり、

幅が広く異質である。あるいは板状の素材に大孔を穿つ点では共通するが、玦状耳飾と捉えることはできないかもしれない。岩石名も、軟質であるが他と異なる緑泥石岩と同定されている（第11図）。形態的特徴から、時期的にやや下る可能性を指摘できる。

#### 勾玉（図版22-342・343）

勾玉2点が、5区から出土した。うち343は、前期前葉のSK62からの出土である。いずれも早期末葉～前期前葉に特徴的に使用される銜色の滑石が用いられている。

藤田亮策氏は、縄文時代の勾玉について「勾玉とは呼ぶが過半数が勾玉類似の彎曲玉といってよく、胎児形や芋虫形の尾の曲ったものが多く、工作上的拙劣さというよりも、勾玉の原始形を想像させるものがある。動物の歯歯から作った飾玉の発達が勾玉であるとの考方は今日も支配的であるが、勾玉の丁字頭の根原と思わせる芋虫形の勾玉は、これからでは解釈できない。」[藤田1957]としている。したがって、縄文時代の勾玉は、弥生時代・古墳時代のそれとは形状が異なり、また系譜も明らかでなく、本来的には「勾玉状石製品」あるいは「先史勾玉」[藤田2004など]として区別することが適当かもしれない。

本遺跡から出土した342は、藤田亮策氏の記述にある彎曲玉といえる。いわゆる勾玉と比べると彎曲が緩く細長い。牙玉との形態的連続性が認められ、勾玉の系譜を考える上で重要な資料といえる。また、穿孔部から内端にかけて斜位方向の溝が刻まれている。その位置はやや異なるが、牙玉の歯根との境界とも似る。342と牙玉の断片的な共通性をもとに、両者の関連性を拙速的に評価することはできないが、これまで仮説として示されてきたことを裏付けるひとつの材料となろう。なお、342は、仕上げ砥までなされており、擦痕はあまり残されていない。この資料の滑らかな器表面は、遺跡内から出土した粒子の粗い砂岩や凝灰岩類の砥石では形成しえないものとみられる。滑石は極めて軟質であることから、研磨具の素材が「石」である必要性はなく、遺跡に残されていない物体（例えば、動物の皮革、木砥石など[藤田1983]）により仕上げ砥が可能であったと考えられる。また、穿孔部の内端側がより滑らかな状態となっている。これは使用による擦れの可能性を指摘できる。

一方、343は342と比べると小さく彎曲がきつい。くびれの部分には、表裏面からの回転痕が確認されることから、363のような円形の垂玉もしくは玦状耳飾製作時の破損品を転用したものと考えられ、直線的な破損面に再加工が施されている。また、外縁は半円形をなしておらず、全体のプロポーションそのものも破損後に再加工された可能性が高い。特に、頭部の形状は穿孔部を意識して再加工されているものとみられ、破損面との境界に丸みをもたせようとする意図が見受けられる。このような形態が偶発的に作出される可能性も考えられるが、342と同様に滑らかな器面に仕上げられており意図的に作出されたものと考えられる。また、玦状耳飾317は、破損後に穿孔しようとした痕跡が認められ、転用による製作過程の存在を裏付けている。すなわち、342とは製作過程が異なり、製作の開始段階から意図的に製作されたものではない可能性が高い。

このように大角地遺跡においては、形態・製作過程の異なる2点の勾玉が認められた。昭和45・48年調査においても1点出土しており、玦状耳飾と共通する技術によって製作されていることから、「縄文時代の飾玉」として報告されている[寺村・安藤ほか1979]。当該期の類例は少ないものの、早期末葉～前期初頭に製作が開始される滑石製装身具において、勾玉・勾玉状品がその一端を占めることが藤田富士夫氏により指摘されている。その具体例として、極楽寺遺跡出土例（第22図）が提示されている[藤田1985]。これは、彎曲玉ともいえそうな細長い形態であり、342にも共通する形態と考えられるが、穿孔部付近を欠損しているため全体像を把握できない。玦状耳飾の破損品に穿孔する事例にも共通するが、端部が細

長く仕上げられており、珉状耳飾の端部とは形状を異にする。早期末葉～前期前葉に位置付けられる勾玉は、管見の限りこの資料しか知られていない。したがって、本遺跡から出土した342・343は、最も古い段階に位置付けられる勾玉のひとつといえ、その系譜や出現時期を考える上で重要な資料になるといえる。

#### 管玉 (図版22-345～347・354)

長軸方向に穿孔されている管玉は、4・5・6区から出土しており、遺構においてはSK23 (347)、SK61a (345)・SK61b (346)、SI166・SK169 (354) から出土している。4点を管玉と判断したが、破損していないのは345のみである。軟質な滑石を素材としているためか、346・347・354は穿孔部に沿うように破損している。これらは穿孔時に破損したものとみられる。螺旋状に形成される回転痕の観察からは、長軸の両端から錐状の工具を回転して穿孔したことが窺える。それを、中間点付近で貫通させようとしているが、346・347は貫通前に破損したようである。345は両端部の開口部の直径がより広いことから、同様の方法で穿孔されたものと考えられる。354は、一方向からの穿孔を主体とするが、他端からの穿孔痕跡がわずかに残る。両端部からの穿孔を基本としたことがわかる。

管玉の石材は、すべて滑石であるが、色調が異なる。345は黒色、346・347は前期前葉に特徴的に用いられている飴色、354は黄土色である。形態はバラエティーに富んでいる。345は、直径が一定しており竹輪状をなす。346・347は、両端部の直径が小さく、最大径が中間点付近にある。細長い橐形ともいえよう。354は、角柱状をなしており角玉といえる。

なお、345には、勾玉342と同様、精緻な仕上げ砥がなされている。穿孔部にもその形跡がみられ、回転痕の上に、回転方向と直交する擦痕が確認される。これにより、回転痕が磨き消され、滑らかな穿孔部が形成されている。一部分を破損しているものの、製品とみてよいものであろう。

#### 垂玉 (図版22-344・348・353・356・357・363・366)

扁平な素材に穿孔しているものを垂玉と分類した。垂玉は、5区と6区のみから出土しており、遺構においては5区SK61b (353)、5区SK62 (348・357)、6区SI166-SK169 (344) から出土している。344・353・357は、素材に厚みがあるため、この記述に必ずしも合致しないが、より扁平な面に穿孔していることにおいて共通性を見出すことができる。平面形態はバラエティーに富み、隅円長方形のもの(348・353)、多角形のもの(344・356・357)、円形のもの(363)がある。円形の363は、丸玉の未製品である可能性も考えられる。また、366はごく一部しか残存していないものの素材は扁平であり、垂玉とみられる。

孔は、いずれも表裏両面から穿孔しており、素材の一端に偏るように穿つもの(344・348)と中央付近に穿つもの(353・356・357・363)がある。344は、縦長五角形の扁平な素材に2孔を穿とうとしている。2孔を縦位置に並べるように配置しており、1孔は貫通しているが、もう1孔は貫通していない。348の表面には、孔を穿とうとした痕跡3ヶ所が認められる。表裏からの穿孔位置をそろえる過程で、複数の穿孔痕跡が形成されたものとみられる。353は、素材の長軸上にあたる下方からと、平坦な表面からの2方向の穿孔が確認される。表面からの穿孔がより深く、下方からの穿孔の深さを超えていることから、当初は管玉を製作しようとしていた可能性もある。ただし、2孔を貫通させることを目的としている可能性もあり、この場合、断面「L」字の穿孔であった可能性もある。356は、縦長六角形の板状の素材に穿孔されている。ただし、貫通はしておらず、穿孔途中で破損した可能性がある。

#### 丸玉 (図版22-352・355・359・360・364・365)

平面円形で厚みのある玉を丸玉とした。その分類そのものが曖昧であり、また破損品が多いため全体像

が明らかでないが、4点を丸玉と考えた。これは、4区(SI14・SD15)から2点、5区(SK62)から2点が出土している。352は、完形資料で直径7mmほどの正円に仕上げられている。仕上げ砥がなされており、器表面が滑らかである。諸磯a式期の竪穴住居SI14からの出土ではあるが、この遺構では早期末葉～前期前葉の遺物が多数混在している。使用している滑石は、前葉に多用されている飴色で透明感のあるものであり、前葉の資料である可能性がある。355は、白玉とでもいうべき形態である。林檎状の素材に長軸上の両端部から穿孔されている。364・365は、復元径が1.5cmほどで、孔径は4mmほどである。外径に比して孔径が小さいことが特徴的といえる。359・360は、これらと法量・形状が近く、穿孔前の未製品とみられる。なお、364・365についても器表面には粗い擦痕や稜線が残されており、未製品であったとみられる。穿孔部分に沿うように破損しており、穿孔に起因して破損したものと考えられる。

#### 礫玉 (図版22-349・350・351)

礫玉は3点出土した。いずれも遺構の覆土の土壌水洗により検出されたものである。349は、細長い円礫に穿孔痕が認められるが貫通していない。凝灰岩が素材として選択されており、透明感のある滑石が用いられる本遺跡の玉類においては珍しい存在である。あえてこのような石材が選択されたことは重要である。350・351は、蛇紋岩もしくは滑石の扁平な小礫を素材としている。直径が6mmほどと極めて小さな素材に、直径1mmほどの穿孔をする。縄文晩期などに認められる形態であるが、350はSK62の最下層である4層、351はSI14の最下層5層からの出土である。351は二次堆積中の所産である可能性があるが、350の出土位置からは前期前葉以外の遺物は混在していない。また、古墳時代の遺物が混入した可能性も考えられるが、形態的な特徴からその可能性は低い。遺跡からは縄文晩期の遺物は出土しておらず、他の装身具と同様、前期前葉に位置付けられるものと考えられる。当該期においては、極めて異質な存在といえ、今後の類例の増加が待たれる。このような微細資料が検出されたのは、遺構覆土全量を水洗した成果といえる。

#### 玉類の素材 (図版22-358・359・360・361・362・367・368・369・370・371)

穿孔が行われていない滑石製品がみられる。5区・6区から多くが出土しているが、特にSK62・SI166に集中する。形態・法量・石材に、共通性が見出されることから、玉類の未製品とみることができるといえる。玉の素材とみられる滑石製品は、形態的バラエティーに富む。管玉もしくは垂玉の素材とみられるもの(361・362・368・369・370)、丸玉の素材とみられるもの(358・359・360)、半円状をなすもの(367)が認められる。相互の形態的比較をもとに位置付けたものの、いずれも断片的な資料であり、あくまで主観的な評価に過ぎない。なお、消費地においては、このような未製品の状態で滑石製品が出土することがある。これらは消費遺跡への搬出形態を考える上で重要な資料となる。

371は、円盤状の石製品である。透明感のある石英製の剥片を素材とし、板状石器のような二次加工が施され、略円形に仕上げられている。主要剥離面側に研磨痕が認められることから、玉類の素材である可能性を指摘できるが、類例は明らかでない。

#### 石棒 (図版22-372)

角閃石を多く含む粗粒な安山岩を素材として、棒状に仕上げられている。両端部を欠損しているが、横断面形が円形を呈しており、石棒の一部と考えられる。県内における石棒の出現は、現在のところ縄文中期以降といわれている[中野・諫山1999]。本資料は、3区の二次堆積中からの出土であり、隣接する調査区から検出されている前期の遺構・遺物との直接的な関係は認められない可能性がある。

## D 原石等 (図版19-297~図版20-311)

## ヒスイ (図版19-297~図版20-304)

「ヒスイ」と呼ばれている出土品には、しばしばアルビタイトやネフライト、ときには緑色で透明感のある石英が含まれている。このように同定される場合の多くは肉眼観察を根拠としており、縄文人が、それらをヒスイと同様に玉の素材とした可能性もある。したがって、外見的特徴から「ヒスイ」とすることに一定の意義はあろうが、岩石学的には「ヒスイ」でない。極端な事例でいえば、外見上よく似るヒスイと石英では、まったく異なる岩石であり、同一に取扱うことは問題である。このような問題を回避するため、本報告においてはヒスイに類似する資料のほか、外見的特徴からヒスイと判断できる資料であっても、そのことを裏付けるために半定量分析を行った。それにより、元素の種類を明らかにし、ヒスイの主要元素であるナトリウム (Na)・アルミニウム (Al)・シリカ (Si) にピークが確認されるか否かを判断した (第10図)。

このような分析等をとおして、ヒスイと判断された資料は、3区で2点、4区で17点、5区で13点、6区で7点である。この出土量の多寡は、縄文時代前期の遺物分布の濃淡と対応関係にある。しかしながら、遺構外からの出土が大半であり、縄文時代前期の遺構に明瞭なかたちで伴うケースは少ない。被熱した剥片298は、縄文時代前期前葉の土坑SK62 (5区) の最下層 (4層) から出土している。しかし、古墳時代の遺物がわずかに混入する1層・2a層・2b層と接する範囲からの出土であり、これのみをもって縄文時代前期におけるヒスイ加工を論じることは難しい。ただし、剥片297もSK62からの出土である。古墳時代以降の遺物の混在は少なく、9割以上が縄文時代前期の遺物であることを勘案すれば、類例の検出をもって積極的に評価できるかもしれない。

このような出土状況にあるためヒスイ原石等の年代は明らかでないが、出土土器の年代から判断すれば、縄文時代早期末葉~前期初頭~前葉もしくは古墳時代に位置付けられる。古墳時代の遺物は少なく、一般的に考えれば、遺物が多数出土した縄文時代前期に位置付けられる可能性が考えられる。しかし、縄文時代早期末葉~前期初頭~前葉におけるヒスイ加工の類例はなく、本遺跡の資料の年代については保留しておきたい。

いずれにしても出土したヒスイは、自然界には存在し得ない比率で出土している。また、ススの付着によって被熱が確認される資料が特徴的に認められる。一方、ヒスイ以外で被熱が確認された石器はない。このことを偶発的な事象と捉えることはできず、ヒスイが意図的に加熱された可能性を指摘できる。ヒスイは硬質であることから、加撃による剥離・分割は困難である。そのため、加熱およびその後の急激な冷却によって、節理面等に沿った分割が行われたのであろう。一方、敲石207や磨製石斧の調整剥片300には被熱の痕跡は認められない。207はもともと分割する必要のない石器であり、300は蛇紋岩に部分的に含まれたヒスイが偶発的に混入した可能性がある。これらのヒスイに被熱の痕跡が認められないことは、目的物と加熱処理の関連性を示唆している。

## 滑石 (図版20-305~311)

装身具に用いられている滑石は、305のような扁平礫の状態で搬入されたと考えられる。306も、表裏が剥離面に覆われているが節理面に沿っており、必ずしも人為的な剥片とはいえない。これもまた扁平な角礫の状態で搬入されたと可能性を指摘できる。また、305の一部に人為性が明らかな剥離痕が認められるが、それ以外の切り合い関係は不明瞭であり、人為性を積極的に評価できない。これらの状況を勘案

#### 4 古墳時代以降の遺物

すると、305・306はほぼ未加工の状態であり、原産地で採取された状態（産状）を示していると考えられる。このような形状からは、原石が露頭から採取されたことを想定できる。滑石は軟質であるため、河川の下流部まではたどり着かず、露頭に近い上流部でしか採取することができない。そのような場合であっても、すでに亜円礫の状態となっている。したがって、河川で採取された可能性は低い。滑石製装身具の製作遺跡は北陸地方に点在するが、滑石の原石が出土した遺跡はなく、本遺跡が原産地により近いことを示唆している。

扁平礫の状態では搬入された原石は、剥片剥離によって目的物に近い大きさに分割される。その石核は、305・308のような形状であったとみられるが、軟質で節理面があるため、剥片剥離をコントロールすることは困難であったと考えられる。したがって、剥離された剥片は、309・310のようにバラエティーに富む。あるいは308に研磨面が存在することから、石核と似たものが目的物の原形で、それを成形する際の調整剥片が、素材とされた場合も想定される。基本的には剥片が素材とされたと考えられるが、装身具の素材となり得る剥片の出土点数は少なく、その整合性については課題が残る。

309・310は、剥片から製品に近付けるための過程がよく表れている。素材となる剥片の縁辺には二次加工が施されており、打ち欠きによって成形されたことがわかる。さらに研磨によって成形・整形されている。すなわち、打ち欠きによって目的物の形状の概略が決定され、研磨によって整形される過程を読み取ることができる。しかし、打ち欠きによる成形は、軟質で節理面が多い滑石に対して必ずしも有効でないかもしれない。打ち欠きによる破損というリスクを回避するため、打ち欠きの過程を省略して、直接、研磨する過程も想定することができる。このような過程を経て、珧状耳飾につながるであろう板状の素材（307・311）、玉類につながるであろう円筒状（359・360）や亜角柱状（361・362）の素材が作出されるものと考えられる。

## 4 古墳時代以降の遺物

ここでは古墳時代以降の遺物について報告する。該期のほとんどの遺物は、自然流路や遺構外から出土したものである。出土した遺物は、古墳時代前期・後期、平安時代前期（9世紀）、中世後期（15世紀）にまとまりが認められる。出土量は少なく、各時代の遺物をあわせても、破片数で700点程度であり、浅箱2箱に満たない。

### A 土 器

#### (1) 古墳時代（図版23－406・415・416・418～421）

406・415・416が古墳時代前期、418～421が古墳時代後期に属すると考えられる。

406と416は、器台の頸部と考えられる。ともに遺構内からの出土である。406がSX101（2区）、416がSK20（4区）からの出土であるが、どちらの遺構も古墳時代より後の遺構と判断されることから混入品の可能性が高い。406の脚部付け根の内面には指頭圧痕が認められ、416は内外面をハケメ調整する。

415は、口縁が「く」の字状に外方に屈曲する甕で、外面には煤が付着する。SD1（4区）からの出土であり、白玉およびその未製品（376～380）が同伴している。

418～421は遺構外からの出土である。418と419は須恵器で、陶邑編年TK10窯式〔田辺1966〕に



位置付けられる。418は蓋杯の身である。短い受部がほぼ水平に延び端部は丸い。419は甕の体部である。中で最大径を迎える球形に近い形状を呈すると考えられ、中央のやや上方より円孔を穿つ。420・421は土師器で、胎土は礫を多く含むなど粗い。420は器台の棒状脚の一部か。421は甕の底部である。底面には土器製作時に圧着したと考えられる滑石製白玉・粘土塊・稲稈圧痕が認められる。作業場の環境を考察する上で、興味深い資料といえる。

今回の調査区からは、古墳時代と判断される土師器は約300点出土しているが、器形のわかる資料は図化した5点のみであり、それ以外は細片である。図化した資料も全容の推定できるものは少なく、詳細な年代比定は困難である。1970・73年度調査ではその一括出土品から、古墳時代中期である漆町編年12～13期に比定〔川村2000〕される7号住居が検出されているが、418と419はTK10窯式であるから、中期末から後期である漆町編年15期に比定され、7号住居の一括資料より後出する。7号住居からはTK208窯式の須恵器蓋杯が出土しており、該地においては遅くとも古墳時代中期以降から後期にかけての須恵器の使用が想定される。

## (2) 平安時代

平安時代の遺物は、2区で検出された自然流路SX101およびSX102から集中して出土しており、おおむね9世紀代に位置付けられる。ほかの各区からも満遍なく出土しているが、3区から6区にかけて多く出土している。中でも3区からの出土数がかつとも多い。また、土師器と須恵器のほか、灰釉陶器・緑釉陶器といった施釉陶器も出土している。中でもSX102から出土した緑釉陶器(412)は遺存率が高く、特筆すべき遺物のひとつである。

**須 恵 器** (図版23-398～402・407～411・417、図版24-423～427)

398～402、407～411、417、423～427は須恵器である。417を除き西角地窯産の可能性はある。

398～402はSX101から出土した。398は底部を回転糸切り技法により切り離された無台杯である。本品は後述するSX102と接合関係にあり、SX101とSX102はほぼ同時期に埋没したのと考えられる。399は長頸瓶か。400と401は焼き歪みや熔着した失敗品である。400は蓋と考えられ、上面器表をケズリ調整する。ケズリの方向は真上から見て左回りである。また上面には「×」ヘラ描が認められる。401は中形甕と杯の熔着品で、重ね焼きの状態が看取できる。

407～411はSX102からの出土である。407～409は杯、410は蓋、411は熔着品である。409は底部を回転糸切り技法により切り離された無台杯である。411は2個体の杯が重ね焼きされたまま熔着したもので、窯詰め方法の分かる資料である。

417はSX52からの出土である。須恵器の甕であるが、やや焼成が甘く、軟質で白色を呈する。タタキ成形され、内外面にタタキ目・当て具痕が認められる。

423～427は遺構外からの出土である。423～425は杯で、423と425は無台杯、424は有台杯である。423の底部は回転ヘラギリである。426は短頸壺と考えられ、外面には沈線が一条巡り自然釉が掛かる。427は瓶の底部である。幅広でがっしりとした、やや外側に踏ん張る高台を有する。

須恵器は、417を除き類似した特徴を有している。色調が黄色味を帯びた灰色系を呈し、粗い胎土中に白色の砂礫を多く含むほか、石英と長石が少量混じる場合があることなど共通点が多く、同一産地と考えられる。また、それらの一群には、焼き歪みが認められる製品や製品同士が窯内で熔着したと考えられるいわば「失敗品」が含まれることから、近隣にその供給元である須恵器窯が存在する可能性を指摘でき

る。本遺跡から約200m南方の丘陵地に位置する西角地窯跡の存在が知られている〔寺村・安藤ほか1979〕が、採集されている杯の形状を比較すると、本年度調査区よりも器高が高く、また成形技法も底部を回転ヘラギリで切り離されており、回転糸切り技法は認められない。色調も黄灰色で軟質な焼き上がりのもはなく比較的硬質な焼き上がりであり、白色砂礫の混入も少ないなどの違いが認められる。したがって、8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる既知の西角地窯跡〔春日1998b〕の製品に該当するとは認めがたい。ただし、胎土に粘性の低い粘土を使用している点においては共通しており、上記のような失敗品が生産地から消費地に運ばれることは考えがたい。したがって、西角地窯跡群内の未だ知られていない窯の製品である可能性を指摘しておきたい。

**土 師 器** (図版23-396・397・403~405・413・414、図版24-428・429)

396・397・403~405はSX101(2区)からの出土である。396と397は椀である。396の口縁部はやや外側に屈曲する。397の底面は磨滅しており調整方法は明確でない。403は長胴甕の口縁部片で、口縁端部は上方へ引き出されている。404は小甕である。405は支脚と考えられ、下方には直径6.8cmを測る半円孔を有する。輪積み成形され、外面の粘土紐繋ぎ部分には指頭圧痕が認められる。

413はP64(5区)からの出土で、小甕である。外面には煤が付着している。

414はP163(6区)からの出土である。甕の口縁部である。内外面をハケメ調整する。

428と429は包含層中から出土した土師器である。428は鍋の口縁部、429は小甕である。

**施 釉 陶 器** (図版23-412・図版24-422)

412は緑釉陶器である。全面に濃緑色の釉薬を施すが、橙色で軟質な胎土であることから、ところどころ釉薬が剥離している。高台は輪高台となるが、明瞭な貼付痕は確認できないことから削り出し高台であろうか。見込みと胴部の境と見込み中央に沈線状の凹みが2条認められる。以上のような特徴から、畿内産で9世紀後半の所産〔高橋1995〕と考えられる。

422は灰釉陶器の椀である。付高台で、内外面にハケヌリで施釉する。灰白色で粗い胎土を有し、白色の微粒子を含み、器表に黒色粒が認められることから猿投産であろう。黒笹90窯式に比定され、9世紀後半の所産である。

### (3) 室 町 時 代 (図版24-430~443)

430~443は中世後期(室町時代)の遺物である。すべて、遺構外からの出土であり、低地の1区から3区にかけて集中して出土する傾向が認められた。一部に14世紀後半に遡る資料も含まれるが、概ね15世紀代に収まる。瀬戸美濃焼および舶載陶磁、ロクロ成形の土師器皿による供膳具と珠洲焼による貯蔵具・調理具で構成される。

各遺物の分類・編年および年代観については、中世土師器は水澤幸一氏〔水澤2005〕、舶載青磁は上田秀夫氏〔上田1982〕、舶載白磁は森田勉氏〔森田1982〕、瀬戸美濃焼は藤澤良祐氏〔藤澤1993〕、珠洲焼は吉岡康暢氏〔吉岡1994〕の各論考を参考にした。

430~433は土師器皿である。すべてロクロ成形され、15世紀の所産である。県内の中世遺跡では、15世紀後半期になるとロクロ成形の土師器皿に加えて、てづくね土師器皿が共伴し始めるが、本遺跡では明確に識別できる製品はない。431と433の底面には回転糸切り痕が認められる。432は磨滅しているため調整痕は明確でない。また、見込みにはタールが付着している。土師器皿は、法量はおおまかに二分されると考えられ、430~432は大形、433は小形となる。

434～436は舶載陶磁器で、434は青磁、435と436は白磁である。434は龍泉窯系青磁碗の胴部片であるが、片刃彫りにより雷文帯および蓮弁文が外面に施されている。上田C-II類に分類され、14世紀末～15世紀前半の所産である。435は八角杯である。15世紀中頃～後半の所産。胴部を大きく面取りする。436は皿である。残存部は直線的に開く器形で、高台際には平坦段を有する。内外面にやや灰緑色掛かった白釉を施すが、ムラが生じている。見込みは蛇ノ目釉剥ぎし、外面高台付近は無釉である。胎土は黄白色を呈する軟質な陶器質である。15世紀中頃の資料か。

437～439は瀬戸美濃焼である。437と438は大窯期の緑釉（灰釉）の施された丸皿である。437は口縁端部の一部を打ち欠く。その部分にはタールが付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。439は大窯1期の天目碗底部であるが、縁辺を打ち欠き、平面円形に成形している。本調査区から西方900mに位置する寺地遺跡から同類が出土している [相羽2002]。

440～443は珠洲焼で、440～442は片口鉢、443はタタキ技法による甕である。441は口縁形態より吉岡IV4期に比定され、14世紀第3四半期頃に位置付けられる。442は口縁端部に櫛描波状文を有することから吉岡V期に比定され、15世紀前半に位置付けられる。440は底部であるが、底面には静止糸切り痕が認められる。

## B 古墳時代の玉作関連資料（図版22-373～390、図版23-391～395）

373は、緑色凝灰岩製の管玉である。比較的粒子の粗い凝灰岩を素材としている。外周には縦方向の擦痕と稜線が認められる。仕上げ砥にまでは至っていない資料とみられる。なお、レントゲン写真を撮影したところ、針状の細い工具により両端から穿孔され、中間点付近で貫通する様子が確認された。

374は、平面「D」字状に仕上げられた勾玉の未製品である。これを素材として穿孔し、括れを作出したものと考えられる。石材は、肉眼的には蛇紋岩と判断されるが、半定量分析により滑石が部分的に含まれることが明らかになっている。

375は、勾玉未製品である。概略の形状は整えられているが、粗削りの段階とみられ表面は滑らかでない。穿孔は片面から行われているが、貫通していない。石材は、黒味の強い軟質なものであり、古墳時代においては白玉等の石製品に多用されるものと共通する。これは、従来、滑石といわれてきた石材であるが、半定量分析によって滑石の構成元素であるマグネシウム (Mg)・シリカ (Si) のほかに、アルミニウム (Al) が特徴的に加わることが明らかとなった (第12図375)。これにより、岩石学的には「緑泥石岩」と分類されることになる。同様の結果は、白玉3点にもみられた (第12図382・387・388) ことから、この1点の特殊な事象とはいえない。したがって、岩石名には「緑泥石岩」と記述することとしたい。一方、考古学においては軟質で加工が容易な石材を広く「滑石」として分類されてきた経過があるため、石材名にはあえて「滑石」とし、本文中には「滑石 (緑泥石岩)」と記述する。

376～389は、白玉およびその未製品である。白玉関連資料は、合計で57点出土している。石材は、すべて滑石 (緑泥石岩) である。このうち376～380はSD1から出土したものであり、今回の調査区においては最もまとまって出土している。したがって、4区SD1が白玉の製作に関連する遺構であることも想定される。しかし、覆土全量を水洗して11点のみの出土であり、そのことを積極的に評価できない。出土した資料から、次のような製作過程を復元できる。

第1過程 薄手の剥片を作出する。

第2過程 剥片の周縁に二次加工を施し、形状の概略を決定する。378・382に特徴的に認められる。

#### 4 古墳時代以降の遺物

第3過程 表裏両面を研磨し、板状の素材を作出する。377～384には、この過程の特徴が顕著に認められる。

第4過程 片面から針状の工具で穿孔する。なお、薄手の素材であるため、表裏両面から穿孔する必要がなかったと見られる。377～384は、この段階の資料である。なお、384は穿孔が2箇所認められることから、異なる目的物の未製品である可能性を指摘できる。

第5過程 穿孔部を中心に、周囲を研磨して略円形に仕上げる。389が、この段階の資料である。

第6過程 略円形に仕上げられた素材を、算盤玉状に成形する。この段階で平面形がほぼ正円に仕上げられていることから、被加工物を軸棒に固定し、回転させながら削り取るような加工技術が想定される。しかし、擦痕の方向は回転方向と直交方向にあり、残された資料からそのような技術を復元することはできない。376・386～388が、この段階の資料である。

第7過程 稜線を削り取り、滑らかな表面に仕上げる。その結果、表面の擦痕はほとんど残されていない。この過程を経たものが製品と考えられる。385が該当する。

このように7過程に区分したものの、状況に応じて不要な段階が省略されることも想定される。また、第5・6過程の段階で、すでに製品としての要件を満たしている可能性もある。各過程の出土点数は、第3過程が3点、第4過程が35点、第5過程が10点、第6過程が6点、第7過程が3点であり、穿孔段階である第4過程の資料が圧倒的に多いことがわかる。特に、孔を境に破損している資料が目立ち、穿孔時に破損したものが多いためと理解される。一方、第7過程を経た製品が少ないことも特徴的である。該期の核心部分を調査したわけではなく明らかでないところもあるが、製品の数に比して未製品の数が多いためとわかる。このことから、製品の多くは、すでに搬出された可能性がある。なお、土師器の底面に雑然と張り付いた白玉(421)の存在は、消費地においては考えにくい事象であり、本遺跡で白玉が大量生産されたことを裏付けている。

390は、コバルトブルー色のガラス玉であり、白玉と形態・法量が近似している。本遺跡で大量生産された滑石製白玉は、このようなガラス玉をモデルに製作された可能性がある。

391は、擦り切り技法によって分割されたヒスイ原石である。復元した擦り切り幅は、縄文中期前葉の磨製石斧にみられる擦り切り技法によく共通する。しかし、擦り切り痕が極めて直線的であり、磨製石斧の擦り切りと比べると異質である。ヒスイに擦り切り技法を適用する事例は少ないが、大角地遺跡1970・73年調査時の原石、上越市裏山遺跡における弥生時代後期の勾玉未製品〔小池・加藤・石田2000〕、富山県下老子笹川遺跡における弥生時代後期のヒスイ製品にも擦り切り技法〔高柳ほか2006〕に類例が見出される。これらの年代と磨製石斧の擦り切り痕との相違を勘案すれば、391は古墳時代の遺物と考えられる。

392～394は、略円形の素材に表裏面から穿孔を行っている。いずれも、穿孔部を境に破損している。392は、流紋岩製の薄手の剥片を素材とし、剥離によって略円形に仕上げられている。その後、金属器のような鋭利な刃物で、中央部を抉るように穿孔している。また、表裏の平坦面には擦痕が確認される。表面の擦痕は滑らかであり研磨痕とみられる。裏面にみられる擦痕は、金属器で切断する際に生じるような鋭利なものであり、素材の粗削り時の成形痕とみられる。394は、厚手の素材を研磨によって略円形に仕上げた後、中央部に敲打と回転によって表裏から穿孔している。滑石(もしくは蛇紋岩?)を素材としている。393は、黒色の滑石(緑泥石岩)を素材としており、敲打と回転による穿孔が認められる。これらの目的物は定かでないが、紡錘車の可能性を指摘できる。ただし、393は、破損後の再加工によって、

大形の勾玉との形態的共通性が見出せる。使用石材においても、子持勾玉に用いられる石材とよく共通する。

395は、方形・板状の石製品である。やや粒子の粗い凝灰岩製である。玉の素材となる可能性が考えられるが、目的物の形態は明らかでない。

## C 石製品・鍛冶関係遺物・金属製品

年代の詳細が不明な石製品・製鉄関係・金属製品は、すべて遺構外からの出土である。

444～446は石製品である。444は粘板岩製の硯である。方形を呈すると考えられるが多くを欠損する。全面に製作時の擦痕が認められる。墨池の底は欠損しているが、上端が半円を描くように遺存しており、その形状から外形を復元した。445は石錘であろうか。花崗岩製で、中央やや下方よりに溝状のくびれを巡らせている。1970・73年調査の7号住居出土資料に類似する。7号住居が古墳時代の遺構であり、同じ用途と推定される縄文前期の礫石錘(244～296)とは形状および製作技法も異なることから、古墳時代の遺物と判断したい。446は砥石である。凝灰岩製で直方体に近い形状を呈する。6面とも砥面として使用されている。ただし、実測図の右側面に認められる単位の大きな粗い擦痕は本製品の切り出し時の痕跡とみられる。また、左側面には敲打痕が認められる。

447～452は鍛冶に関連する遺物である。447と448は鞆羽口、449～452は腕型滓である。451は礫と熔着した状態で出土した。452は炭化物の混入が認められる。メタル度は449が特Lである他はHであり、含鉄滓である。鍛冶に関する遺物は本年度調査区からは36点出土し、そのうち17点が6区、8点が3区からの出土でこの2つの調査区で出土総数の約7割を占める。1970・73年調査では、3区付近をトレンチ調査しており、3区と4区の間地点あたりから、覆土に鉄滓を含み周辺に焼結の認められる落ち込みを1基検出している。また、同トレンチからは鉄滓が平箱1箱程度出土しており、本年度の調査成果とあわせて3区周辺および6区周辺で鍛冶ないしは製鉄が行われていた可能性を指摘しておきたい。なお、4・5・6区では土中の微細遺物を採集するため、目が1mm程度のザルで遺構の覆土全量を水洗したが鍛造剥片は発見されていない。したがって、今回の調査範囲内に、鍛冶ないし製鉄関連遺構は存在しないと考えられる。

453・454は銭貨である。453は皇宋通寶(北宋銭)であり、書体は真書で、裏面は無文である。1038～1049年の鑄造で、中世銭の中では最も多く渡来し、出土量が最多である[永井1994]。1区の確認調査トレンチ内Ⅱb層からの出土である。454は渡来銭である。残存部の表面には口元口實の文字が確認され、裏面は無文である。6区34B11グリッドⅡd層からの出土である。

## D 木製品

455は、頭部に明瞭な刻みが作出されており、古代の荷札状木簡と考えられる。2区の川跡SX101-1層(20A10グリッド)から出土したものである。長さ21.3cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmを測り、スギ材である。表裏の加工の程度は明らかに異なり、実測図表面がより丁寧に削られており、平滑な面となっている。墨痕は確認できないが、緑釉陶器の存在とともに官衙の存在を窺わせる遺物と考えられる。

## 第Ⅵ章 ま と め

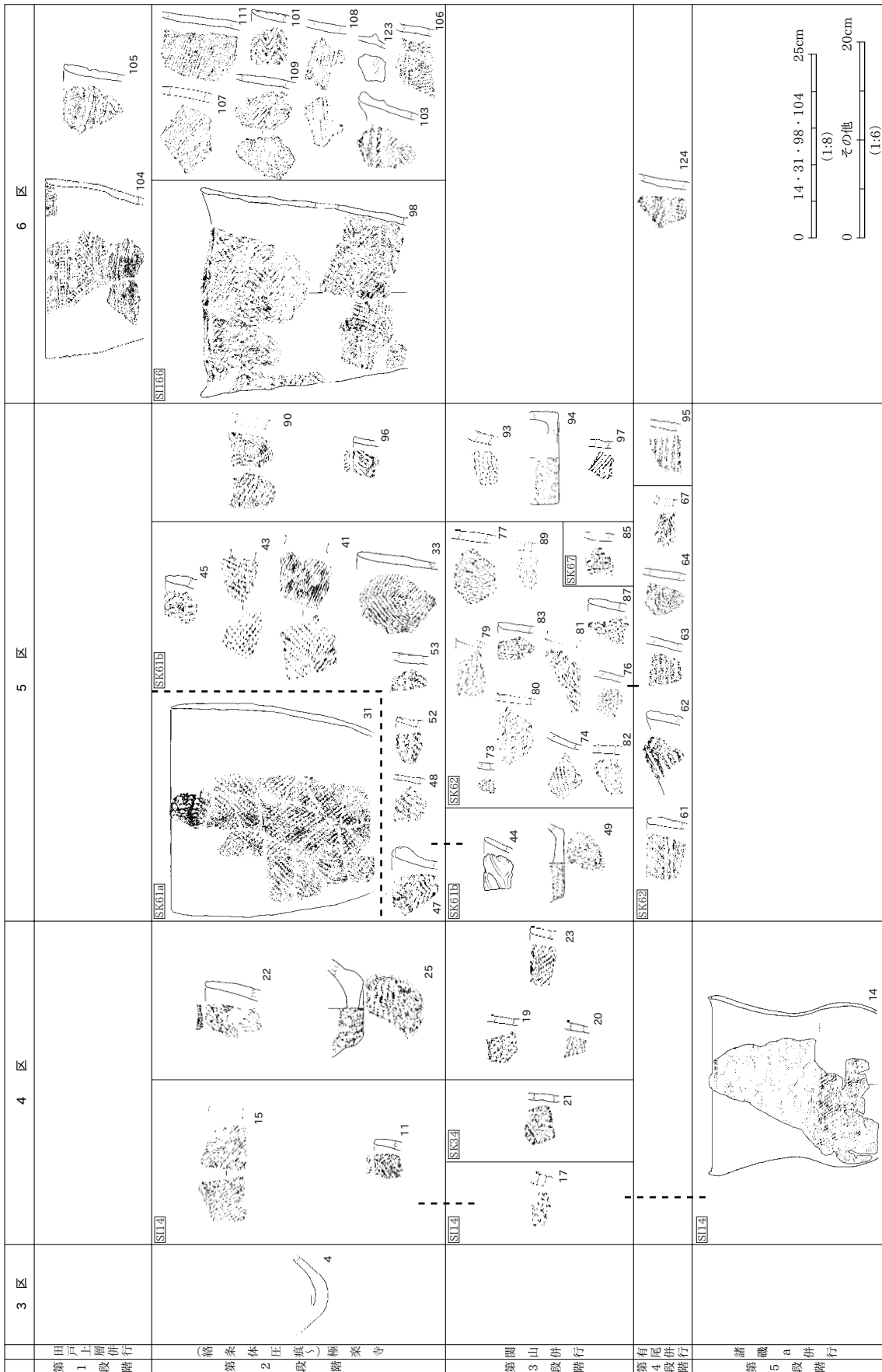
### 1 大角地遺跡出土の縄文土器について

今回調査で大角地遺跡から出土した縄文土器は、縄文時代早期中葉から前期後葉のものである。関東地方の編年に対比して言えば、田戸上層式から諸磯a式の時期に相当し、特に胎土に繊維を含む前期前半期の羽状縄文系土器が多い。しかし、残念ながら出土した土器類は縄文のみの破片資料が大半を占めており、時期が特定できるような有文土器はごくわずかであった。したがってここでは、ある程度時期が分かる資料を各区・各遺構から抽出し、本遺跡出土土器の大まかな変遷を追うことにする(第20図)。新潟県の縄文時代早期・前期については、他の時期に比べ資料が少なく、現状で把握できることをまとめておくだけでも、それなりの意義があるものと思う。なお、縄文時代早期・前期の編年観等については、先学諸氏の論考および報告書〔遠藤2005、小熊1994・1999・2000、金山2005、岸本・山本1986、小島1965、小嶋・金山ほか2004、駒形・石原・小熊1984～1987、駒形・小熊1988・1989、斉藤2006、坂上2004、佐藤・石坂ほか1994、高橋・小池ほか1986、寺崎1997・1999、寺崎・石原1999、寺村・安藤ほか1979、土肥1983、前山1994、水澤2003、安ほか1997、四柳1972〕を参考にした。

大角地遺跡で最も古い土器は、すでに述べたように早期中葉の貝殻沈線文系土器である。これが、本遺跡の第1段階に位置づけられる。本報告中の分類でいえばI群1b類の一部と同2・3類が該当するものと思われ、特に6区からI群2類の良好な資料(104)が出土している。平口縁の深鉢土器で、体部の沈線区画間を刺突によって充填している。104のような早期土器は、上越地方では糸魚川市岩野E遺跡〔高橋・小池ほか1986〕や上越市八斗蒔原遺跡〔坂上2004〕に類例が認められる。今回出土した土器は、その新出資料として注目されよう。

次の第2段階は、早期末から前期初頭に位置づけられる土器群である。I群4～6類・7c類・14類と同8a類の一部、II群1～4類と同5～7類・11類の一部がこれに相当する。条痕文や表裏縄文、非結束羽状縄文などが施され、土器型式で言えば北陸地方の極楽寺式に類する土器を中心としている。極楽寺式と言えば、富山・石川両県の海岸部を中心に分布する土器であり、富山県境近くの海岸部に位置する本遺跡からこの種の資料が発見されても、何ら不思議はない。今回の調査で出土した縄文土器の中では、この時期の資料が特に多く、大角地遺跡における主体期の一つであったものと考えられる。ただし、出土点数が多いと言ってもほとんどが小破片であり、早期末から前期初頭の資料をさらに細分して編年的に検討するまでには至らなかった。

ただし、そのような資料の中にも特徴的な土器が全くないわけではない。3区では、尖底状の底部穿孔土器(4)が出土している。分類上はII群11類であるが、底部への穿孔は極楽寺式の特徴である。4区ではII群5類の中に口唇部(11・22)や底部外面(25)に縄文を施す例が認められ、これらも極楽寺式に類例がある。5区では、SK61を中心に羽状縄文・表裏縄文・条痕文・絡条体圧痕文などを施す土器が出土しており、特にI群7c類の31が良好な資料である。非結束羽状縄文を体部に施し、口縁部付近の狭い範囲にD字形爪形文を連続施文するものであるが、文様構成などから見て極楽寺式に比定できる。棒状工具によって刺突が施される突起状波状口縁(47)や、口唇部に縄文を施文する平口縁(96)も、極楽寺



第20図 大角地遺跡における縄文土器の変遷

## 1 大角地遺跡出土の縄文土器について

式の類と考えられる。また33のように、塚田式に類する菱形状の非結束羽状縄文資料（Ⅱ群6類）も見られる。そのほかⅠ群4類とした45は、早期末に位置づけられる絡条体圧痕文土器であり、本遺跡では唯一の資料である。6区では、羽状縄文・条痕文などを施す土器が多く出土しており、特にSI166から出土した98はおおよその器形が分かるものとして注目される。緩やかな波状口縁のⅡ群6類で、口辺部が無文になる。これも、極楽寺式の範疇で捉えるべき資料であろう。101の矢羽状文資料（Ⅰ群6類）や、103の波状口縁資料（Ⅰ群14類）も、極楽寺式の類である。

続く第3段階は、前期前葉のもので、関東地方の土器編年で言うところの関山式に併行する。県内資料では、新谷遺跡〔前山1994〕や二軒茶屋遺跡〔水澤2003〕の段階に位置づけられ、本遺跡では第2段階に次いで資料が多い。C字形の連続爪形文やコンパス文、ループ文、組紐文などを有する土器が、ここに位置づけられる。土器分類で言えば、Ⅰ群7a・7b類・9類・11類と同1類の一部、Ⅱ群5～7類の一部と同第8～10類が該当する。この時期の土器が出土した遺構としては、4区SI14・SD15・SK34や5区SK61b・SK62・SK67があり、特にSK62の資料が最も多かった。

また、SK67から出土したⅠ群9類（85）は、神ノ木式に類似した資料として注目される。本遺跡昭和54年報文中〔寺村・安藤ほか1979〕では、神ノ木式に類する資料がないことが指摘されているが、今回の調査によって、この種の土器も存在していたことが明らかとなった。小破片1点とは言え、後続する有尾式系土器への系統的つながりを考える上でも意義のある発見である。

第4段階、前期中葉の資料としては、櫛歯状工具によって連続的に点状刺突文を施すⅠ群8類（主に8b類）が挙げられる。口縁部が出土しており、平口縁（61）と波状口縁（62）の存在が確認できる。有尾式系統の土器と見られ、昭和54年報文中にも「有尾式類似土器」として類例が紹介されている。同報文中には糸魚川市庭平遺跡で採集された同種の資料も紹介されており、姫川下流域に有尾式系土器が若干量分布していたことが知られる。今回の調査では、この時期に比定できる土器はわずかししか出土していないが、5区SK62に比較的まとまりが認められる。

最後の第5段階に位置づけられるのが、前期後葉の諸磯a式土器である。この時期に断定できる資料は1点のみ（14）であるが、4区SI14に伴って出土している。胴部がくびれる薄手の深鉢上半部で、竹管工具による肋骨文が特徴的である。4区から出土した土器の中では、これが最も遺存状態の良い資料であった。本遺跡では、図化できないような小破片資料においても大半が胎土に繊維を含んでおり、土器の主体が前期前半以前にあることは間違いない。しかし、そのような中で、諸磯a式土器が際立った形で出土したことは、遺跡の性格や変遷を考える上で示唆的である。

以上のように、大角地遺跡の縄文土器は、大まかにではあるが5つの段階に分けることができる。それでは最後に、この5段階区分を基にして調査区ごとの時期的な流れを追ってみることにする。

まず3区では、第2段階の土器が確認されている。しかしこの調査区については、出土点数がきわめて少なく、混入品である可能性が高い。続く4区では、第2・第3・第5段階の資料が見られた。第3段階の土器を伴う遺構が複数見られるほか（SI14・SD15・SK34）、SI14から第5段階の良好な資料が出土していることが注目される。5区では、第2～第4段階の資料が見られたが、第2・第3段階のものが特に多い。第2段階はSK61aを中心とし、第3段階はSK62を中心とする。またSK62では、第4段階の資料も比較的まとまって出土している。遺構の切り合い関係からはSK61a→SK61b=SK62という変遷をたどることができ、SK61aでは第2段階の資料が主体を占める。すなわち、SK61bに認められる第2段階の土器は、本来的にはSK61aに帰属する可能性が高い。したがって、SK61bはSK62と同様に第3段階



階に位置付けられるものと考えられる。最西端の6区では、第2段階の資料が主体となり、また第1段階の良好な資料が出土している。

このような出土状況から、3区はともかくとして、4区から6区に向かうにつれ土器の時期が概ね古くなっていくことがうかがわれる。逆に言えば、遺跡の主体が、6区から4区に向かって徐々に移動しているように見える。今回の調査は部分発掘であり、遺跡の全貌は知るべくもないが、おおそ西から東へ向かっていくような集落の変遷が考えられよう。住居址に伴って関山式併行期（第3段階）および有尾式併行期（第4段階）の土器が多く出土した1973年調査区が、今回の調査における4区と5区の間位置することからも、その可能性は高い。

## 2 蛇紋岩製磨製石斧の大量生産

### A 大量生産の背景

本遺跡においては、磨製石斧未製品や工具（敲石・砥石）が多数出土している。未製品の石材は、127点（95%）が蛇紋岩であり、特定の石材に特化した製作であったことがわかる。素材となる蛇紋岩は、遺跡周辺で容易に採取できる石材であり、原石および未製品に残された原石面の観察からは遺跡の北方500mに広がる海岸で採取されるものに近似する。これらの状況から、蛇紋岩製磨製石斧は、豊かな石材環境のもとで大量生産されたものと考えられる。

一方、研磨によって全体的なプロポーションが整えられた資料を「完成品」と判断した場合、それはわずかに10点しか出土していない。比率にしてわずか7%である。しかも、そのうち7点は破損品であり、完形品は3点に過ぎない。製品の出土点数は、未製品と比べると著しく少なく、すでに遺跡外に搬出されたものと考えられる。生産数は自家消費的な範囲を超えている可能性が高く、遺跡外への搬出を前提とした大量生産であったものと評価できる。「原産地遺跡」的な要素を見出すことができよう。

これら磨製石斧の大量生産に関連する資料は、伴出土器の年代から少なくとも前期前葉にまで遡ることが明らかであり、一部は早期末葉～前期初頭にまで遡る可能性もある。糸魚川地域においては、磨製石斧の大量生産・流通の起源に関わる資料といえ、今後の研究において重要な情報になるものと考えられる。また、縄文時代前期前葉においては、蛇紋岩製の磨製石斧が原産地以外でも比較的大きな規模で生産されていることが知られている。新潟市新谷遺跡〔浅井1989、前山1994〕や長岡市大武遺跡〔春日1998a〕が、その代表的事例であり、いずれも海岸部に分布する。この分布状況は、原石搬入において効率的な遺跡立地であったと考えられる。しかしながら原石搬入において多大な労力が必要であり、原産地と離れた地において大量生産することは製作途上のリスクが大きく効率的な選択であったとはいえない〔鈴木1998〕。今後、石材原産地以外における生産状況との対比、消費地への搬入状況を検討することで、より実態的な石材の動態把握が必要となろう。

### B 製作過程の復元

本遺跡から出土した蛇紋岩製磨製石斧は、大きさにより小形・中形・大形の3種類に分類することができる（第13・14図）。小形品は長さ4～5cm・幅2.5～4cm・厚さ1cmほど、中形品は長さ5～12cm・幅4～7cm・厚さ1～2cmほど、大形品は長さ10cm超・幅5cm・厚さ2～4cmほどの大きさである。実際のところ、長さ・幅においては破損品が多く実態が明らかでないところがあるが、小形

品・中形品と大形品は厚さによって明瞭に区別できる。小形品・中形品が薄手に仕上げられているのに対し、大形品は厚手に仕上げられている。ただし、大形品は厚手であるものの、いわゆる定角式のように側面に明瞭な平坦面が作出されない。側面に平坦面が作出されない状況は、砥石に明瞭な筋状の砥面が形成されていないことと相関関係にある。

大きさによる分類は、未製品の大きさとも対応関係にある。そして、未製品の観察から、この相違が生じる背景に素材の選択があると考えられる。小形品は中形品・大形品の成形時に生じる調整剥片や薄く小さな扁平礫、中形品は剥片や薄手の扁平礫、大形品はやや厚みのある礫を素材としているものと考えられる。すなわち、素材の選択段階において、すでに目的物の形状が決定されていた可能性が高い。

縄文前期前葉における磨製石斧の製作過程については、山本正敏氏・浅井芳伸氏の検討がある。山本氏は「第一段階（原材の準備）→第二段階（敲打・剥離による整形と研磨（の繰り返し））→第三段階（研磨により完成）」[山本 1986] と整理し、第二段階において「敲打・剥離による整形と研磨を並用しながら、完成へ近づけていったと理解」している。浅井氏は「第 1 工程（原石の選択）→第 2 工程（荒割）→第 3 工程（調整剥離）→第 4 工程（敲打）→第 5 工程（研磨）」[浅井 1989] と整理している。これらの研究を参考に、本遺跡の実態を踏まえて次のように整理したい（第 21 図）。

**第 1 過程** 素材獲得過程。礫素材のものは原石の選択、剥片素材のものは原石の選択～素材剥片の獲得（剥離・分割）を行う。このとき、目的物により近い素材を準備することが意識された可能性が高い。

**第 2 過程** 成形過程（浅井氏の荒割段階）。剥離長が 2cm を超えるような大剥離痕によって形態の概略が決定される。大剥離痕により形成される平面形態の凹凸が大きい。

**第 3 過程** 整形過程（浅井氏の調整剥離段階）。大剥離痕の上に、細かい剥離痕を重複させることで、製品の形態により近付ける。なお、第 2 過程と第 3 過程は作業上、連続しており、両者を明瞭に区分別できないところもある。

**第 4 過程** 敲打過程。稜線を敲き潰すことで、より滑らかな形態が作出される。この過程で、側面の平坦面が形成される。

**第 5 過程** 研磨過程。砥石で全面を研磨し、平滑な器表面と鋭利な刃部が形成される。

本遺跡における磨製石斧の製作過程は、原石から製品に至る一連の資料をもとに、上記の 5 段階に区別することができる。小形・中形・大形のいずれの大きさにおいても、おおむね各過程の資料を認めることができるが、第 4 過程については小形品・中形品には認められない。第 4 過程の有無は、素材の厚さと密接に関連する可能性を指摘できる。すなわち、薄手の素材に敲打調整を施すことは、素材の損壊というリスクに直結する。また、厚手の素材であれば適当な剥離角を準備できないため、敲打整形を選択せざるを得ない状況が想定される。一方、薄手の素材であれば、剥離調整をより行いやすい状況にある。したがって、薄手の中形品・小形品に敲打調整が適用されないのは、合理的な選択であったと考えられる。

このことから、目的物の大きさや素材の規制によって、製作過程が選択されていたことが想定される。従来いわれている一系列に端的に整理された製作過程作過程と大枠で一致するが、状況に応じた柔軟な対応が資料に顕在化しているものと評価できよう。

## C 製作に関連する工具

本遺跡においては、磨製石斧の製作に関連する工具（敲石・砥石）も認められる。敲石にはヒスイや蛇紋岩、砥石には砂岩や凝灰岩が用いられており、特定の石材に固執する状況が理解される。その素材とな

	第1過程	第2過程	第3過程	第4過程	第5過程	製品
小形品	189(5区) 《礫・剥片》	177(5区SK61b) 169(4区)	202(6区)		201(6区) 204(6区)	151(4区P141) 150(5区)
中形品	《礫・剥片》	176(5区SK61b) 180(5区SK61b)	192(3区) 189(3区)			146(5区SK61b) 149(5区SK61a)
大形品	173(5区SK61a) 《礫》	175(5区SK61b) 197(6区)	199(6区)	194(工事立会S11)	195(工事立会S11)	152(5区)
	《剥片》	196(6区) 191(5区)	183(5区P65)	193(5区)		153(5区SK61b)
特大品	160(4区S114) 《礫・剥片》	164(4区S114)	166(4区S114)	167(4区S114)	168(4区S114)	

0 (150・151・169・203・204) 10cm (1:4)

0 (その他) 15cm (1:6)

0 (167) 10cm (1:8)

第21図 大角地遺跡における蛇紋岩製磨製石斧の製作過程

### 3 滑石製装身具の製作

った石材は、いずれも遺跡の北方500mに広がる海岸で採取できるものである。磨製石斧の素材とともに、工具の素材も採取された可能性を指摘できる。ただし、砥石に用いられる砂岩の大きさは40cmに近いものがあり、近隣を流れる姫川で採取された可能性もある。

成形・整形時に使用する敲石は、いずれも拳大で、稜線上に顕著な敲打痕が認められる。石材は、重量感があり硬質なヒスイや蛇紋岩が選択的に用いられている。ヒスイ製敲石207は、表面が風化しているものの、透明感のある緑色の良質なヒスイである(図版26)。しかし、他の敲石と比べて特別な状況は認められず、重く硬い性質であるがために敲石に利用されたものと理解される。なお、このヒスイ製敲石は出土状況から前期前葉に位置付けられ、これまで最も古いといわれていたヒスイ製品(柏崎市大宮遺跡における前期後葉の加工品)[平吹2004]より古く位置づけられる。現段階においては、ヒスイ利用の初源を示す資料といえる。蛇紋岩製敲石は、磨製石斧に用いられる蛇紋岩とはやや異なり、より重量感がある硬質な蛇紋岩(ロディン岩)が選択される傾向にある。また、製作途中で破損した磨製石斧の未製品が敲石に転用されるケース(208)も存在することから、大きさが重視されたものと考えられる。

砥石は、置き砥石とみられる平砥石と、持ち砥石とみられる薄形砥石から構成される。いずれも砂岩が主体的に用いられ、一部に凝灰岩が認められる。砂岩は、粒子が粗いものと細かいものが存在することから、粗砥と仕上げ砥を使い分けていた可能性がある。ただし、大半の砂岩は比較的粒子が細かいものであり、特定の石材に固執する状況が理解される。また、置き砥石は、成形剥離した後に使用され、使用の進展に伴い平滑になった砥面を更新する剥離も行われている。これに伴う砂岩製の調整剥片が多数出土しているが、その法量は薄形砥石と共通する。調整剥片と薄形砥石に用いられる砂岩は、粒子が細かい点においても共通しており、平砥石の調整剥片が薄形砥石に転用された可能性を指摘できる。

このように、蛇紋岩製磨製石斧の製作に関連する資料には、原石～完成品に至る一連の過程を示す資料のほか、工具である敲石・砥石が伴う。いずれも、石材の特性が理解されたうえで選択的に利用されており、特定の石材と特定の形態との密接な関係を理解できる。製作過程の資料と工具を一体的に捉え、より具体性をもった製作過程を復元できる点において、本遺跡の重要性を指摘できよう。

## 3 滑石製装身具の製作

### A 石製装身具の素材「滑石」

#### (1) 滑石利用の背景

本遺跡における縄文時代早期末葉～前期中葉の石製装身具類(瑛状耳飾・玉およびその素材)の石材は、106点中、100点(94%)が滑石と判断された。これらには、半透明で鉛色をなすものが特徴的に認められ、不透明で黒色・緑色のものがわずかに認められた(図版27)。肉眼観察による滑石の色調・質感の構成は、極楽寺遺跡出土資料とよく共通する。この滑石の産地については、今のところ明らかでない。しかし、磨製石斧の製作に関連する資料や不定形石器の石材のように、遺跡周辺の海岸や河川で採取できるものとは考えられない。すなわち、軟質であるがために、海岸や河川の下流域までたどり着くことは考えにくい。実際、河川で滑石を採取できるのは上流域に限られる。

ここで遺跡から出土した滑石の原石の状況をみると、板状をなした扁平な角礫であることがわかる(305・306)。滑石の原産地のひとつ姫川支流の牛巻沢(第6図)の源流部では、拳大の原石を採取できるものの、すでに円磨が進行している。すなわち、本遺跡から出土した角礫の原石は、河川では採集するこ

とは困難と考えられる。また、出土資料の滑石原石の表面には剥離面が確認されるものの、その切りあい関係は明瞭でなく、表面がやや擦れた感がある。このような状況を総合的に判断すれば、原石は路頭から採取された可能性が高い。また、滑石は蛇紋岩帯に帯状に産出するとされるが、遺跡から半径5kmにはそれが存在しない。すなわち、装身具の素材である滑石は、磨製石斧等の素材とは異なり、ごく近隣では採取できないものと考えられる。

近隣で採取できないであろう滑石をあえて利用する背景には、軟質であるため加工が容易なことが想定される。原石の形状を大きく修正するため、その物性が注目され、特化して利用されたものと考えられる。このことはヒスイの加工が開始される以前の玉作の一側面を象徴する事象と評価できよう。

## (2) 「石灰岩説」の問題

本遺跡と時期的に重複する石川県三引遺跡出土の珉状耳飾の石材は、藤 則雄氏によって「無破壊・無変質にて岩石学的・鉱物学的鑑定」が行われている〔藤2005〕。その結果、経験的・肉眼的に滑石と考えた石材のほとんどが不純物を含む石灰岩と判定され、滑石と判断されたのは63点中2点(3%)に留まったとされている。そして、不純物を含む石灰岩の産地を姫川流域に求めている。この見解をもとに、姫川流域を中心とした石灰岩の供給経路・範囲を想定している〔小嶋2005〕。

三引遺跡において石灰岩とされた石材は、これまで考古学において「滑石」とされてきた石材であることを実見の上で確認した。これまで「滑石」と同定された多くの事例が経験則によっており、藤氏の説は傾聴すべき見解といえる。しかし、石灰岩( $\text{CaCO}_3$ )はカルシウムを主成分とする岩石であり、国内の酸性土壤中において風化が進行しない状態で残存することに疑問が残る(宮島宏氏のご教示による)。実際、発掘調査において盛土中に多数含まれた石灰岩の風化の進行は著しかった。

このような問題を受けて、本遺跡において肉眼観察から滑石とみられる縄文時代の装身具類19点(第10～11図)について半同定分析を行い滑石であるか否かを判断した。その結果、これまで経験則によって滑石と判断してきた石材のうち17点(89%)がシリカ(Si)とマグネシウム(Mg)が主要構成元素であることから「滑石」と判断された(第V章3B3)。なお、この分析試料には飴色・黒色・緑色など様々な色調のものが含まれているが、いずれも元素の構成は近似した。また、滑石と同定されなかった資料についても、緑泥石岩2点であり石灰岩ではない。

したがって、石灰岩の原産地とされた姫川流域の本遺跡においては、石灰岩が用いられた事実は認められない。三引遺跡の報告においては、姫川流域の石材を見直す必要性が強調されたが、三引遺跡出土資料についても本報告と同様の分析をもって比較する必要がある。石灰岩説は、従前の枠組みを大きく見直す重大な提言であり、より慎重に検討しなくてはならない。

## B 滑石製装身具の形態構成

本遺跡から出土した滑石製装身具は未製品が多く、目的物の形態が必ずしも明らかでない。したがって、今回調査で明らかとなった装身具の形態構成が実態を必ずしも反映していない可能性もある。現段階で把握しうる装身具には、珉状耳飾と勾玉・管玉・垂玉・丸玉・礫玉がある。勾玉・礫玉を除けば、北陸地方における早期末葉～前期初頭の代表的事例である富山県極楽寺遺跡・石川県三引遺跡と共通する形態構成といえる。また、飴色と黒色の滑石が用いられていることも両遺跡と共通し、特に極楽寺遺跡出土資料とは、使用される滑石の質・色調の構成が酷似する。ここでは各遺構の形態的特徴を概観し、両遺跡および

群馬県新堀東源ヶ原遺跡〔大賀・長谷川1997〕と比較して、共通点と相違点を整理したい(第22図)。

**SK61a** 早期末葉～前期初頭に位置付けられる竪穴住居からは、仕上砥がなされた「製品」と評価できる資料が特徴的に出土した。小形の玦状耳飾(312)・管玉(345)・玦状耳飾の素材とみられる円盤状石製品(340)が認められ、円環状をなす玦状耳飾の形態・大きさは極楽寺例に、円筒状をなす管玉は三引例によく共通する。また、玦状耳飾には飴色、円筒状の管玉には黒色の滑石が用いられる点は、三引例と共通しており、色調と形態の有意な関係を想定させる。円盤状の石製品は、表面がやや膨らみをもち、裏面がより平坦である。このような断面形状は、極楽寺・三引にも認められ、穿孔途中のものもある。玦状耳飾の中形品と直径・厚さがほぼ一致することから、その未製品である可能性が高い。

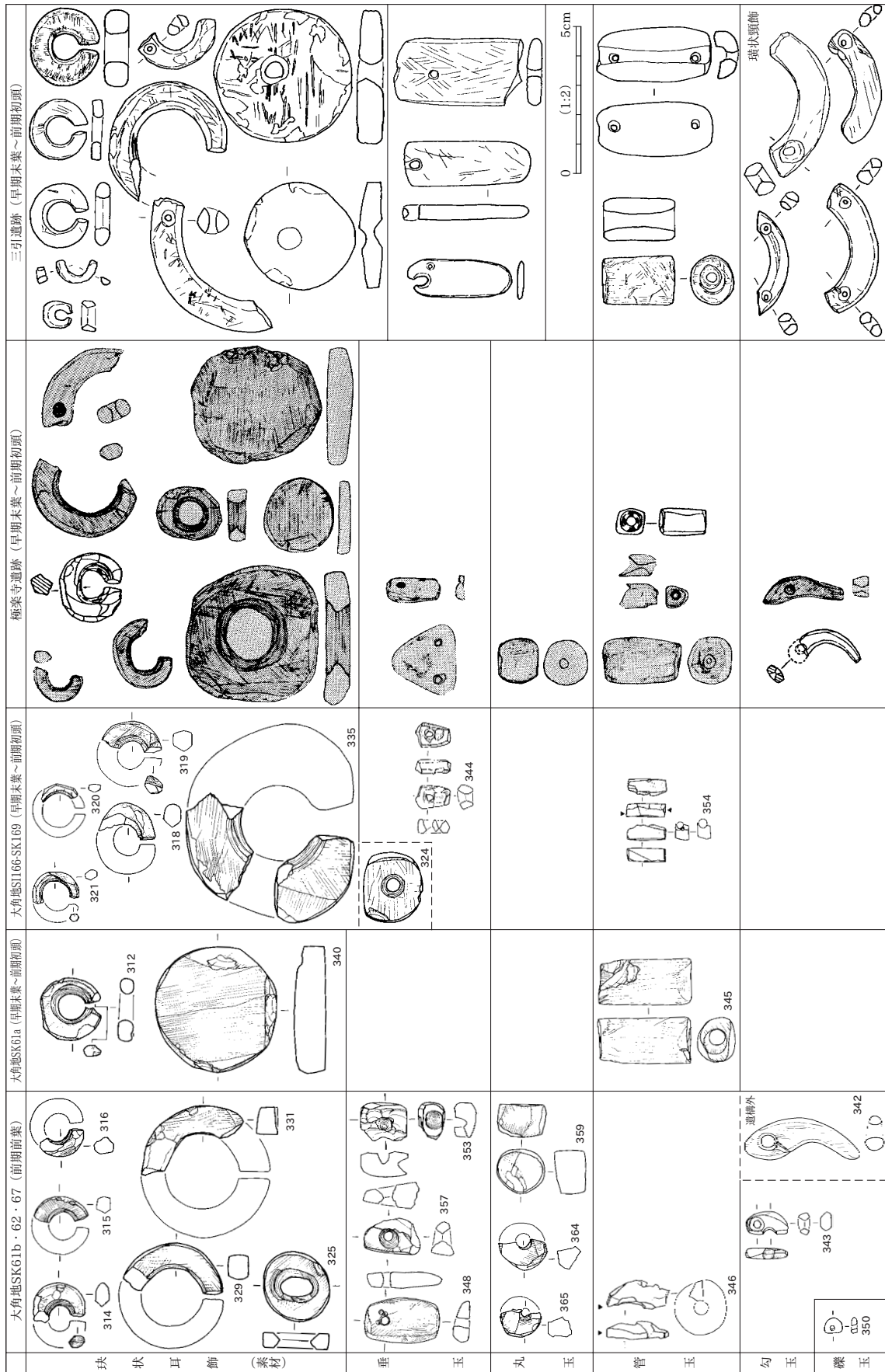
**SK61b・SK62・SK67** SK61aを切るように築かれた前期前葉の土坑からは、玦状耳飾・垂玉・丸玉・管玉・勾玉・礫玉が出土した。バラエティーに富む形態構成といえる。また、飴色の滑石が多数使用されることも特徴的である。玦状耳飾は小形と中形のものがあるが、いずれも円環状をなし、大きさの上でも極楽寺・三引例とよく共通する。垂玉は、形態的バラエティーに富み、三引や新堀東源ヶ原に特徴的に認められる大形で扁平な垂玉は認められない。丸玉は、極楽寺では少数認められるが、三引では出土していない。一方、新堀東源ヶ原では丸玉が多数出土しており、遺跡間で数量の多寡を認めることができる。勾玉は、丸玉あるいは玦状耳飾の破損品が転用された343のほか、本遺構と近接する地点から出土した342は牙玉と形態的連続性をもって捉えることができるものである。これは、勾玉の起源を考える上で重要な資料といえる。また、玦状耳飾の破損品に穿孔して転用する点において三引の「璜状頸飾」〔谷藤2004〕と共通性を見出すことができる。礫玉は、長径6mmほどと極めて小さな礫に、直径1mmの穿孔を施したものである。後期～晩期に類例があるが、該期の資料は知られていない。本遺跡においては後期～晩期の土器は出土しておらず、また前期後葉の竪穴住居(SI14)からも混在する前期前葉以前の資料とともに同様の形態が出土している。出土状況からは偶発的な混入とは考えにくく、該期の資料と考えたい。

**SI166 - SK169** 早期末葉～前期初頭に位置付けられる土坑からは、玦状耳飾・垂玉・管玉が認められる。玦状耳飾は、小形と大形が認められる。小形のものには、細身で指輪状をなすものが特徴的に含まれるが、極楽寺・三引に類例を見出すことができる。大形は、三角形をなす特徴的なものは、極楽寺に類例を見出すことができ、該期の特徴的な形態といえるかもしれない。324は、小形の玦状耳飾の未製品とみられるが、垂玉の可能性もある。2孔が穿たれた344は薄手で扁平なものではなく、他の垂玉とは異なる。管玉354は、角柱状の素材の長軸方向に穿孔したものであり、管見の限り該期に類例は認められない。しかし、極楽寺の管玉には断面が隅丸方形をなすものがあり、共通性を見出すことができるかもしれない。354は未製品とみられることから、最終的には角を磨き落とす予定であったのかもしれない。

以上のように、同時期の極楽寺・三引・新堀東源ヶ原と比較すると相違点が認められるものの、形態構成の大枠では共通する。玦状耳飾は、穿孔部が大きいいわゆる円環状をなしており、該期の形態的特徴を表している。玉類は、遺跡間で数量の多寡や形態に相違が認められるものの、勾玉・管玉・丸玉が特徴的に伴う。本遺跡から出土した滑石製装身具は、これまでに知られている早期末葉～前期初頭の事例とよく共通するが、それらが遺構からまとまりをもって出土しており、縄文時代の玉作研究において重要な指標になるものといえる。

#### C 玦状耳飾の製作過程

本遺跡からは、玦状耳飾の製作過程を示す資料が出土している(図版48)。素材となる滑石は、遺跡に



第22図 北陸地方における早期末葉~前期前葉の石製装身具の形態構成

搬入されている原石の形状(305・306)から、露頭の「ズリ」が用いられた可能性が高い。この原石から、節理面に沿うように剥離された板状の剥片が剥離されたものと考えられるが、素材となりうる大きさを確保した剥片は出土していない。いずれにしても、扁平な素材が用いられたとみられる。

扁平な素材は、研磨されて成形される。この段階で、表面により膨らみをもたせ、裏面をより平坦に仕上げている(311)。このような断面形態は、極楽寺遺跡・三引遺跡にも認められる。これを平面円形に仕上げ、円盤状の形状が作出され(340)、瑛状耳飾の形状・大きさの概略が決定される。

円盤状の素材に対し、穿孔がなされる。穿孔部分は、楕円形をなすもの(325・326)、穿孔が中央部分からややずれているもの(327・339)が特徴的であることから、複数の孔を穿ち、それを連結させたものとみられる。この穿孔は表裏から施されるが、擦痕の観察から一般的な回転穿孔とは異なるものと理解される。短い単位の擦痕が連続的に形成されており、鋭利な剥片などによって繰り返し削りつつたかのようなものである。「反復様削除痕」[藤田1983]または「反復回転抉り穿孔」[藤田1998]と呼ばれている技術によって穿孔されたものと考えられる。

穿孔によって作出された円環状の素材の一端にスリットが刻まれる。スリット部分の擦痕は、弧状をなすものがある(328)。このような擦痕のありようからは、「糸切り技法」の存在を窺うことができる。しかし、一見、弧状に見えるものであっても「ハ」の字をなすようなものもあり(314)、スリット形成段階とみられる資料(333)には鋭い刃部が複数回にわたって接触した直線的な擦痕が認められる。この状況から判断すれば、本遺跡においては一部の資料をもって「糸切り技法」を普遍化させることは難しい。

これらの過程を経て、瑛状耳飾が形成される。粗い擦痕が認められる資料が多い中において、一部の資料の表面は滑らかで深い擦痕が認められない(312・314・316・318)。このような表面は、出土している砂岩製の砥石からでは作出することができず、動物の皮革や木砥石など[藤田1983]で仕上げ砥がなされた可能性がある。また、仕上げ砥の段階に達した資料の穿孔痕は、回転方向と直交する擦痕によって打ち消されているものがある(318)。反復回転抉り穿孔による粗い擦痕を磨き消したのと考えられる。ただし、その擦痕は仕上げ砥のようにきめ細かなものではない。

## 4 縄文時代前期前葉における大角地遺跡の性格

本遺跡においては、豊かな石材環境を背景に、蛇紋岩製磨製石斧と滑石製装身具が多数製作されたものと理解された。しかしながら、製品の比率は極めて低く、大半が製作過程の資料、もしくはその過程で生じた破損品であった。また、未製品の数量からは、自家消費的な製作の範囲の中に捉えることはできず、それらの製作に特化した遺跡であったものと考えられる。このことから判断すれば、製品がすでに遺跡外に搬出された可能性がより高い。すなわち、これらは遺跡外へ搬出することを前提とした大量生産であった可能性を指摘できる。

この大量生産は、伴出土器から前期前葉にまで遡ることが明らかであり、一部は早期末葉～前期初頭にまで遡る可能性がある。磨製石斧や石製装身具の大量生産・流通の起源に関わる資料ということができ、縄文時代における物資の動態を考える上で重要な情報を有するといえる。生産遺跡からどのような状態で搬出されているのか、そして消費遺跡へどのような状態で搬入されているのか、資料を蓄積することが今後の課題といえる。



## 要 約

- 1 大角地遺跡は、新潟県糸魚川市大字田海字田海に所在する。黒姫山地から広がる舌状台地上、標高4.5～5.5mに立地する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成17年度に実施した。調査面積は1,152m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、遺跡周辺の旧地形は起伏に富むことが明らかとなり、台地と低地から構成されることが明らかとなった。遺跡の中心部は、遺構が集中する台地上に認められたが、後世の攪乱が著しく残存状況は良好でなかった。
- 4 後期旧石器時代、縄文時代草創期・早期中葉・早期末葉～前期初頭・前期前葉・前期中葉・前期後葉、古墳時代前期・後期、平安時代、室町時代の遺物が出土したが、今回の調査範囲における遺跡の最盛期は縄文時代早期末葉～前期前葉に認められた。
- 5 後期旧石器時代のナイフ形石器文化前半に位置付けられるナイフ形石器2点が出土した。これは、糸魚川地域で最も古い遺物となる。
- 6 縄文時代早期末葉～前期前葉の遺構は、竪穴住居と土坑が検出された。調査範囲が狭いこと、攪乱が著しいことから残存状況は良好でなかったが、覆土中からは蛇紋岩製磨製石斧・滑石製装身具の製作に関連する資料が多数出土した。
- 7 出土した縄文土器は、縄文時代早期中葉（田戸上層式併行期）から前期後葉（諸磯a式併行期）のものである。胎土に繊維を含む前期前半期の羽状縄文系土器が主体を占め、極楽寺式～関山式併行期の資料が多い。新潟県域では稀有な存在であり、今後の編年研究において重要な資料となる。
- 8 縄文時代早期末葉～前期前葉の蛇紋岩製磨製石斧の製作に関する資料が多数出土した。原石から完成品に至る一連の資料のほかに、工具（敲石・砥石）も伴う。蛇紋岩の原産地・糸魚川地域における磨製石斧の大量生産・流通の起源に関わる資料とみられる。また、蛇紋岩製磨製石斧の製作に使用されたとみられるヒスイ製の敲石が出土した。これはヒスイ利用の初源を示す資料となり注目される。
- 9 縄文時代早期末葉～前期前葉の滑石製装身具の製作に関する資料が多数出土した。ここには珧状耳飾・勾玉・管玉・垂玉・丸玉など、該期の形態構成を示す資料が認められる。その多くは仕上げ砥の段階に達しない粗磨き段階の資料であり、製作途中に破損した資料が多くを占める。なお、勾玉は最も古い段階に位置付けられる資料のひとつといえ、その系譜を考える上で重要な資料といえる。
- 10 蛇紋岩製磨製石斧や滑石製装身具の未製品が多数出土したことは、それらの製作に特化した遺跡の性格を反映している。一方、製品はほとんど出土しておらず、すでに遺跡外に搬出されたものとみられる。蛇紋岩帯という豊かな石材環境を背景に、遺跡外へ搬出することを前提とした大量生産が行われた可能性を指摘できる。
- 11 古墳時代の遺構・遺物は少ないが、白玉の製作に関する資料が認められた。その石材は、従来滑石と呼ばれているものであるが、半定量分析による元素の構成から緑泥石岩であることがわかった。滑石と緑泥石岩は、岩石学上、まったく異なる分類であり、今後の分析結果の蓄積が必要である。
- 12 平安時代の遺構は、台地上から大型の掘立柱建物1棟が検出された。低地から9世紀代の遺物が出土しており、これに伴う時期の遺構とみられる。緑釉陶器や荷札状木簡が出土しており、近隣に官衙など有力な遺跡が近隣に存在する可能性がある。

13 2区の川底砂礫層からまとまって出土した9世紀代の須恵器には、複数個体が溶着したものや焼き歪んだものが特徴的に含まれた。南側200mに位置する西角地古窯跡（8世紀末～9世紀初頭）との関連が想定されるが、年代が一致しない。未知の窯体の存在を含めて窯跡群が構成されていたものと想定される。

## 引用文献

- 相沢 央 2004 「第三節 頸城郡の人々と暮らし」『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』上越市
- 相羽重徳 2002 「第V章遺物 1 土器・陶磁器」『北陸新幹線関係発掘調査報告書 I 寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝 1966 『青海—その生活と発展—』青海町役場
- 青木重孝 1973 「調査に至るまで」『大角地遺跡1973年度発掘調査概要』青海町教育委員会
- 青木重孝監修 1976 『糸魚川市史』1 糸魚川市役所
- 浅井芳伸 1989 「巻町新谷遺跡における磨製石斧製作工程の復原」『巻町史研究』V 巻町
- 糸魚川市史編さん委員会監修 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市役所
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 貿易陶磁研究会
- 遠藤 佐 2005 「新潟県における沈線文系土器群の様相 一田戸上層式以降を中心に—」『第18回縄文セミナー 早期中葉の再検討』縄文セミナーの会
- 大賀 健・長谷川一郎 1997 「滑石製飾玉について」『新堀東源ヶ原遺跡』日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
- 大竹憲昭 2000 『貫ノ木遺跡・西岡A遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48 財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
- 岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
- 岡村道雄 1979 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要』5 東北歴史資料館
- 小熊博史 1994 「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」『第7回縄文セミナー 早期終末・前期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 小熊博史 1999 「第2節 縄文土器 第2項 早期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 小熊博史 2000 「新潟県における絡条体圧痕文土器群の様相」『第13回縄文セミナー 早期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 織笠 昭 1984 「石器形態の復原」『東京考古』2 東京考古談話会
- 織笠 昭 1992 「弥三郎第2遺跡 縄文時代草創期」『土気南遺跡群II』財団法人千葉市文化財調査協会・千葉市土気南土地区画整理組合
- 春日真実 1998a 「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成9年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1998b 「西頸城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金山哲哉 2005 「三引遺跡10・11区貝塚および同下位包含層出土土器の検討」『七尾市三引遺跡IV』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 金子拓男 1975 「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27-1 信濃史学会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』5 上越市
- 木島 勉<sup>ほか</sup> 1986 『後生山遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告13 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1985 『苦竹原A遺跡』糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書16 糸魚川市教育委員会
- 岸本雅敏・山本正敏 1986 『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 (4) 南太閤山I遺跡』富山県教育委員会

- 小池義人・加藤 学・石田守之 2000 『裏山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小嶋俊彰 1965 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 小嶋芳孝・金山哲哉<sup>ほか</sup> 2004 『田鶴浜町三引遺跡Ⅲ（下層編）』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 小嶋芳孝 2005 「石製装身具について」『七尾市三引遺跡Ⅳ』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1984 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（1）」『長岡市立科学博物館研究報告』第19号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1985 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（2）」『長岡市立科学博物館研究報告』第20号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1986 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（3）」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏郎・石原正敏・小熊博史 1987 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（4）」『長岡市立科学博物館研究報告』第22号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏郎・小熊博史 1988 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（5）」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号 長岡市立科学博物館
- 駒形敏郎・小熊博史 1989 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究（6）」『長岡市立科学博物館研究報告』第24号 長岡市立科学博物館
- 五味一郎 1983 「石匙」『縄文文化の研究7 道具と技術・補』雄山閣
- 斉藤 準 2006 「新潟県における縄文前期前葉の土器群について」『第19回縄文セミナー 前期前葉の再検討』縄文セミナーの会
- 齋藤秀平 1937 『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯』新潟県
- 坂上有紀 2004 『八斗葎原遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第129集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤俊幸・田海義正<sup>ほか</sup> 1992 『新潟県歴史の道調査報告書 第一集 加賀街道 松本街道』新潟県教育委員会
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3 日本考古学会
- 佐藤雅一・石坂圭介<sup>ほか</sup> 1994 『干溝遺跡』中里村教育委員会
- 梶山林継 1972 「神坂峠」『神道考古学講座5 祭祀遺跡特説』雄山閣
- 鈴木 暁 1999 「台形様石器群」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 鈴木俊成 1998 「新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について—縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に—」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成<sup>ほか</sup> 1988 『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成・高橋昌也 1989 『鰐口下遺跡・美山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 新潟県教育委員会
- 鈴木道之助 1974 「縄文時代晩期における石鏃小考」『古代文化』26-7 古代学協会
- 鈴木道之助 1983 「石鏃」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器入門事典 縄文』柏書房
- 関 雅之 1967 「新潟県西頸城郡青海町・遺跡調査予報—特に寺地及び田海遺跡の出土遺物について—」『上代文化』37 國學院大學考古学会
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会
- 関 雅之・藤田富士夫 2004 「北陸Ⅱ 新潟県・富山県」『日本玉作大観』吉川弘文館
- 高橋 保・小池義人<sup>ほか</sup> 1986 『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1988 『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 高橋照彦 1995 「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 高橋保雄・鈴木俊成 1990 「不定形石器」『清水上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 新潟県教育委員会
- 高柳由紀子<sup>ほか</sup> 2006 『下老子笹川遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第31集 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

- 田中英司 1979 「縄文時代の剥片石器製作」『風早遺跡』埼玉県庄和町風早遺跡調査会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 谷 和隆 2000 『裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48 財団法人長野県文化振興事業団、長野県埋蔵文化財センター
- 谷藤保彦 2004 「中国の璜と列島の装身具」『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文科学研究所
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄<sup>ほか</sup> 1988 『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』青海町教育委員会
- 寺崎裕助<sup>ほか</sup> 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ 原山遺跡 大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助 1997 「新潟県における前期中葉の土器―根小屋式を中心として―」『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1999 「新潟県における縄文時代前期の土器―その標識資料と編年―」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助・石原正敏 1999 「第2節 縄文土器 第3項 前期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴<sup>ほか</sup> 1974 『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴<sup>ほか</sup> 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一<sup>ほか</sup> 1979 『大角地遺跡―飾玉とヒスイの工房址―』青海町教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 『史跡 寺地遺跡』青海町教育委員会
- 土肥富士夫<sup>ほか</sup> 1983 『吉田野寺遺跡』七尾鹿島広域圏事務組合
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭―出土銭の調査と分類―』兵庫県埋蔵銭調査会
- 中野 純・諫山えりか 1999 「石棒」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 中谷治宇次郎 1925 「石匙に対する二三の考察」『人類学雑誌』40-4 東京人類学会
- 西頸城郡教育会郡誌出版部 1930 『西頸城郡誌』
- 橋本 正<sup>ほか</sup> 1974 『立野ヶ原遺跡群第二次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 樋口清之 1948 「日本の硬玉問題」『上代文化』18 國學院大學考古学会
- 平野団三・渡辺秀雄 1968 「西頸城郡」『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』平凡社
- 平吹 靖 2004 「柏崎市大宮遺跡出土の日本最古の縄文時代前期ヒスイ加工品」『玉文化』1 日本玉文化研究会
- 藤 則雄 2005 「出土石器の石材について」『七尾市三引遺跡Ⅳ』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇Ⅳ』愛知県瀬戸市
- 藤田健一・渡辺文男<sup>ほか</sup> 2004 『上野林J遺跡・上野林E遺跡』安田町文化財調査報告書第14集 安田町教育委員会
- 藤田富士夫 1971 「耳飾の起源について」『信濃』23-4 信濃史学会
- 藤田富士夫 1983 「块状耳飾」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 藤田富士夫 1985 「日本海沿岸の玉作遺跡」『古代日本海文化の源流と発達』大和書房
- 藤田富士夫 1998 「縄文時代の装身具への穴あけ方法」『発掘速報展`97 古代の装飾と文字』富山県教育委員会
- 藤田富士夫 2004 「块状耳飾の遺跡と攻玉」『日本玉作大観』吉川弘文館
- 藤田亮策 1954 「越後姫川の翡翠に就いて」『越佐研究』7 新潟県人文研究会
- 藤田亮策 1957 「硬玉問題の再検討」『古代』25・26 早稲田大学考古学会
- 藤田亮策 1960 「硬玉の勾玉」『日本古代史論叢』西田先生頌寿記念論集
- 藤田亮策・清水潤三 1964 『長者ヶ原』糸魚川市教育委員会
- 藤森栄一 1963 「縄文中期に於ける石匙の機能的変化について」『考古学雑誌』49-3 日本考古学会
- 前山精明 1994 「新谷遺跡」『巻町史』資料編1 巻町
- 水澤幸一 2003 『二軒茶屋遺跡』中条町埋蔵文化財調査報告第27集 中条町教育委員会
- 水澤幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』24 貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会

- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁学会
- 安 英樹<sup>ほか</sup> 1997 『能登島町通ジゾハナ遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水穂寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 糸魚川市教育委員会
- 山本 肇<sup>ほか</sup> 1988 『三屋原遺跡 三屋原B遺跡 塚ノ越遺跡 四割・杉沢遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第52集  
新潟県教育委員会
- 山本正敏 1986 「北陸の縄文時代前期前葉における磨製石斧の製作」『大境』10 富山考古学会
- 山本正敏 2005 「富山県内の縄文早期・前期の磨製石斧」『大境』25 富山考古学会
- 吉岡康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 四柳嘉章 1972 『甲・小寺遺跡』穴水町文化財保護専門委員会
- 渡辺 誠 2004 「クマ類の牙玉」『日本玉作大観』吉川弘文館

遺構観察表

遺構観察表 竪穴住居 (SI)

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面高	覆土	主軸	床面積 (㎡)	柱穴	炉	時期	出土遺物	切り合い関係 (新>旧)
2	3	3	31	27B2・3・7・8・11・12・13	隅丸方形	台形	6.12 (検出範囲)	3.42 (検出範囲)	0.18	5.68	水平	N87° E	13.0 (検出範囲)	壁柱穴?		古墳時代以前		SK27>
14	3	5	28 29 32	27A8・9・10・13・14・15	円形	台形	3.60 (推定)	2.84	0.32	5.24	水平		6.6 (検出範囲)	7以上		縄文前期後葉	6・18・126・127・160・168・205・258・317・322・351・352・362・386・389	SD15>SD1>
16	3	3 33 34	32 33 34	26B12・13・16・17・18・21・22・23	隅丸方形	台形	6.40 (検出範囲)	3.10	0.25	5.44	水平	N89° E	16.3 (検出範囲)			古墳時代以前	233・259・349・374・383	SI18<・SD9・13> SD8・10>SK29・40・34・P30>
18	3	4	32	26B21・27A5・27B1・2・6・7	隅丸方形	台形	3.15 (検出範囲)	2.40	0.18	5.45	水平	N1° W	5.6 (検出範囲)			古墳時代以前	375	SD4・9>SD7> SK11>SK12> SK21>SI16>
166	7 8	7	29 38 39	33A25・33B21・22・34A5・34B1・2	隅丸方形?	弧状	3.75	2.90	0.18	4.65	水平		8.8	4 (P170・P168・P176・SK169)	地床炉	縄文時代早期未葉~前期初頭	98・135	SK169
工事立会1	8	8	39		方形?	台形			0.36	5.60	水平	N23° E (推定)	56.3 (推定)	P1を確認 (四隅に存在か)		縄文時代前期中葉	56・57・194・195・323	

遺構観察表 掘立柱建物 (SB1)

図版番号	平面図: 3 断面図: 3・4 写真: 29・32~35	グリッド	26B・27B	桁行 (m)	8.70	梁間 (m)	5.02	床面積 (㎡)	—	時期	古代	構造	—	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	距離 (m)	方位	N87° W				
34	隅丸方形	台形状	0.94	0.80	5.51	5.32	0.19	34-40	1.85		切り合い関係				
40	隅丸方形	箱状	0.82	0.76	5.46	5.33	0.13	40-29	1.72		SI2<・SI18<SI16<・SD8・10>・SD4>				
29	隅丸方形	箱状	1.00	0.72	5.42	5.30	0.12	29-21	2.20		出土遺物				
21	隅丸方形	箱状	0.90	0.48	5.46	5.23	0.23	21-20	2.92		出土遺物				
20	隅丸方形	箱状	0.88	0.70	5.64	5.30	0.34	21-27	5.02		299・416 (SK20) 21 (SK34) 381 (SK27)				
27	円形	箱状	0.60	—	5.79	5.19	0.60								

遺構観察表 土坑 (SK)

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面高 (m)	時期	出土遺物	切り合い関係 (新>旧)
17	3	4	33	26A13・14	円形	弧状	1.33	1.02	0.19	5.21	縄文		—
22	3	3	34	26B23・27B3	方形	弧状	2.48	—	0.22	5.56	縄文		SD13>
23	3	4	34	26B11	円形	箱状	0.64	0.58	0.17	5.25	縄文	347	SD6>
150	3	4	35	26A18	円形	階段状	0.90	—	0.21	5.30	縄文		—
169 (SI166内)	7	7	38	33B21・22・34B1・2	不整形	半円状	0.92	0.78	0.21	4.41	縄文時代早期未葉~前期初頭	99・100・213・216・286・318~321・324・335・344・354・366・371	SI166=
工事立会1	8	8	—	—	円形	弧状	—	0.63	0.12	5.28	縄文時代前期前葉		工事立会 SD2<
工事立会2	8	8	39	—	楕円形	階段状	—	3.30	0.40	5.62	縄文時代前期前葉		
工事立会3	8	8	39	—	不整形	台形状	—	0.54	0.28	5.42	縄文時代前期前葉	55	

遺構観察表 ピット (P)

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面高 (m)	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係 (新>旧)
25	3	5	33	27A3	円形	弧状	0.52	0.52	0.15	5.39	水平	縄文時代		
64	6	6	36	30B2	円形	台形状	0.30	0.30	0.19	5.46	水平	古代	384・413	SK62<
163	7	—	—	33A14・19	円形	台形状	0.44	0.38	0.17	4.67	水平	古代	414	

遺構観察表 溝 (SD)

報告番号	平面図	断面図	写真図版	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	覆土	方位	時期	出土遺物	切り合い関係 (新>旧)
1	3	5	34	27A13	2.80	1.02	0.25	直線	弧状	斜め	N1° E	古墳時代以降	376~380・415	SI14<
5	3	4	33	26A15・20	2.38	0.72	0.12	直線	台形状	単層	N62° E	近世		
6	3	4	35	26B11・16	3.46	0.62	0.15	直線	台形状	単層	N63° E	近世		SK23<・SK11>
8	3	4	35	26B12・17・22	4.66	0.54	0.16	直線	台形状	単層	N60° E	近世		SI16<SK40<・SD9>
10	3	4	35	26B13・18	3.56	0.64	0.10	直線	台形状	単層	N62° E	近世		SI16<SK34・P30<







石器・石製品観察表(1)

報告 番号	種別	分類	石材	岩石名		出土位置					属性 (単位: mm/g, ( ) は破損品の残存長)				備考			
				分析№	分析結果	調査区	遺構番号	層位	グリッド	取上№	長さ	幅	厚さ	重さ				
1	ナイフ形石器		玉髄			3			IIb	23B	21			21	31	9	5.25	
2	ナイフ形石器		玉髄			5			I					34	18	10	5.86	
3	打製石斧		硬砂岩			3			IIb	23B	17			54	36	22	53.84	局部磨製基部
125	石鏃		珪質頁岩	35	頁岩	4			I	26B	17			22	17	4	1.12	
126	石鏃		珪質頁岩			4	SI	14	2	27A	14	d		24	14	4	0.90	
127	石鏃		黒曜石			4	SI	14	1	27A	14	a		(9)	(8)	(2)	0.09	
128	石鏃		珪質頁岩			5	SK	61b	1	30B	6			20	18	5	1.04	
129	石鏃		珪質頁岩			5	SK	61a	4b	29B	21	c		30	18	6	2.22	
130	石鏃		チャート			5	SK	61b	4	30B	1	b		26	18	3	1.26	
131	石鏃		珪質頁岩			5	SK	62	4	30B	2	b		29	15	4	0.74	
132	石鏃		珪質頁岩			5	SK	62	4	30B	8	a		18	15	4	0.87	
133	石鏃		ガラス質 安山岩			5	SK	62	1b	30B	2	a		22	15	5	1.30	
134	石鏃		珪質頁岩			6			II	34A	4			20	16	4	1.00	
135	石鏃		珪質頁岩			6	SI	166	2	33B	21	d		(22)	14	4	1.20	
136	石鏃		珪質頁岩			5	SK	62	4	30B	2	b		(26)	(8)	5	1.02	
137	石鏃		チャート			5	SK	61b	1b	30B	1			26	16	8	3.05	
138	石匙		頁岩			5	SK	62	1b	30B	2			128	110	27	351.67	
139	石匙		珪質頁岩			3			IIb	23B	17			25	42	6	6.88	
140	石匙		チャート			2	SX	101	3	20B	6			29	38	6	5.28	
141	不定形石器		頁岩			5	SK	61b	1b	30B	1	a	S68	98	76	16	153.35	
142	不定形石器		頁岩			5	SK	61b	1	29B	21	c	S2	123	105	33	307.95	
143	楔形石器		玉髄			5	SK	67	4	29B	22	c		24	19	10	4.43	
144	不定形石器		黒曜石			5	SK	62	1	29B	23	c		(20)	20	6	1.82	
145	打製石斧		頁岩			1			IIc	16A	9			133	54	19	169.43	
146	磨製石斧		蛇紋岩			5	SK	61b	1b	30B	1	b	S91	(61)	33	14	35.23	
147	磨製石斧		蛇紋岩			3	SD	51	IIb	23B	1			(54)	38	10	30.96	
148	磨製石斧		蛇紋岩			5			II	30B	3			(46)	37	11	32.14	
149	磨製石斧		蛇紋岩			5	SK	61a	4b	30A	5	b	S54	92	43	13	54.98	
150	磨製石斧		蛇紋岩			5			I	30B	8			32	19	6	5.21	
151	磨製石斧		蛇紋岩			4	P	141	3	27A	15	b		25	14	6	2.54	
152	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5			I	30B	6			(84)	(50)	24	120.91	風化による剥落顕著
153	磨製石斧		蛇紋岩			5	SK	61b	1	29B	21	d	S30	(71)	(48)	24	121.96	
154	磨製石斧		安山岩		ヒン岩	3			IIb	23B	13			120	48	33	264.22	
155	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			IIb	23B	17			95	56	31	253.36	
156	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			IIb	23B	21			123	81	34	396.75	
157	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			IIb	23B	17			97	77	24	171.44	
158	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			IIb	23A	20			99	79	38	404.57	
159	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			II	23B	6			98	48	20	112.76	
160	原石		蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	9	b	S8	183	93	46	1278.12	
161	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	10	c	S25	78	75	37	311.50	
162	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	10	c	S19	118	56	55	410.52	
163	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	9	b	S7	114	83	45	572.27	
164	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	10	c	S18	166	124	53	1454.99	
165	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	2	27A	14	b	S45	130	82	52	687.24	
166	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI P	14 141	2	27A	10	c	S29	149	96	33	310.33	
167	磨製石斧	未製品	安山岩		デイサイト	4	SI P	14 141	2	27A	10	c	S30	225.5	128	56	1556.40	
168	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	9	d	S36	151	55	32	696.45	
169	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4			I	27B	12			49	28	11	19.89	
170	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4			II	27A	14			56	20	10	14.97	
171	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			4			II	27A	10			43	24	8	11.85	
172	原石		蛇紋岩			5	SK	61a	4b	30A	5	b	S59	126	50	27	249.20	
173	原石		蛇紋岩			5	SK	61a	4b	30A	5	b	S58	119	52	36	324.17	
174	原石		蛇紋岩			5	SK	61b	3b	30B	2	a		146	127	41	1254.95	
175	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	30B	1	a	S19	107	66	34	294.40	
176	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	29B	22	c	S32	83	53	21	145.17	
177	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	30B	1	c	S51	73	55	15	107.04	
178	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	29B	21	d	S40	75	71	32	248.74	
179	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	30B	1	a	S13	101	65	28	245.19	
180	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	1	29B	21	d	S31	83	48	18	110.29	
181	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61a	1	30B	1	a	S9	107	54	38	293.94	
182	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	61b	4	30B	1	b	S68	172	68	41	716.26	
183	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	P	65	1	29B	23	c	S1	154	68	25	338.18	
184	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	62	1	30B	2	d	S54	135	108	72	1294.76	
185	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	62	2d	30B	2	c		75	36	15	55.51	
186	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	67	4	30B	2	b	S110	108	92	45	495.02	
187	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	62	2	30B	3	a	S50	74	52	22	119.86	
188	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5	SK	62	1	30B	8	c	S2	68	69	17	108.00	床面
189	原石		蛇紋岩			5			I	30A	4			65	54	20	105.66	
190	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5			II	29B	22			68	54	23	102.94	
191	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5			I	30A	4			109	53	31	218.40	
192	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			3			IIb	23B	12			104	54	15	99.41	
193	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			5			I	30A	4			145	58	37	429.67	
194	磨製石斧	未製品	蛇紋岩				工事立会	SI	1	1	27A	13		124	60	44	465.76	東壁際
195	磨製石斧	未製品	蛇紋岩				工事立会	SI	1	1	27A	13		132	61	33	247.58	西側
196	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	33A	25			120	66	22	169.87	
197	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	34B	7			133	68	27	319.10	
198	磨製石斧	未製品	輝緑岩		ドレライト	6			II	33A	24			140	54	30	321.92	

遺物観察表

石器・石製品観察表(2)

報告 番号	種別	分類	石材	岩石名		出土位置						属性(単位:mm/g. ( )は破損品の残 存長)				備考		
				分析№	分析結果	調査区	遺構番号	層位	グリッド	取上№	長さ	幅	厚さ	重さ				
199	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	33A	13			124	62	34	328.64	
200	磨製石斧	素材	硬砂岩			6			II	34B	3			162	72	38	540.79	
201	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	34B	6			81	51	24	109.40	
202	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	33B	13			83	41	17	65.60	
203	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	34B	2			41	25	8	9.23	
204	磨製石斧	未製品	蛇紋岩			6			II	34B	8			58	33	8	20.97	
205	敲石		蛇紋岩			4	SI	14	3	27A	9	b	S16	82	94	53	523.82	
206	敲石		蛇紋岩	4	ロディン岩	5	SK	61b	1	30B	1	b	S49	96	91	55	600.32	
207	敲石		ヒスイ	34	ヒスイ輝石岩	5	SK	62	4	30B	8	a	S1	80	64	55	409.71	床面
208	敲石		蛇紋岩			6			II	33B	22			75	59	32	207.66	
209	敲石		蛇紋岩			6			II	34B	3			83	75	46	428.69	
210	砥石		凝灰岩			5			I	30B	7			368	277	82	7200.00	
211	砥石		凝灰岩			3			IIb	23A	24			220	159	62	1838.00	
212	砥石		砂岩			5	SK	61a	1	30B	1	a		258	184	109	5350.00	
213	砥石		砂岩			6	SK	169	1	34B	1	b		226	248	111	6700.00	SI166内
214	砥石		砂岩			5	SK	61a	1	30b	1	a	S9	167	151	53	1538.00	
215	砥石		砂岩			6			I	33A	25			310	237	75	8500.00	
216	砥石		砂岩			6	SK	169	1	34B	1	b	S6+S8	389	290	150	22750.00	SI166内
217	筋砥石		砂岩			3			IIb	23B	21			90	68	24	196.00	
218	薄形砥石		砂岩			5			I	30A	5			80	68	23	146.00	
219	薄形砥石		砂岩			3			IIb	23B	17			85	142	15	258.00	
220	薄形砥石		砂岩			4			I	27B	6			63	99	16	165.00	
221	薄形砥石		砂岩			3			IIb	23A	—			87	213	20	559.00	
222	石皿	A	安山岩			5	SK	61a	4b	29A	25	d	S77	230	234	46	3240.00	
223	石皿	A	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S108	242	209	56	3840.00	
224	石皿	B	安山岩			3	—	—	IIb	23B	16			191	168	37	1459.00	
225	石皿	A	安山岩			5	SK	62	4	30B	2	a		181	139	36	1310.00	
226	石皿	A	安山岩			3			IIb	23B	17			110	89	26	386.00	
227	磨石	B	安山岩			4	P	149	—	—	—			(93)	165	41	1039.00	SI14内
228	磨石	A1	安山岩			5	SK	61b	1	30B	1	a	S64	109	99	60	920.00	
229	磨石	A1	安山岩			5	—	—	I	30A	5			108	95	26	405.00	
230	磨石	A1	安山岩			5	—	—	I	30B	3			87	79	31	274.00	
231	磨石	A1	安山岩			5	SK	61b	1	30B	1	a	S11	109	97	50	683.00	
232	磨石	A1	安山岩			5	—	—	II	30B	11			107	91	46	607.00	
233	磨石	C	安山岩			4	SI	16	1	26B	22	c		86	73	41	318.00	
234	磨石	D	安山岩			6	—	—	II	33B	23			100	74	35	370.00	
235	磨石	B	安山岩			3	—	—	IIb	23A	23			99	84	37	385.00	
236	磨石	A3	安山岩			5	SK	61b	2	30B	1	b	S66	150	87	43	873.00	
237	磨石	C	安山岩			1	—	—	IIa	16A	24			109	82	43	455.00	
238	磨石	A3	安山岩			6	—	—	II	33B	18			135	76	40	597.00	
239	磨石	A2	蛇紋岩			5	SK	62	1	30B	2	d	S24	103	87	45	445.00	
240	磨石	A3	安山岩			5	SK	62	4	29B	23	a		103	84	43	515.00	
241	磨石	A1	安山岩			6	—	—	II	33B	18			103	95	38	559.00	
242	特殊磨石	E	安山岩			3	—	—	IIb	23A	25			191	86	49	1261.00	
243	特殊磨石	E	安山岩			3	—	—	IIb	23B	13			152	71	43	637.00	
244	石錘	C	安山岩			1	—	—	IIb	16B	1			72	66	29	188.00	
245	石錘	A2	安山岩			1	—	—	IIa	16B	3			114	124	33	680.00	
246	石錘	A1	安山岩			2	SX	102	3	19A	25			109	76	29	361.00	
247	石錘	A2	砂岩			3	SD	51	IIb	23B	1			82	78	26	225.00	
248	石錘	B	砂岩			3	—	—	IIb	23B	25			97	78	28	318.00	
249	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23B	12			93	80	22	257.00	
250	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23B	13			92	81	35	336.00	
251	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23B	18			86	79	31	266.00	
252	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23A	25			83	74	25	224.00	
253	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23B	17			84	69	32	251.00	
254	石錘	A1	安山岩			3	—	—	IIb	23A	25			70	58	17	104.00	
255	石錘	A1	砂岩			3	—	—	IIb	23B	21			54	43	23	57.00	
256	石錘	A2	安山岩			3	—	—	IIb	23A	25			72	74	18	146.00	
257	石錘	D	頁岩			3	—	—	IIb	23A	25			76	58	14	86.00	
258	石錘	A1	安山岩			4	SI	14	2	27A	14	b	S43	(81)	79	26	231.00	
259	石錘	A1	安山岩			4	SI	16	1	26B	22	c		62	53	18	78.00	
260	石錘	A1	安山岩			4	—	—	I	26B	18			50	41	15	55.00	
261	石錘	A1	安山岩			4	—	—	I	26B	23			82	56	21	139.00	
262	石錘	B	蛇紋岩			4	—	—	II	26A	20			99	48	26	185.00	
263	石錘	A1	砂岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S47	116	75	24	286.00	
264	石錘	A1	砂岩			5	SK	61b	1	29B	21	d	S27	104	86	21	262.00	
265	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1	30B	1	c	S22	87	90	28	371.00	
266	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S34	95	75	28	295.00	
267	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	30B	1	a		90	70	33	289.00	
268	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S109	90	77	23	249.00	
269	石錘	A1	蛇紋岩			5	SK	61b	3	30B	1	b		87	70	20	86.00	
270	石錘	A1	蛇紋岩			5	SK	61b	1	29B	21	d	S28	81	73	18	174.00	
271	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1	30B	1	b	S25	81	69	22	182.00	
272	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	30B	2	a		79	68	25	171.00	
273	石錘	A3	安山岩			5	SK	61b	4	30B	1	b	S72	76	76	29	212.00	
274	石錘	A2	頁岩			5	SK	61b	1	30A	5	b	S4	82	81	26	240.00	
275	石錘	A1	蛇紋岩			5	SK	61b	1b	30B	1	b	S46	86	80	22	236.00	
276	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S107	80	76	27	264.00	
277	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S37	81	66	27	215.00	
278	石錘	A1	安山岩			5	SK	61b	1b	29B	21	d	S38	72	64	24	135.00	

石器・石製品観察表（3）

報告番号	種別	分類	石材	岩石名		出土位置						属性（単位：mm/g.（）は破損品の残存長）				備考		
				分析No.	分析結果	調査区	遺構番号	層位	グリッド	取上No.	長さ	幅	厚さ	重さ				
279	石鏟	A1	安山岩			5	SK	62	3a	30B	8	c	S60	92	83	29	293.00	
280	石鏟	A1	安山岩			5	SK	62	4	30B	8	c	S56	79	62	26	181.00	
281	石鏟	A2	砂岩			5			I	30B	3			93	96	44	541.00	
282	石鏟	A1	安山岩			5			I	30A	3			105	90	21	322.00	
283	石鏟	B	安山岩			5			I	30B	2			85	81	28	267.00	
284	石鏟	A1	砂岩			5			II	30A	5			67	57	16	84.00	
285	石鏟	A1	安山岩			5			I	30A	10			46	41	13	39.00	
286	石鏟	A3	安山岩			6	SK	169	1	34B	2	b	S5	79	79	21	202.00	SI166内
287	石鏟	B	安山岩			6			II	33B	18			93	93	22	269.00	
288	石鏟	A1	安山岩			6			II	34B	7			91	86	31	402.00	
289	石鏟	A1	砂岩			6			I	33A	25			102	91	23	223.00	
290	石鏟	A1	安山岩			6			II	33B	23			104	70	26	265.00	
291	石鏟	A1	安山岩			6			II	33B	23			88	80	29	320.00	
292	石鏟	B	安山岩			6			II	34A	15			82	68	20	161.00	
293	石鏟	C	砂岩			6			II	33B	22			75	41	19	88.00	
294	石鏟	A1	安山岩			6			II	33B	22			84	79	24	275.00	
295	石鏟	A1	砂岩			6			II	33A	14			80	68	21	131.00	
296	石鏟	A1	安山岩			6			II	34B	3			55	38	16	45.00	
297	剥片		ヒスイ	31	ヒスイ輝石岩	5	SK	62	1	30B	2			39	33	22	27.94	
298	剥片		ヒスイ	33	ヒスイ輝石岩	5	SK	62	4	30B	2			71	70	29	123.06	被熱
299	剥片		ヒスイ			4	SK	20	1	27A	15			66	39	30	114.79	敲石か
300	剥片		ヒスイ	1	ヒスイ輝石岩	4			II	27B	11			22	33	8	7.20	
301	原石		ヒスイ			6			II	34B	2			103	79	57	697.98	被熱
302	原石		ヒスイ			3			IIb	23B	21			101	75	50	397.67	
303	原石		ヒスイ			6			I	33A	18			35	54	26	68.53	被熱
304	原石		ヒスイ			6			II	34B	3			103	62	34	283.87	被熱
305	原石		滑石			6			I	33B	22			97	77	26	242.61	
306	原石		滑石			6			II	34B	3			120	65	42	343.17	
307	原石		滑石			5	SK	61b	1b	29B	21	c		64	53	28	156.30	
308	原石		滑石			5	SK	61b	1	30B	1			63	38	34	82.87	全体に丸味を帯びる
309	玉素材		滑石			5			I	30B	6			34	27	12	15.05	一部カジリの可能性
310	玉素材		滑石			6			I	33B	21			47	19	11	13.01	全体に磨滅顕著
311	玉素材		滑石			3			IIb	23A	25			52	38	7	20.01	
372	石棒		安山岩			3			IIb	23A	13			76	55	51	252.77	
391	原石		ヒスイ	3	ヒスイ輝石岩	5			II	29B	23			43	34	4	54.54	擦り切り痕あり
392	環状石製品		流紋岩			2			I	20A	9			87	124	22	200.06	孔径A（2mm）、孔径B（6mm）
394	環状石製品		蛇紋岩			6			II d	34B	8			96	67	38	270.51	孔径B（7mm）
444	硯		粘板岩			5	--	--	I	30A	5			(35)	(87)	19	96.00	
445	石鏟		安山岩			6			II	33B	23			76	71	71	507.04	
446	砥石		凝灰岩			2	--	--	I	19B	11			109	48	38	356.00	

石製装身具観察表（1）

報告番号	種別	石材	岩石名		出土位置						属性（単位：mm/g.（）は推定値）						備考				
			分析No.	分析結果	調査区	遺構番号	層位	グリッド	取上No.	長さ	外径	幅	孔径A・内径A	孔径B・内径B	厚さ	重さ					
312	環状耳飾	滑石	8	滑石	5	SK	61a	4b	30	A	5	b	S53	21	21	7	9	14	5	3.06	
313	環状耳飾	滑石			5	SK	61b	1	29	B	21			16	(27)	9	(10)	(13)	6	1.42	
314	環状耳飾	滑石			5	SK	62	1	30	B	2			18	(22)	8	7	11	4	1.48	
315	環状耳飾	滑石			5	SK	62	3a	30	B	3	c		19	(20)	6	(9)	(11)	5	0.85	
316	環状耳飾	滑石	27	滑石	5	SK	62	1b	30	B	7	a		15	(19)	5	(9)	(11)	6	0.99	
317	環状耳飾	滑石			4	SI	14	1b	27	A	9	d		16	(24)	6	(12)	(14)	5	0.88	穿孔痕跡あり
318	環状耳飾	滑石			6	SK	169	1	33	A	25	c		19	(24)	7	(12)	(14)	6	1.28	SI166内
319	環状耳飾	滑石			6	SK	169	1	33	B	21	d		20	(22)	7	(9)	(13)	6	1.89	SI166内
320	環状耳飾	滑石			6	SK	169	1	34	B	16			12	(17)	3	(11)	(14)	4	0.34	SI166内
321	環状耳飾	滑石	25	滑石	6	SK	169	12	33	B	21	d		16	16	3	9	11	4	0.63	SI166内
322	環状耳飾	滑石			4	SI	14	3	27	A	15	a		15	(30)	7	(15)	(17)	3	1.15	
323	環状耳飾	滑石				工事 立会	SD	1						23	23	7	11	15	11	4.39	
324	環状耳飾	未製品 滑石	9	滑石	6	SK	169	2	34	B	1	b	S20	20	24	11	5	8	9	5.49	SI166内
325	環状耳飾	未製品 滑石			5	SK	62	1	30	B	2			23	23	8	11	17	5	4.55	
326	環状耳飾	未製品 滑石	28	滑石	5	SK	61b	3a	30	B	1	b		18	18	8	5	11	5	1.76	
327	環状耳飾	未製品 滑石	17	滑石	6			II	34	A	14			28	32	18	7	10	5	6.64	
328	環状耳飾	滑石			5	SK	61b	1	30	B	1			18	(40)	9	21	(23)	4	1.36	
329	環状耳飾	滑石			5	SK	67	4	29	B	22	c		34	(36)	9	(20)	(22)	7	5.28	
330	環状耳飾	滑石			6			II	34	A	9			35	(43)	10	(23)	(25)	10	7.62	
331	環状耳飾	滑石			5	SK	62	1	30	B	7	a		39	(44)	9	(25)	(25)	7	5.01	
332	環状耳飾	滑石			3			IIb	23	A	25			46	(51)	11	(25)	(31)	10	11.01	
333	環状耳飾	未製品 滑石	29	滑石	5	SK	61b	II	30	B	1			22	(31)	13	(9)	(15)	8	4.33	
334	環状耳飾	滑石	30	緑泥石岩	3			II	23	A	5			45	(63)	12	(42)	(47)	6	7.35	
335	環状耳飾	滑石			6	SK	169	2	34	B	1	b	S3 S19	a : 36 b : 35	(68)	a : 20 b : 21	(26)	(36)	10	a : 10.76 b : 13.30	SI166内
336	環状耳飾	未製品 滑石			6			II d	34	B	12			56	(56)	21	(16)	(25)	13	35.58	
337	環状耳飾	滑石			4			II	27	A	4			35	(82)	23	(39)	(49)	10	9.82	
338	環状耳飾	滑石	14	緑泥石岩	2			III	20	B	1			60	不明	28	不明	不明	7	20.22	
339	環状耳飾	未製品 滑石	12	滑石	6			II	33	B	17	d		37	37	17	未貫通	(18)	8	8.69	
340	環状耳飾	未製品 滑石	11	滑石	5	SK	61a	4b	30	A	5	b		41	41	43	穿孔なし		11	38.78	
341	環状耳飾	未製品 滑石	13	滑石	6			II	34	A	5			65	65	58	穿孔なし		12	66.81	

石製装身具観察表 (2)

報告番号	種別	石材	岩石名		出土位置						属性 (単位: mm/g, ( ) は推定値)							備考		
			分析No	分析結果	調査区	遺構番号	層位	グリッド			取上No	長さ	外径	幅	孔径A・内径A	孔径B・内径B	厚さ		重さ	
342	勾玉	滑石	15	滑石	5		II	30	B	6			39		14	5	7	6	4.01	
343	勾玉	滑石	7	滑石	5	SK 62	1	30	B	3	a		14		14	2	5	4	0.63	
344	垂玉	滑石	24	滑石	6	SK 169	2	34	B	1	b	S21	12		9	2	4	5	0.65	SI166内
345	管玉	滑石	10	滑石	5	SK 61a	4b	30	A	5	b	S52	32		15	5	9	13	10.06	
346	管玉	滑石			5	SK 61b	1	30	B	1			21		11	5	不明	6	1.23	
347	管玉	滑石			4	SK 23		20	B	11			23		11	6	不明	8	1.76	
348	垂玉	滑石	16	滑石	5	SK 62	2a	30	B	2	c		26		15	2	3	6	3.85	
349	礫玉	凝灰岩			4	SI 16	1	27	B	18	a		14		14	7	3	8	1.17	
350	礫玉	蛇紋岩	22	滑石	5	SK 62	4	29	B	23	a		6		5	1		2	0.10	
351	礫玉	蛇紋岩	5	滑石	4	SI 14	5	27	A	9	d		7		6	2		3	0.16	
352	丸玉	滑石	6	滑石	4	SI 14	4	27	A	15			7	7	7	2	3	3	0.20	
353	垂玉	未製品			5	SK 61b	4	30	B	1	a	S48	16		13	未貫通	6	10	2.78	
354	丸玉	未製品			6	SK 169	1	34	B	1	b		13		6	(2)		5	0.64	SI166内
355	玉類	滑石			4			1	27	A	14		93		10	2	6	8	0.92	
356	垂玉	滑石	26	滑石	6		II d	34	B	11			35		14	未貫通	(7)	5	3.23	
357	垂玉	滑石			5	SK 62	1	29	B	21	d		19		13	3	6	10	2.61	
358	玉類	未製品			5		II	29	B	23			20		11	穿孔なし		7	2.29	
359	丸玉	未製品			5	SK 62	1	29	B	22	d		17		15	穿孔なし		11	4.74	
360	丸玉	未製品			5	SK 62	1b	30	B	2	c		15	(16)	15	穿孔なし		7	1.61	
361	玉類	未製品			5	SK 62	1	29	B	21	d		18		13	穿孔なし		11	4.11	
362	玉類	未製品			4	SI 14		27	A	15	c		18	18	11	穿孔なし		9	2.61	
363	垂玉	滑石			5		1	30	B	2			16	16	15	3		5	1.47	
364	丸玉	滑石			5	SK 62	1	29	B	21	d		16	16	10	4		7	1.53	
365	丸玉	滑石			5	SK 62	Tr	30	B	2			14	14	9	(2)	(4)	7	1.32	
366	玉類	滑石			6	SK 169	1	34	B	1	b		13		9	(5)		5	0.90	SI166内
367	玉類	未製品			5	SK 62	1	30	B	2			13		13	穿孔なし		9	1.87	
368	玉類	未製品			5	SK 61b	3a	30	B	1	b		22		7	穿孔なし		5	1.56	
369	玉類	未製品			6		1	34	A	9			18		10	穿孔なし		6	1.87	擦り切り痕あり
370	玉類	未製品			5	SK 61b	①	30	B	1	a		13		7	穿孔なし		4	0.61	焼土再堆積
371	玉類	石英			6	SK 169	1	34	B	2	b	S7	62		58	穿孔なし		18	81.10	SI166内
373	管玉 (古墳)	緑色凝灰岩			6		II	34	A	8			35		10	2	3	10	5.86	
374	勾玉 (古墳)	未製品 蛇紋岩	23	滑石	4	SI 16	1	26	B	22	b		16		10	穿孔なし		4	1.13	
375	勾玉 (古墳)	未製品 滑石	21	緑泥石岩	4	SI 18	1	27	B				12		8	未貫通	1	4	0.68	
376	白玉 (古墳)	滑石			4	SD 1	1	27	A	13	c		5	5	4	1		2	0.07	
377	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SD 1	1	27	A	13	a		8		10	1		2	0.25	
378	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SD 1	1	27	A	13	b		7		11	2		3	0.33	
379	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SD 1	2	27	A	13	d		6		9	2		2	0.22	
380	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SD 1	1	27	A	13	d		7		8	2		2	0.20	
381	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SK 27		27	B	13			10		7	(3)		2	0.20	
382	白玉 (古墳)	未製品 滑石	20	緑泥石岩	5		1	30	B	17			12		10	1		3	0.46	
383	白玉 (古墳)	未製品 滑石			4	SI 16	1	26	B	22	d		6		8	1		2	0.18	
384	白玉 (古墳)	未製品 滑石			5	P 64	1	29	B	23			8		9	2		2	0.18	
385	白玉 (古墳)	滑石			5	SK 62	1	30	B	2	d		4	4	4	2		2	0.06	
386	白玉 (古墳)	滑石			4	SI 14		27	A	15	a		4	4	4	2		3	0.06	
387	白玉 (古墳)	滑石	19	緑泥石岩	1	SK 67	2b	30	B	2	a		5	5	5	2		3	0.10	
388	白玉 (古墳)	滑石	18	緑泥石岩	1	SK 62	1	30	B	8			6	6	6	2		3	0.15	
389	白玉 (古墳)	滑石			4	SI 14	2	27	A	15	a		6	(7)	4	3		2	0.08	
390	ガラス玉 (古墳)	ガラス			4		II	27	B	2			6	6	6	1		3	0.14	
393	玉類 (古墳)	滑石			6		II d	34	B	11			50		47	穿孔なし		40	108.25	勾玉未製品か
395	玉類 (古墳)	凝灰岩			5		I	30	A	15			27		23	穿孔なし		69	5.38	

古墳時代以降の土器観察表 (1)

(製作痕跡: ロクロ成形=R, 底部回転系切り痕=回糸)  
(胎土: 石=石英、白=白色粒子、赤=赤色粒子、黒=黒色粒子、長=長石、雲=雲母、チャ=チャート、骨=海綿骨針、礫=砂礫、角=角閃石)

報告番号	分類		調査区	遺構種別番号	層位	グリッド		口径 mm	器高 mm	底径 mm	色調		胎土 (上段: 色調 下段: 混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備考	
	種別	器形				大	小				外面	内面					
396	土師器	椀	2	SX 101	3	20	B	13	120			黄橙	浅黄橙	浅黄橙 石 礫 角	R		
397	土師器	無台椀	2	SX 101	3	20	B	6		60		にぶい橙	浅黄橙	灰黄褐 長 雲 礫			
398	須恵器	無台杯	2	SX 101 SX 102	33	20 A 19	B 16		142	37	100	灰	灰~灰オリーブ	灰白 長 礫	(底) 回糸		
399	須恵器	長頸瓶	2	SX 101	3	20	B	13	180			灰白	灰白	灰白 石 長 礫			
400	須恵器	蓋	2	SX 101	1	20	B	1				灰	灰	灰白 石 礫	(外) ヘラ描「×」 (外) ケズリ		焼き歪み有り
401	須恵器	坏+甕 (熔着品)	2	SX 101	1	20	B		坏130 甕	28	88 92	灰白	灰	灰白 石 礫			
402	須恵器	蓋	2	SX 101	3	20	B	6				灰	灰	灰白 石 長 礫	(外) ケズリ+ナデ (内) ナデ		
403	土師器	長胴甕	2	SX 101	3	20	A	10	200			橙	橙	橙 石 長 雲 礫 角	R		
404	土師器	小甕	2	SX 101	3	20	B	6				にぶい赤褐~橙	明褐~にぶい褐	明褐 長 雲 礫	R		胴部径12.4cm
405	土師器	支脚	2	SX 101	1	20	B	6	84	90	96	にぶい黄褐	灰黄褐	灰黄褐 石 長 礫	(外) 指頭圧痕		半円孔: 直径6.8cm
406	土師器 (古墳)	器台	2	SX 101	3	20	B	11				浅黄橙	にぶい橙	にぶい黄橙 石 長 礫			頸部径4.8cm
407	須恵器	坏	2	SX 102	3	19	B	11	112			灰	灰	灰白 長 礫			

古墳時代の以降土器観察表 (2)

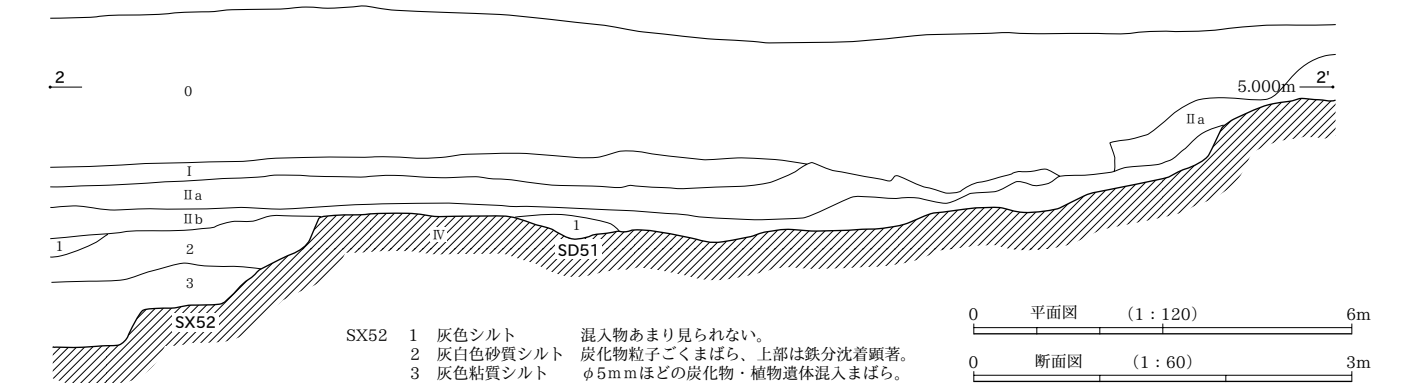
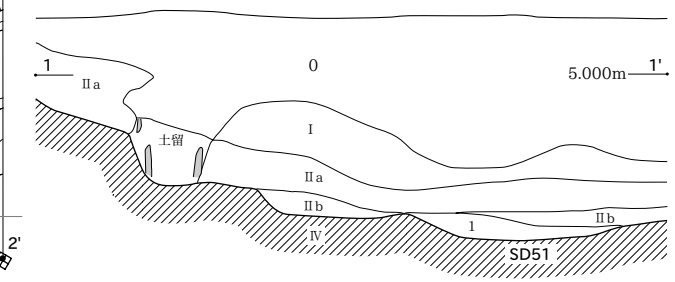
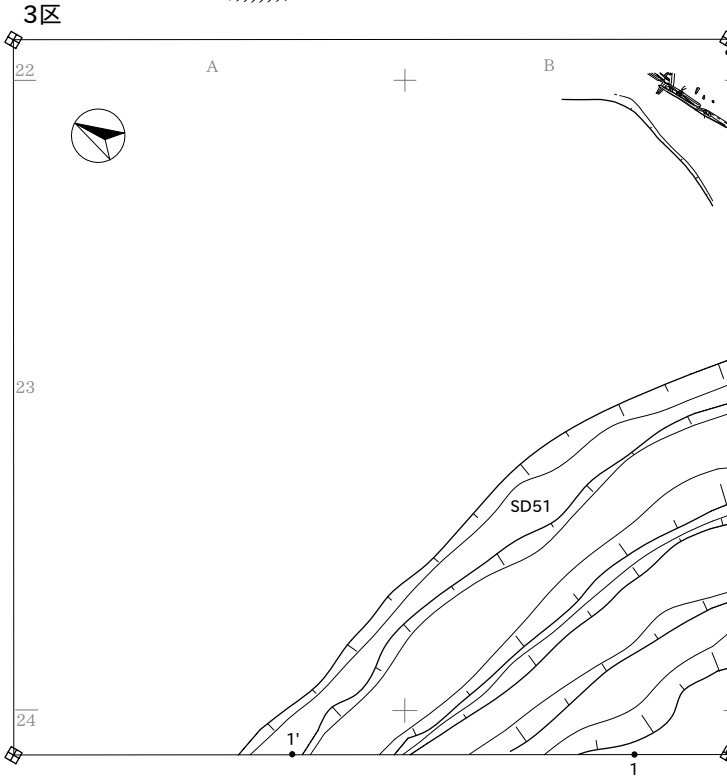
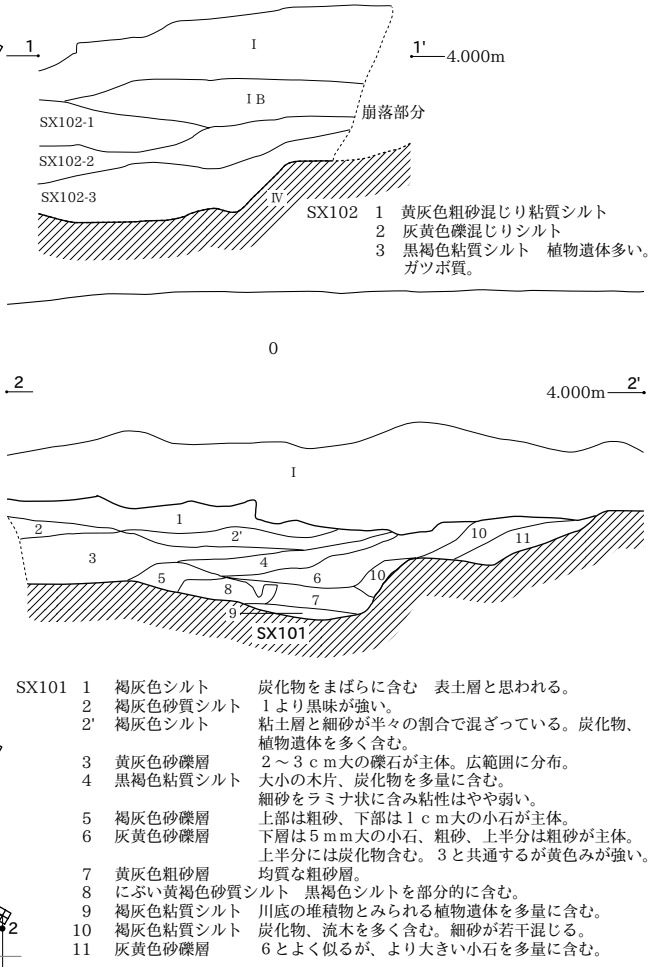
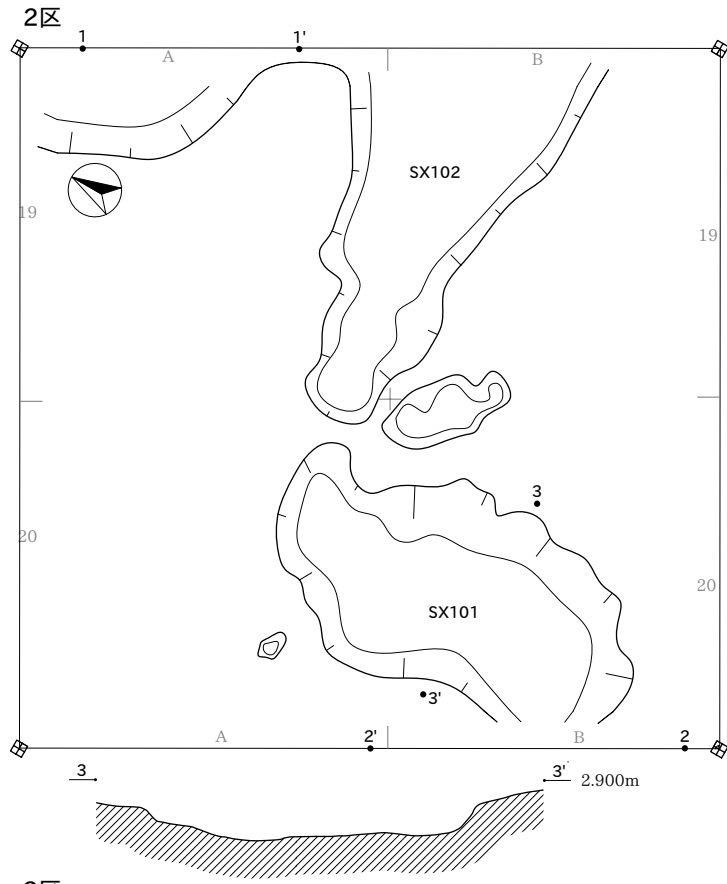
報告番号	分類		調査区	遺構種別	層位	グリッド		口径mm	器高mm	底径mm	色調		胎土(上段:色調下段:混入物)	製作痕跡	消費痕跡	備考	
	種別	器形				大	小				外面	内面					
408	須恵器	坏	2	SX	102	3	19	A	20	131		灰白	灰白	灰白石長 礫			焼き歪み有り
409	須恵器	無台坏	2	SX	102	3	19	B	21			58	灰	灰	灰白長 礫		
410	須恵器	蓋	2	SX	102	3	19	A	25	172			灰白	灰白	灰白石長 礫		
411	須恵器	坏+坏(熔着品)	2	SX	102	1	19	B	16	138 144			灰オリーブ	灰	灰白長 礫		
412	緑釉陶器	皿	2	SX	102	3	19	B	11	156	34	73	オリーブ黒	オリーブ黒	橙白長		
413	土師器	小甕	5	P	64	1	29	B	23				にぶい黄橙	浅黄橙	灰黄褐石白 礫	R	(外) 煤
414	土師器	甕	6	P	163	1	33	A	19	170			にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙石雲 礫		(内外) ハケメ
415	土師器(古墳)	甕	4	SD	1	2	27	A	13	148			にぶい橙	にぶい橙	褐灰長雲 礫		(内外) ナデ+ハケメ (外) 煤
416	土師器(古墳)	器台?		SK	20	3	27	A	15				橙	橙	褐灰白 礫		(内外) ハケメ 頸部径5.6cm
417	須恵器	甕		SX	52	3	23	B	1				灰白	灰白	灰白長 礫		タタキ
418	須恵器		6			II	33	A	25				青灰	灰	灰長雲 礫		TK10窯式
419	須恵器		3			IIb	23	A	18				暗灰	灰	灰雲 礫		TK10窯式
420	土師器(古墳)	器台or高坏	6			II	34	A	15				にぶい黄橙	にぶい褐	褐灰石長 礫 角		頸部径5.6cm
421	土師器(古墳)	甕	6			II	33	B	16			60	にぶい褐	にぶい黄橙	黒褐長雲 礫		(底) 白玉・糊圧痕
422	灰釉陶器	碗	3			IIa	23	B	7			68	灰白	灰白	灰白白 礫		ハケヌリ付高台 猿投産K90窯式(9C後半)
423	須恵器	無台坏	3			IIb	23	B	17			74	灰白	灰白	灰白石長 礫		(底) 回転ヘラギリ
424	須恵器	有台坏	2			I	19	B	23	134	67	65	灰	浅黄橙	黄白 礫		
425	須恵器	坏	6			II	33	A	23	154	33	104	黄灰	灰	灰白石長 礫		
426	須恵器	短頸壺	3			IIb	23	A	23				暗オリーブ灰	青灰	灰雲 礫		(外) 自然軸 頸部径17.0cm
427	須恵器	瓶	3			IIb	23	A	24			120	灰	明紫灰	淡青灰石長 礫		
428	土師器	鍋	6			II	34	B	3	376			にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙石長雲 礫		
429	土師器	小甕	6			II	34	A	4	176			にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐長雲 礫	R	
430	土師器	皿	1			IIc	16	B	12	152	40	96	にぶい黄橙	にぶい黄橙	浅黄橙長雲 礫	R	15C
431	土師器	皿	3			II	23	A	8			94	にぶい黄	にぶい黄橙	にぶい黄橙長雲 礫	R+回糸	(内) タール 15C
432	土師器	皿	3			IIb	23	B	21			64	にぶい黄橙	灰黄褐	橙石長 礫	R+回糸	(内) タール 15C
433	土師器	皿	3			IIb	23	A	23			48	灰黄	浅黄	浅黄橙長雲 礫	R+回糸	15C
434	青磁	碗	2			IIb	20	B	11				オリーブ灰	オリーブ灰	灰白		(外) 片刃形雷文帯 蓮弁文 上田C-II類(14C末~15C前半)
435	白磁	八角坏	3			IIb	23	B	17				灰白	灰白	白黒		(外) 胴部面取り 森田D類(1430年代~)
436	白磁	皿	3			IIb	23	B	21				白	白	黄白(陶質、粗)		(内) 蛇ノ目軸刺ぎ (内外) 高台付近無軸 露胎部:桃白色
437	瀬戸美濃焼	丸皿	3			IIb	23	A	25	96			オリーブ黄	灰オリーブ	灰黄長		(口) スス 大窯1期(15C末) 灯明皿
438	瀬戸美濃焼	緑釉小皿	1			IIa	16	B	1			50	オリーブ黄	オリーブ黄	灰白		(内) 菊花文か? 大窯期
439	瀬戸美濃焼	天目碗	3			IIb	23	A	18			44	褐	にぶい褐	にぶい黄橙長		(内) 擦痕 大窯1期(15C末) 円盤状陶片
440	珠洲焼	片口鉢	3			IIb	23	A	14			140	褐灰	褐灰	褐灰長骨 礫		(底) 静止糸切り (卸目) 9条一単位 (外) スス
441	珠洲焼	片口鉢	3			IIb	23	B	21	326			灰	灰	灰石白骨 礫		(卸目) 5条一単位 吉岡IV4期(14C第3四半期)
442	珠洲焼	片口鉢	6			II	34	B	15	290			灰	灰	灰黄長雲骨 礫		(口) 櫛描波状文 吉岡V期(15C前半)
443	珠洲焼	甕	6			II	33	B	18				灰	灰	にぶい褐石白骨 礫		タタキ

製鉄関連資料観察表

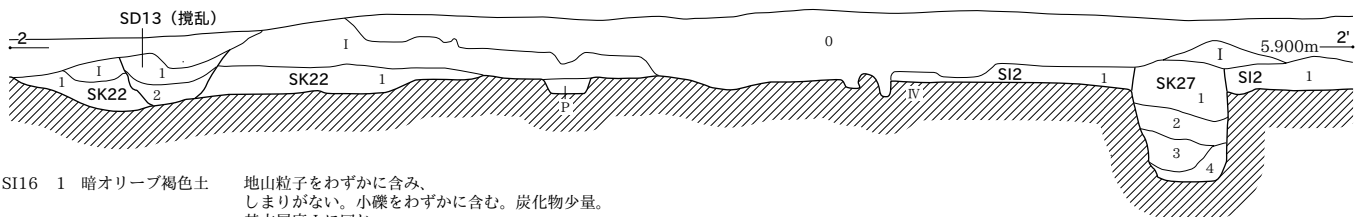
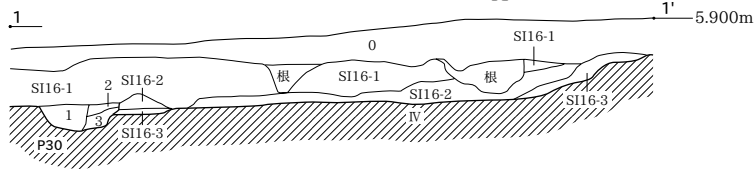
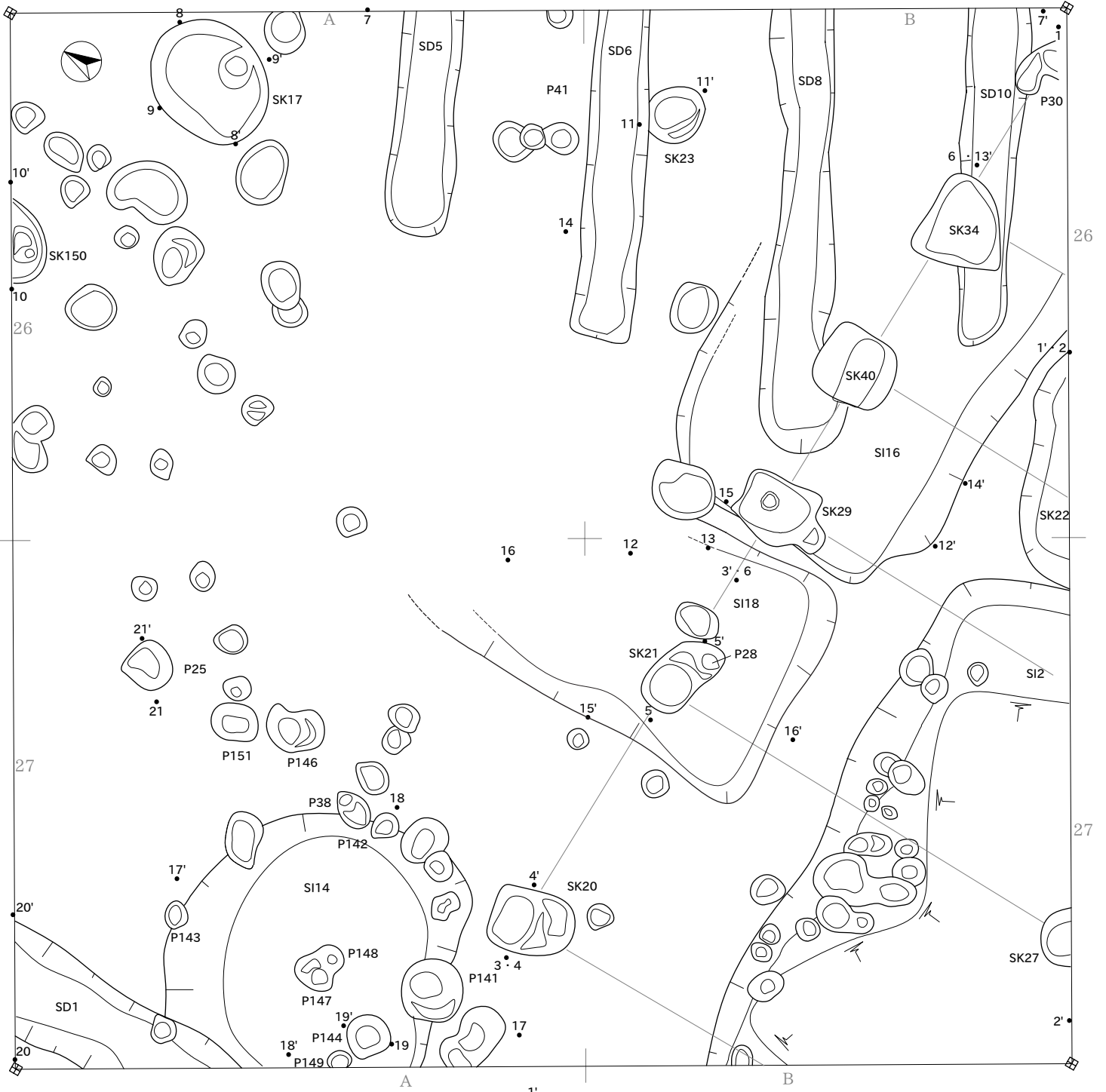
報告番号	種別	メタル度	出土位置			法量(単位: mm/g、○は推定値)				備考	
			調査区	グリッド	層位	長さ	幅	厚さ	重さ		
447	羽口	—	3	23B	21	IIb	(57)	外径(104)	40	116.00	孔径38mm
448	羽口	—	6	34A	14	II	(41)	外径(70)	26	40.00	孔径24mm
449	鉄滓	特L	1	16A	8	IIb	52	61	25	67.00	
450	鉄滓	H	3	23B	25	IIb	71	43	24	86.00	
451	鉄滓(礫と溶着)	H	6	33B	23	II	45	33	19	682.00	重さを除く測定値は鉄滓のみ。
452	鉄滓	H	1	16A	10	IIb	26	43	15	10.00	

図 版

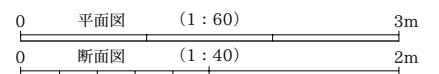


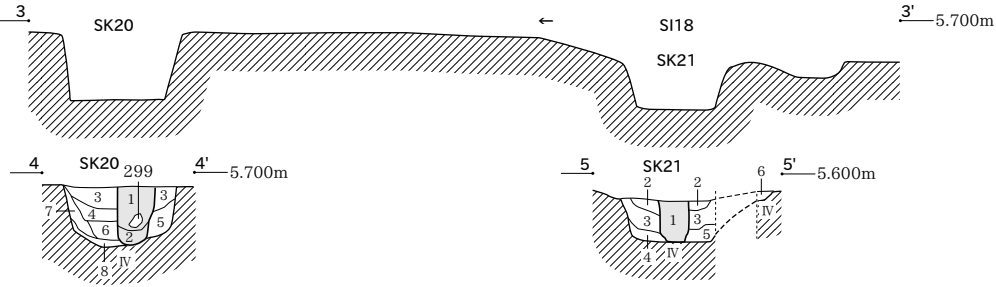






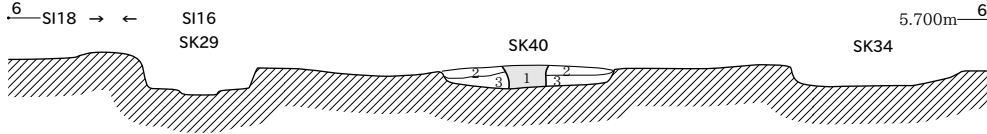
- |   |   |
|---|---|
| <p>SI16 1 暗オリーブ褐色土 地山粒子をわずかに含み、しまりが無い。小礫をわずかに含む。炭化物少量。基本層序 I に同じ。</p> <p>2 灰黄褐色土 地山粒子ごくわずか。炭化物ごくわずか。しまりは良い。</p> <p>3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多量に含む。</p> <p>P30 1 灰黄褐色土 地山ブロックをきわめて多量に含む。</p> <p>2 灰黄褐色土 色調が1層より暗い。地山粒子がほとんど混じらず均質。</p> <p>3 灰黄褐色土 1層より色調が淡い。地山ブロックをわずかに含む。</p> <p>SD13 1 オリーブ褐色シルト 地山ブロックをきわめて多く含む。</p> <p>2 灰黄褐色土 地山粒子(小)をごくわずかに含む。下位には地山ブロックを多量に含む。</p> <p>SK22 1 にぶい黄褐色土 地山粒子(小)と炭化物をごくわずかに含む。しまりが強い。</p> | <p>SI2 1 にぶい黄褐色土 地山をブロック状に多く含む。しまりが強い。</p> <p>P27 1 暗褐色土 地山粒子(小)及び炭化物をわずかに含む。</p> <p>2 暗褐色土 1層より色調が赤く淡い。礫を含む。</p> <p>3 黒褐色土 地山粒子(大)を多く含む。一部地山をマーブル状に含む。</p> <p>4 暗褐色土 地山粒子(小)をごくわずかに含む。混ざりが少ない。</p> |
|---|---|



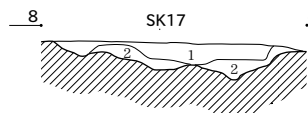
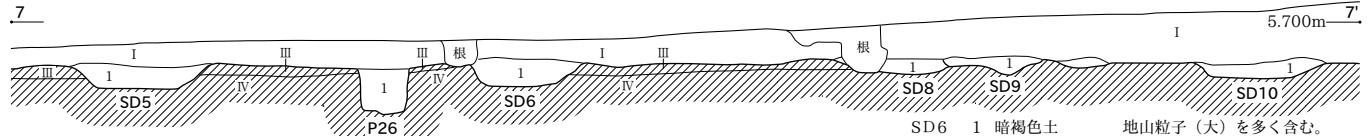


- SK20
- 1 褐色土 地山粒子 (大) を多く含む。(柱痕)
  - 2 にぶい黄褐色土 地山粒子 (小) をごくわずかに含むものの均質で混じりが少ない。粘性がある。(柱痕)
  - 3 にぶい黄褐色土 地山ブロック及び地山粒子 (大) を多く含む。炭化粒子 (小) をごくわずかに含む。
  - 4 にぶい黄褐色土 3層より色調が暗い。地山粒子 (小) を多く含む。
  - 5 にぶい黄褐色土 色調は4層に似る。地山粒子 (小) 及び同 (大) をわずかに含む。
  - 6 にぶい黄褐色土 4層より色調が暗い。炭化物 (大) をごくわずかに含む。比較的均質。
  - 7 褐色土 地山ブロック (大) 及び地山粒子 (大) を多く含む。
  - 8 オリーブ褐色土 地山粒小 (大) をわずかに含む。

- SK21
- 1 褐色土 しまりが弱い。柱痕。
  - 2 にぶい黄褐色土 地山ブロック (大) を多く含む。炭化物 (大) をわずかに含む。
  - 3 にぶい黄褐色土 2層より色調が濃い。炭化粒子 (小) をわずかに、地山粒子 (小) を多く含む。
  - 4 にぶい黄褐色土 3層より色調が濃い。やや粘性があり、混じりが少ない。
  - 5 褐色土 地山粒子 (大) をわずかに含む。
  - 6 灰黄褐色シルト 粒径大きい。地山粒子を多く含む。炭化物わずか。

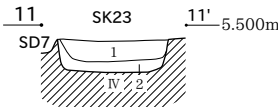
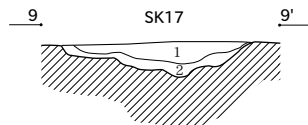


- SK40
- 1 灰黄褐色土 地山をブロック状に多く含む。しまり弱。
  - 2 にぶい黄褐色土 地山粒子 (大) をわずかに含む。
  - 3 褐色土 地山ブロックをきわめて多く含む。

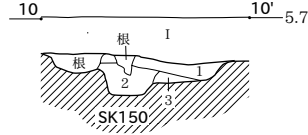


- SK17
- 1 にぶい黄褐色土 地山を大理石状に少量含む。炭化物をわずかに含む。
  - 2 褐色土 地山をブロック状 (大) に多く含む。

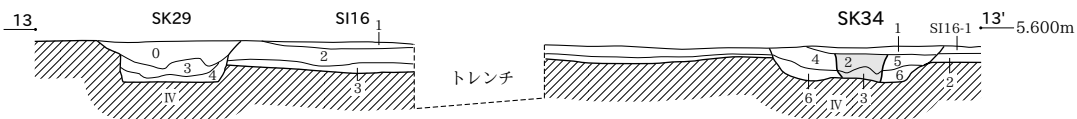
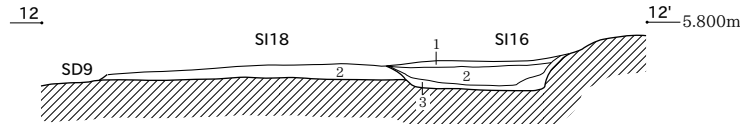
- SD6
- 1 暗褐色土 地山粒子 (大) を多く含む。
- SD5
- 1 暗褐色土 地山粒子 (大) を多く含む。
- P26
- 1 灰黄褐色土 地山ブロック粒子を多く含む。炭化物 (小) をわずかに含む。
- SD8
- 1 暗褐色土 地山粒子 (大) を多く含む。
- SD9
- 1 暗灰黄色シルト 地山ブロック (大) を多く含む。
- SD10
- 1 暗褐色土 地山粒子 (大) を多く含む。



- SK23
- 1 にぶい黄褐色土 地山粒子 (小) をごくわずかに含む。炭化物 (微小) をごくわずかに含む。しまりはよい。
  - 2 褐色土 炭化粒子 (1層より更に細かい) をごくわずかに含む。しまりはよい。

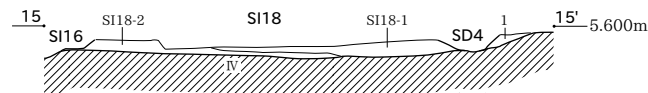
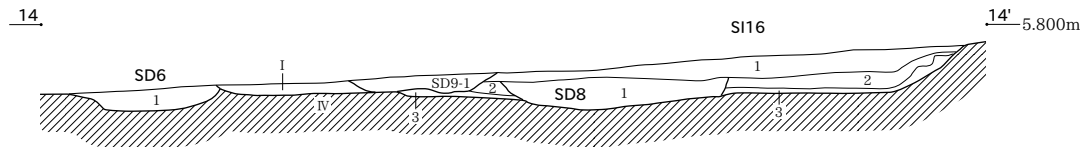


- SK150
- 1 褐色土 炭化物をわずかに含む。
  - 2 黄褐色土 固くしまる。
  - 3 にぶい黄褐色土 固くしまる。

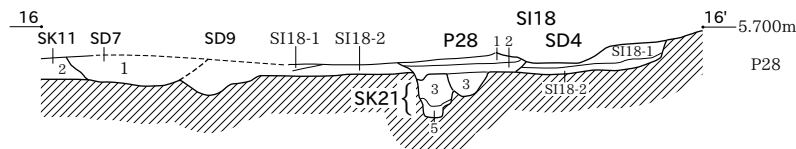


- SK29
- 0 暗褐色土 地山粒子 (小) わずか。炭化物ごくわずか。
  - 3 にぶい黄褐色土 地山ブロック (大) をきわめて多量に含む。
  - 4 褐色土 にぶい黄褐色土ブロックをわずかに含む。

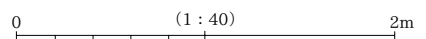
- SK34
- 1 褐色土 地山粒子 (小) をごくわずかに含む。炭化粒子 (小) をごくわずかに含む。
  - 2 褐色土 1層よりやや赤みを帯びる。地山ブロック (大) を多く含む。柱痕。
  - 3 にぶい黄褐色土 地山ブロック (小) を多く含む。炭化物をごくわずかに含む。柱痕。
  - 4 3層に同じ。ただし、地山ブロックは小さく地山粒子に近い。
  - 5 にぶい黄褐色土 3・4層より色調が淡い。地山をきわめて多量に含む。
  - 6 褐色土 微細な地山粒子をごくわずかに含むものの、均質。しまりが良い。

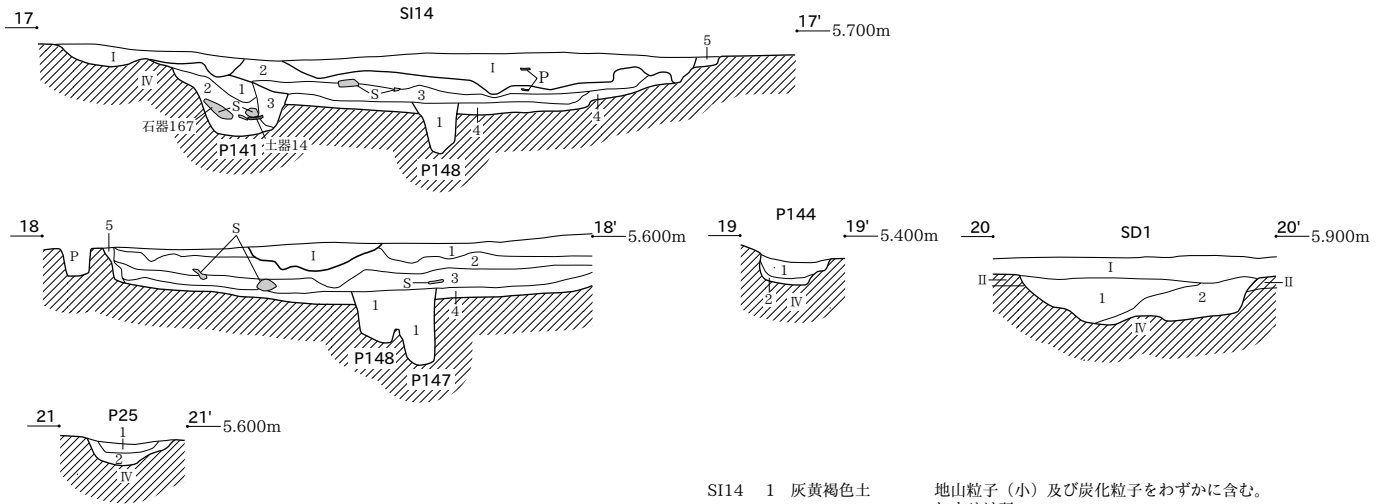


- SI18
- 1 暗灰黄色シルト 地山粒子 (小) わずか。炭化物わずか。
  - 2 暗灰黄色シルト 地山ブロック (大) 多い。
- SK11
- 1 にぶい黄褐色砂質シルト 地山ブロックを多量に含む。
  - 2 暗オリーブ褐色砂質シルト 地山ブロック (小) を少量含む。

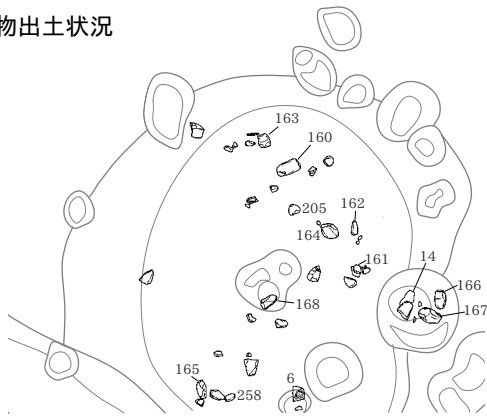


- P28
- 1 オリーブ褐色シルト 地山粒子 (小) わずか。炭化物わずか。
  - 2 オリーブ褐色シルト 地山ブロックを多量に含む。
  - 3 にぶい黄褐色土 地山粒子 (小) ごくわずかに含むが、混じりは少ない。



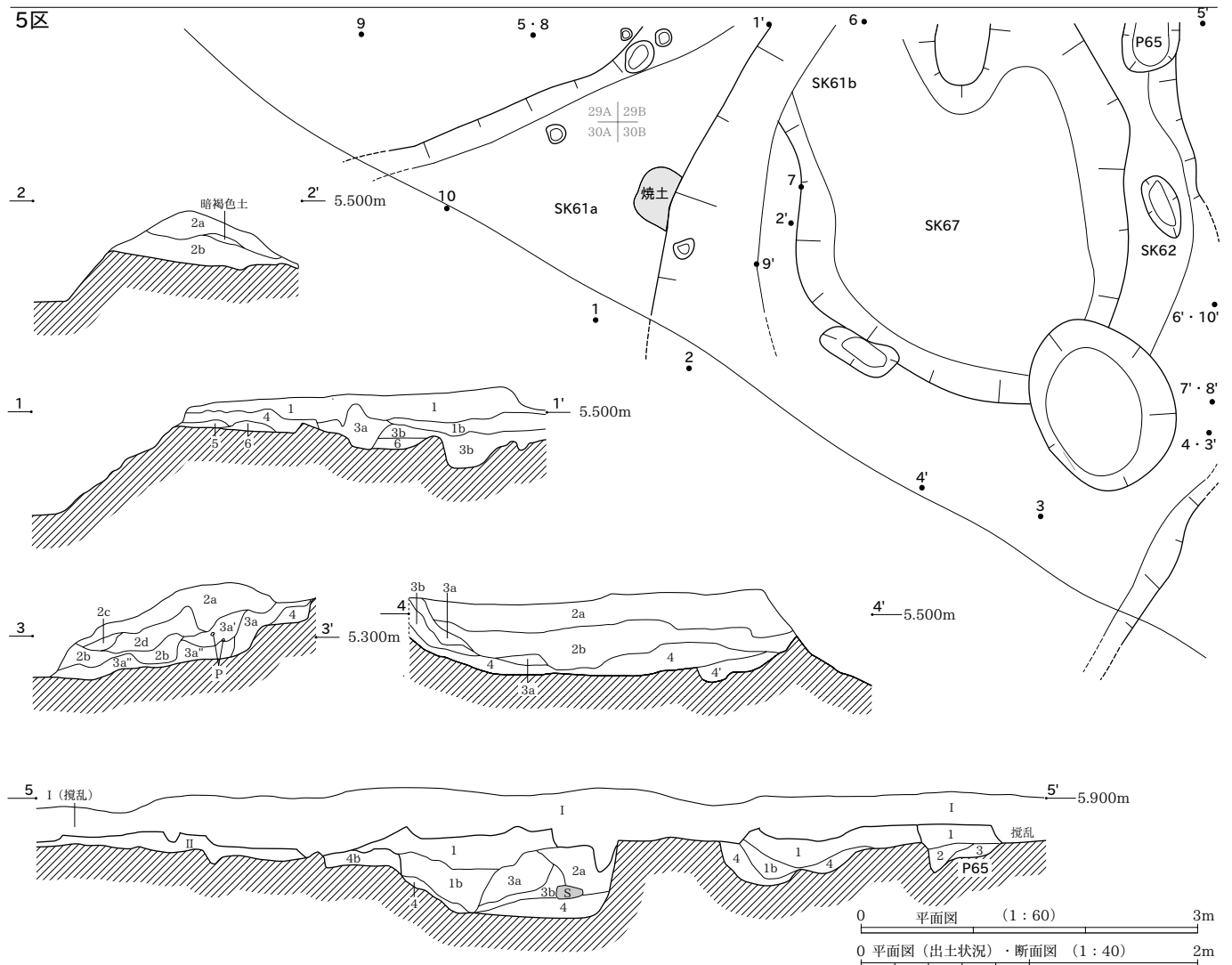


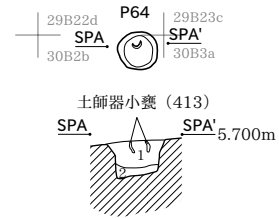
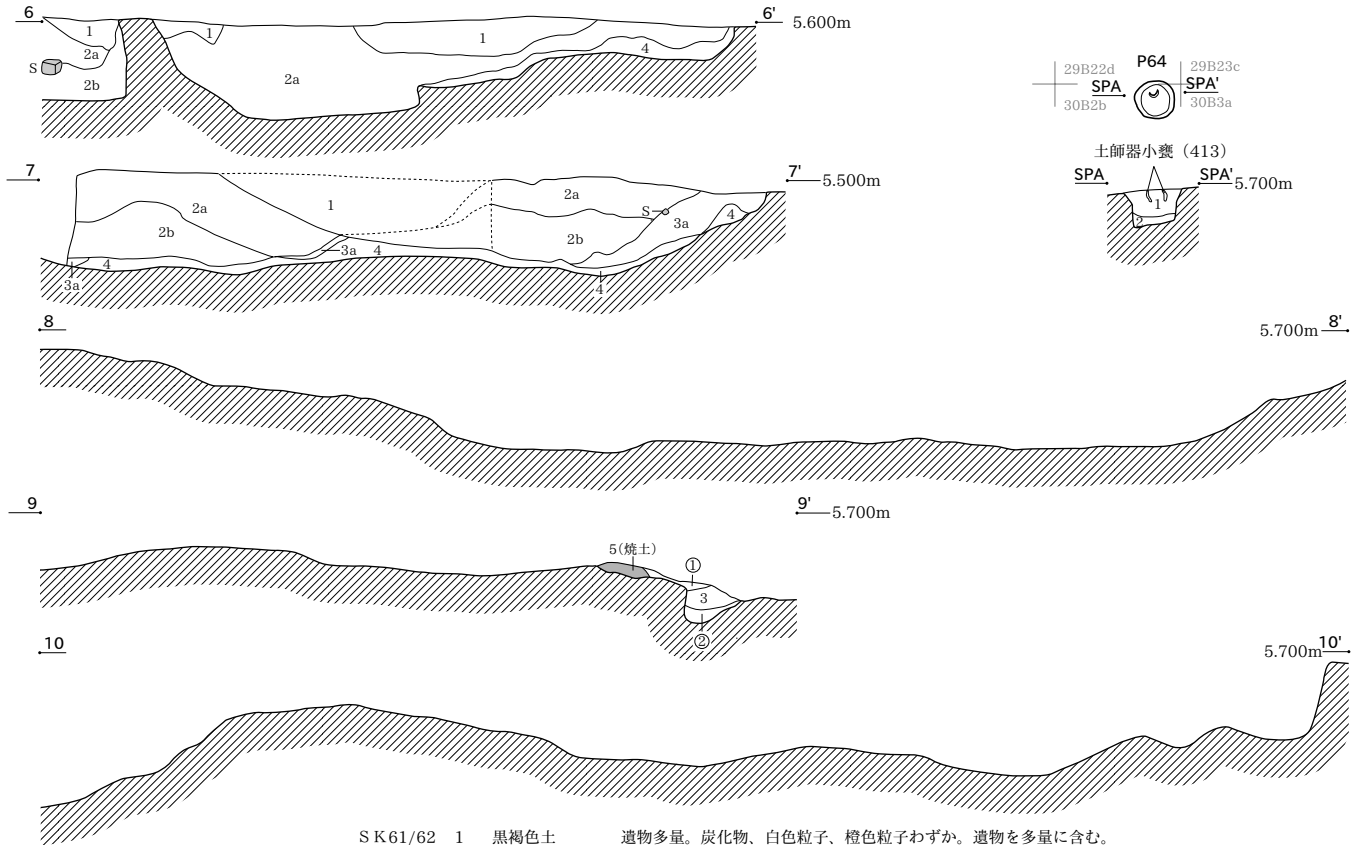
SI14遺物出土状況



- |      |            |  |
|------|------------|--|
| SI14 | 1 灰黄褐色土    | 地山粒子 (小) 及び炭化粒子をわずかに含む。しまりは弱い。   |
|      | 2 褐色土      | 地山粒子 (小) 及び炭化粒子をごくわずかに含む。  |
|      | 3 にぶい黄褐色土  | 地山粒子 (2層より小さい) 及び炭化粒子をごくわずかに含む。しまりが強い。蛇紋岩製磨製石斧未製品を多く包含する。                    |
|      | 4 にぶい黄褐色土  | 地山ブロックを多量に含む。  |
|      | 5 黄褐色土     | 地山ブロックを多量に含む。  |
| P147 | 1 にぶい黄褐色土  |  |
| P148 | 1 にぶい黄褐色土  |  |
| P141 | 1 褐色土      | 色調はSI14の2層に似るがやや暗い。炭化物 (φ2cm) を多く含み、地山粒子 (小) をごくわずかに含む。                      |
|      | 2 にぶい黄褐色土  | 炭化物 (φ2mm) をわずかに含む。蛇紋岩と縄文時代前期後葉の土器 (14) を包含する。                               |
|      | 3 暗褐色土     | 地山粒子 (小) をごくわずかに含み炭化物 (φ5mm) を多く含む。  |
| P144 | 1 暗褐色土     | 地山粒子 (小) 及び炭化粒子 (φ5mmほど) を多く含む。  |
|      | 2 褐色土      | 地山ブロックをきわめて多く含む。   |
| P25  | 1 炭化物層     |  |
|      | 2 暗オリーブ褐色土 | 炭化物及び地山ブロックをきわめて多く含む。  |
| SD1  | 1 黒褐色土     | 地山粒子 (大) 多く、炭化物 (小) をわずかに含む。1層よりやや暗い色調を呈する。地山粒子 (小) をわずかに、炭化物 (小) をごくわずかに含む。 |
|      | 2 黒褐色土     |  |

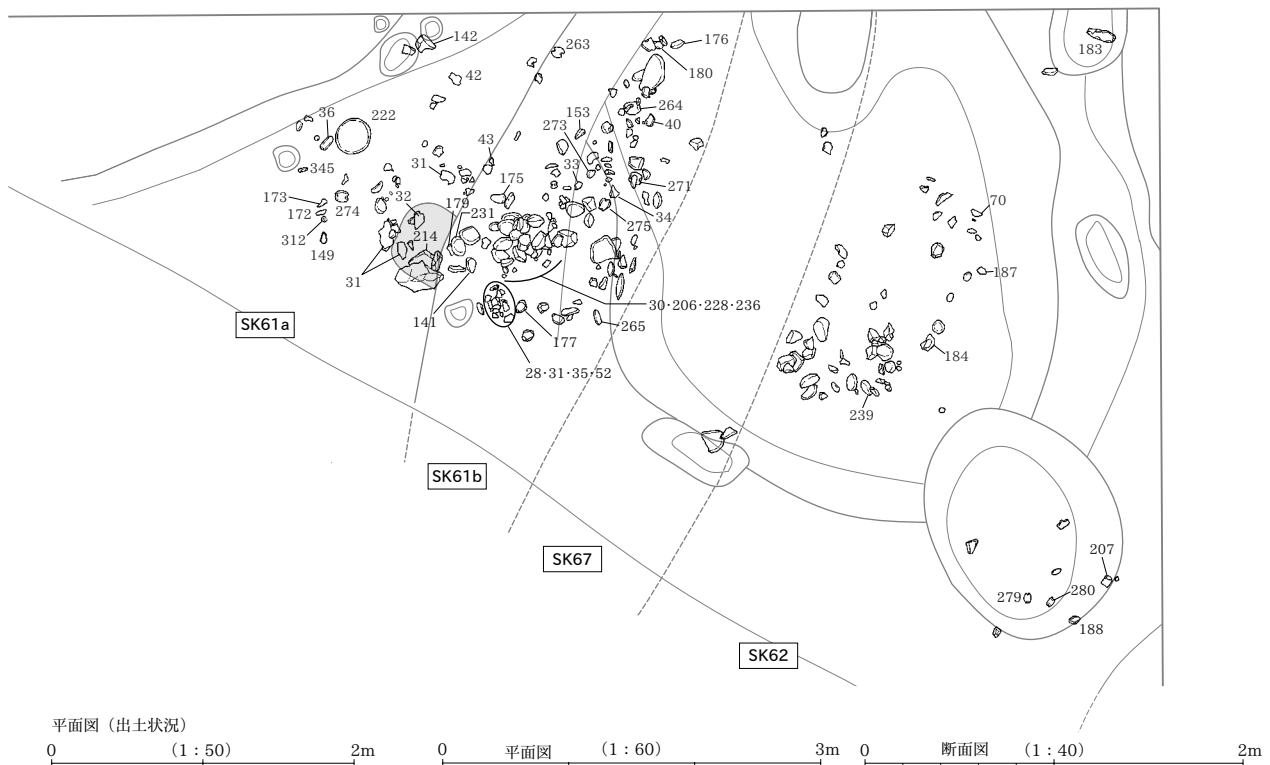
5区

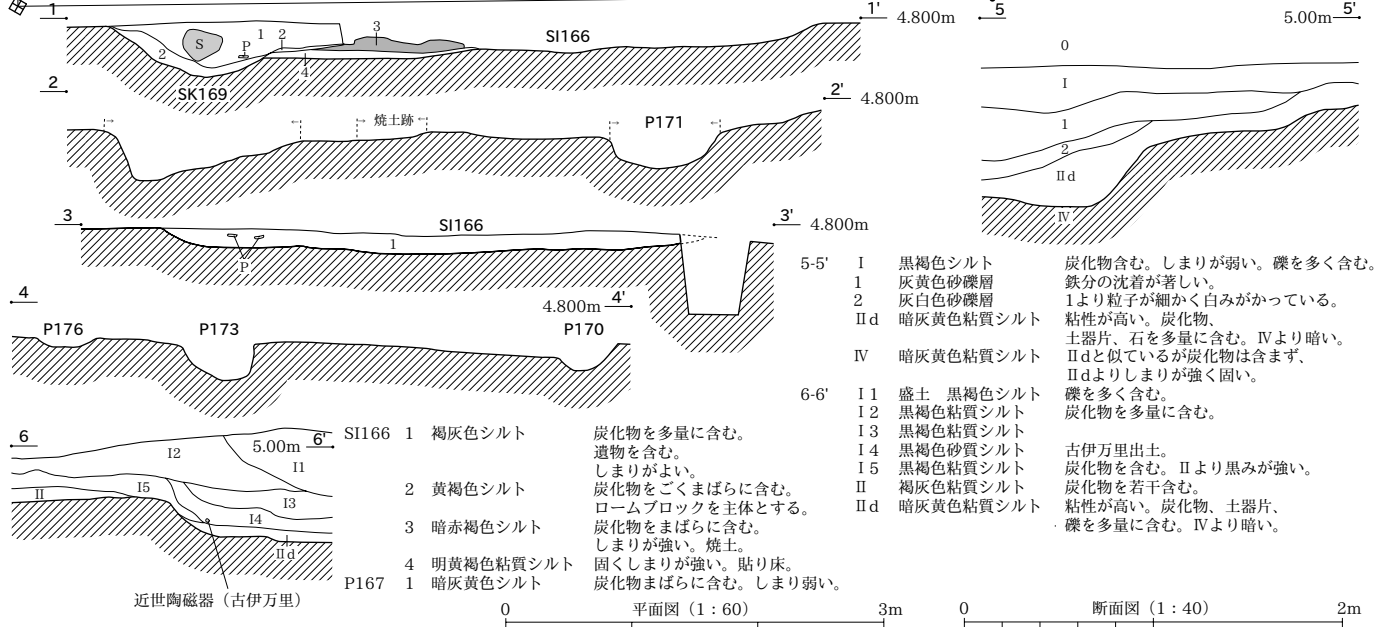
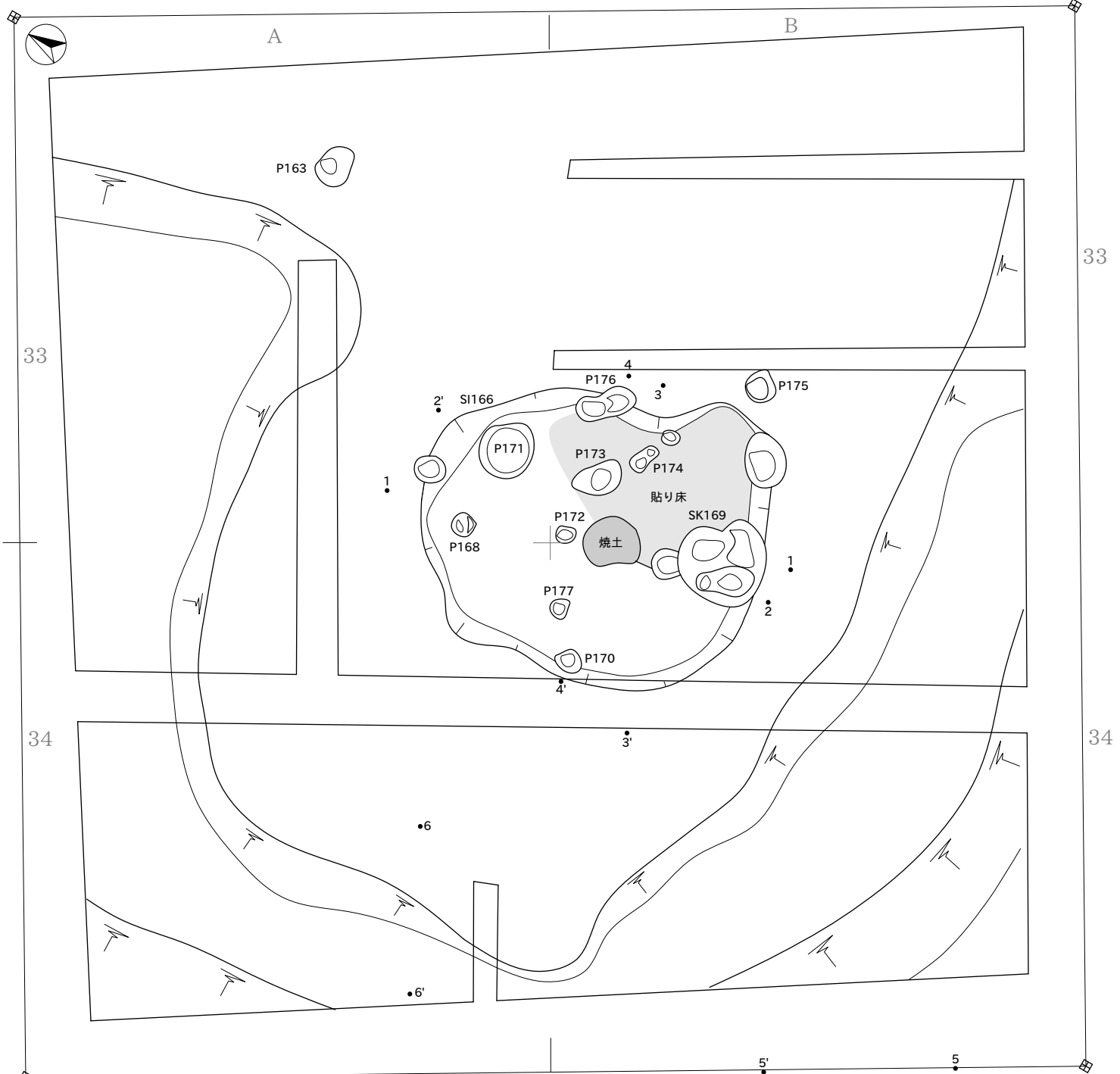




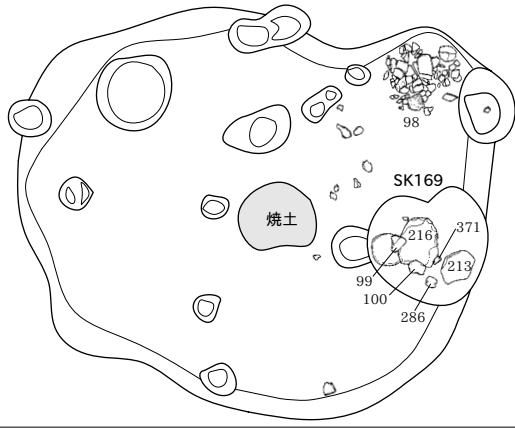
- |                 |      |         |  |                                     |
|-----------------|------|---------|--|-------------------------------------|
| SK 61/62        | 1    | 黒褐色土    | 遺物多量。炭化物、白色粒子、橙色粒子わずか。遺物を多量に含む。            |                                     |
|                 | 1b   | 灰褐色土    | 1層と共通するが遺物少なく、しまりが強い。遺物を多量に含む。             |                                     |
|                 | 2a   | にぶい赤褐色土 | ロームによる埋め戻し土か。地山に酷似するが炭化物をごくまばらに含む。遺物ごくわずか。 |                                     |
|                 | 2b   | にぶい褐色土  | ロームによる埋め戻し土か。地山に酷似するが炭化物をごくまばらに含む。         |                                     |
|                 | 2c   | 灰褐色土    | 炭化物きわめて多量。部分的に介在。                          |                                     |
|                 | 2d   | にぶい赤褐色土 | 2a層に共通するが炭化物がより多く、しまりが弱い。                  |                                     |
|                 | 3a   | 暗褐色土    | 炭化物、橙色粒子、ロームブロック多量。遺物を多く含む。                |                                     |
|                 | 3a'  | 褐色土     | 3a層に共通するがよりロームブロックが多い。                     |                                     |
|                 | 3a'' | 褐色土     | 3a層に共通するがより炭化物が多く橙色粒子を含む。                  |                                     |
|                 | 3b   | 黒褐色土    | 3a層より暗く、しまり強い。地山ブロックがより多く、炭化物まばら。遺物を多く含む。  |                                     |
| P 64            | 1    | 黒褐色土    | 炭化物まばら。                                    |                                     |
|                 | 2    | にぶい褐色土  | ロームブロックを基調とし、炭化物まばら。                       |                                     |
|                 | P 65 | 1       | 灰黄褐色土                                      | 地山ブロックを多量に含む。しまりが比較的弱く、攪乱の可能性が高い。   |
|                 |      | 2       | にぶい黄褐色土                                    | 地山ブロック粒子きわめて多量。しまりが強く、遺構覆土であることは確か。 |
| SK61a・61b・62・67 | 3    | 黄褐色ローム  | ロームを主体とするが、炭化物をごくわずかに含む。                   |                                     |
|                 | 5    | 明赤褐色土   | ローム主体の6層の焼土。                               |                                     |

SK61a・61b・62・67  
遺物出土状況

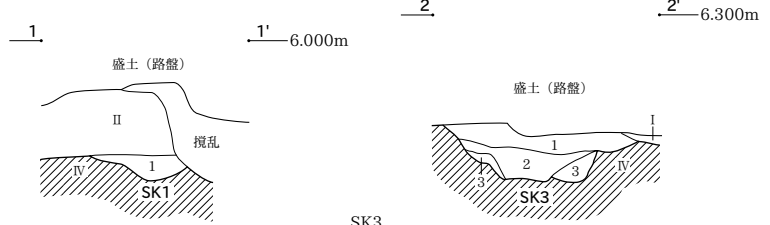




6区SI166遺物出土状況

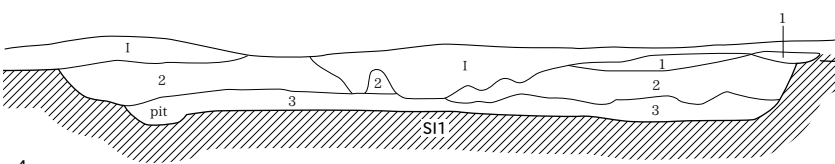
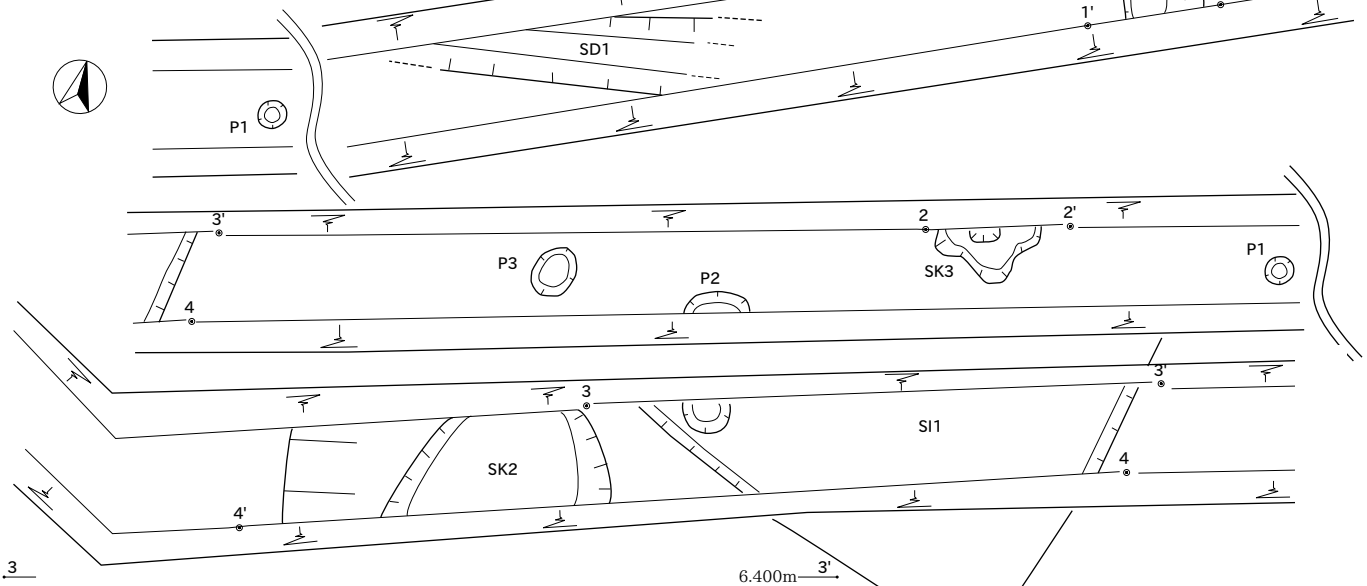


工事立会

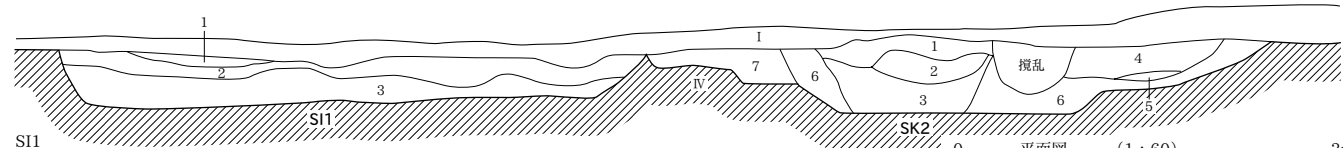


SK1  
1 暗褐色土 II層と比べると暗く、地山ブロックをほとんど含まない。

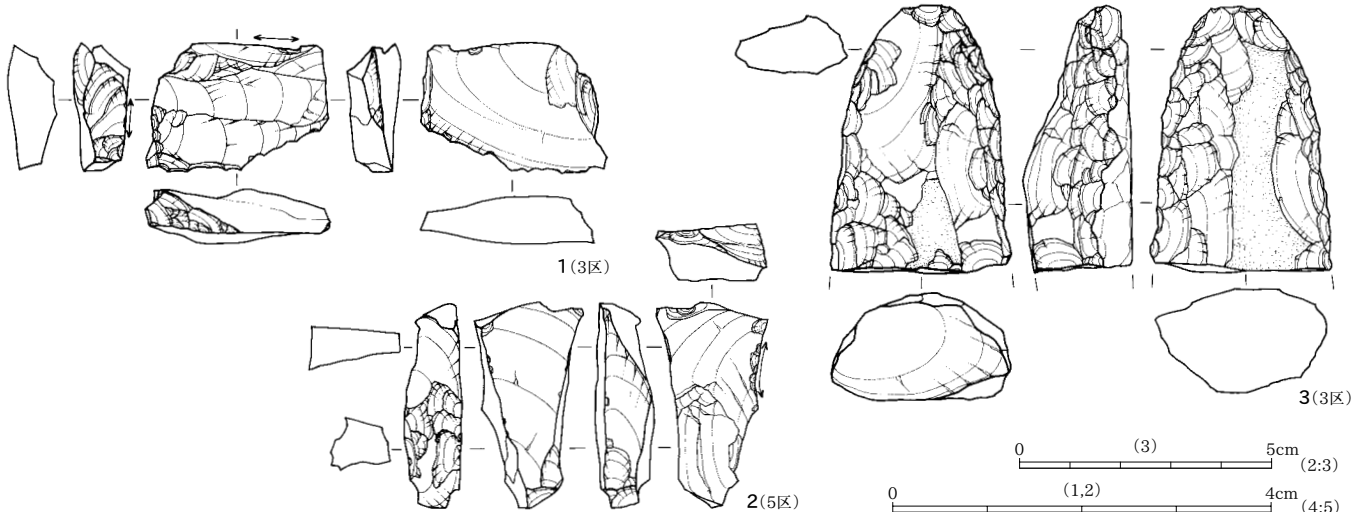
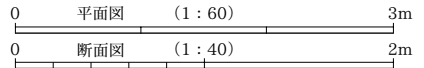
SK3  
1 褐色土 II層を基調とするが、しまりが極めて強い。1層と共通するが、炭化物が極めて多く、しまりがより弱い。  
2 褐色土  
3 明橙色土 しまりが強く、炭化物をまばらに含む。遺物を含む。



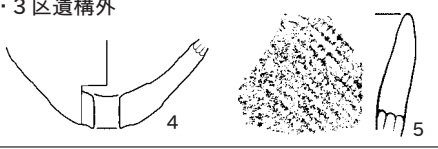
SK2  
1 明褐色土 炭化物まばらで遺物が多い。しまりは弱い。  
2 褐色土 炭化物まばらで遺物が多い。しまりは弱い。  
3 暗褐色土 炭化物・遺物ともに多い。しまりは弱い。  
4 褐色土 炭化物まばらでしまりは弱い。  
5 褐色土 4層と共通するが、ロームブロックが集中。  
6 褐色土 炭化物多く、しまり強い。  
7 明橙色土 ロームを主体とする。炭化物粒子をごくまばらに含む。



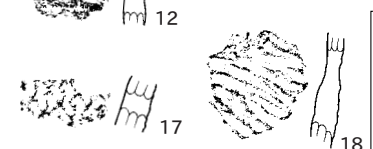
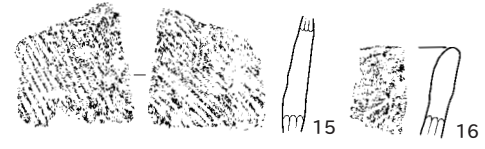
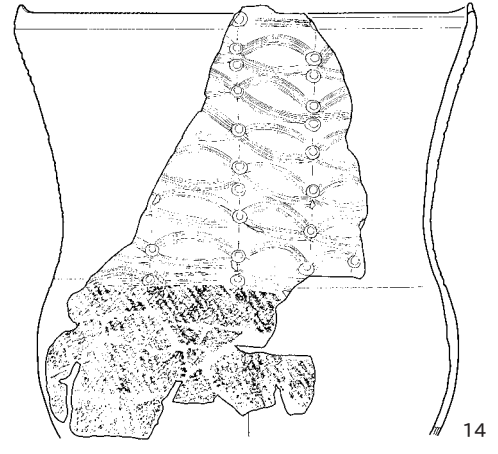
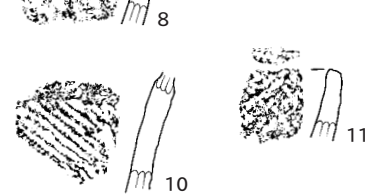
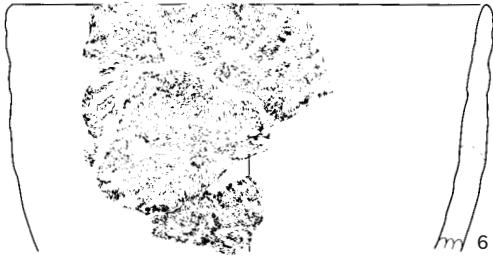
SI1  
1 明褐色粘質シルト ロームブロックを多量に、炭化物をごくまばらに含む。しまり強い。  
2 明橙色土 ロームを主体とする。炭化物粒子・遺物を多量に含む。しまり強い。  
3 明橙色土 ロームを主体とする。炭化物粒子をごくまばらに、遺物を少量含む。しまりは2層より強い。



2・3区遺構外



4区SI14



4区遺構外



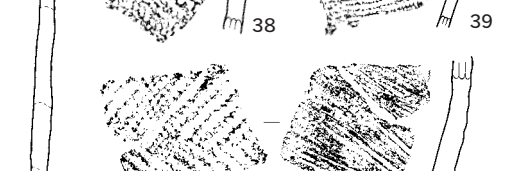
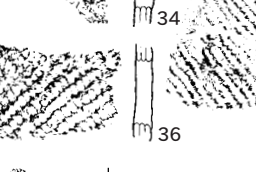
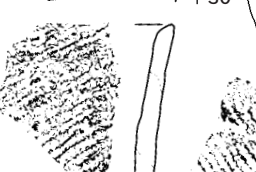
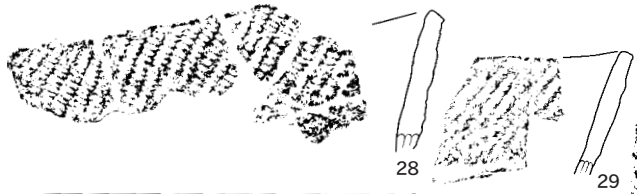
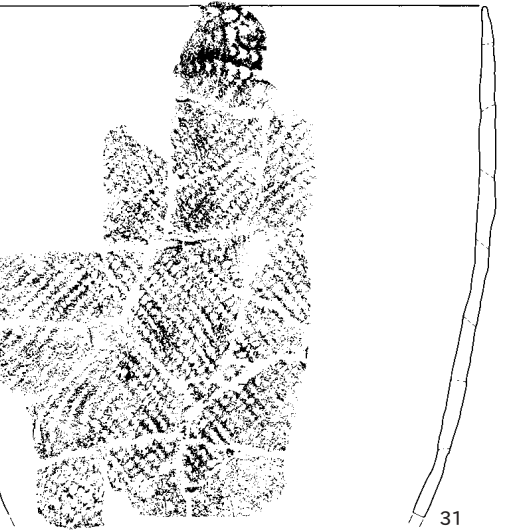
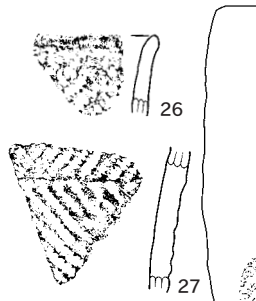
SK34



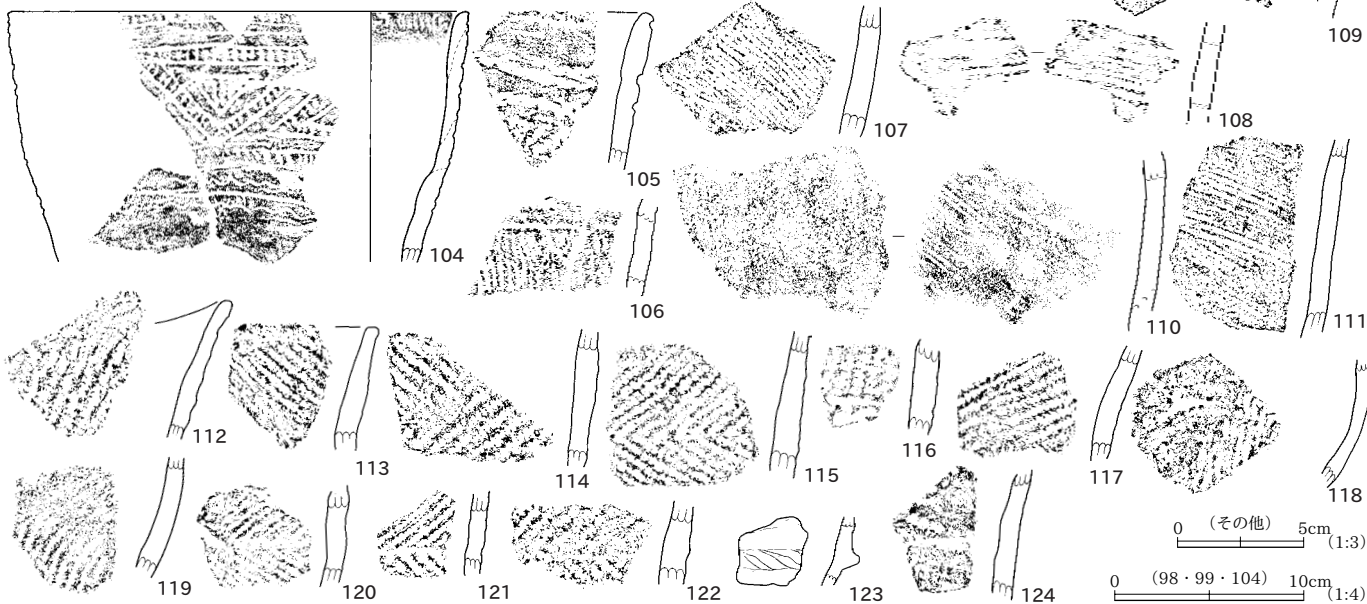
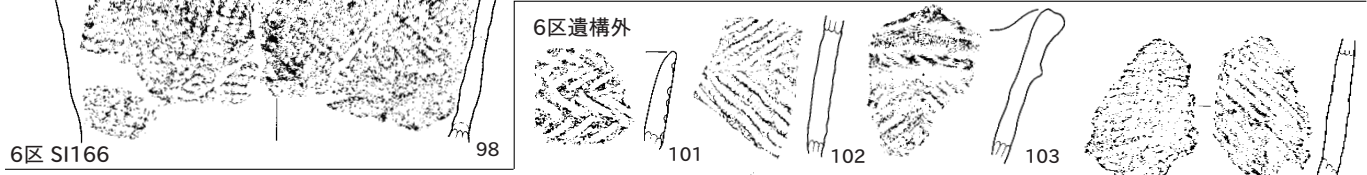
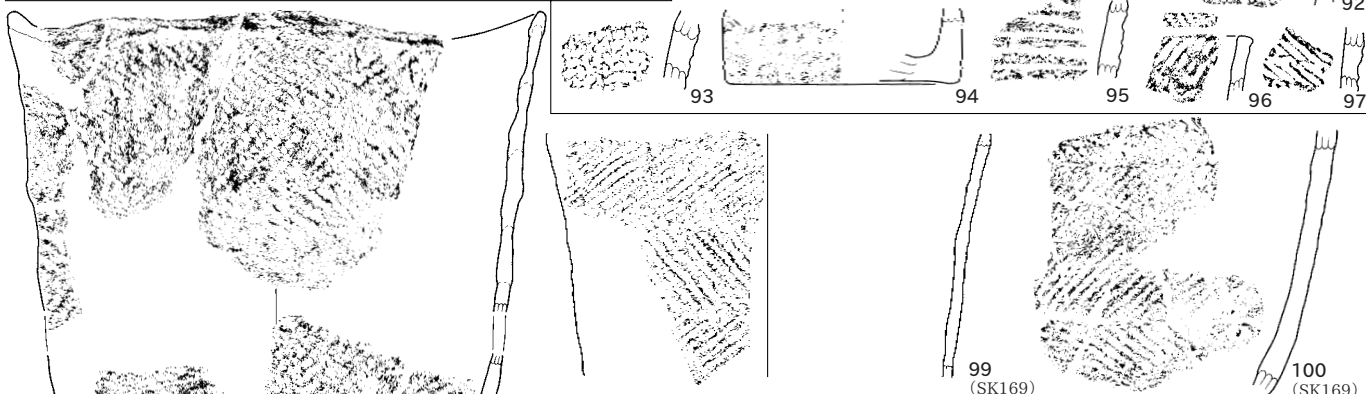
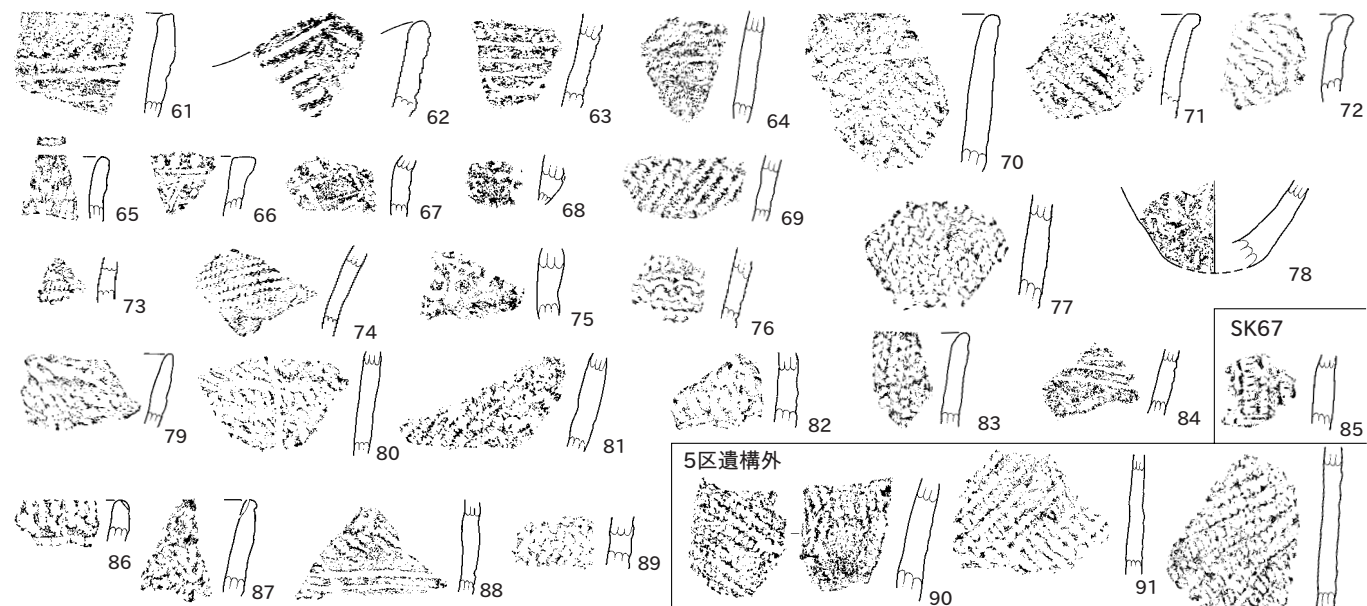
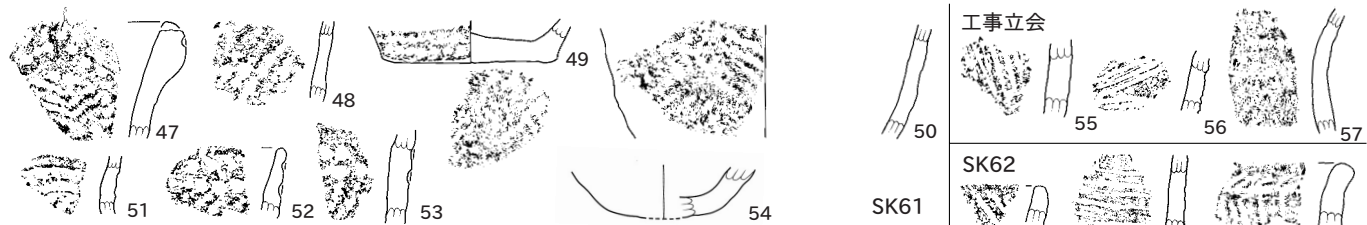
4区遺構外



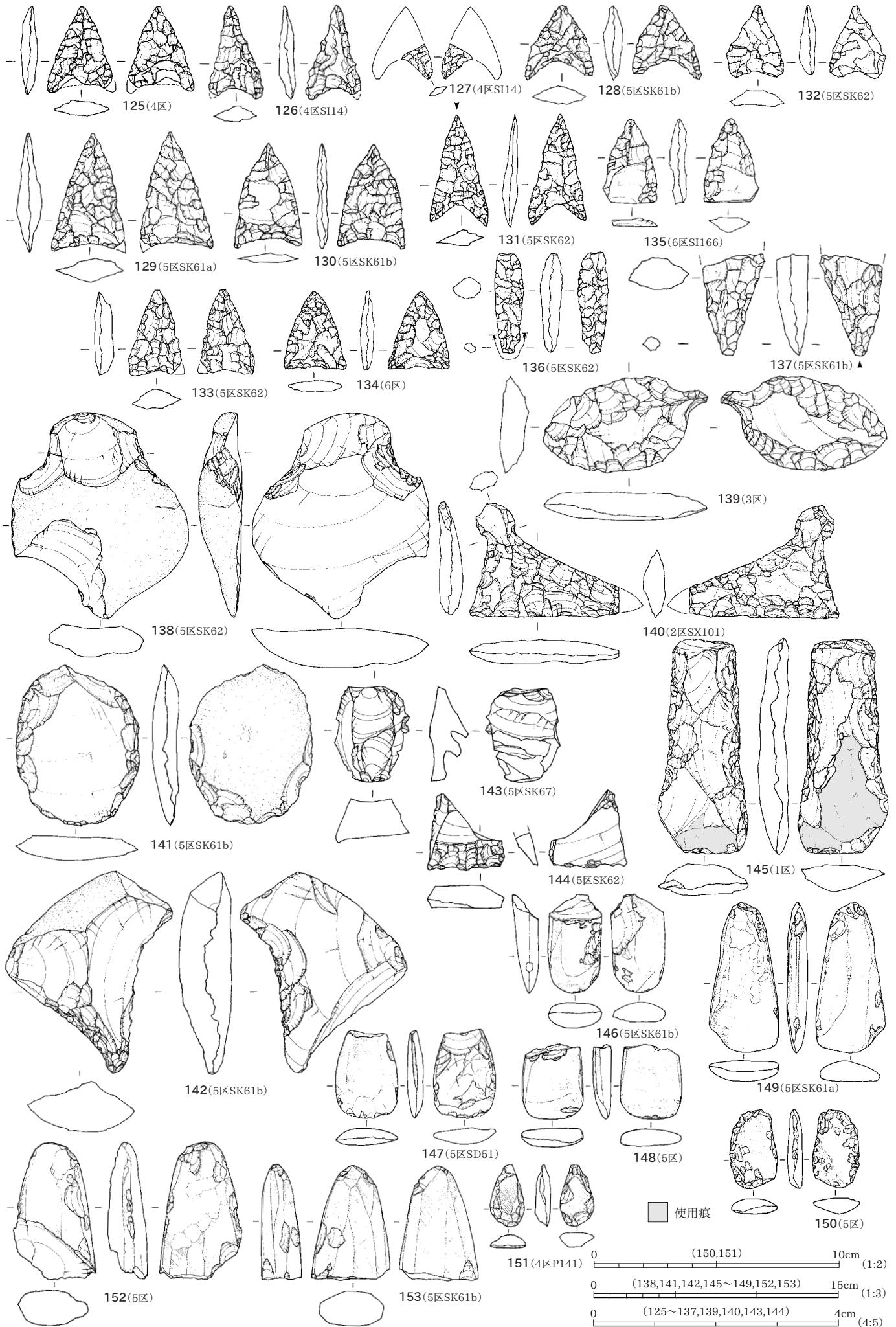
5区SK61 (SK61a: 31・32・36・42, SK61b: その他)

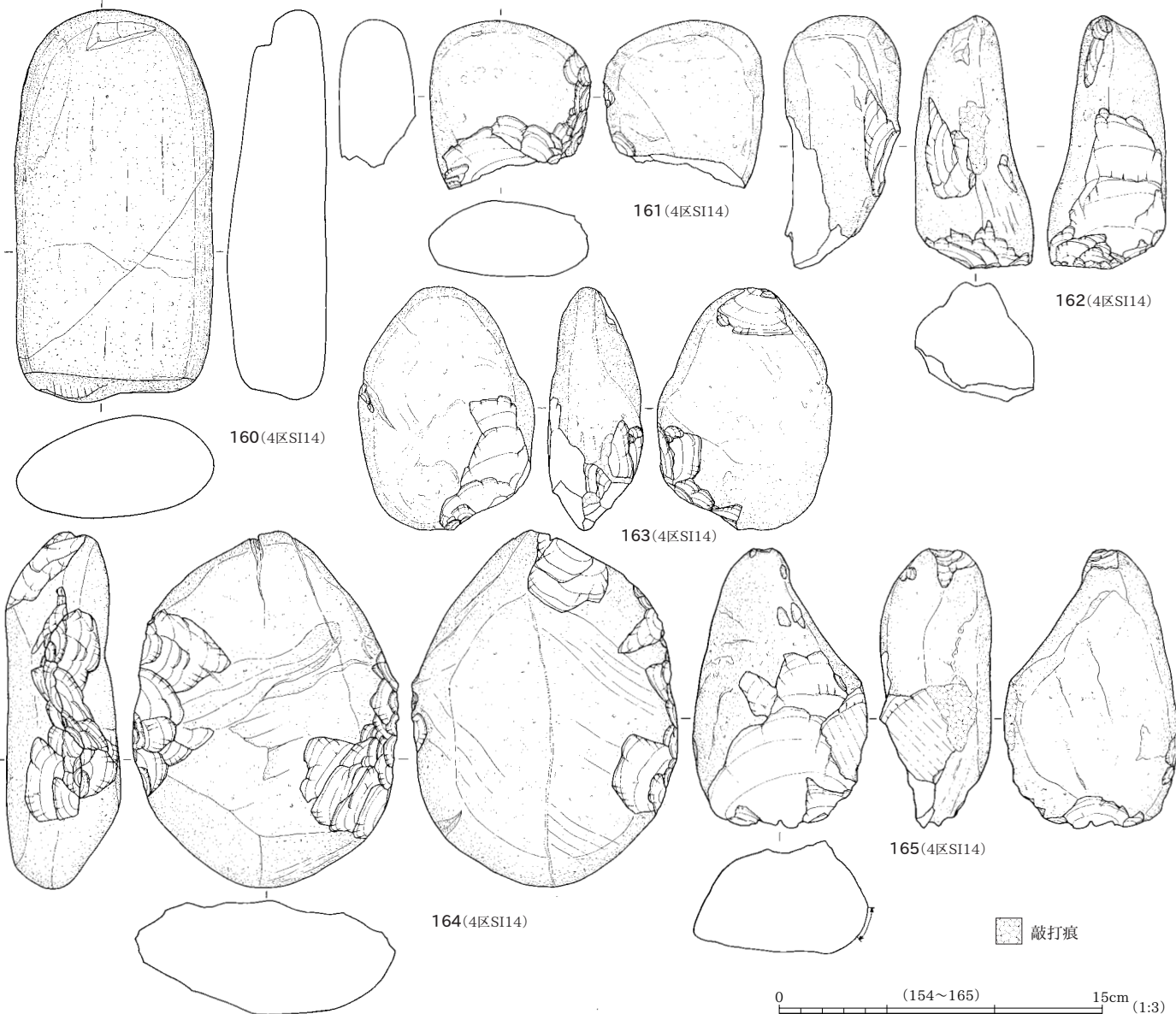
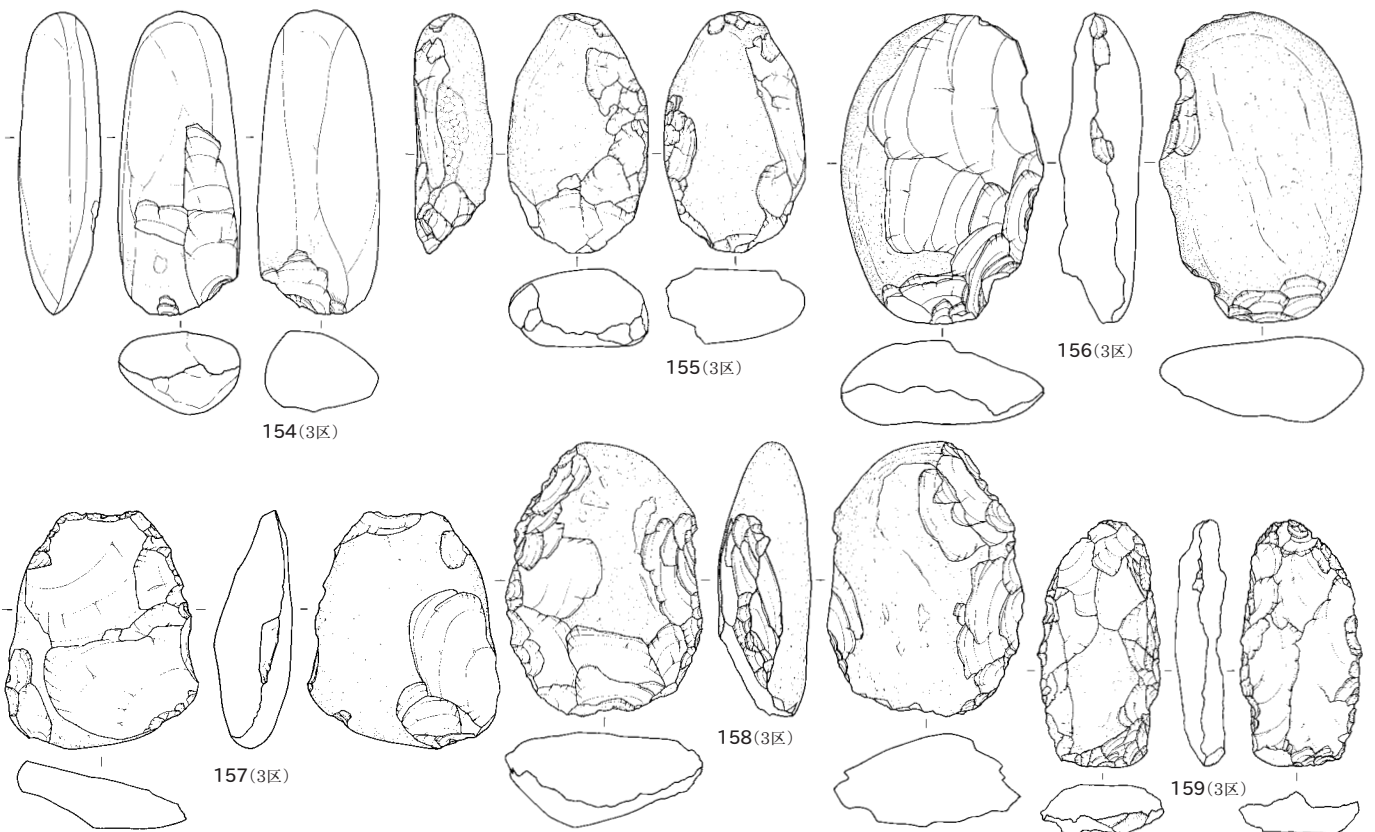


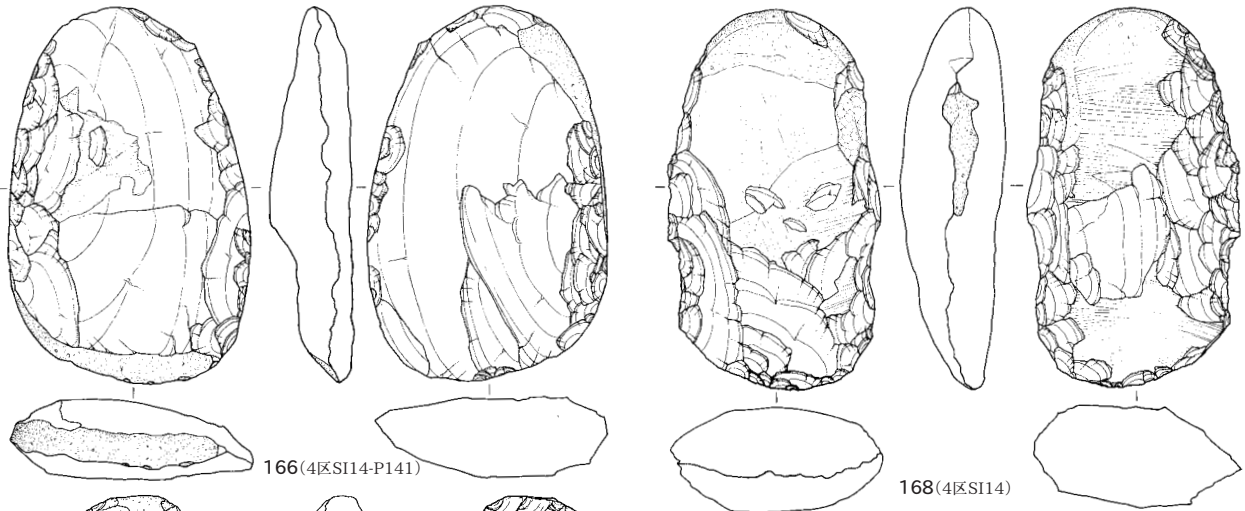
0 (その他) 5cm (1:3)  
0 (14,31,35,39) 10cm (1:4)





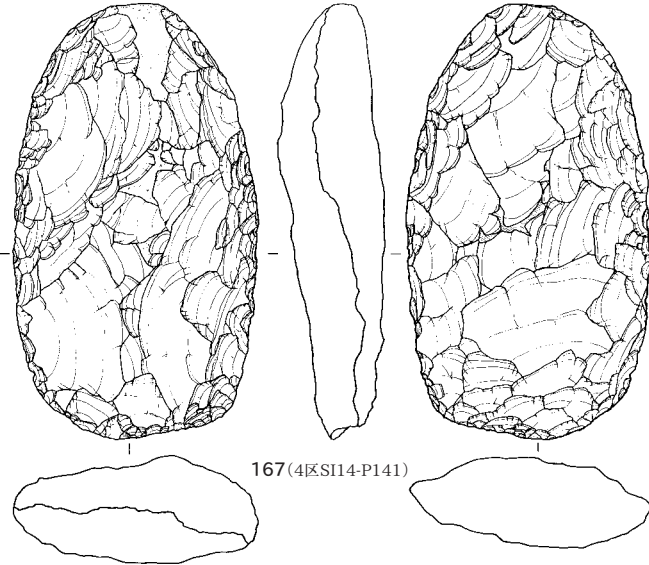




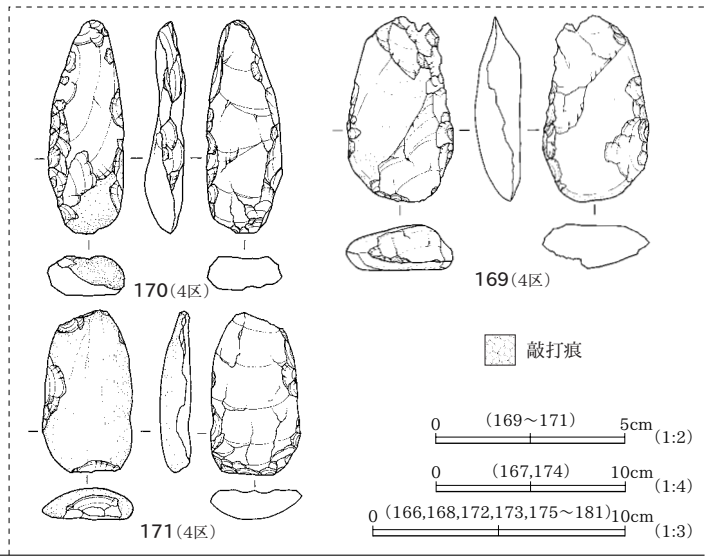


166(4区SI14-P141)

168(4区SI14)



167(4区SI14-P141)



170(4区)

169(4区)

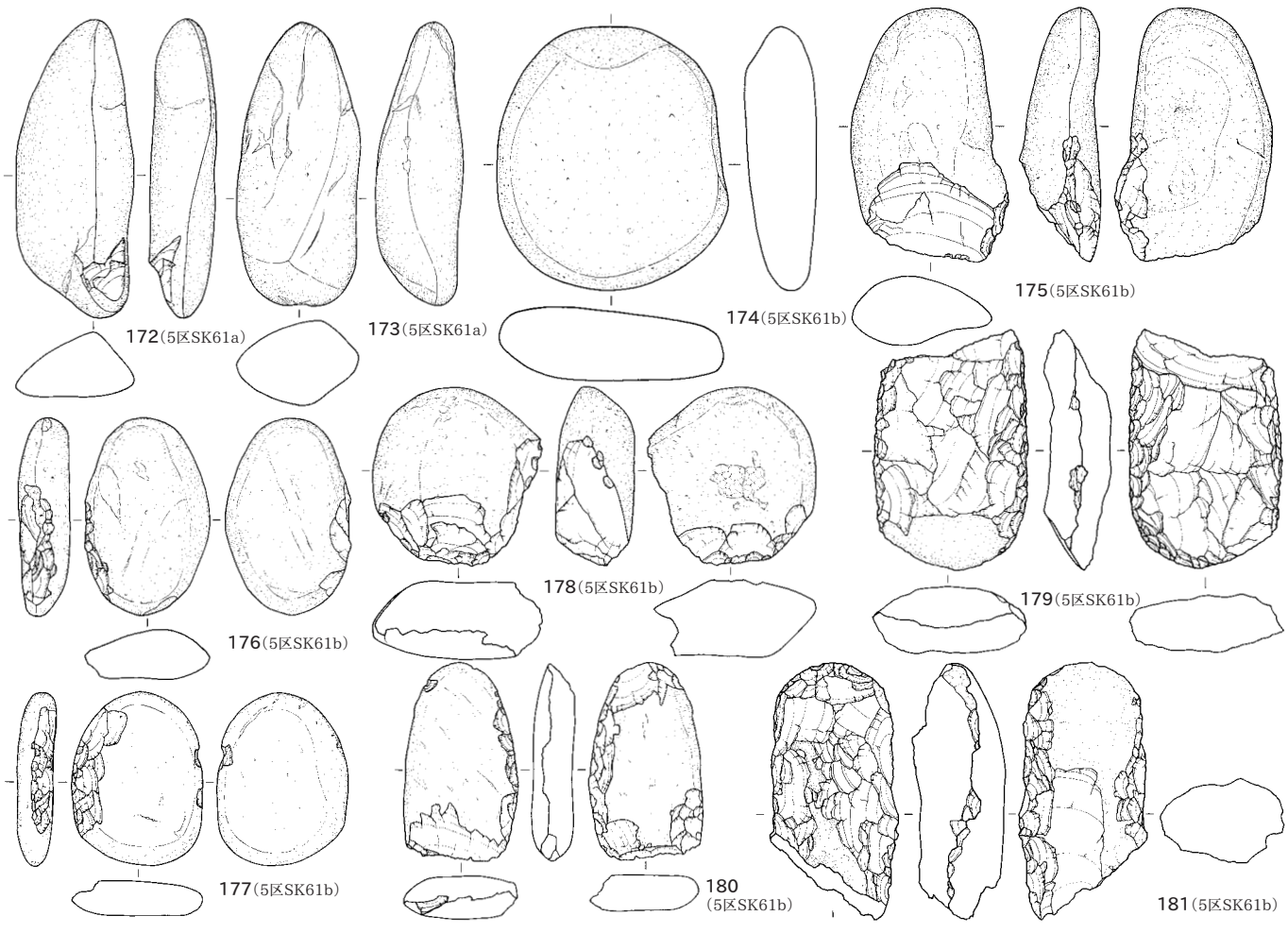
敲打痕

0 (169~171) 5cm (1:2)

0 (167,174) 10cm (1:4)

0 (166,168,172,173,175~181) 10cm (1:3)

171(4区)

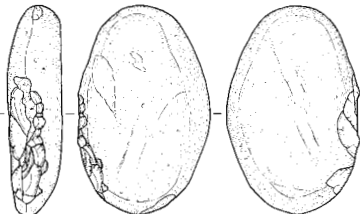


172(5区SK61a)

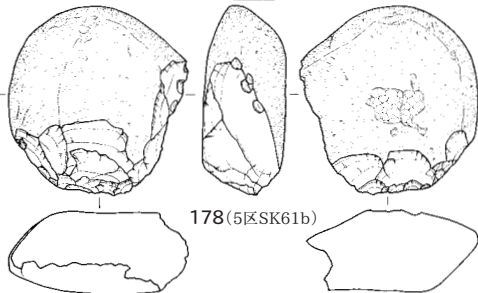
173(5区SK61a)

174(5区SK61b)

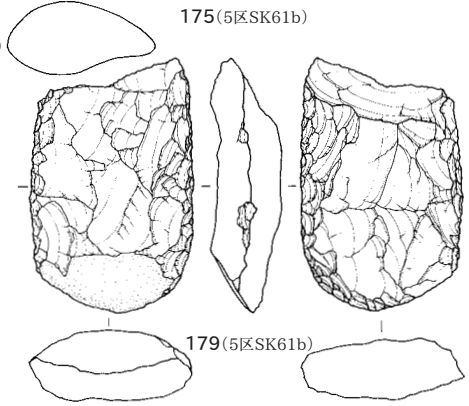
175(5区SK61b)



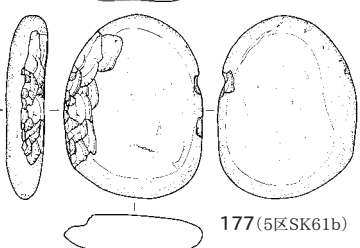
176(5区SK61b)



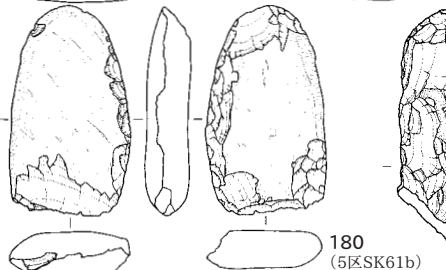
178(5区SK61b)



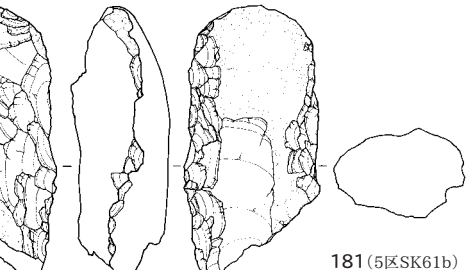
179(5区SK61b)



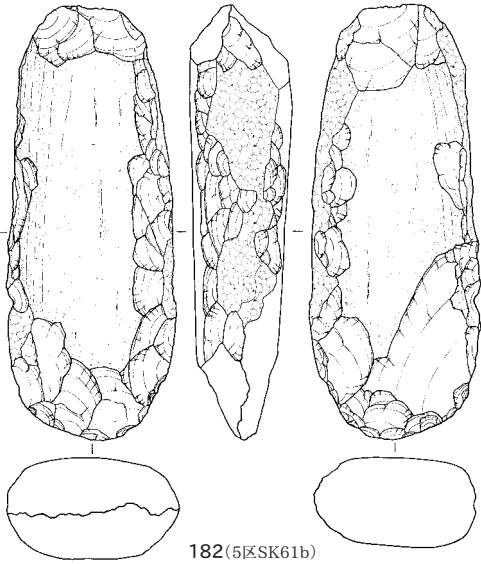
177(5区SK61b)



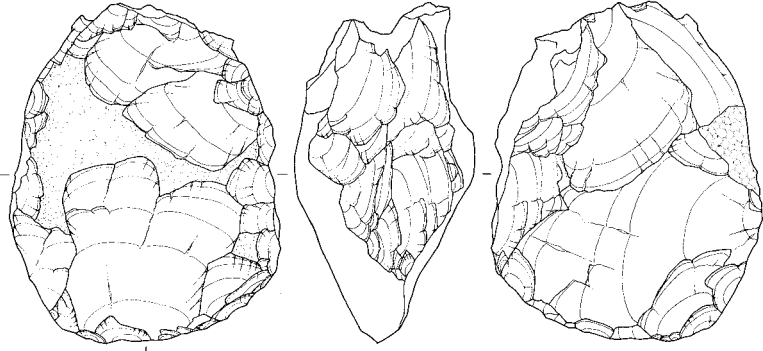
180(5区SK61b)



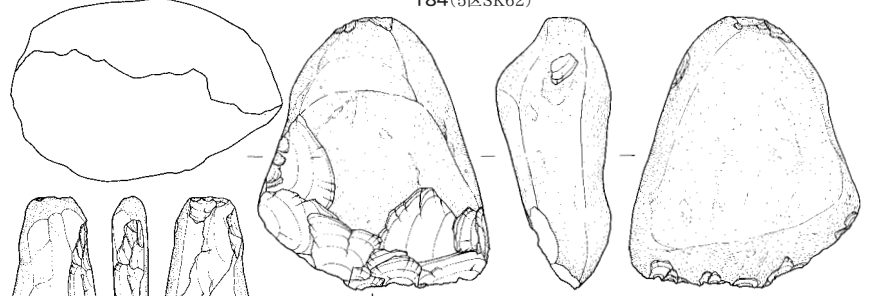
181(5区SK61b)



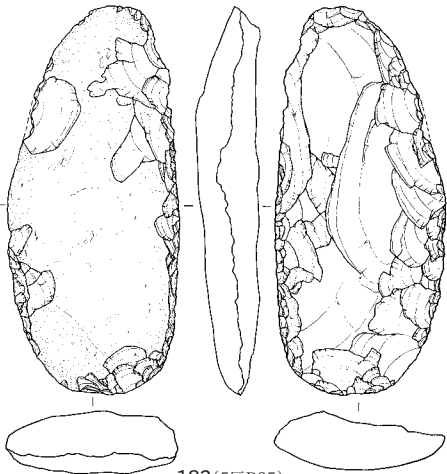
182(5区SK61b)



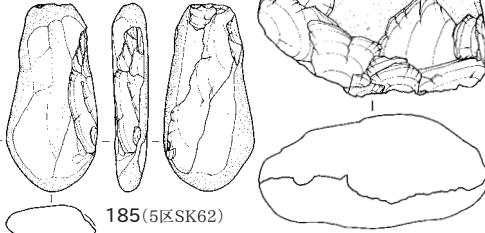
184(5区SK62)



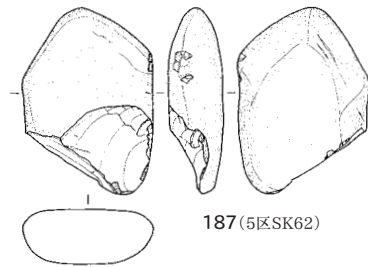
186(5区SK67)



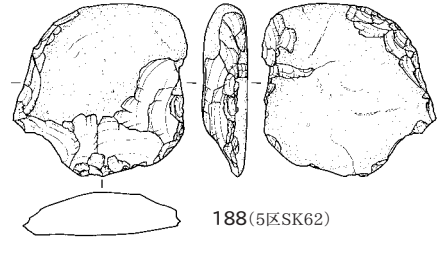
183(5区P65)



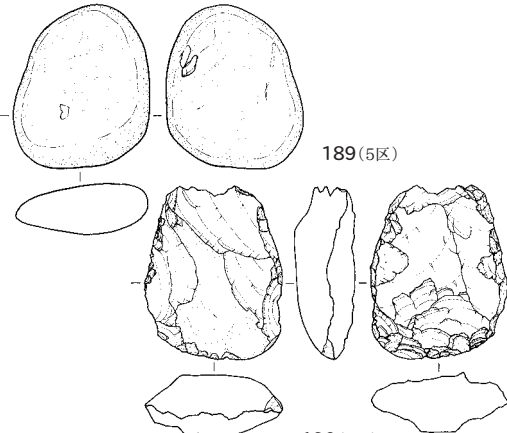
185(5区SK62)



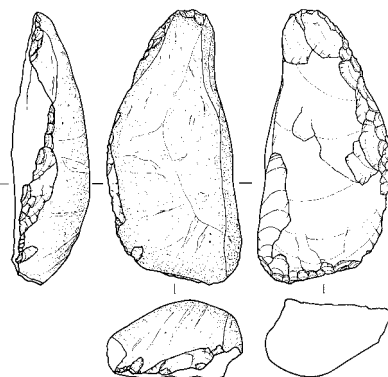
187(5区SK62)



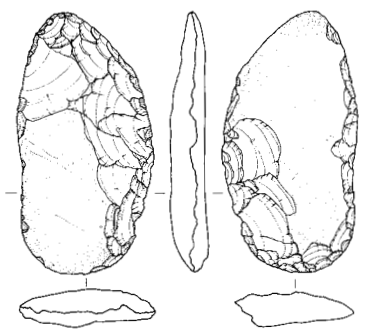
188(5区SK62)



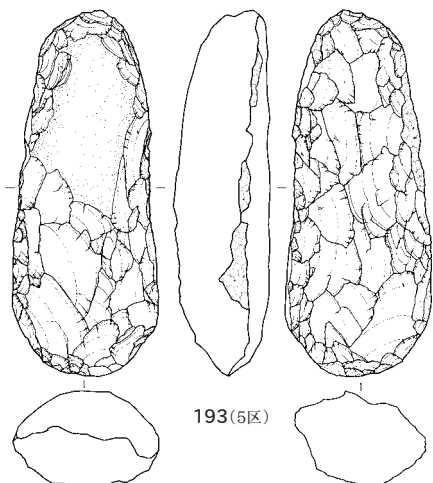
189(5区)



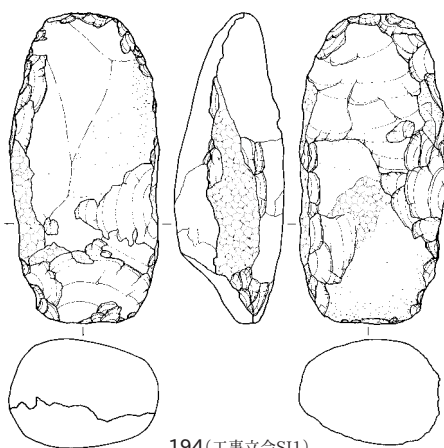
191(5区)



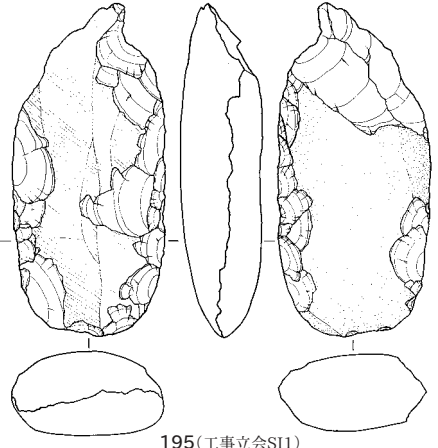
192(3区)



193(5区)



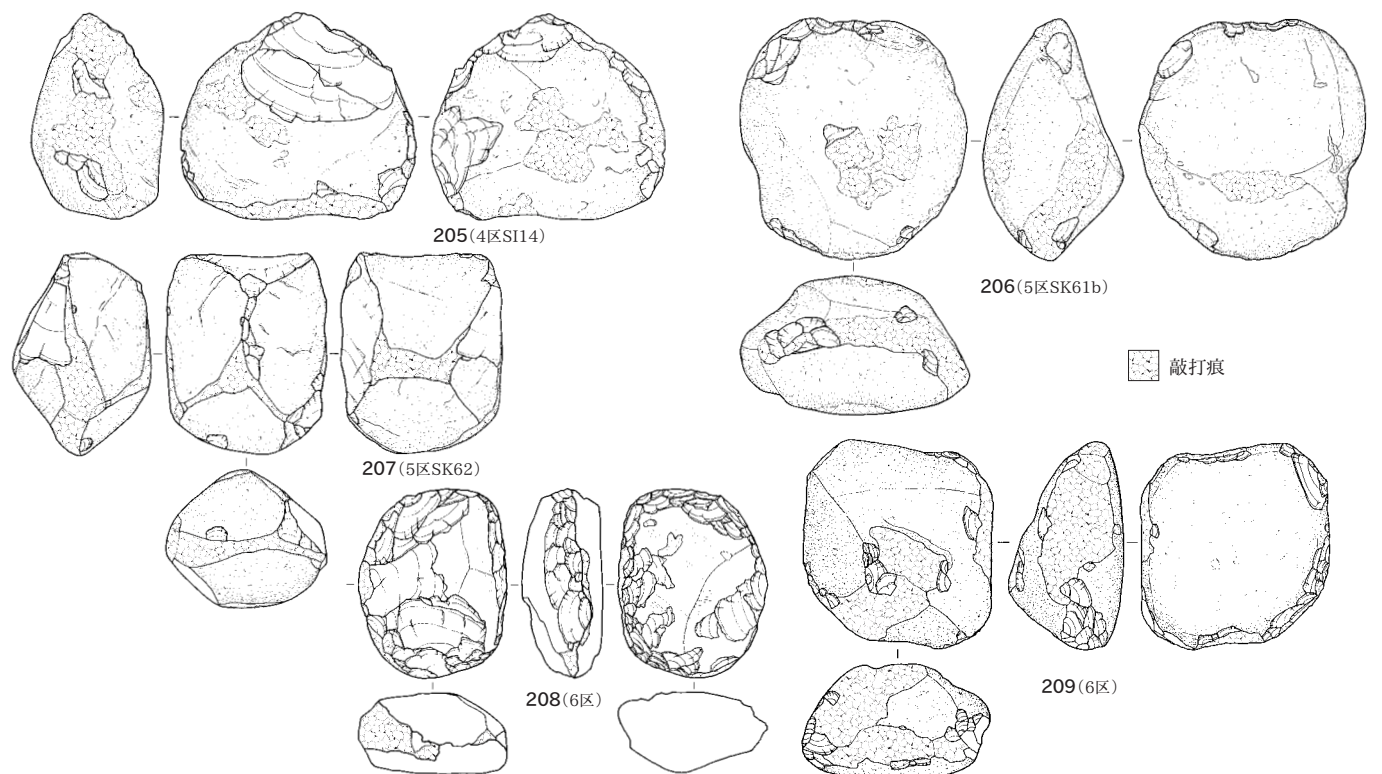
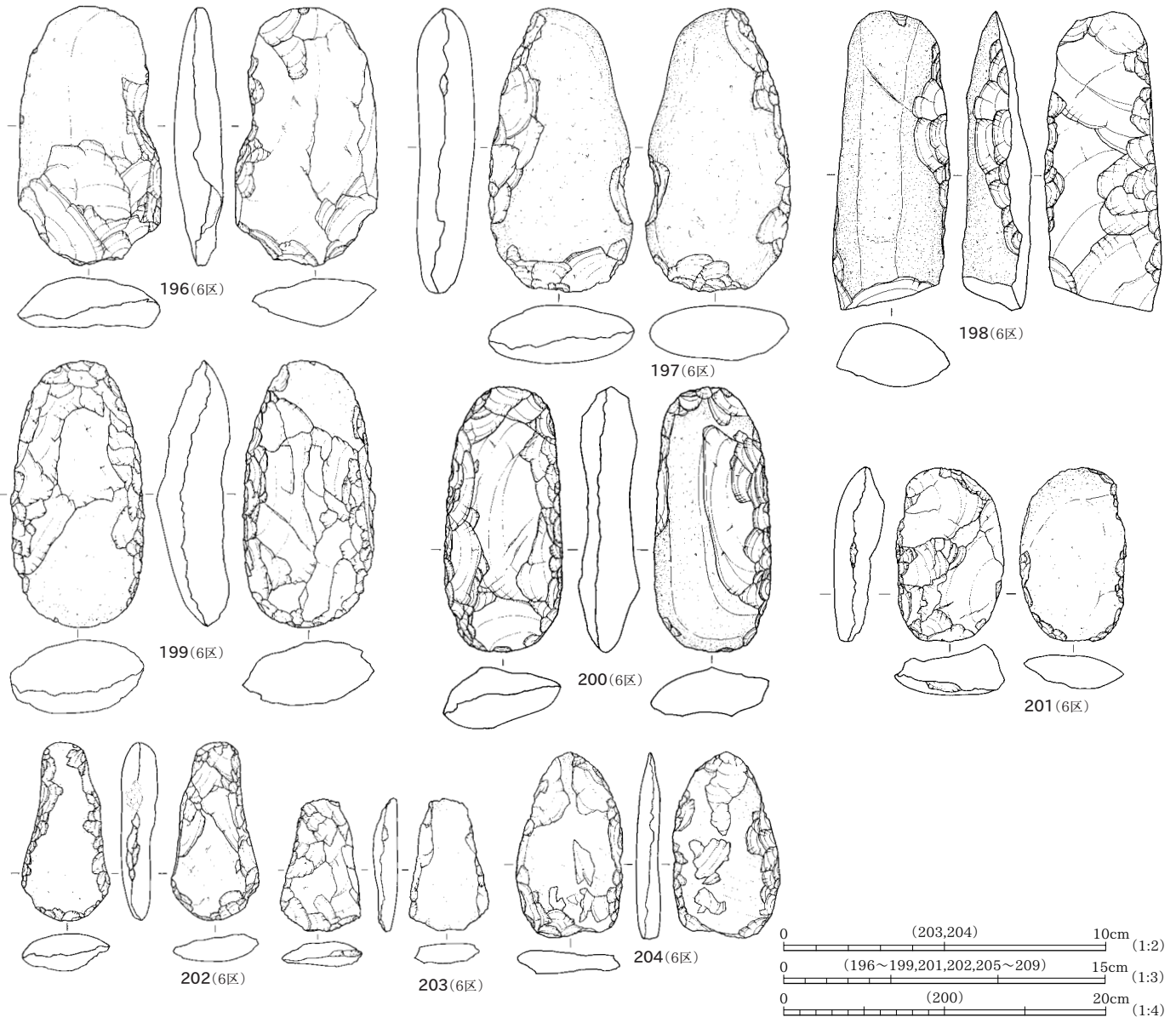
194(工事立会S11)

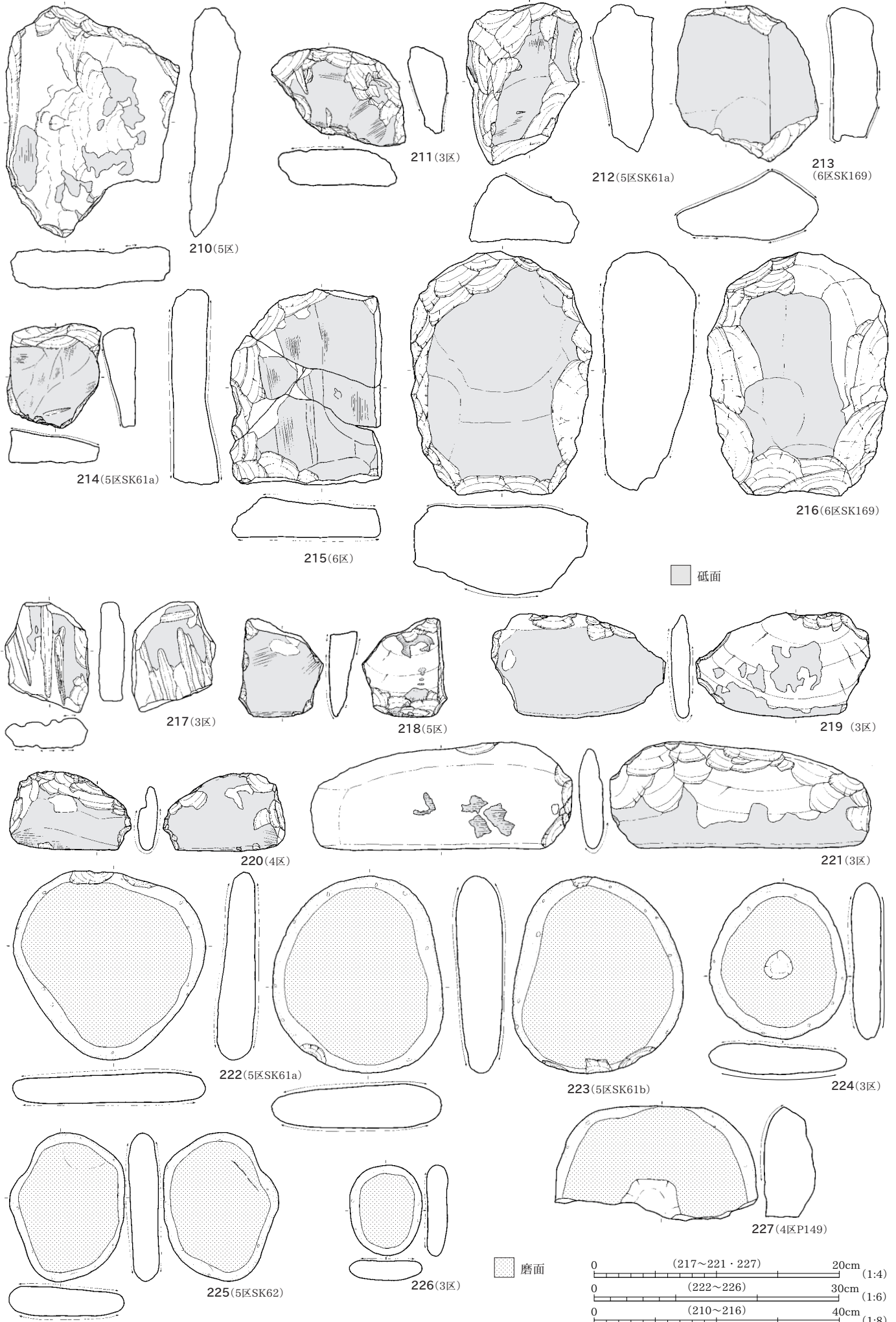


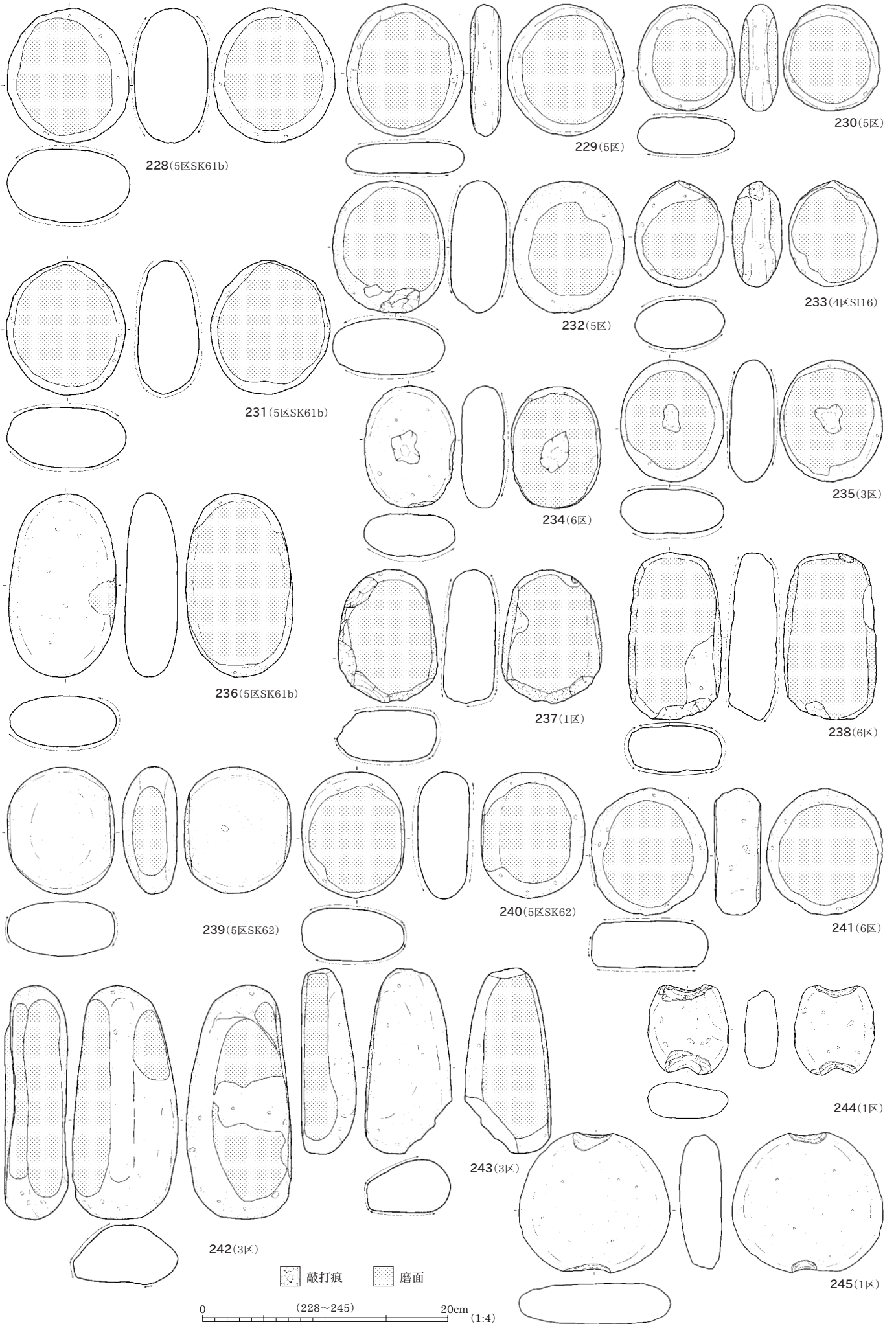
195(工事立会S11)

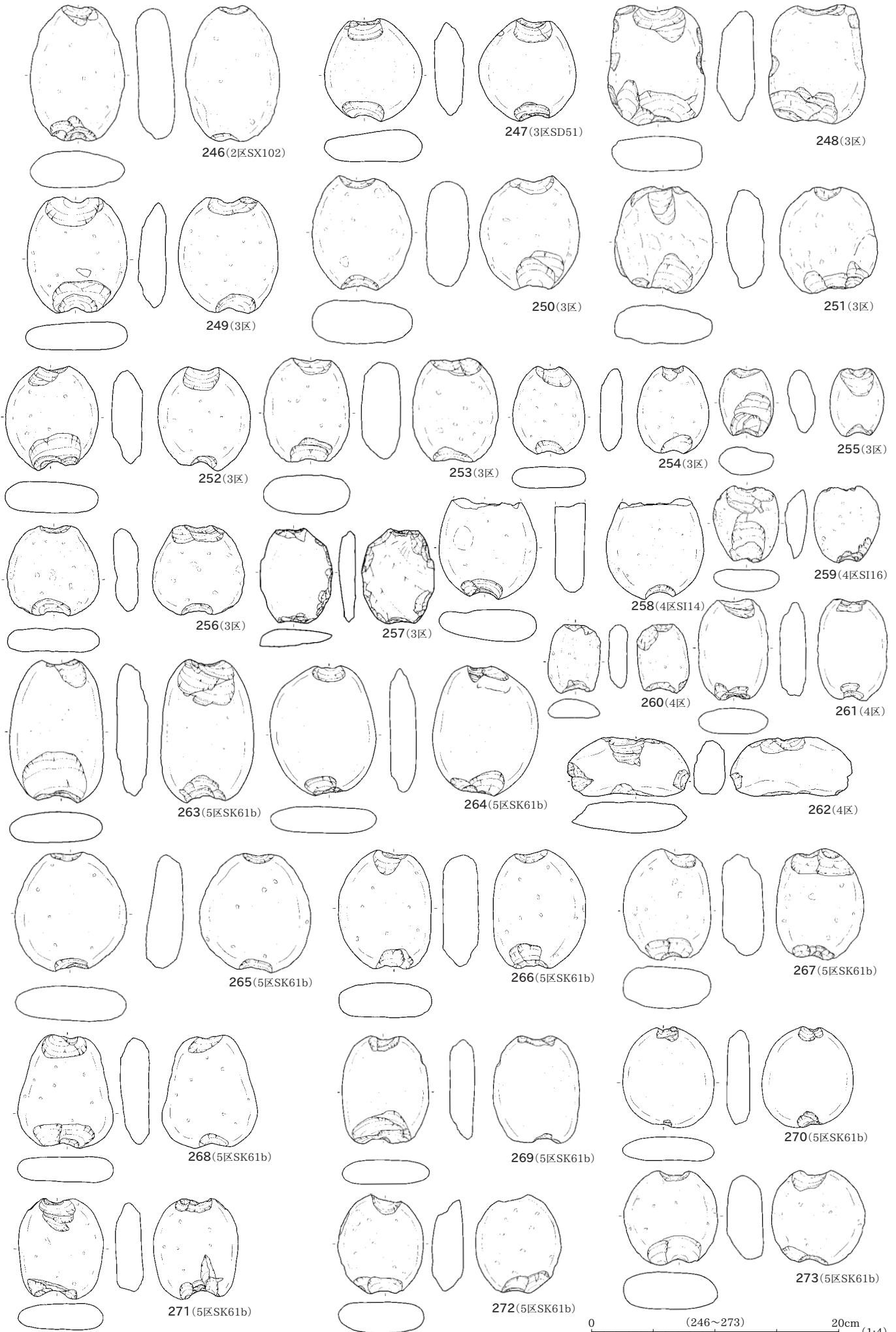
■ 敲打痕

0 (182~195) 15cm (1:3)

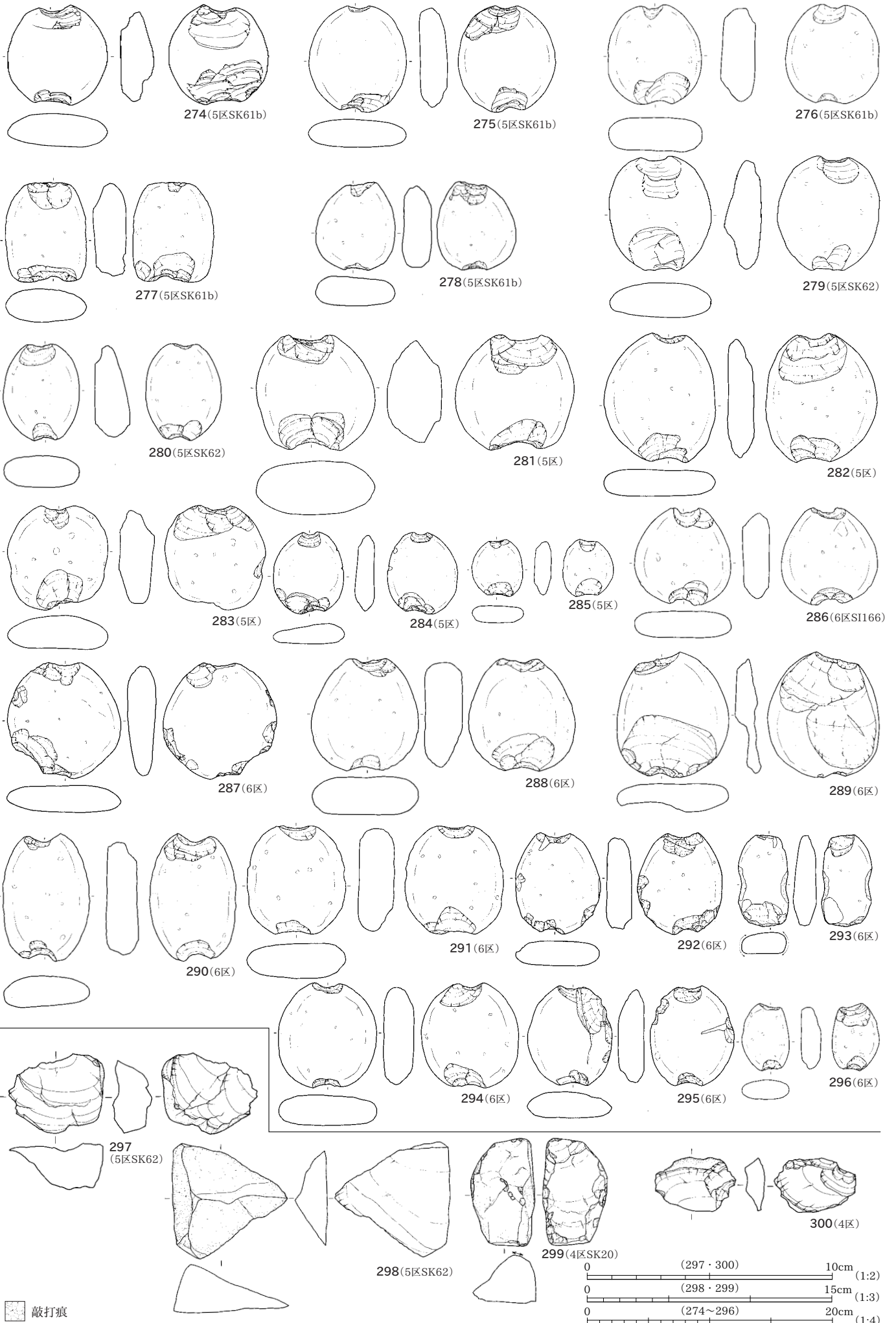


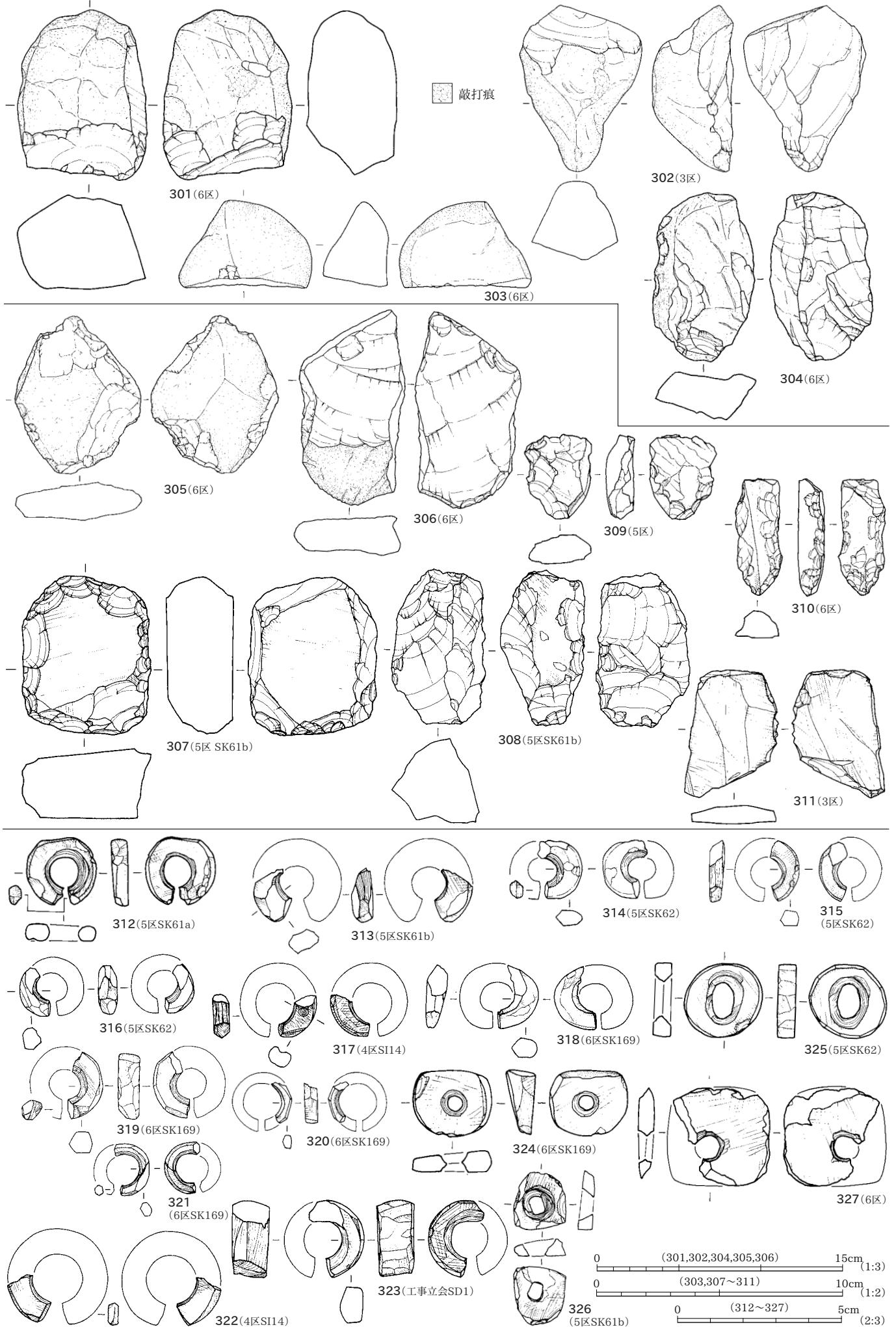


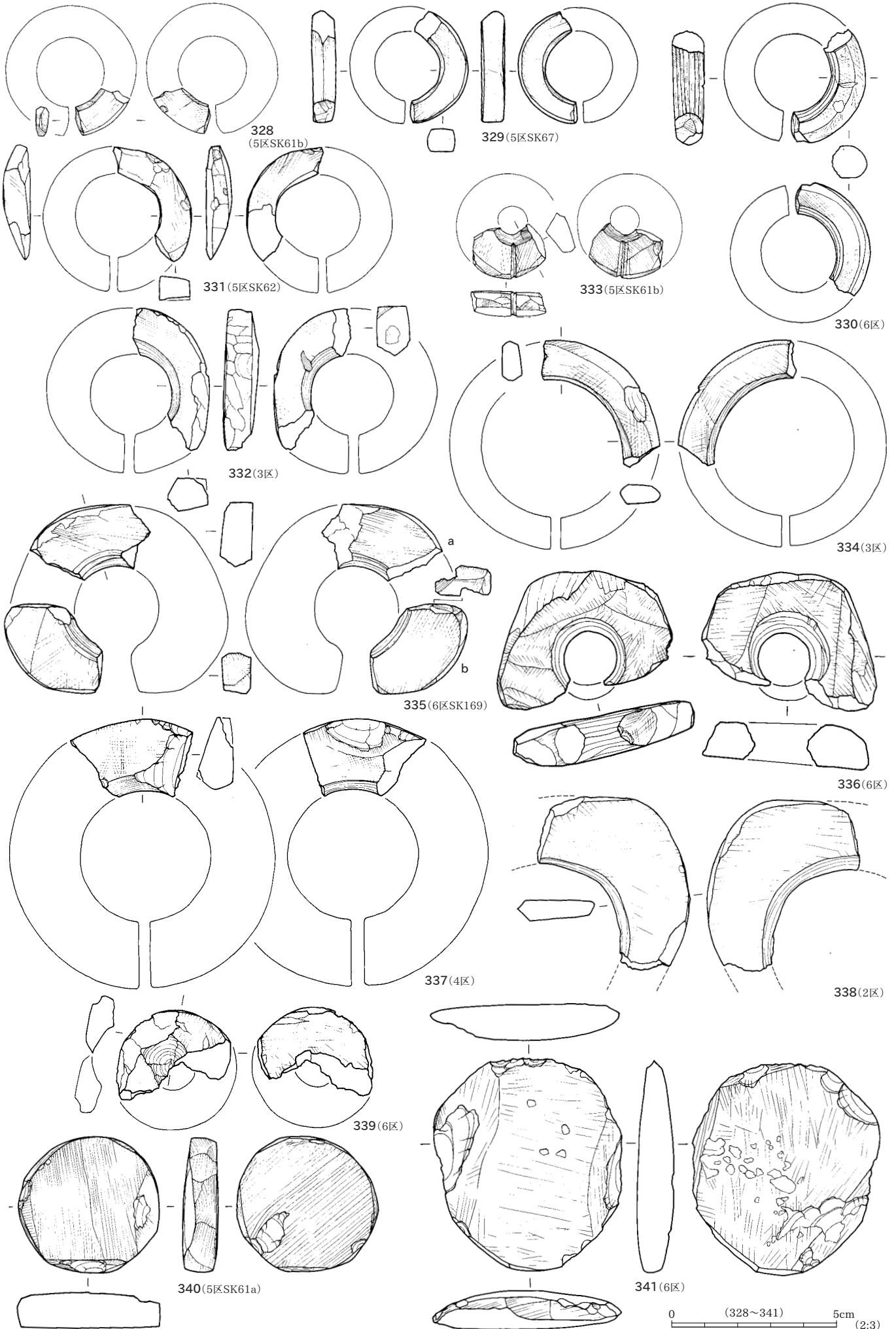


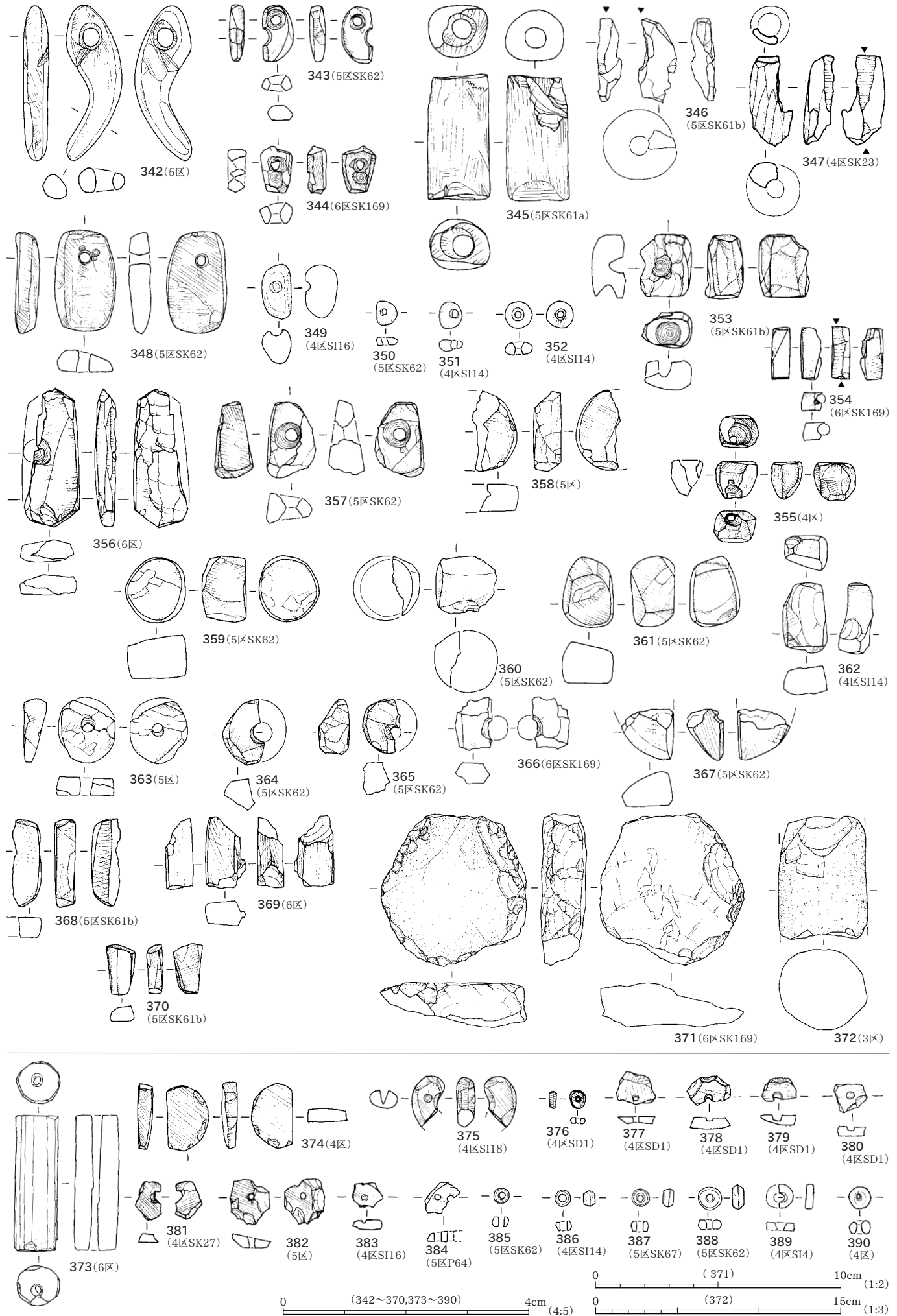


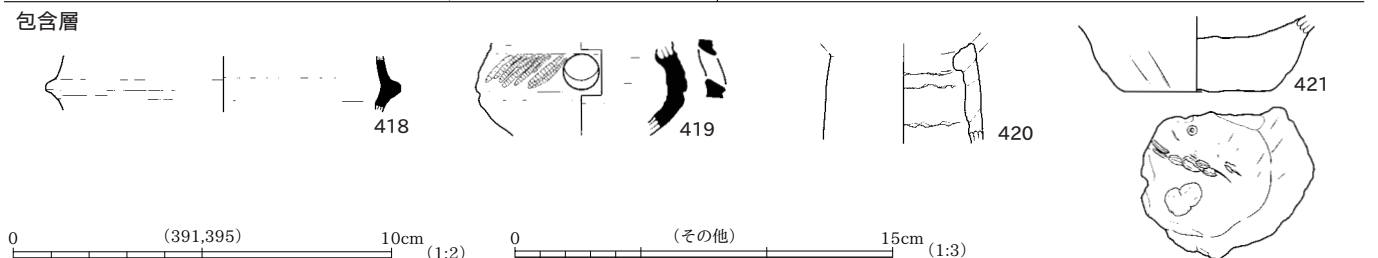
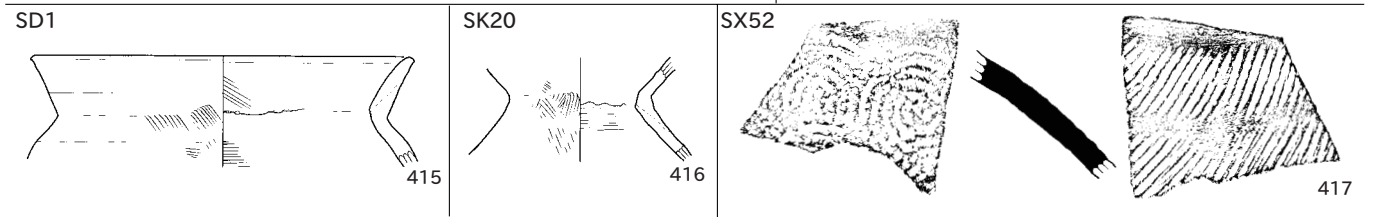
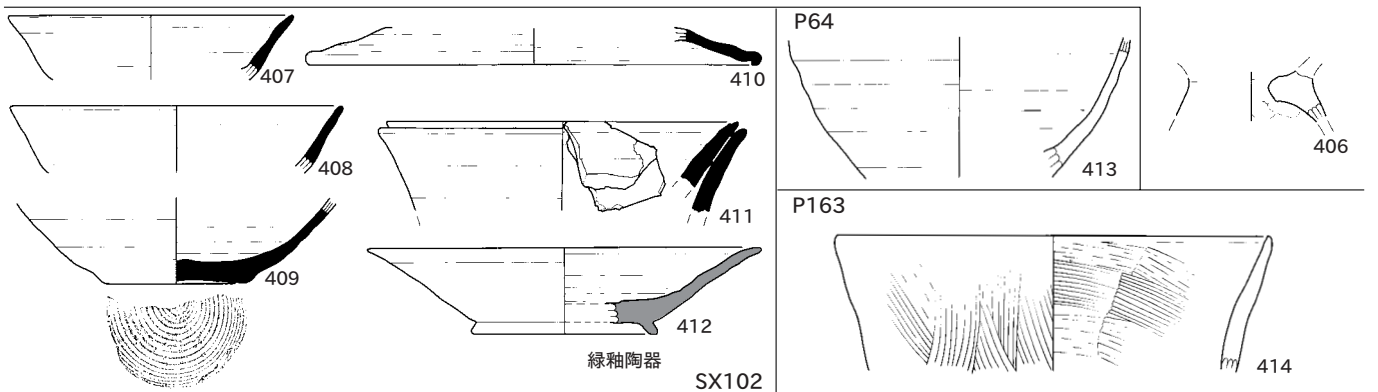
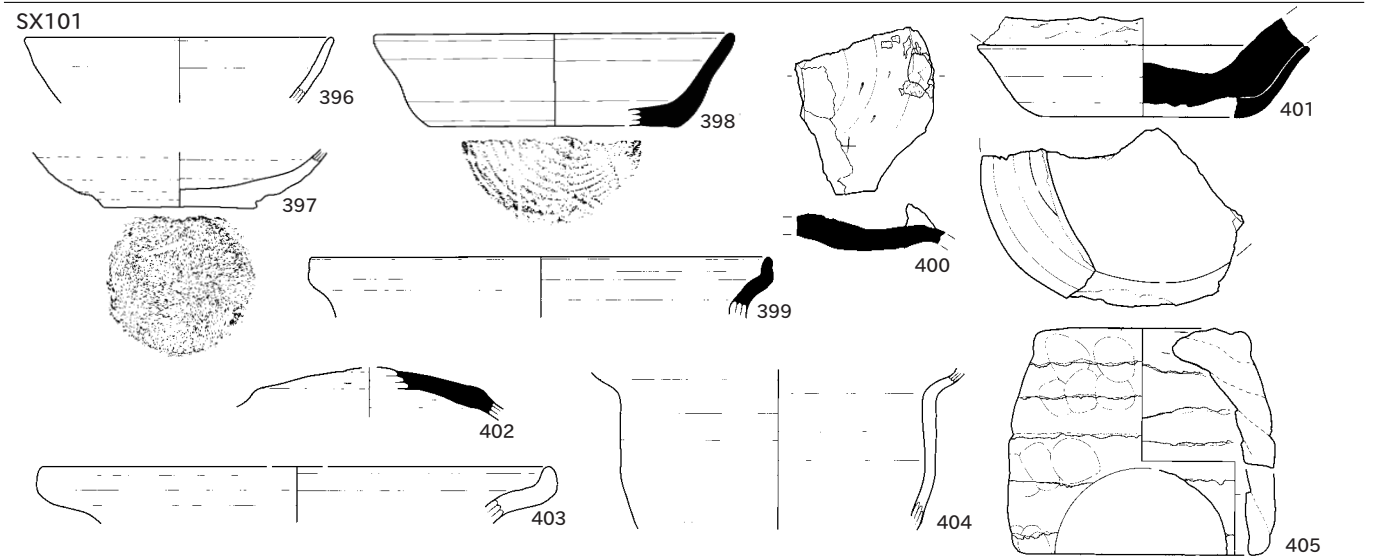
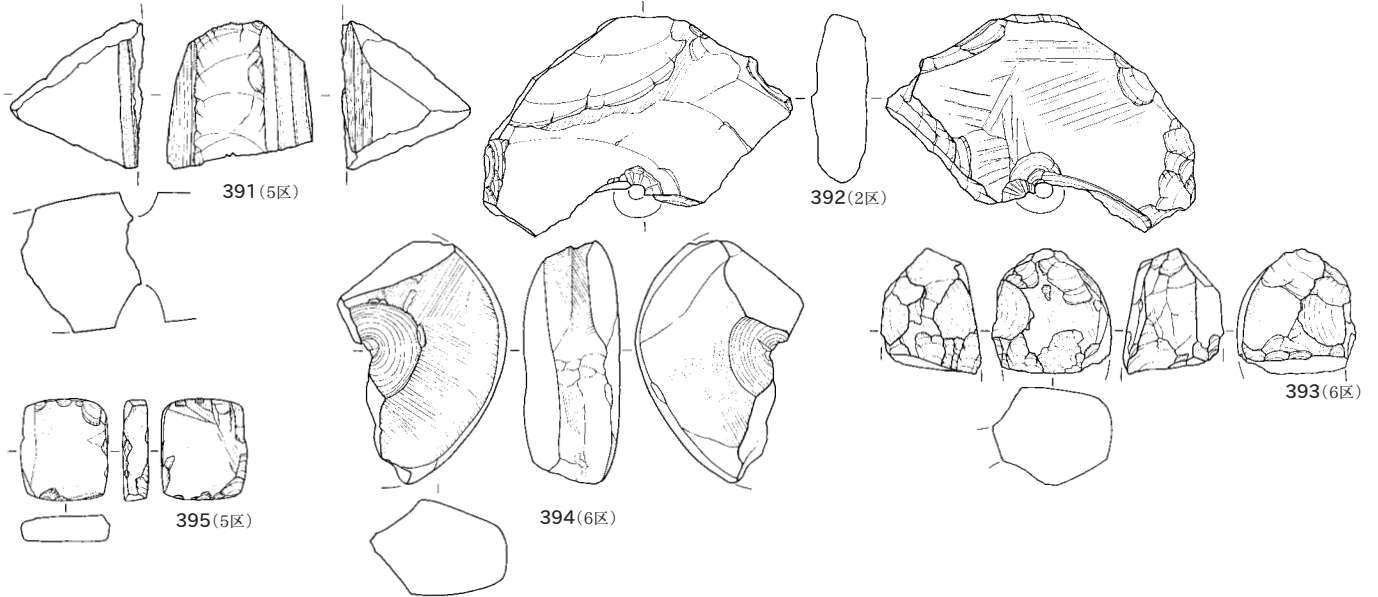






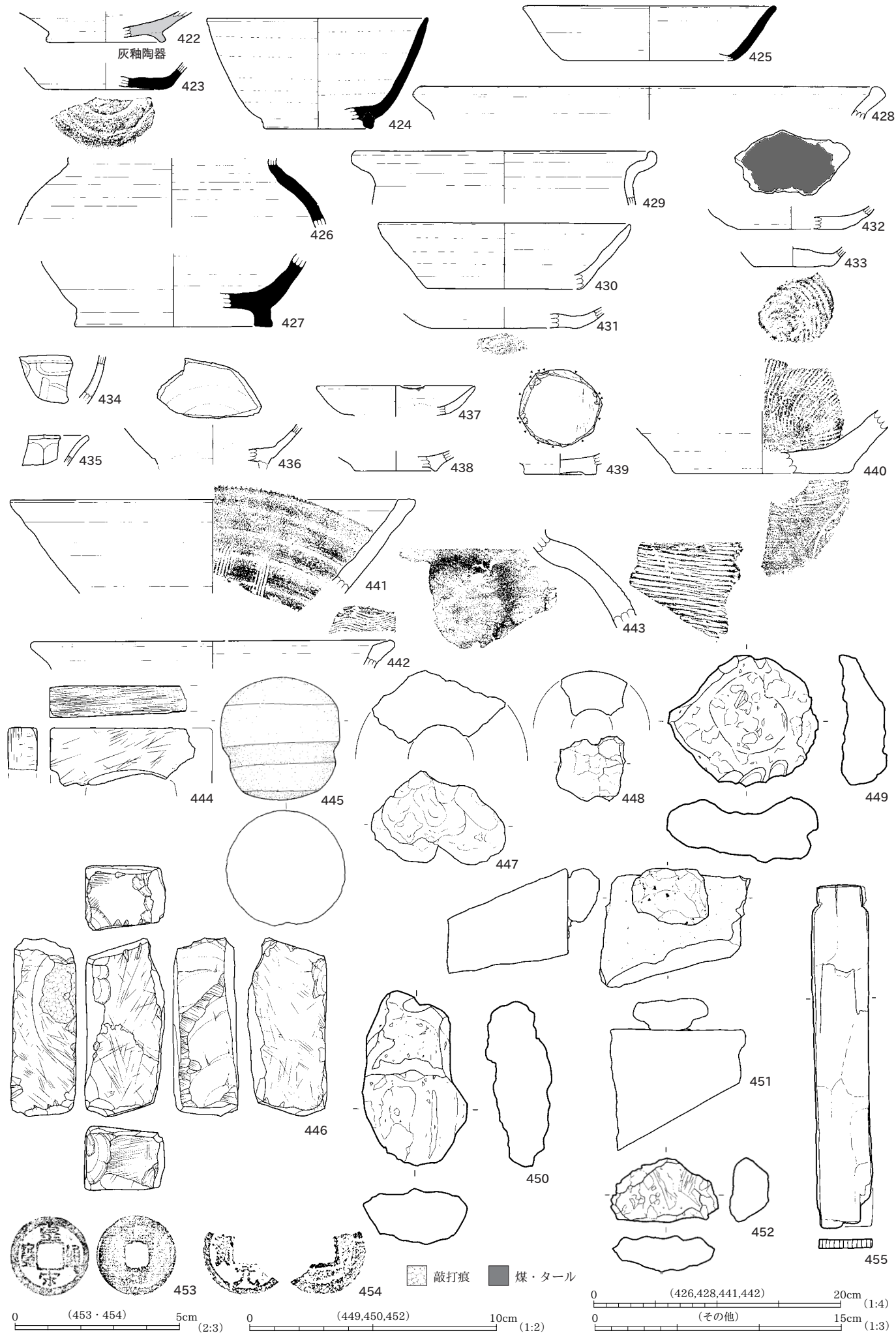






0 (391,395) 10cm (1:2)

0 (その他) 15cm (1:3)





▲上空から見た大角地遺跡と周辺の地形（北東から）



遺跡近景（南西から）



ヒスイ製敲石 (207)



勾玉と丸玉・磬玉 (342・343・350～352)





滑石製装身具の形態的バラエティー



珧質頁岩製の石鏃 (125・126・128・129・131・134)



4区 SI14 完掘（北東から）



4区 SI14 遺物出土状況（北東から）



遺跡近景（北西から）



4区 完掘（南西から）



4区 SI14 遺物出土状況（北東から）



5区 完掘（西から）



5区 SK61b 遺物出土状況（南から）



5区 SK62 4-4'セクション（北西から）



5区 SK62 3-3'セクション（南西から、右側の遺物はヒスイ製敲石 207）



6区 完掘（南西から）



1区 調査前近景（北東から）



1区 完掘（南西から）



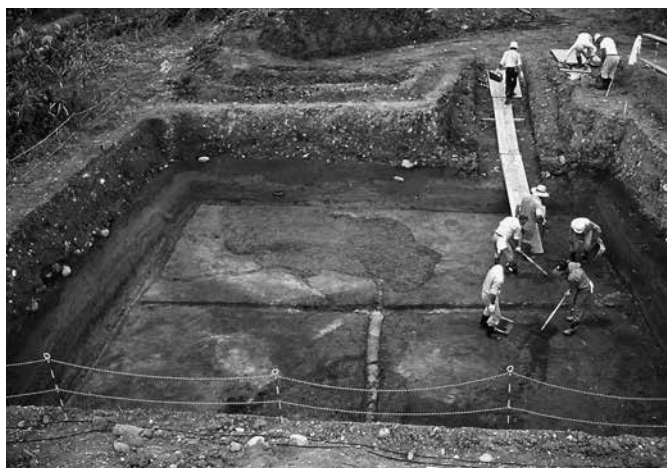
1区 基本層序（北から）



2区 完掘（北東から）



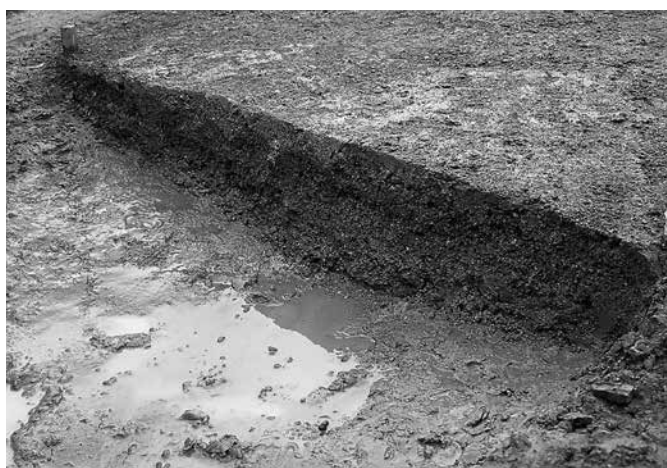
2区 完掘（北から）



2区 SX101・SX102 検出状況（北東から）



2区 SX101 2-2'セクション（北東から）



2区 SX101 3-3'セクション（南から）



3区 完掘 (北から)



3区 基本層序 (東から)



3区 杭列検出状況 (1-1'セクション) (東から)



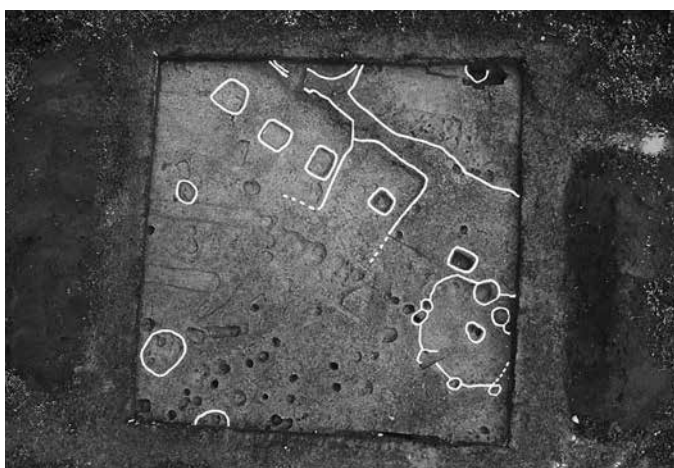
SD51 完掘 (北西から)



3区 SX52 (土留杭) 検出状況 (西から)



4区・5区・6区 完掘



4区 完掘



4区 SI2 完掘 (南西から)



4区 SI14 18-18'セクション(北から)



4区 SI14 17-17'セクション(東から)



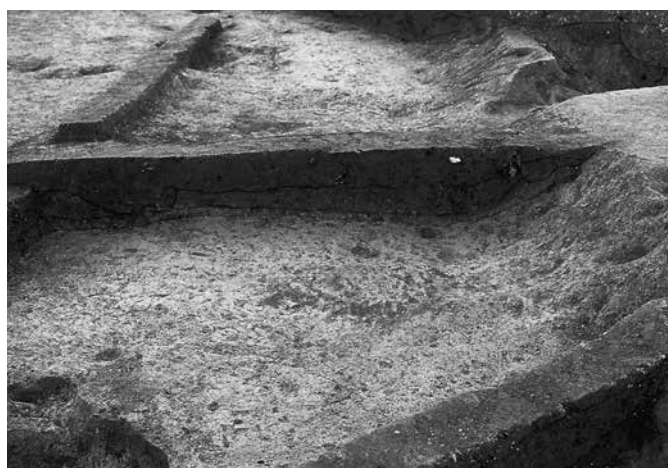
4区 SI14 遺物出土状況(東から)



4区 SI14 遺物出土状況(北東から)



4区 SI16 1-1'セクション(北から)



4区 SI16 14-14'セクション(西から)



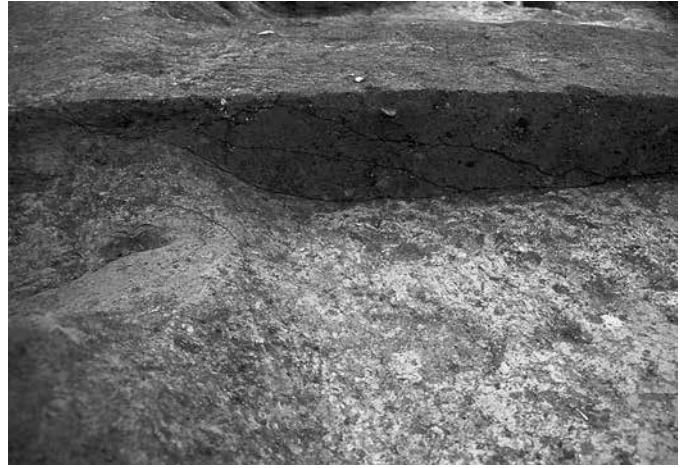
4区 SI16・SI18 12-12'セクション(西から)



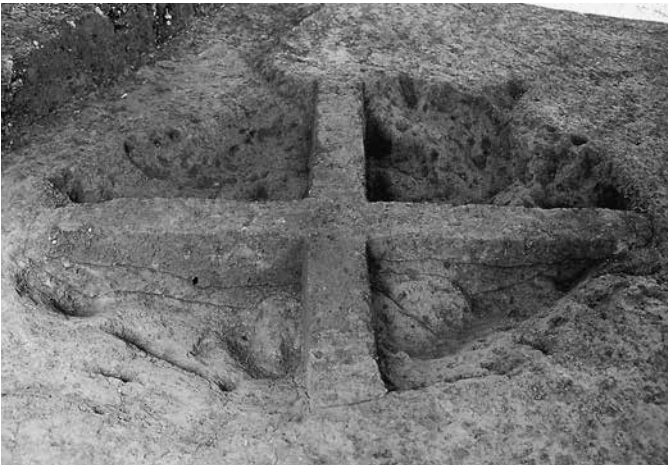
4区 SI16・SK29 13-13'セクション(南から)



4区 SI16 14-14'セクション(西から)



4区 SI16セクション(東から)



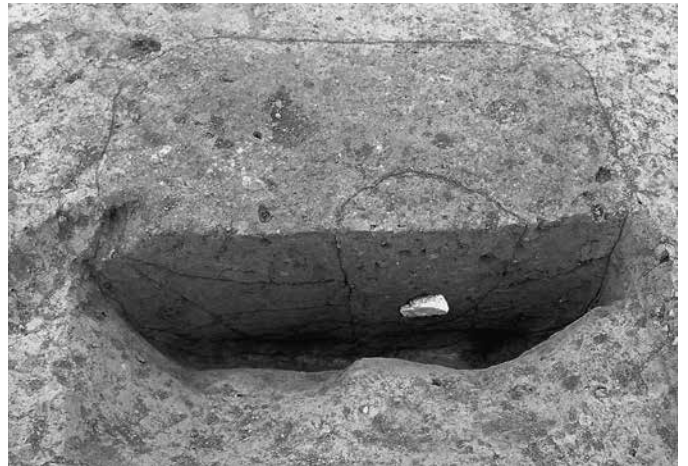
4区 SK17 8-8'セクション(西から)



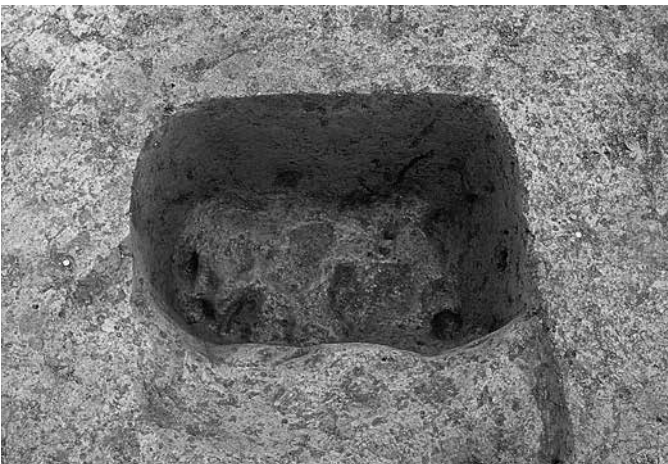
4区 SK17 9-9'セクション(南から)



4区 SK17 完掘(南東から)



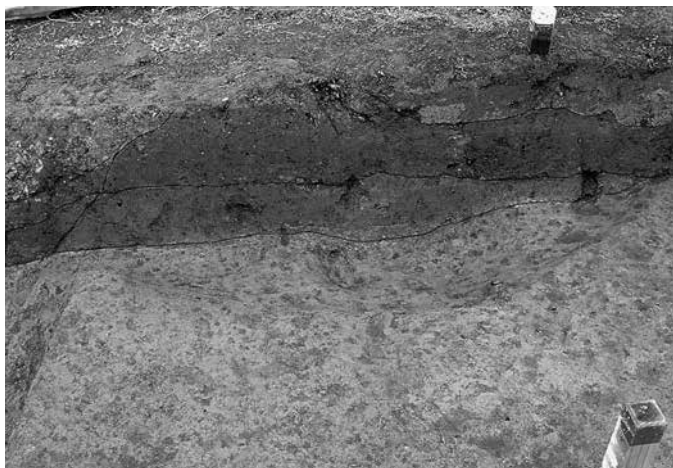
4区 SK20 4-4'セクション(南から)



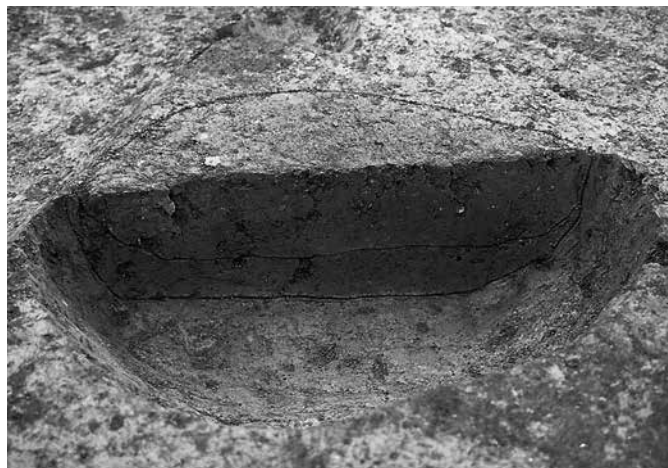
4区 SK20 完掘(南から)



4区 SK21 5-5'セクション(南から)



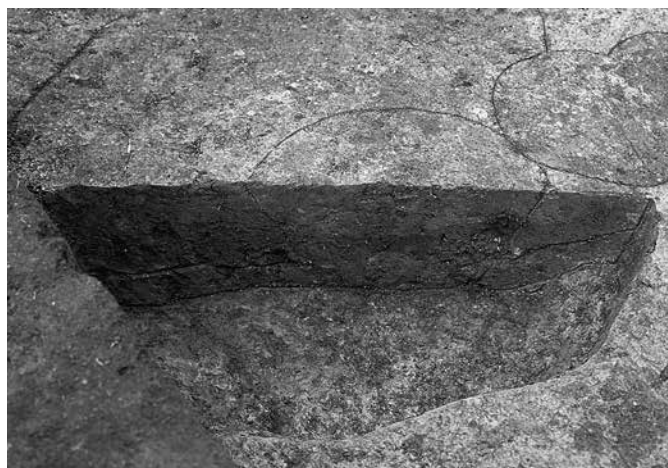
4区 SK22 2-2'セクション (北西から)



4区 SK23 11-11'セクション (南から)



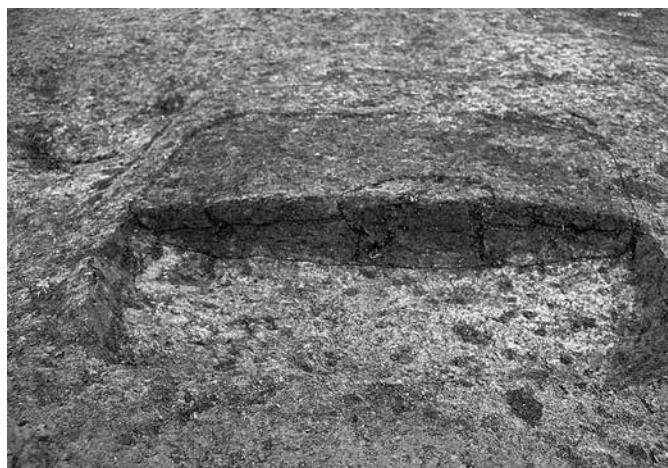
4区 SK23 完掘 (南から)



4区 SK29 セクション (南から)



4区 SI16・SK34 13-13'セクション (南から)



4区 SK40 セクション (南から)

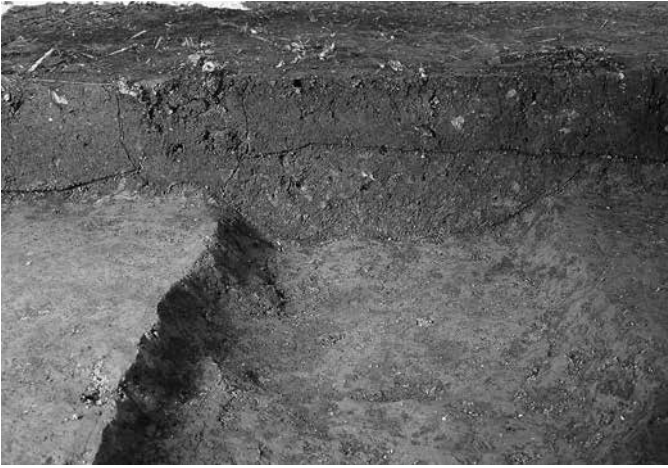


4区 SD1 セクション (東から)



4区 SD1 完掘・20-20'セクション (南から)

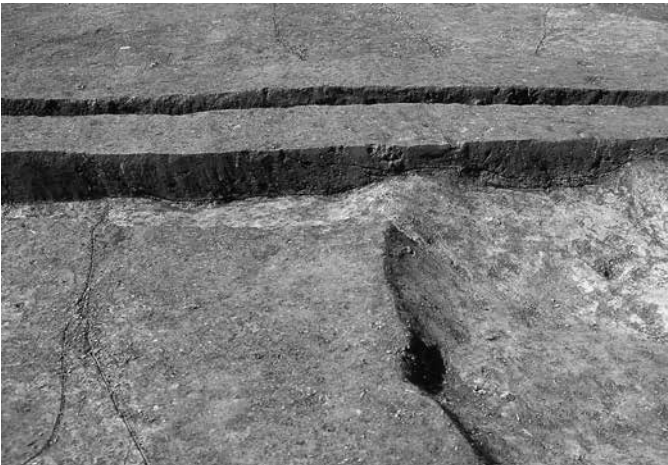




4区 SD6 7-7'セクション (南西から)



4区 SD6 セクション (南から)



4区 SD8・9 14-14'セクション(東から)



4区 SD10 7-7'セクション (南西から)



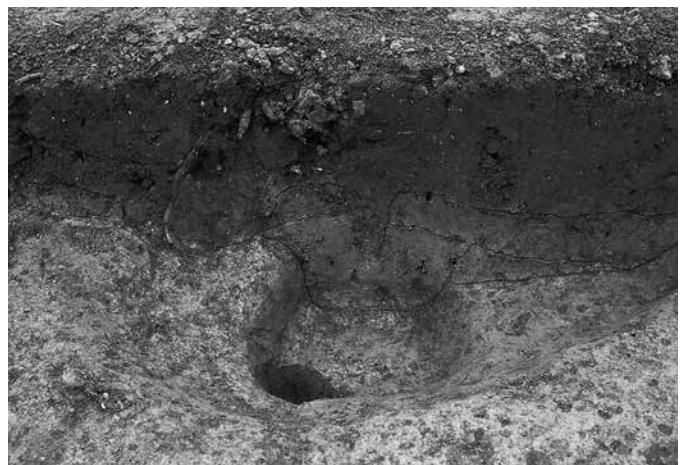
4区 SD13 2-2'セクション(北西から)



4区 P25 遺物出土状況(南から)



4区 P27 2-2'セクション (北西から)



4区 SK150 10-10'セクション (南東から)



5区 調査前近景(南西から)



5区 遺構掘削前風景(南西から)



5区 基本層序(南西から)



5区 SK61 遺構検出状況(西から)



5区 SK61b 遺物出土状況(北から)



5区 SK61b 遺物出土状況(北東から)



5区 SK61a 遺物(31)出土状況(北から)



5区 SK61b 遺物出土状況(北西から)



5区 SK61 焼土検出状況(南西から)



5区 SK61a 焼土検出状況(北から)



5区 SK61 焼土9-9'セクション(西から)



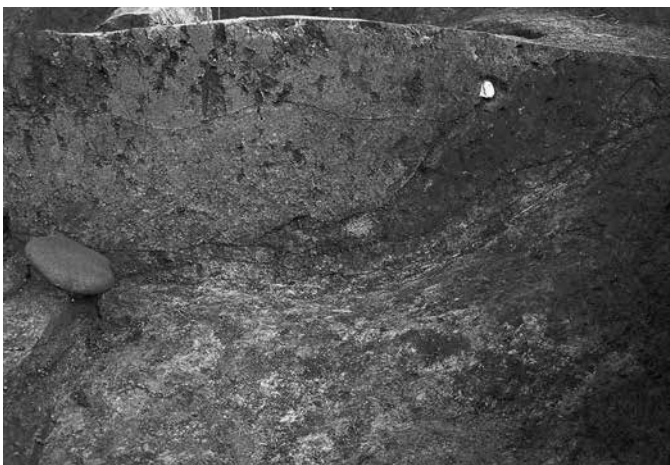
5区 SK61 5-5'セクション(南西から)



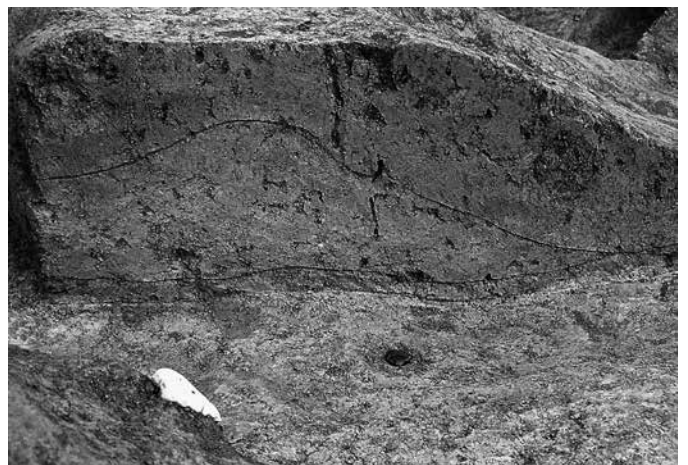
5区 SK61 1-1'セクション(南から)



5区 SK62 6-6'セクション(西から)



5区 SK62 7-7'セクション(西から)



5区 SK62・SK67 7-7'セクション(西から)  
手前遺物は磨製石斧未製品 186



5区 SK67 6-6'セクション(西から)



5区 P64 遺物(413) 出土状況(南から)



上空から見た6区



6区 SI166 完掘(南西から)



6区 SI166 1-1'セクション(北東から)



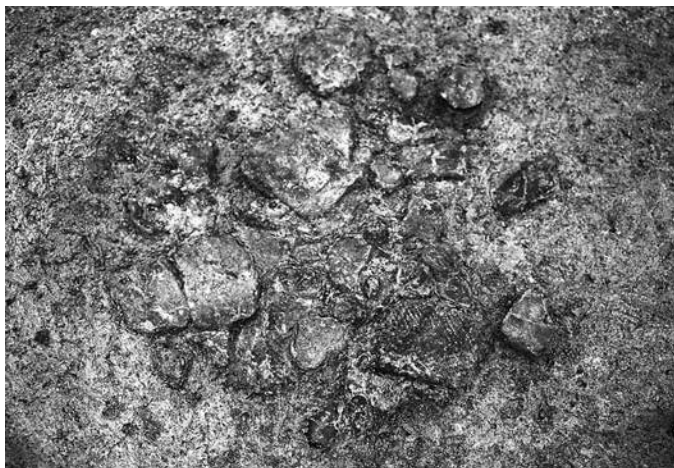
6区 SI166 3-3'セクション(北西から)



6区 SI166 焼土検出状況(北西から)



6区 SI166-SK169 遺物出土状況(北東から)



6区 S1166 遺物出土状況(北から)



7区 セクション(北東から)



工事立会 S11 4-4'セクション(北西から)



工事立会 SK2 4-4'セクション(北から)



工事立会 SK3 2-2'セクション(南から)



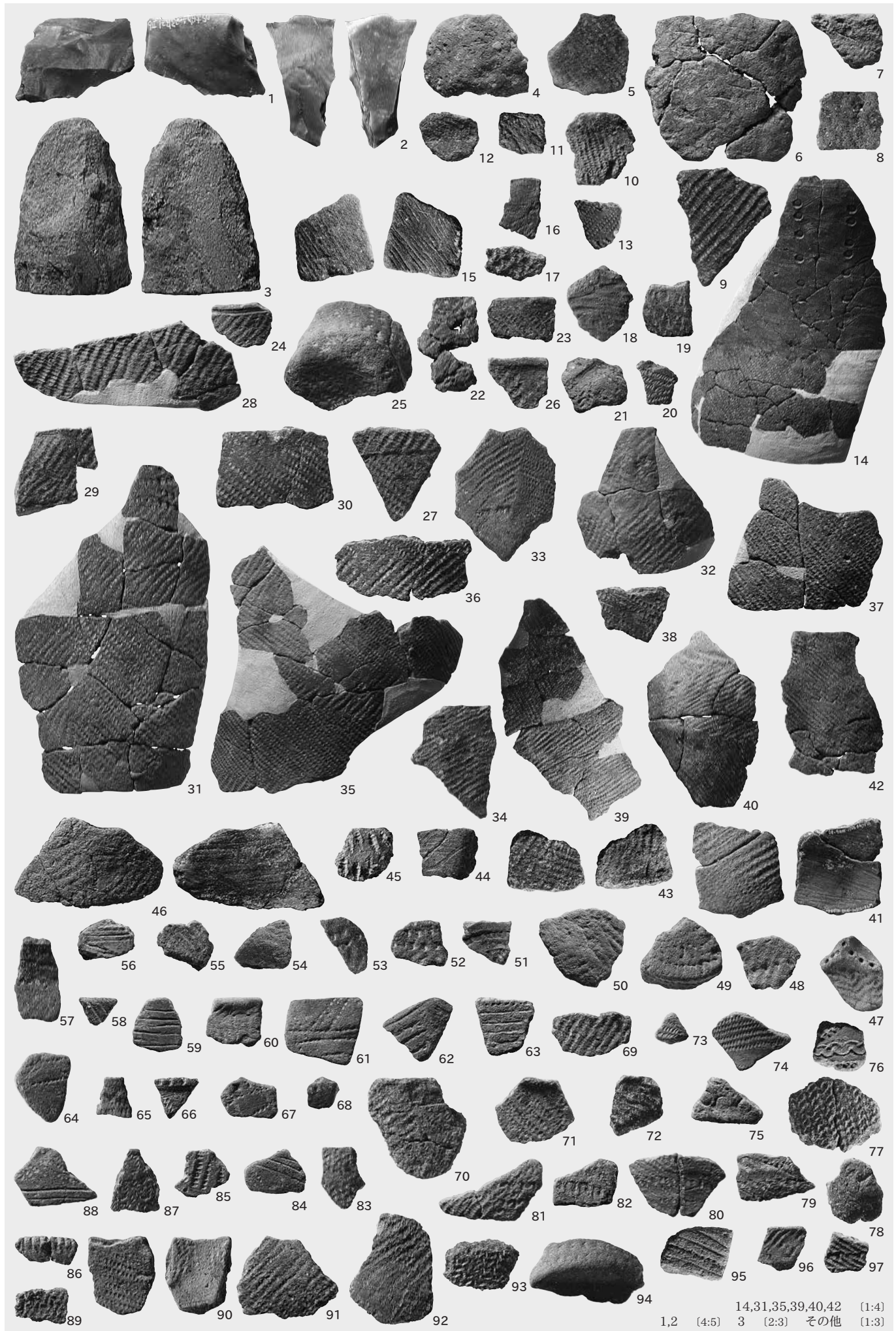
5区 作業風景

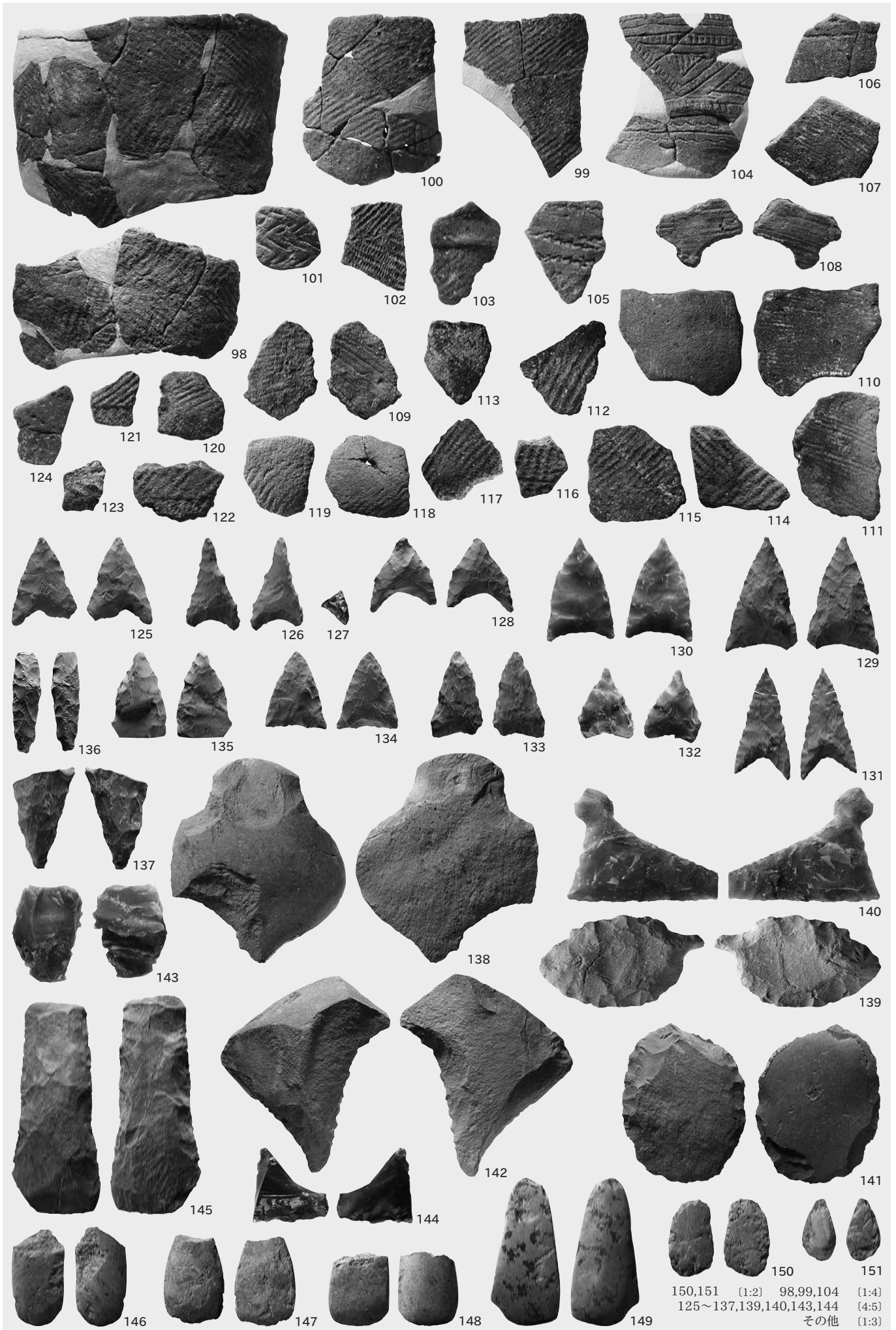


土壌水洗作業の様子

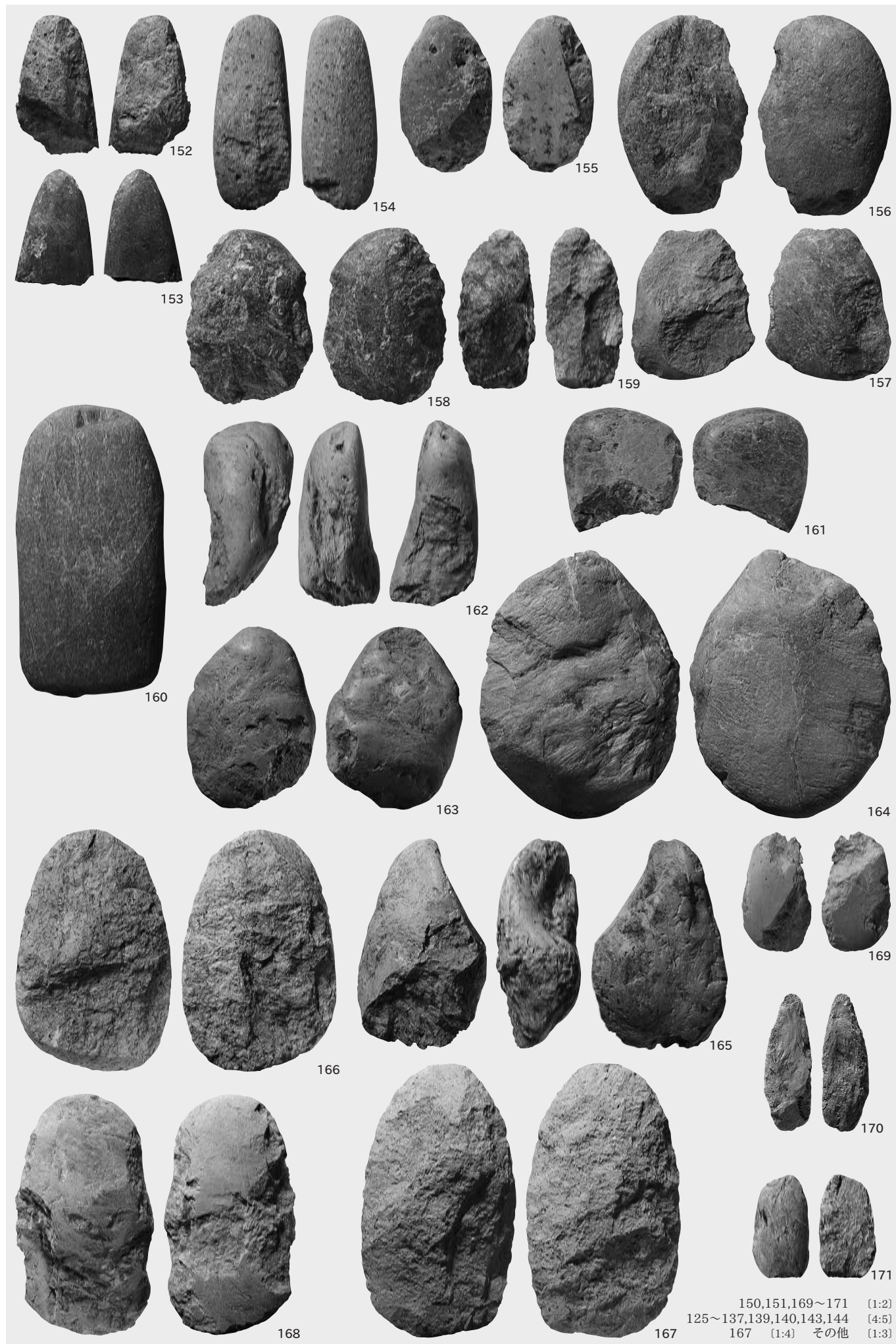


遺跡近景(北東から黒姫山を望む)

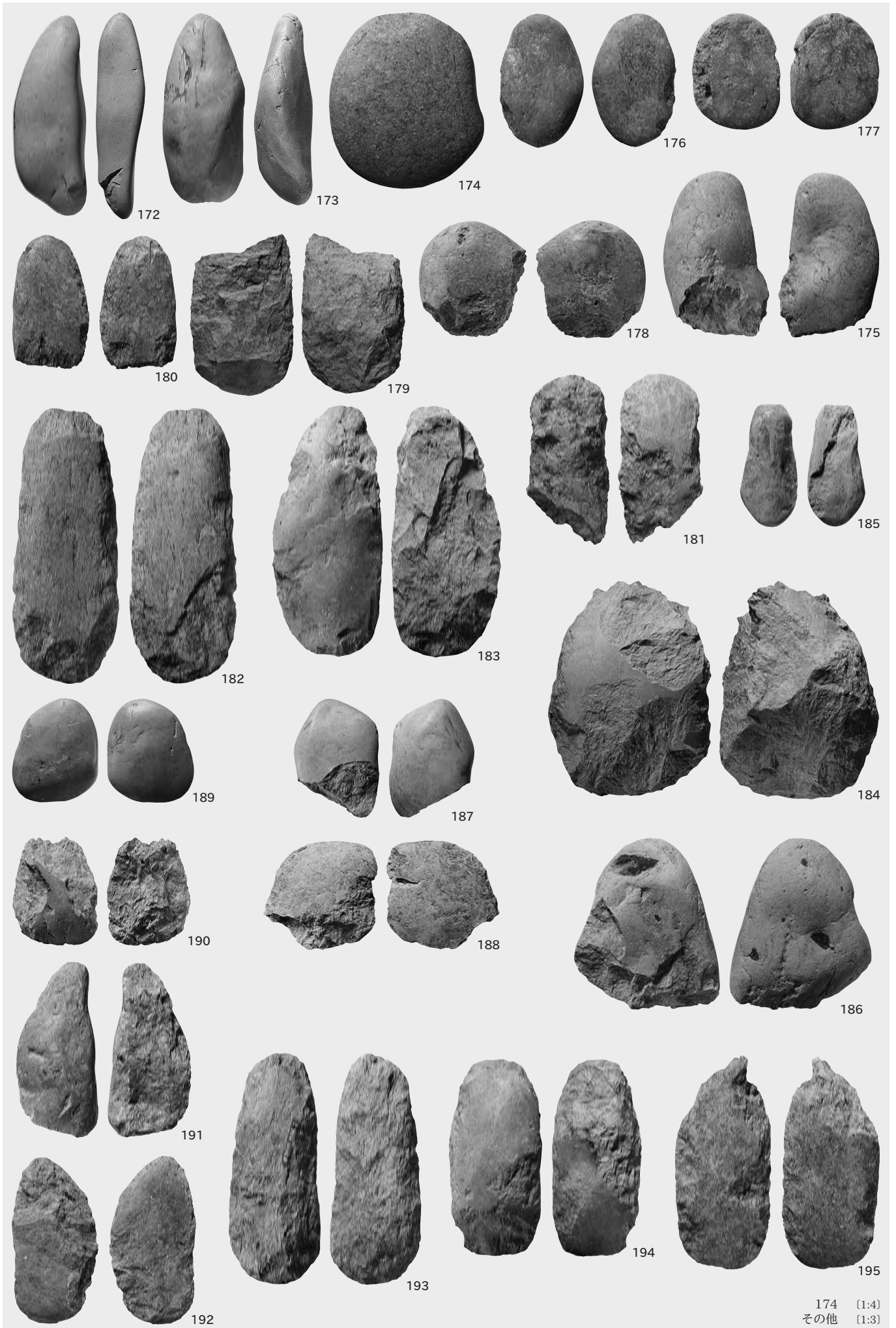


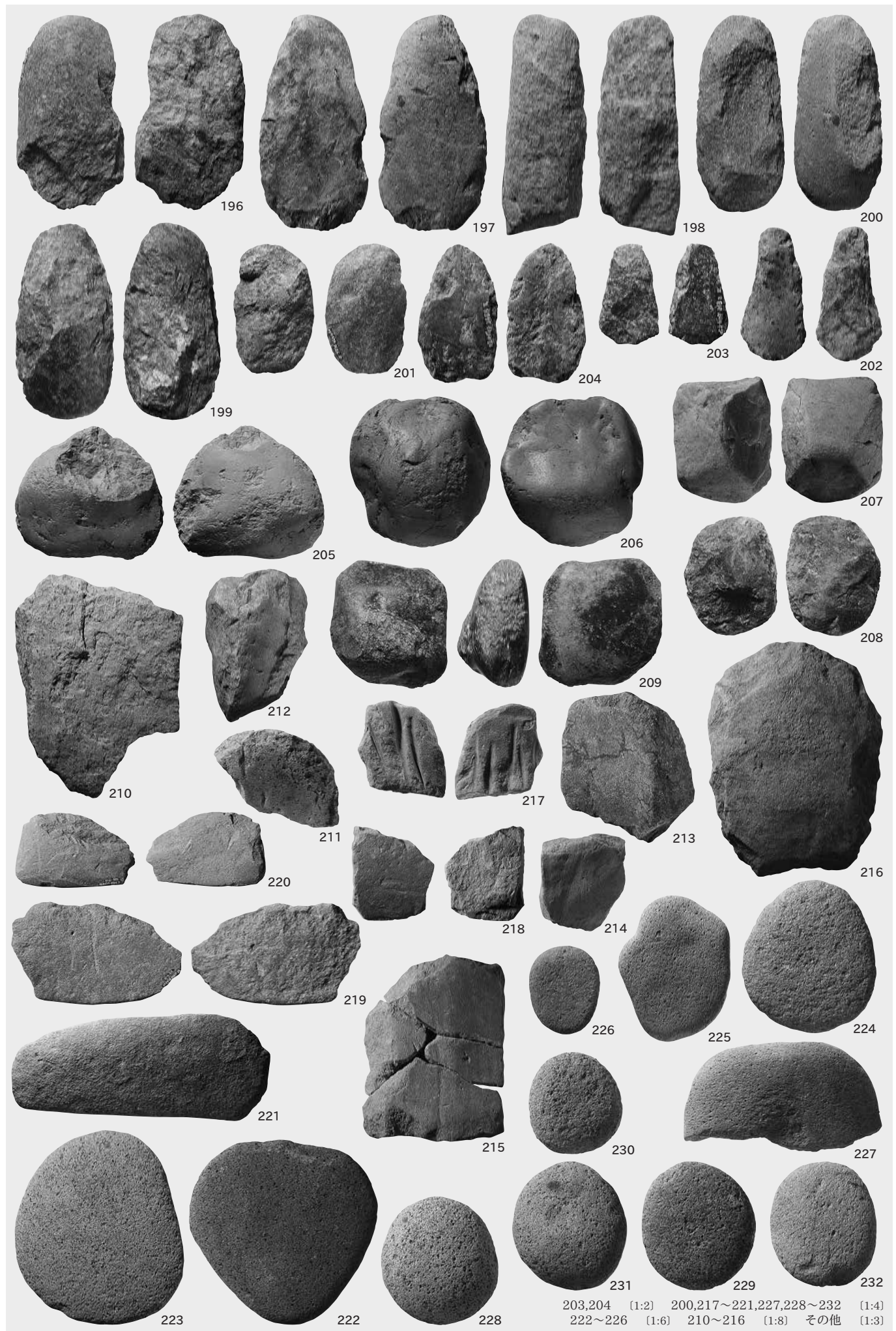


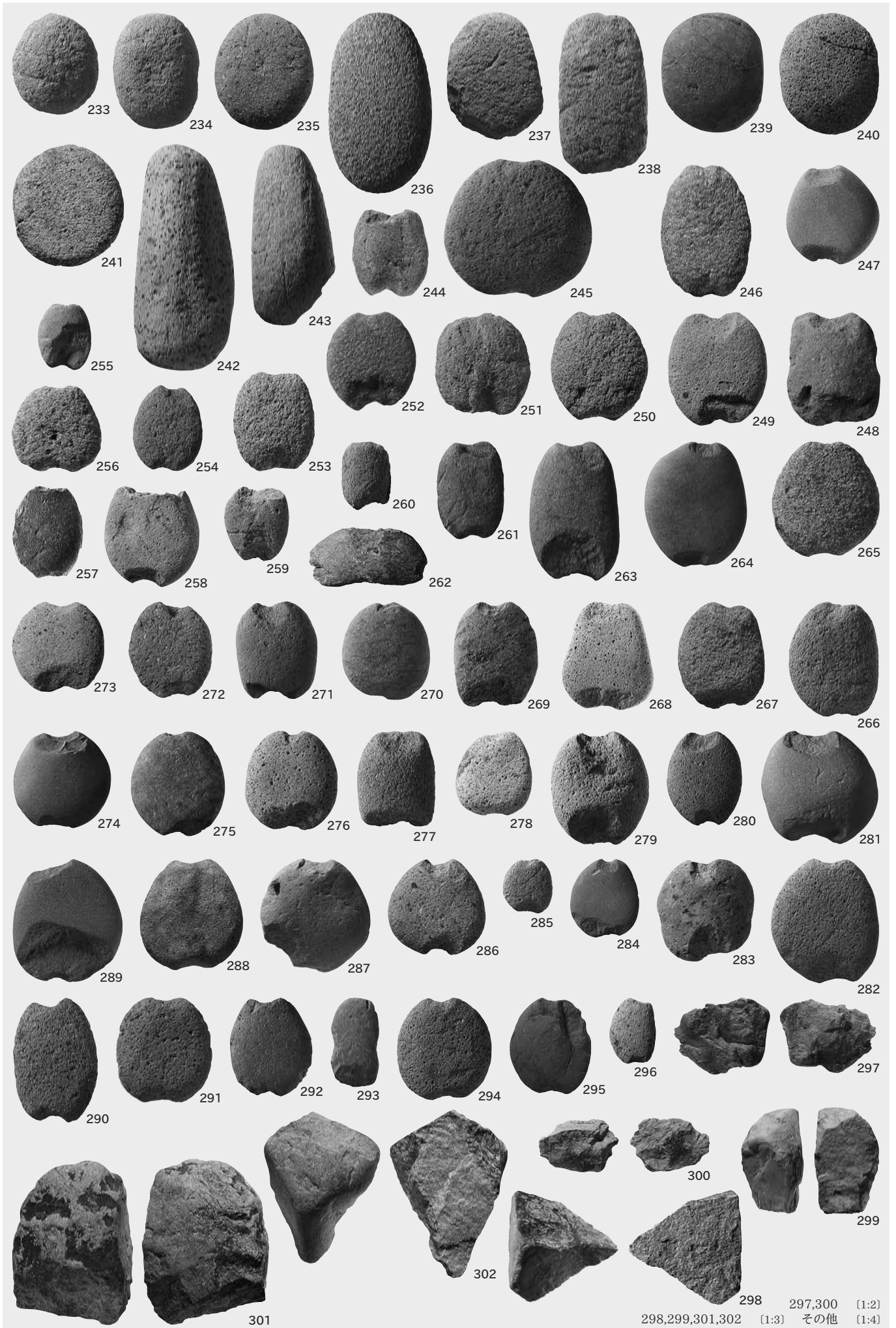
150,151 (1:2) 98,99,104 (1:4)  
 125~137,139,140,143,144 (4:5)  
 その他 (1:3)







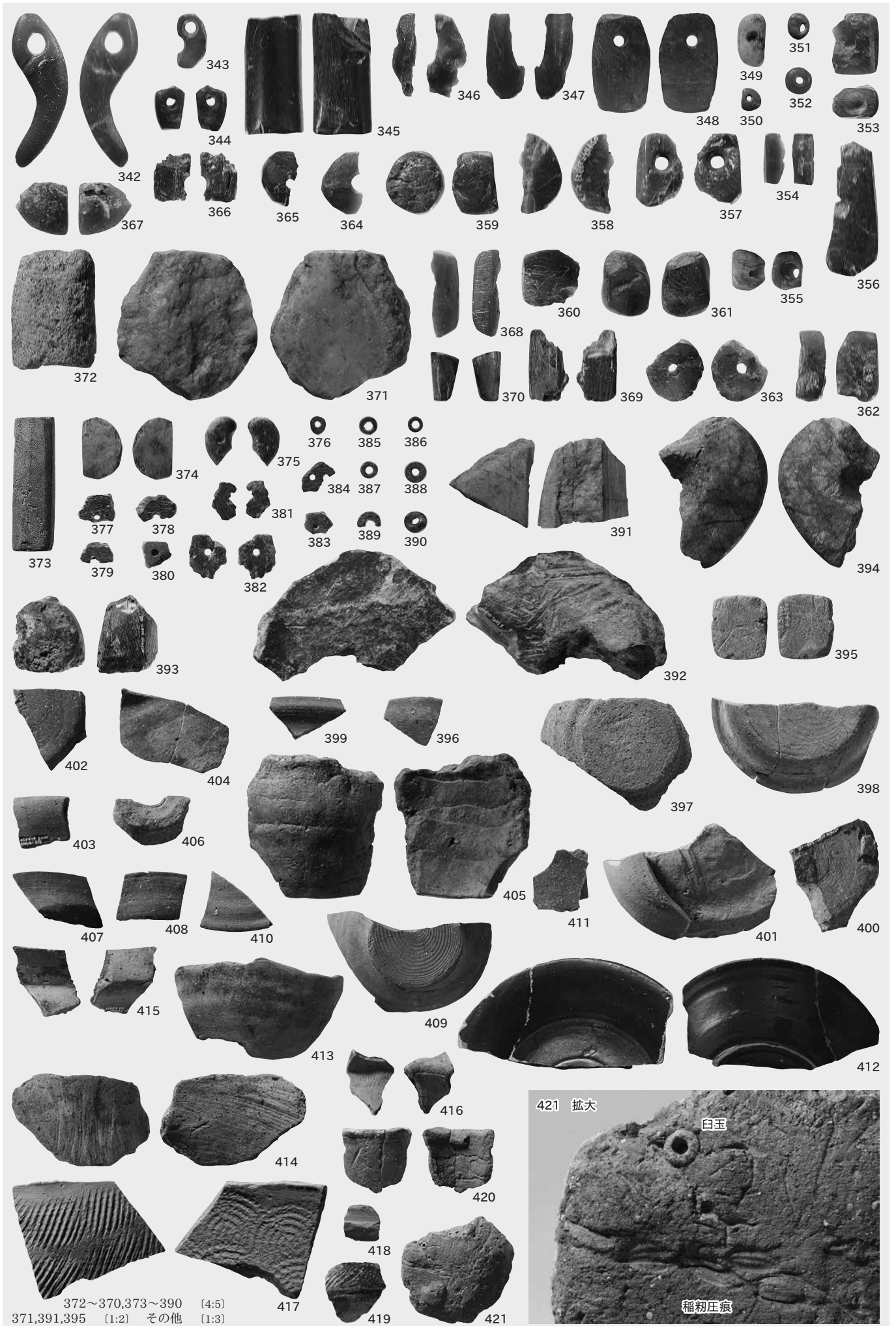


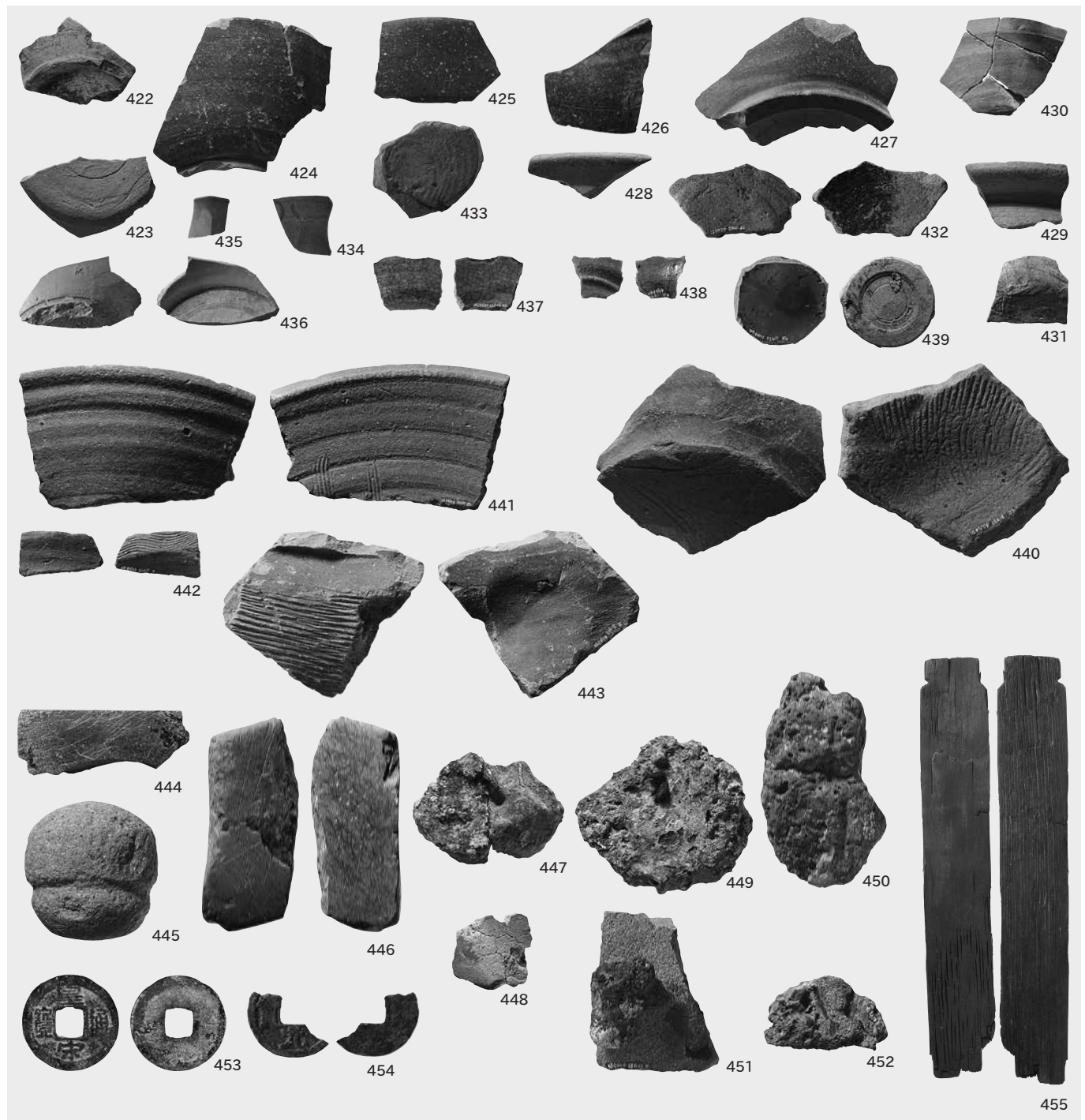


298 297,300 [1:2]  
 298,299,301,302 [1:3] その他 [1:4]

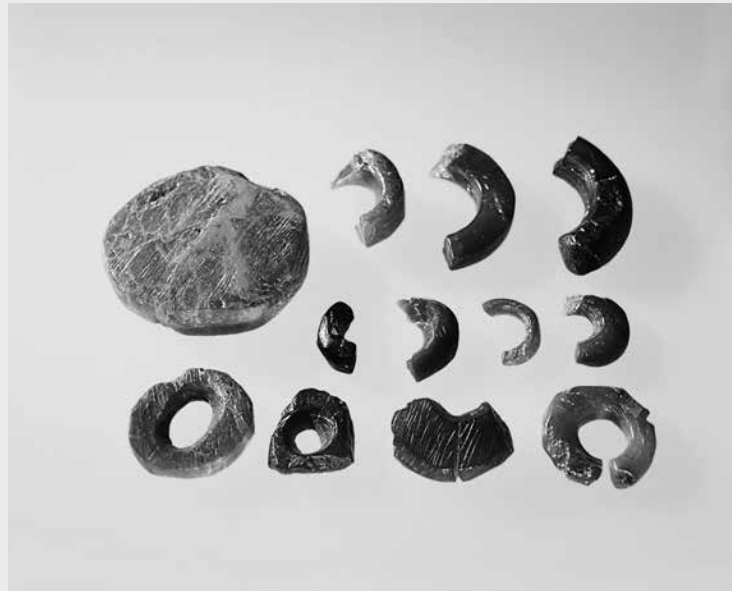


305,306 [1:3] 303,307~311 [1:2] その他 [2:3]





426,428,441,442 (1:4)  
 449,450,452 (1:2)  
 453,454 (2:3)  
 その他 (1:3)



玦状耳飾の製作過程を示す資料

# 報告書抄録

ふりがな	おがくちいせき							
書名	大角地遺跡							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第173集							
編著者名	加藤学・杉田和宏・近藤慎子（以上、埋文事業団）、相羽重徳・松永篤知（以上、株式会社古田組）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2006（平成18）年12月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
おがくちいせき 大角地遺跡	にいがけんいといがわし 新潟県糸魚川市 おおあぎとうみあぎとうみ 大角地海字田海 ほか	15216	244	37度 01分 39秒 (新座標)	137度 49分 08秒 (新座標)	20050908 ～ 20051121	1,152m <sup>2</sup>	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大角地遺跡	遺物 包 含 地	後期旧石器時代		ナイフ形石器		ナイフ形石器文化前半期の資料。		
		縄文時代早期末葉～前期前葉	竪穴住居3棟 土坑5基	縄文土器、石器（石鏃・石錘・石匙・磨製石斧及び製作関連資料・磨石類・石皿・石錘）、石製装身具及び製作関連資料（珞状耳飾・勾玉・管玉・垂玉・丸玉・礫玉）		豊かな石材環境のもと、蛇紋岩製磨製石斧と滑石製装身具の製作に特化した集落とみられる。また、磨製石斧の製作に利用されたとみられるヒスイ製敲石は、出土品としては最古のヒスイ製品となる。		
		古墳時代	溝1条	土師器、須恵器、管玉、勾玉、白玉		滑石（緑泥石岩）による白玉の製作が行われる。		
		平安時代	掘立柱建物1棟	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、荷札状木簡		緑釉陶器や荷札状木簡が認められたことから、付近に有力な遺跡が存在する可能性が高い。また、須恵器は、南方200mに所在する西角地古窯跡から流出したものと考えられる。		
		室町時代		土師器、青磁、白磁、瀬戸美濃焼、珠洲焼、製鉄関連資料、銭貨				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第173集	
北陸新幹線関係発掘調査報告書V	
大角地遺跡	
平成18年12月20日印刷 平成18年12月20日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025 (285) 5511  財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986  印刷・製本 阿部印刷株式会社 〒959-1704 新潟県五泉市村松甲2096 電話 0250-58-5115